
Valbatous【バルバトス】

シギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Valbatus 【バルバトス】

【コード】

N6399U

【作者名】

シギ

【あらすじ】

地球から遠く離れた星のお話。「何となくムカツク」という訳のわからない理由で世界を滅ぼそうとした魔神バルバトス。それを止めるため、なりゆきで女盗賊ノア（16歳）が、王子様やら医者やら記憶喪失の少女やらなんかを集めて頑張る・・・という話。自称王道ファンタジー・・・かと。

用語・登場人物紹介

用語解説

・ファル

ネコが人間へと進化した種族。猫耳に尻尾が特徴。柔軟な身体能力に優れ、剣や斧が得意。優性種意識が高い者が多い。

・メリン

ウサギが人間へと進化した種族。長いウサ耳が特徴。魔法力が総じて高い者が多い。ファルと同じで優性意識が高い者が多く、ファルとは比較的に仲が良い。魔神バルバトスによって、故郷を破壊されている。

・デム

猿が人間に進化した種族。蔑称エテ公。地球の人間に似ていて、外見の特徴も特殊能力もない。総じて独善的かつ臆病者が多く、ファルやメリンからは軽視されている。ただ中には稀に優秀な者もいて、一部のデムは優遇されているケースもある。

・ボーズ星人

進化を止め、自我を放棄し、退化を選択した元人間の種族。ノツペリとした非個性的な顔に、ツルツとした頭をしている。語尾にボーをつける者が多い。優柔不断であるが、争いを望まない平和主義者たち。火に非常に弱い。発見された時に異星人だと思われたので星人との名がつく。能力はデム以下だが、中には哲学的な思考力を持つ者もいる。総体数は、上記三種族に比べてかなり少ない。

・魔神バルバトス

『ムカツク』からという理由で世界を滅ぼそうとした恐怖の魔神。30メートルの体躯に、鉄仮面と三本の鉄爪、そして無敵の筋肉が武器。誰も止めるがでなかつたが、二十年前にスタッドの聖魔法によって封印される。

登場人物紹介

ノア 16歳

主人公。デムの男勝りな女の子。得意武器はダガー。赤いショートカットの髪。バツカレス盗賊団の紅一点。赤ん坊の時に、バツカレス親分に宝と間違えてられて拾われたのが縁で盗賊になる。盗賊といつても強きを破き、弱きを助ける義賊。お宝には目がないが、面倒見の良く、正義感に厚い。欠点は思慮に欠け、無鉄砲、向こう見ずなところ。体型はまだまだ成長中、かつアスリート寄り。男の好みは、男集団の中で育ったせい、マッチョで強いヤツ。いまでは命を助けられたスタッドに、仄かな恋心を抱いている模様。

スタッド 42歳

二十年前に魔神バルバトスを封印した英雄。元はデムの考古学者で、とくに目立つような人でもなかつた。丸眼鏡をかけ、無精ヒゲ、登山服にリュックサクといった出で立ち。常に朗らかな容姿から、冴えない人物と思われがちだが、その右手には聖剣エイストを有しており、見た目とは裏腹に強力な聖魔法を使用する。種族の平等主義をデムの中で一番先に述べ、見捨てられていたボーズ星人なども高く評価していたり、常人ではちよつと考えられない価値観を持つ。現在では、フラフラして行方は誰にも解らない。ひよつとしたことから偶然に、瀕死の重傷を負ったノアを助けることになる。

メルメル 16歳

メリンの少女。記憶をなくしていて、ボーズ星人たちに保護される。退化の大森林で迷ってる時にノアと出会う。強力な魔法力を持つが、とても心優しく、軽視されているボーズ星人と仲良くしていたり、魔物とも出来れば争いたくないと考えている。ウサ耳で童顔。しかも、清纯派と思わせるや、ノアと比べものにならないナイスバディというまさに世の中の男どもの理想（妄想）を体現したかのよう。人を傷つける魔法しか使えないことを疎んでいる節があり、人を助ける技術をもつ医者バーボンに惹かれる。

ミヤオ 14歳

ファルの少女。幼い頃に捨てられ、デムの隠居人コネミに気まぐれで拾われ、育てられてしまった少女。辺境の地にいたため、かなりの世間知らず。男性という存在を、「頭が光っていて、腹が出ているもの」という誤った認識をもっている。天然で明るい天真爛漫な元気少女。一部のお兄様がたが大好きな、ネコ耳、八重歯、尻尾はもちろん標準装備。でも、天然なフリって計算が高いからできるの・・・おっとと。ある調べによれば、スタイルはノアよりも上らしい。

レイ 16歳

デムの国であるジャスト城の将来を囑望された優秀美麗な王子。妹のマレルも類い希なる美しさを持つが、実はその妹に恋愛感情を抱かれているのは本人以外ではよく知られた事である。王国剣技も一通り習得しており、それなりに腕っ節も強い。完璧とも思える王子様像であるが、実は女の子に惚れやすいという欠点を持つ。好きな女の子にはストーカーのようになってしまい、身分の差を越えてノアたちの仲間に入る。現在、お熱なのはメルメル。まあ、本人の想いはメルメルには殆ど届いていないのはお約束である。

バーボン 25歳

優秀なデムの医者。かつてはその技術を認められ、ファルの首都レ

ムジンで働いていた。が、種族差別を否定するような主張をしたため、その反感者との争いで、レムジンでの地位と、右目と左腕のみならず、妻まで失うこととなる。いまでは種族平等の理想を捨て、ジャスト城下町の町医者として、細々と診療を営んでいる。ノアたちバツカレスとは古い知り合いであり、特にノアにとっては兄のような存在。ノアには盗賊という危ない仕事は辞め、本当に幸せになつて欲しいと願っている。

ボーズ太郎 およそ58歳

ノアたちとの出会いにより、自我を持ったボーズ星人。基本的には臆病であるが、時にはメルメルのために命を張ったりすることもある。スタッドの力で、隠されていた古代魔法の力に目覚め、癒しの魔法や補助魔法などで仲間達をサポートする。お調子者で、軽はずみなことを言うこともあるが、皆が気づかないところを的確にいたりもする。存在感が薄く、気づいてもらえなかつたりすることも多い。

オ・パイ 48歳

暗殺拳を極めたデムの男。死^{しとつ}至突と呼ばれる一撃で敵をあの世に葬る。秘宝を盗みにはいったノアを瀕死に追い込む。一年前にジャスト城に大臣として就任してから、国費をかなりの節制し、国民への重税を課したり、盗賊やボーズ星人などへの残酷な対応など、思うがままに非道に国を操っている。だが、実力は最上なので、国王を初めとして誰も止められないでいる。かなりの現実主義者で、スタッドやバーボンの主張を世迷い言と考へてる節がある。ある野望のためにノアたちと激しく敵対する。

アホンとダラ それぞれ25歳

オ・パイ直属の配下。小柄で口うるさいアホンに、大柄で無口なダラの凸凹コンビ。通称二人合わせて、アホンダラ。やることなすこ

と、へまばかりであるが、オ・パイにとっては扱い易いらしく、たびたび用いられている。ノアたちにとっては一応、障害となる敵。まあ、一応であるが。

コネミ 50歳

ファルの領土、レグー砂漠にある釣り人の泉で釣り三昧の隠居生活を送っている。女魔物のステラに好かれたり、ファルのミヤオを拾って面倒を見たりと波瀾万丈な人生を歩んでいる。温厚そうにいつも笑っているが、実は他人とコミュニケーションをあまたらずに表情が硬直しているだけ。本人に悪気はないが、ピリツとくる失礼な毒舌が特徴。戦闘能力は見かけに反して総じて高い。

ファラー 55歳

レムジンの大教会にいる司法の長である大司教。レムジンの施政である元老院に口出しできる程の権力者。ファルでありながら、並のメリンが齒が立たないほどの魔法力を有する。スタッドと旧知の仲である。穏やかで寛容な性格だが、強引なところもあったりする。六人の娘がいて、娘のためならば苦勞も厭わないほどの親ばかぶりな面もあったり・・・。

第一章 女盗賊ノアと秘宝エルマドール

ここは地球よりも遙かに遠く離れた星。

でも、ありがちなことに、そりゃよくもまあ、環境は地球に酷似した世界です。

この星が地球と違うのは、この星には人間に似た三つの種族が存在しているということです。

ネコが進化した『ファル』族。ウサギが進化した『メリン』族。そしてサルが進化した『エテ公』・・・いや、失礼。もとい、『デム』族という種族です。

三種族はそりゃ仲良く・・・まあ、毛深くて知性の低いデムは差別されてましたけどね。まあ、それなりに良好関係にありました。

そして、この世界には『バルバトス』という神様がいました。

特徴を言い表すならば、巨大、仮面、筋肉、鉄の三本爪・・・といったところでしょうか。

その気性の荒い神様は、ある日、突然に『なんかムカツク』というような十代の暴走のような理不尽さで世界を滅ぼそうとしました。

もちろん、この世界に必死に生きている三種族。ただ黙って滅ぼされるわけではありません。体技に優れたファル族は剣を持ち、魔力が高いメリン族は魔法を使い、特筆すべき能力もないデム族は・・・まあ、わーわー騒いでいただけなんですけど・・・まあ、とりあえず抵抗しようと、戦おうとしました。

しかし、バルバトスは『魔神』と呼ばれるほど強力な神様です。

ドス紫色に輝く無敵の筋肉で、「そりゃ！ふんりゃ！」と言わんばかりにパソコンパソコンと、三種族を千切っては投げ、千切っては投げして叩きのめしました。

そして、風の吹くまま、気の向くまま、バルバトスはあちこちの国々を吹き飛ばしていきました。魔神バルバトスの止まらない暴走。為す術もなく三種族は家の中でブルブルと震えていました。

そんな中、デムの中でも一際に変人と呼ばれる男がいました。その名前を『スタッド』と言います。この男、考古者であったのですが、魔神バルバトスが暴れる中、なんと一人でフラフラと遺跡巡りをしていたのです。

ある日、この魔神バルバトスと考古者スタッドは森の中でぼつたりと出くわしてしまいます。もう、森のクマさんより最悪なケースです。

昼飯を終えたバルバトスは、爪楊枝をシーシーさせながら（仮面しているのに不思議ですね！）、「こしゃくな、人間！ 死ねえい！」と悪役にありがちな台詞を言いながら、スタッドに殴りかかりました。魔神バルバトスは30メートルはある巨大さです。そんなヤツに殴られたら、ひ弱なデムなんてひとたまりもありません！でも、スタッドは怯えることも、逃げることもしませんでした。

迫りかかる鉄の爪を前に、無精髭をポリツとなで、丸眼鏡の奥の細い目はいつものように穏やかでした。そして、小さく呟いたので。

『聖結界エミトン』

スタッドの手の平から魔法陣が飛び出し、それが魔神バルバトスを包み込みました。そして全自動洗濯機に飲み込まれる野球部の汗くさいシャツのように、グルグルと回転しつつ収縮して、魔神バルバトスは消えてしまいました。あの巨大な魔神が一瞬にしてです！なんと、名もなく、力もない、あのエテ公が・・・あの魔神バルバトスを封じ込めてしまったのです！！

その一部始終を目撃していたある村のババアは、「スタッドが遺跡巡りをしていたのはのお、実はバルバトスを封印するためのパウワーを探していたのであって、偶然、道ばたで魔神に出会ったのはスタッドの計算だったじゃ！」と自身の勝手な憶測による噂話によって、スタッドが魔神バルバトスを倒したという噂は世界中に広まりました。

こうしてファルからもメリンからもエテ公・・・デムからも、スタッドは英雄として担ぎ上げられたのです。

いまから致しますのは、それから、二十年の月日がたった頃のお話です……。

三種族は、基本的に住む場所が別々です。それぞれが住む地域を持ち、独立しているわけです。

ここはエテ公たちの住まう城『ジャスト城』。デムたちが築いた城の中では一番に大きい物です。っていうか、魔神バルバトスに壊されて、他に城なんてもうないんですけどね。

その付近の森に、エテ公からも見放されたエテ公たちが住んでいました。まともな定職にも就かず、いつもフラフラして、必要とあればジャスト城やその城下町から拝借……泥棒してくるっていう集団です。この人達を、『バツカレス盗賊団』といいました。

月を見上げながら、赤ら顔で酒瓶をあおる……。ボロボロのバンダナに、ガチムチの体格、腰にはギリリと光る大きめのダガーが差してあります。バツカレス盗賊団を率いる首領バツカレス親分です。「ウー。飲みすぎちまったかな。いや、まだいけるな。今日は良い月夜だ。ガツハツハ！」

そう上機嫌で言いながら、酒瓶を再び口に含みます。しかし、すぐにバツカレスは渋い顔をしました。口から酒瓶をはずし、逆さにするとポタポタとしか出てきません。

「チツ。おーい！ ノア！！ 酒だ！！ 酒をもてこーい！！」

野太く大きな声で、バツカレスが小屋に向かって言いました。この小屋は盗賊団のアジトなのです。そこから、赤い髪をした小柄な少女が出てきました。両手に抱えているのは、大きな酒樽です。

「親分ー。飲み過ぎだよ」

呆れた顔をして、赤い髪をした少女は言いました。それでも、酒樽はバツカレスの前に置かれます。

「うるせいやい！ ノア！ お宝ゼロでこれが飲まずにいられるってのか！」

酒樽の上蓋をバカンと拳で殴りつけて割り、バツカレスはそれを丸ごと持ち上げてゴックゴックと飲み始めました。口の箸から酒がポタポタと滴ります。赤い髪の少女・・・ノアは、それを見てちょっと引きました。

「ぶっはー！ うめえー！ うますぎるぜー！」

「んだよー。これじゃ、ただの酔っぱらいじゃないか。盗賊なら盗賊らしくもう一度チャレンジすりゃいいじゃんか」

ノアはふくれっ面でいいました。女の子なのに、あぐらでどつきりと親分の隣に座ります。

実は、バツカレス盗賊団は今日、お宝を盗りにジャスト城に乗り込んだのですが・・・失敗してしまったのです。それで、バツカレスはやけになつて酒をガバガバ飲んでるわけなのです。

「もう一度、チャレンジだと？ 阿呆ぬかすな。先月、今月と収穫ゼロなんだぞ。クソ、それもこれも、あのクソ大臣のせいだな！」
ウーッと怒りの息を吹き出しながら、バツカレスの顔がますます赤くなります。

「大臣？ ああ、なんだか最近に就任したとかいう？ 暗殺拳の使い手で、なんだか王様の警護も任されているんでしょ」

「ああ。それに頭もキれる。あいつの策で、いくつも俺の部下がやられたことか！ それに、こんな辺鄙な場所にアジト作らなきゃいけないのもヤツのせいだ！」

「えー。親分より強いわけ？」

「馬鹿いうな！ 俺は盗賊だぞ？ 戦士じゃねえ。真つ正面からやり合うのは好きじゃねんだよ！」

バツカレスはどんと、机がわりにしている切り株を叩きました。

「ちきしょう。あいつさえいなければ、秘宝エルマドルもすでに俺の手にあつたのになあー」

「秘宝エルマドル？」

ノアが小首を傾げると、バツカレスは何かを思いついたかのようにニヤリと笑いました。

「そうだ。ジャスト城に眠る、最高のお宝だ！　これがありや、なに不自由なく暮らせる！」

「へえー。すつげーな！」

ノアの目はキラキラと光りました。そりゃ女の子ですもの。そりゃ盗賊ですもの。光り物大好きです！

「で、だ！　ノア。赤ん坊のオメエを拾ってはや16年。俺のもてる技術のほとんどは教えた！　もう一人立ちしてもいい頃だ！　一人前の証として、一人で秘宝エルマドルをかつぱらってこい！」
酔っぱらっているバツカレスは、唐突にそんなことを言い出します。

「一人前・・・やる！　アタシやるよ！！」

短絡的な思考回路がカチツと入りました。ノアはバツと立ち上がり、腰からバツカレスのよりは一回り小さいダガーを抜いて構えます。

それを盗み聞いていたらしい二人の男が、アジトから慌てた様子で飛び出てきました。

「む、無茶です、親分！」

「ノア一人にそんな危険なことを！！」

血相を変えた顔で、二人はそれぞれバツカレスに詰め寄って言い放ちます。

一人は神父の格好をしたシュタイナ・・・盗賊なんですけど、諜報活動のためこんな格好しているんですね。バツカレスの右腕とも呼ばれる二十歳の男です。

もう一人はノアと同年。倉庫番をしていて、オレンジ色のニット帽をかぶっているのが特徴のヤグルです。

「な、なんだテメエら！？」

ノアは驚いて目をパチパチとさせました。そんなノアなんてお構いなしで、二人の男はバツカレスの腕を左右から揺すぶります。

「バツカレス親分！　いまのジャスト城がいかに危険かご存じでしょう！　あの暗殺大臣のせいで、この僕もケガを負ったんですよ！

！」
シユタイナが左腕の裾をめくりまわす。そこにはひどい青痣がありました。腕っ節の強いシユタイナがケガをするなんて相当なことです。

「そうですよ！ もし、どうしても行けというのなら俺も！ ノアがいくら親分の一番弟子だからって・・・」

そう抗議する二人に、バツカレスの鉄拳が二人に落ちました。ゴツンゴツン！

「うるせー！ ピーピー、男の癖にさえずるな！ ノアはもう一人前だ！ ったく、テメエらみたいな心配性な奴らがいるから、ノアを連れて盗みに入ることもできなかったんだろが！ 寛大な俺も、もう限界だ！ この件はノアに任す！ ノアが適任だ！」

バツカレスは真つ赤な顔でそう言いました。完全に酔っぱらっています。バツカレス親分の悪い癖です。

「お、親分。・・・いつもは、親分がノアを連れていきながらなのに・・・」

「うるせー！！！」

バツカレスが吼えると、「ひい」とヤグルは腰を抜かしました。シユタイナは苦い顔をします。ですが、ノアは、大丈夫だとVサインをしました。

「盗賊ノア！ いっちょ秘宝エルマドールを見事うばいってきてやる！！！」

こんな適当な成り行きで、ノアはジャスト城に一人忍び込むこととなりました・・・。

実は、これはノアにとって大チャンスでした。盗賊団が盗みに入るとき、ちよつとでも危険な事があると、ノアは女の子だからという理由で参加させてもらえなかったのです。いくら親分の娘みたいなものだからといって、いくら盗賊団の紅一点だからといって、こつも過保護にされることにノアはちよつとイライラした気分を感じ

ていました。

即決行。それがノアのスタイルです。そして、ましてやジャスト城の側も、今日の昼来て、夜もまた盗みに入るなんて思っていないかもしれせん。だとすれば、今夜がチャンスじゃありませんか。愛用のポーチに、薬草やらロープやらの必需品を詰め込みます。そんな準備をしている間、シュタイナは複雑そうな顔をして、壁にもたれ掛かりながらノアを見ていました。

「ノア。酔っぱらった親分が無茶苦茶というのは知っているだろう？ 今日とはくにひどいよ。考えなおしてくれ」

兄貴みたいな存在のシュタイナです。ノアはいつもするようにニツと笑いました。

「大丈夫大丈夫。その暗殺大臣とかいうのとは戦うつもりないし。危なければすぐ逃げるって」

そう言いながら、ノアはチラツとシュタイナの腕を見ました。きつとあの暗殺大臣につけられた傷なんでしょう。ノアに心配させまいと、シュタイナは昼間にケガをしたことを黙っていたのです。

「そんなに簡単にすむ相手じゃない・・・あいつは別格だ」

そう苦々しくシュタイナは言いますが、ノアはすでにポーチを腰に巻いています。こうなったノアは、誰にも止められません。親分と同じで、こういうところは頑固なのです。それを知っているシュタイナは大きく溜息をつきました。

「ヤグル。無駄のようだよ。力づくで・・・っていつでも、お前の力じゃノアは止められないだろ」

シュタイナが扉を開くと、扉の後ろに隠れていたヤグルが前のめりに倒れました。

「・・・ノ、ノア、俺も一緒についていくってのは？」

ヤグルが顔を紅くして言いますが、ノアは首を強く横に振りしました。

「それじゃ一人前って認めてもらえないだろ。ヤグル。それに、一緒に رفتら逃げるときに足手まといだよ」

ノアがはつきり言うのに、ヤグルはしょぼんとした顔をしました。でも、実際にはヤグルの実力は褒められたものではありません。盗賊なのに足も速くはありません。だから、いつも倉庫の番をさせられているのです。不審者を見かけたら叫び声をあげる・・・それぐらゐの仕事しか任せてもらえないのです。

足手まといなんて言われてしまったら、男としてのメンツもたちません。ヤグルの目はノアをジッと見やっています。何か言いたげに、口をモゴモゴさせます。ですが、言う勇氣はせずに、がっくりと肩を落としました。

「じゃ、じゃあ・・・せめてこれを持っていつてくれ。きつと、役に立つから！」

ヤグルは、ポケットの中から小さな球状の物を取り出しました。球といつても完全な球体でなく、何かガムテープのような物でグルグル巻きにしたものです。一見してゴミに見えます。ノアはそれを指でつまんで首を傾げました。

「なにこれ？」

「あの・・・危なくなつたら、投げてみて。そしたら、解るから」
ヤグルが両方の人差し指を付き合わせながらモジモジと言います。ノアは「ふーん」といつて、それを胸元に入れました。それを見て、ヤグルはカッと赤くなります。ええ。ノアについて行きたがつたのは、そういうわけもあるんです。

「・・・とりあえず、危険なこととはしないで。無理だと思つたらすぐ逃げるんだよ」

シユタイナが柔らかくそう言います。ヤグルもコクコクと頷きました。ノアはあっけらかんと笑つて「大丈夫大丈夫」つて答えました。

実は、本当に大丈夫ではないことが先に待ち受けているんですけども。そんなこと、今のノアが知る由もありませんでした・・・

俊足の足で、盗賊の森を抜け、エルジメン橋を通っていきます。そして寝静まったジャスト城下町に入りました。

武器屋も防具屋も道具屋も閉まっていますし、町中にはほとんど誰もいません。バツカレスに内緒で行く馴染みのアクセサリー屋にもシャッターが下りていました。煌々と灯りがついているのは酒場ぐらいです。

見張りの兵士が松明をもってうろついています。暗闇に慣れているノアは、上手に死角をくぐってジャスト城へと向かいます。

ジャスト城はそれほど大きな作りではありません。三階建てで、一階に兵士たちの待機所や厨房に食堂。二階に王間や王子たちの部屋、そして三階に式典などに使われる大広間などが設けられています。それでも、初めて見る城はノアにとっては大きい物でした。

ポカンと口を上げて月明かりの中、しばし見とれてしまいました。ですが、ブーツとしているわけにもいきません。観光に来たわけではないのです。

堀にかかっている橋の向こうでは、見張りの兵士が二人たっていました。……なんと二人揃って居眠りしています。城下では兵士が巡回していますし、きつと気が抜けていたのでしょうか。それは、ノアにとっては好都合でした。

足音を忍ばせて橋を渡り、閉じている城門の上をめがけて、フックのついたロープを投げます。見事、覗き窓の端にそれが引っかかります。

身軽なノアはヒョイと飛び上がり、スルスルと器用に、まるで猿・
・ああ、デムって猿が進化した種族なんです。……ツルツルした壁を登っていきます。

シユタツと二階の空中庭園に到着しました。大変、順調です。ノアは思わず笑みが零れそうになりました。ですが、ハツと背中に人の気配を感じます。慌てて、大きな鉢植えの裏に身を隠しました。チラッと気配を感じた方を見やると、庭園の真ん中。石作りのテーブルに両肘を乗せ、憂鬱な表情で月に見とれている金髪の少女が

いました。幸い、ノアには気づいていないようです。

フワフワした豊かな巻き毛、ヒラヒラの純白のドレス。神々しいまでの装飾が施された、金でできたブレスレットにイヤリング。それだけで、ノアはすぐに、彼女がこの城の王女であるマレルであると気づきました。

ノアの記憶では、歳は確か十二歳ぐらいでしたでしょうか。あんまり森から出ない、世間知らずのノアも、この国の王様や王女様の顔ぐらいは知っています。

マレルの神々しいまでのドレスと、自分の着ているボロボロの胸当てを見比べて、自分とは対称的だなあと、ノアは自分でちよつとおかしく思ってしまった。女の子として羨ましいという気持ちと同時に、それ以上に女の子らしくない自分の姿が滑稽に感じられたのです。でも、盗賊として一人前に、バツカレス親分のようにになりたいと思っているノアの気持ちを優先すれば、それは笑い飛ばせるぐらいの嫉妬に過ぎなかったのです。

「・・・はあ、お兄様。いつになったら私の気持ちに気づいてくれるのでしょうか」

マレルが口にした言葉に、ノアは釣り目を少しだけ大きく開きました。自分の聞き間違いだと思ったのです。

「・・・お兄様。お慕いしています。ああ、お兄様」

マレルは月を見上げながら、祈るようにそう呟きます。ノアの二の腕に鳥肌が立ちました。

「・・・うわー。なんだよ。兄妹で、かよ。アタシには理解できないなあ」

ノアは首を横に振り、マレルの注意が向かないよう静かに城内の方に向かいました。

大きな窓は今日は暑いので開けっぱなしです。不用心ですね。

でも、最近のニュースでも、城の要人の誰かが狙われたというような話はありません。優秀な暗殺者が大臣になってからというもの平和なのです。なんせバツカレス盗賊団を追い返してしまうぐらい

の実力の持ち主なのですから！ だから、見張りの兵士が居眠りしていたとしても納得・・・いきませんが、まあ、そういうものなのです。なにせ無能なエテ公・・・デムの城なんですよものね。

ノアが窓から入ったところは、どうやら王子の部屋でした。マレルの兄であるレイ王子です。眉目秀麗、博識明瞭かつスポーツ万能。そんな優秀なデムの王子はノアと同じ年でした。

レイはノアの侵入にも気づかず、青いナイトキャップをかぶり、枕を抱きかかえてムニヤムニヤと眠りの中でした。枕を抱いて、よだれを出している姿は・・・ちよつと王子様には相応しくありません。

バルコニーで手を振っているレイの姿をノアも見ることがありますが、自分の好みでないものの、それなりに格好良く、女の子にもてそうな顔だとは思いますが。事実、キヤーキヤという黄色い声援が飛んでいたのですから。

そんな格好いい王子様が、よだれを出して枕を抱えている姿を見たら、どんな女の子でも幻滅してしまうでしょう。そんなことを考えて、ノアは声を立てずに小さく笑ってしまいました。

「まぬけ面だなあ・・・まったく。報われるかしらないけど、妹さんの気持ちも汲んでやれよ。お・う・じ・さ・ま」

ノアは王子の平たいおでこをデコピンしました。金色の眉が苦痛に歪みましたが、それでも目を覚ますことはありません。ノアはまた笑いが込み上げてきました。

王子様との運命的な出会いですら、ノアにとってはドキドキの物語にもなりません。ノアの好みは、バツカレスのように強い男性です。マッチョガイです。シュタイナのような心配性な男も、ヤグルのように気弱な男も興味が湧きません。レイ王子のように綺麗な顔立ちも、どちらかというと苦手なのです。

ノアはそそくさと、王子の部屋をでました。出た瞬間、何やら悲鳴のような物が聞こえます。ノアは自分が見つかったと思いきくと反応してしまいました。でも、どうやら違うようです。

「ゆるしてくれえー。ゆるしてくれえー」

その声は、許しを請うているようです。声のする部屋に向かうと、どうやらそれは王様の部屋のようでした。

「わかったー。お前の言うとおりに政策をするー。だから、怒鳴らんでくれー。すまんー」

その囁れた声からして、どうやら王様が言っているようです。でも、誰かと会話しているという感じではありません。それは寝言のようです。なにやら、しきりに低姿勢に誰かと話しているようでした。

王様・・・このジャスト城の王様はとても気弱な人だと有名です。そりゃ、女王様が気が強すぎるせいもあるでしょうけれどね。だから、まだ若年のレイ王子に、国民の多くは望みをかけています。今の王様は統治者としては及第点。もっぱら大臣の言いなりになっているのだとの噂です。

そういえば、城に入ってからノアは違和感を覚えていました。普通、王族の住まいともなれば、ビロードのカーテン。高価なメルシ―毛皮を使った絨毯。巨大なドラゴンの剥製。天才芸術家が生み出した無数の彫刻。勇猛果敢な勇者の甲冑などなど。そういった装飾品が所狭しと並び立つものです。ですが、ジャスト城は簡素・・・というより、殺風景。申し訳ない程度のツボみtainなものが廊下にポツンとあるだけです。

経済対策として、無駄な国費を節制する新大臣の案だそうです。さすがに国宝であるエルマドールは手放していませんが・・・。しかし、こつも高価な品がなくなると、盗賊団としては盗み甲斐もなくなります。そして、それだけ大臣の発言力が強いのがうかがえるわけです。

ちなみにバツカレス盗賊団は義賊です。お金があるところしか盗りにいきません。そして、貧しい人々への施しもちゃんとやっています。税金などを納められない人々が時々、路頭から迷いに迷って、盗賊の森にフラフラと来るときがあります。まあ、もしかしたら最

期の場所を探してのことかもしれませんが……。そんな人をバツカレスたちは助け、働ける人には仕事を探してやり、どうしても見つからない人に至っては、自分たちの仲間にしてしまいます。そんなこんなで、大きくなってしまったのがバツカレス盗賊団なのです。迷ってくる人の数もここ最近では増えてきました。新しい大臣になつてからのことです。それも、盗賊がやれそうにない老人まで……。王族だけでなく、国民にも厳しい大臣の政策には、反対意見も多いことでしょう。でも、それは振り回されている王様が弱いからだと揶揄されています。しかしながら、そんな政治のことはノアにはまったく関係もないことでした。

特に誰かに見つかることもなく、ノアはあつという間に三階にきました。国宝だったら、やっぱり一階などには置きません。でも、あんな警備の薄い二階に……。まあ、王族がいるのに警備が薄いつても問題なんです。そこに秘宝エルマドルがあるとも考えられません。ということ、ノアは三階に目を付けていたわけです。三階の大広間。王族の結婚式や、まず来ることがないファルやメリンがもし仮に来たときのために応接する部屋。そんなあまり使われていない場所です。ここも経済政策で、装飾品の類はほんの少ししかありません。

魔神バルバトスの像……。ではなくて、なんかよく解らない女神の像。おそらくは女王様を象つたものなのかもしれませんが。それが大広間の奥にありました。スタンドガラス越しに差し込んでくる月明かりで照らされています。表情はちょっと厳しげ。気弱な王様にピシッと言う顔です。

「怪しい……。怪しすぎる」

ノアはその像をみてピーンとききました。側によって、ペチペチと叩いてみます。

「こういふ像には何かが隠されている。アタシの盗賊の勘がそう言っている！」

自信満々言います。というより、この部屋にはこの像しか変わっ

た物が無いので・・・当然じゃないかとも思うのですが。すでにノアは勝利のポーズをとっていました。

「どういう仕掛けかな？ とりあえず、うおりゃああ！」

ノアはおもむろに像の首を掴み、グイッとひねりました。いや、これが生身の人間ならば完全に折れてます。まさに猪突猛進の極みです。

しかしながら、このなんの考えなしの行動が功を奏することもあるものです。ガキンと首の中の部品が外れる音がして、顔の部分が手前に折れました。そして顔がなくなった首に、赤いスイッチが現れたのです。

「ビンゴ！」

ノアはパチンと指を鳴らします。そして、なんの躊躇いもなしにスイッチをバシンと叩きます。でもシーンとして何も起きません。

「なんだろ？ なんにも・・・うわあ、うわわわ！」

油断していたノアの周囲の空間が突如として歪みます。慌てて逃げようとしたノアを取り込み、魚眼レンズか、万華鏡を通して見たようにグニャグニャと歪みます。

シュッポン。間抜けな音をさせて、ノアの姿は跡形もなく消えてしまいました。後には何もなかったように静寂の中に像が佇むだけです・・・。

真つ暗闇。ノアはゆるゆると起き上がります。意識が消えたわけではないようです。何やら瞬時に別の場所に移動してきたようです。辺りを見回りと、ガラス戸のような床の上にいるようです。あるのは暗闇だけ。このガラス床から、その下がどれだけ深いのかもわかりません。落ちたら、底がなくて落ち続けるかも・・・そんなことを思ってしまったいそうなほど真つ暗なのです。

盗賊を捕まえるためのトラップだったのかも・・・。そんな事を考えると、ノアの全身の血が氷ついたかのようにになりました。頭の芯から冷えて、気が遠くなります。

しかし、こんな所で倒れるわけにはいきません。とりあえず、ここがどこなのか確認して脱出しなければなりません。自分を奮い立たせて顔を上げます。

そういえば、辺りは真つ暗なのに、どうしてガラスのような床だと解ったのでしょうか。そう。どこからか光源が来ているのです。それは、ちょうどノアが顔を上げた瞬間にわかりました。

小さな光の点。脈打つように震えるそれは、今のノアにとって希望の光に見えました。ヨロヨロと危ない足取りで光の方に向かいま

す。
最初、小さな光だと思ったものはとつもない大きさでした。この部屋がどれだけ広いのか皆目検討もつきませんが、ノアが十歩進む毎に、倍の大きさになっていくのです。不思議と光量は変わりません。なんだかロウソクの灯火に近く、やはりそれは明滅していました。ドツクン、ドツクン！ 光が大きくなるに連れて、なにやら音まで聞こえてきます。地を揺るがすような忙しない音です。ノアはお腹の底が揺れて、気持ちが悪くなってきました。決して心地よいものではありません。

「なんだよ・・・これ」

すぐ側まできたノアは愕然としました。大きさは、小さな太陽と言っても良いくらい。もしかしたらジャスト城と同じくらいはあるかも知れませんが。そんなものかどうして城の中に収まるのでしょうか。いや、それより、これはいったい何なのでしょう。不気味な赤黒い色を波立たせ、まるで生き物のようにドツクンドツクンいつてます。ノアは言い知れぬ不安に包まれました。

「・・・ネズミが。ようやく来たか」

敵意のこもった低い声がして、慌ててノアはダガーを抜いて構えます。

あの太陽みたいなもののインパクトが強く、思わず注視していたために気づきませんでした。不気味な太陽を背に、まるでそれを護るうとせんばかりに立ちはだかる男がいることに。

浅黒い顔に、ノアより釣り上がったキツネのような細く冷たい目。そして濃い緑色のゆったりした不思議な服を着ています。ローブのように見えますが、下は綿のパンツで動きやすそうです。いわゆるカンフーパンツですね。まあ、この世界にカンフーはないでしょうが、「誰だ!？」

ノアは猫科の猛獣のように全身の毛を逆立てました。逆手に持ったダガーの剣先を向けますが、相手はまったく怯む様子もありません。

「誰だ? 少なくとも盗人が吐く台詞ではないな。それは、こちらが問う事だ」

目を細め一歩進みます。ノアが武器を構えてるのに、相手は丸腰で、しかも後ろに手を組んでいるのです。有利なはずのノアの方が、なぜか気圧されていました。

「フ……。まあ、よからう。私はジャスト城の大臣オ・パイだ」

ノアは目を丸くしました。相手の顔をまじまじ見やります。

「あ、アンタが暗殺者の大臣か!？」

ノアは信じられませんでした。背は高くはあるものの、細身で、横幅もバツカレスの半分もありません。暗殺者なんていうぐらいですから、もつと筋骨隆々していると思いきやこन्दいたのです。……まあ、ノアの価値観で強い男というのは基本的にマッチョタイプだったのです。

「盗賊の小娘。昼間の賊の仲間か。まだあれだけ痛めつけられても懲りんとみえるな……。それまでにこの国宝が欲しいか?」

痛めつけられたというのはシユタイナの事でしょう。しかしノアの関心は、その後の台詞に向きました。

「国宝? エルマドールのことか!? どこにある!？」

そうです。自分は秘宝エルマドールを奪いに来たのです。目的を達成しなければなりません。オ・パイは、嫌らしくニヤリと口元を笑わせました。

「どこにある? 目の前にあるではないか」

「え？」

言っている意味がわからずノアは眉を寄せました。

オ・パイは小馬鹿にしたように鼻を鳴らし、両手を広げました。

「私の後ろにある『これ』だ！ これこそがジャスト城の国宝エルマドール！」

驚愕の事実が判明しました。なんと、あの不気味な太陽こそが秘宝だったのです！ ノアはあんぐりと口を開きました。

「な、な、なんだよ！ 親分のバカヤロー！ あんなの盗めつこないじゃないかよ！」

がつくりと肩を落とします。それは、とてもノア一人に抱えられない代物ではありません。それどころか、バツカレス盗賊団が束になっても持ち上げることすら無理そうです。

「徒労だな。物の真の価値が解らぬからそうなる。・・・さて、後悔はすんだか？ 低脳なネズミはやはり根から駆除せねばな」

「さつきから人のことをネズミ呼ばわりしやがって！ オツパイなんて変な名前の野郎なんかには負けないよ！」

オ・パイの額に青筋がたちます。

「・・・私はオ・パイだ。やはり低脳だな！」

オ・パイが襲いかかってきます。やはり素手だけあって、徒手空拳なわけです。下手な刃より鋭そうな手刀がビュンと振るわれます。ノアはそれを寸前でかわしました。

「ちやいやあ！」

休む暇も与えまいと、オ・パイは素早い動作でしやがみ込み、ノアに足払いを仕掛けます。両足ともに刈られ、すってんころり。ノアの小さなお尻がガラス床に落ちます。

「いってー！！！」

骨盤から電気が走りました。涙目に叫びます。ですが、オ・パイは止まりません。

「ほらほら、どうした！ 次から次へと行くぞ！ しえいやあ！」

オ・パイの無数の連打。拳ありーの、二本拳ありーの、掌打、手

刀、抜き手のおまけ付きでのオンパレード。尻餅をついたままのノアは、お尻をズリズリ後退させながら猛攻を受けます。ただでさえ薄着なのに、このままじゃお尻の皮が剥けてしまいます。

しかも、オ・パイは手加減して遊んでるだけのようです。連打も片手でしか打っていませんし、その気になれば蹴り技をノアに叩きつけるなんて造作もないでしょう。余裕の笑みは、ノアを明らかに嘲笑っています。

ノアは悔しくて唇を噛みました。尻もちをつきながら、ダガーで防御する姿はなんと滑稽ではありませんか。でも熾烈な攻撃は止みそうにありません。必死なのです。少しでも気を抜くと、パシンと顔を払われてしまいます。わざと手加減しているのです、それだけでは気絶することすらできません。

それに鋭利なダガーの刃先で防御しているわけですが、素手のはずのオ・パイは物ともしません。まるで拳が金属でできていうかのようです。ガキン、ガキンと重低音が響きます。

「フン。暇つぶしにもならん。わざわざ、ここまで誘き寄せて私の相手をさせた意味がないではないか……」

オ・パイがピタリと攻撃を止めます。ノアは両手をダラリと落としました。もうヘトヘトです。お尻の皮も剥け、ジンジンとした痛みが鈍く感じられます。鼻先から血がツーと流れ落ちます。悲しくもないのに、痛みで涙が零れました。

オ・パイは、三つ編みにした黒髪をピュンと後ろに払いました。無情の瞳で、満身創痍のノアを見下します。

「……さっきの威勢はどうした？ もうお仕舞いか。面白くもない。死ね」

オ・パイが片手をあげ、人差し指だけピンと伸ばします。

「大臣という要職になってからというもの、なかなか人殺しもできん。せいぜい、良い声で泣き喚き、私の渴きを癒せ！」

目にも止まらぬスピードで、オ・パイの人差し指がノアの胸元を突きます。

「……死至突^{しとつ}」

オ・パイがゆっくり指を離しました。その瞬間、ノアの身体がビクンと跳ね、全身の血管が浮き上がって、どす黒くなります。

「きゃ……あああ！」

血を吐きだし、全身を襲う激痛に身を寄せて、ノアはのたうちまわります。

オ・パイは満足そうに笑いました。

「……これが暗殺者の所以だ。地獄の苦しみの中で、己が愚かさを呪い、そして死ぬがよい」

しかしながら、その言葉も悶えるノアには聞こえていません。目を白黒させて痙攣しています。

「……む？」

コロンと何かがノアの胸元から転がり落ちました。胸元を突いたとき、胸当ての隙間から出てきたのです。オ・パイは片眉を上げ、それを拾おうとしました。

その瞬間、小さな玉状の物から、ブシューと煙が勢い良く吹き出します。ヤグルがノアに渡したあれです。そう、あれは煙玉だったのです。

「煙幕とは小癩な！」

オ・パイは煙を吸い込まぬように、口元を抑えながら身を庇います。

ようやく煙が収まった時、オ・パイは目を見開きました。なんとさつきまで目の前にいたノアがいないのです。

「死至突を受けてなお動くか……。フン。ネズミらしくしぶといな。まあ、長くはないだろうが」

オ・パイは秘宝エルマドルをチラツと見てから、ザツと踵を返して立ち去りました……。

ジャスト城と盗賊の森を繋ぐエルジメン橋。ノアは身体を引きずりながらそこまでやってきていました。自分でも、どこをどうやっ

てここまで逃げてきたのか解らないのです。気づいたら、この橋の欄干を辿って歩いていました。

動悸が早く、時おりに信じられない激痛に襲われます。しかし、生きたいという気持ちでノアを動かしていました。

「・・・は、ハハハ。アタシ、死ぬのかな」

橋の真ん中で、ついに動けなくなつて膝をつきました。もう一歩も進めそうにありません。ここまで逃げれたのも奇跡と言ってもおかしくないくらいなのです。

あと少しで、皆が待つアジトが見えてくるといふのに。ノアの朦朧とする意識に、バツカレスやシユタイナ、ヤグルの顔が浮かびます。心細くなり、涙ぐんでしまいます。

川の流れが、雲に隠れて幾分か弱くなつた月光を浴びています。そこで、鯉に似た魚がノアを見上げて口をパクパクとさせました。まるで、死に逝くノアを馬鹿にしているみたいです。

「・・・チキシヨ。まだアタシは死にたくないよ」

「これはヒドイね」

ふいにノアの背に呑気な声がかかりました。誰だろう？ 振り向きたくとも身体がいうことをききません。

「死至突つて技を受けているね。このままじゃ死んじゃうねえ」

あつけらかんと言うその口調は、まるで人事で、ぜんぜん深刻そうではありません。

「治療魔法は専門外だけど。まあ、応急手当なら・・・」

ノアの頭にポンと手があてられます。痛みに朦朧としてる中、その手の温かい感触がとても心地よく感じられました。

その手が、ブーツと温かさを増します。聖なる光がノアの身体を駆け巡ります。ショートカットにした赤い髪一本一本から、指の先足の末端に至るまで。どす黒くなつた血管が、シューツと浄化され正常に戻りました。

痛みに耐えていたノアは、フツと気が弛み、その場に倒れこみます。その時、仰向けになつたノアの虚ろな瞳に、その声の主の姿が

映りました。

ボサボサの茶髪に、ド近眼の分厚い丸眼鏡。生え放題の不精髭。ボロボロの作業服に大きなリュックサック。顔は場にそぐわないほど朗らかで、ニコニコした笑みを浮かべています。

「もう大丈夫だよ。死んで良い命なんて一つもないんだから……」
そんな男の言葉は、意識が混濁しているノアには辛うじて聞こえた程度です。

ノアは何かを言おうとしましたが、それを許すまいと、もの凄い睡魔が襲ってきます。抵抗することもかなわずノアはそのままゆっくりと眠りの世界に落ちていきました……。

第一章 女盗賊ノアと秘宝エルマドール（後書き）

十年以上昔に、かつて私がやっていたアマチュアRPG作成チーム『ターリムプロダクション』のゲーム内容を新しく小説にリメイクして直したものです。

私の不手際でゲームデータなくしてしまいました（汗）。十代の記憶を辿りながら、書き起こして残していければなあ、というほぼ自己満足の作品ですね。もしゲームプレイしてくれた人に見ていただけたらとても嬉しいですね

もし、もし稀有な方でゲームデータをお持ちの方いましたら、ぜひ御一報いただければ！

第二章 記憶をなくしたメリンの少女メルメル

蝋燭が何本も並んだお手製の無影灯をグツと寄せます。傷を確認し、銀色のバッドからピンセットを掴みました。ガチャツという重厚な音が響き渡ります。消毒液に浸したガーゼを掴み、丁寧に傷口を消毒していきます。

ちょっと大きい裂傷には、針と糸を取りして手早く縫いつけてしまいます。慣れた手つきで、シウルシウルとあつという間に塞いでいきます。

片目にはめた拡大鏡を外し、少し垂れた感じの目が油断無く全身を点検します。治療が全て終えたことを確認すると、白衣の胸ポケットから煙草を取り出し口にくわえます。照明の蝋燭を利用し、火を付けました。

「傷口は浅いが……。女子供にやる仕打ちじゃねえな」

フーツと紫煙を吹き出し、ガタツと椅子から立って、窓の側でシヤッターを開きました。朝靄の奥から、朝日の光が差し込みます。

その光が治療を受けていた人物……。ノアの顔に当たりました。

「……う、ここは」

ノアは眩しそうに目を開きます。なぜか自分はダイニングテーブルの上に寝かされています。ここはどこだろうと、ノアは頭を少し振りながら上体を起こしました。

「起きたか。ま、ほとんど心配はねえだろうが、もう少し休んでおけ」

くるりと振り返り、窓辺に立つその男がそう言いました。その顔を見て、ノアは驚きに目を見開きます。

「バーボンおじさん！？ なんで？」

「おじさん……。つてのはやめてくれよ。これでも、まだ二十五だぜ」

白髪まじりの髪をガシガシと掻き、バーボンは苦笑しました。

右目に眼帯、左腕には鉤状の義手。深い目の下のシワに、不健康そうなやせ細った身体。ヨレヨレの白衣を着たバーボンは、ノアがおじさんと言ってもおかしくないぐらいです。とても、二十五歳の若さには見えません。

「あ……アタシ、どうしてここに？ 傷を……治してくれたの？」

傷口の包帯を見て、バーボンが治してくれたのだとノアは気づきました。

バーボンはジャスト城下町の外れに住む町医者です。バツカレスとも古い知り合いで、盗賊のようなならず者とも縁がある顔の広い人物です。ノアとも、もちろん面識がありました。昔から怪我をしたり病気になったりする度に、バツカレスに担がれてこのバーボンの元に来ていたのです。

「夜中に駆け込んでくる患者はごまんといるが、さすがに玄関前で倒れているのは初めてだったぜ。しかも、よく知った顔がな」

「そんな……アタシ、だって、エルジメン橋にいたのに」

ようやくノアの頭が回り始めました。ジャスト城に秘宝エルマドールを盗みに入り、大臣オ・パイにやられて、命からがらエルジメン橋にまで逃げ延びたのです。

しかし、バーボン医師が治療を行っている自宅兼診療所は、ジャスト城下町の北側です。盗賊の森やエルジメン橋があるのは南方なので、まるで正反対の方向なのです。ノアが自力でバーボン診療所に来てきたとは考えにくくことでした。

「……また危ないことに首をつっこんだらうが」

バーボンは溜息をつきながら、ダイニングチェアにドツカと乱暴に座りました。ノアがダイニングテーブルに寝ているので、まるでこのまま食事でもしそうな感じですよ。

「今回は本当にやばいところだったぜ。死至突……生命の根幹を打ち砕いてしまう最悪の殺人技だ。だが、俺の前に治療したヤツがいるな。それも魔法の類だ。そうじゃなきゃ、俺でも治してやれん」

バーボンが、果物のバスケットに入っていたカルテを取り出し、ペラツとめくって言いました。

診察室で煙草を吸ったり、ダイニングテーブルを寝台にしたりするぐらいにいい加減なところが目立つわけですが、患者の記録だけはきつちりとついているのです。

「・・・魔法」

ノアは首を少し傾げました。そして、思い出します。這々の体で逃げてきたノアが、エルジメン橋で出会った男のことを。

ボサボサの茶髪に、丸縁の眼鏡の奥から覗く優しげな瞳。乗せられた温かい手。そして、放つ癒しの光によって苦痛を取り除いてくれたこと。

その男のことを思い出した瞬間、ノアの顔から火がでるんじゃないかってほどボツと赤くなりました。なぜだか解りませんが、胸がキョツとして、ドキドキと鼓動が早くなります。

「な、なんだ？ まだどこか痛むのか？」

バーボンがノアの顔を見てギョツとしました。熱でもあるのではないかと、ツルツルしたノアのおでこに手を当てます。ですが、ノアはブンブンと首を横に振りました。

「ありえない！」

「え？」

ノアが叫び、バーボンが目を瞬きます。

ノアは自分自身が信じれませんでした。あの眼鏡の男は、ノアの好みとは真反対です。マツチヨでもないし、強そうにも見えません。ましてや、たぶん四十歳は越えてる中年です。でも、なぜか、あの自分を見る優しげな瞳がなぜか忘れられません。ポンと乗せられた手の温かさなど、今でもハッキリ思い出せるぐらいです。いくら、瀕死の状態を助けられたからといって、そんなすぐに好意を抱くものでしょうか。ノアは自分の感情が理解できずにただ首を横に振りました。

そんなノアの心情なんて知る由もないバーボンは、訳がわからな

いと言わんばかりに両手を上げました。

「魔法！ そう、ここに来る前に魔法で治療をしてくれた人がいたんだ！ きつと、その人がアタシをここにまで連れてきてくれたんだよ！」

まくしたてるかのように言うノアに、バーボンは天井をにらんで少し考える素振りをします。

「・・・死至突を治す魔法ってのは俺も知らない。だから、お前を治したヤツにすごく興味があつたんだが。魔法に長けるメリンにだって、そんな魔法を使えるヤツなんていないと思うぜ」

バーボンはかつて天才的な医学の専門知識を認められ、ファルやメリンにも認められた数少ないデムであつたのです。そのためジャスト城周辺しか知らないノアなんかよりも、遙かに多くの人脈を持つているのです。医療関係だけだったら、メリンの魔法使いの知り合いもかなりいます。そんなバーボンをして、死至突を治せる人を知らないのです。

「あれは誰なんだろう・・・。ここらじゃ、見ない顔だつたよ」

「どんなヤツだつたんだ？」

「んー、なんか、パツとしない、冴えない感じ」

ノアは思つたままを言いました。確かにそのまんまですが、第一印象と聞かれたらそんな感じでしか答えようがありません。ノアの言葉には、なんでこんな印象の相手にドキドキするんだろうという自分への疑問も含まれていました。

「なんだそりゃ・・・。雰囲気じゃわかんねえよ。その外見的特徴とか、何か持ってたとかないのか？」

理詰めで考える医者らしく、バーボンは論理的な意見を求めます。ノアは、うーんと頭を捻りました。あの時の状況を深く思いだします。

「丸い眼鏡をかけてて、大きなリュックサックをもつてて・・・なんだか、探検家みたいだった。服装も登山服みたいで」

「リュック？ 登山服？・・・旅人か何かか？ 他には？」

決め手に欠けると言わんばかりに、バーボンは眉を寄せながら、ちよつと苛立たしそくにテーブルの端を指でタンタンと叩きました。ノアは口をモゴモゴと動かして、さらに思い出します。

「そんなこと言われたって・・・アタシ、あるとき死にそうなくらい辛かったし。あ！あと、右手！右手が何か・・・変だった！爪の先から、刺青・・・みたい模様してた！」

ノアがようやく思い出して言うと、バーボンの目が大きく開きました。

「右手？刺青・・・まさか、聖剣エイスト？いや、そんな。だが、リュックを背負った登山服姿・・・」

バーボンがアゴに手を当てて思案します。ノアは不満そうに頬を膨らませました。

「おじさん！？なんだよ、一人で考えてなくてアタシにも教えてよ！誰なの！？知ってるの？」

ノアがダイニングテーブルから降り、バーボンの腕を掴んで揺すぶりました。

「あ、ああ・・・。だが、にわかには信じがたいが。だが、お前を治した魔法。仮に聖魔法だったら使い手を一人だけ知っている」

「誰？教えてー！」

バーボンは言ってもいいものかと少し逡巡しましたが、ノアの必死な目を見て、ついには口を開きました。

「二十年前、魔神バルバトスを封じた英雄スタッドだ」

ピタツと、ノアの動きが止まります。

「え？えー！えー！あ、あの人、英雄？あの、英雄スタッド！？」

ノアは悲鳴に近い感じで叫びました。バーボンは咄嗟に自分の耳を抑えます。しかし、間に合わず、ノアの甲高い声のせいで耳の奥がキーンと響きました。

いくら自分が生まれる前の話とはいえ、この世界を救ったスタッドのことは、世間知らずのノアでも知っています。でも、絵本とか

の物語にでてくるような人物です。普通の人なら、いくら同じ時代に生きているとはいえ、そんな超有名人が自分と関わりを持つなんてまず考えられません。そう思っていたのは、ノアも例外ではありませんでした。

まあ、その英雄が冴えない容姿をしていたので、そのギャップに驚いたつてもあるんですが。ほら、絵画とかだと、有名人ってのはどうしても美形になるじゃないですか。そうじゃなくても、お話できかされる英雄ともなれば、妄想が後押しして、ちょっとその主人公を格好良くしてしまうものです。ましてや二十年前といえば、スタッドも二十代そこそこです。どうしても、物語の主人公って、その活躍した時の場面だけ語るもんだから、ずっと歳をとることなんてないって思っちゃうんですよね。そんなことあるわけないんですけれども……。

「ああ。可能性としては……ある。二十年前に世界を救った後からほとんど誰にも見られていないけどな。俺が昔、ファルの首都レムジンにいたときに、確かヤツの論文で『退化神殿』について書いてあったものがあつた。遺跡調査で訪れているとすれば、この辺をうろついてもおかしくはない」

「たいか……しんでん？」

「このジャスト城下街から、東に抜けた『退化の大森林』のどこかにあるって噂の遺跡だ。考古学者として、遺跡には目がないって話だからな。それに、その辺は俺たちファル、メリン、デムの三種族以外の『第四の種族がいる』ってようなスタッドの記述もあつた。進化した種族じゃなく、誰にも相手されなくなった『退化した種族』らしいが……本当にいるのなら、スタッドがそいつらと共にしているのかもな」

「バーボンがそう言うのに、ノアの目がキラキラと輝きました。バーボンはしかめっ面になります。」

「……まさかとは思うが」

「うん！ アタシ、その退化神殿ってところに行ってみる！」

バーボンは自分の顔を抑えました。そして首を横に振ります。

「おいおい。何を考えている？ 退化の大森林は、迷いの森だ。それも、初めてはいえるヤツは間違はなく迷う。それに、魔神バルバトスが封印されたとはいえ、配下の魔物どもはまだそういう未開の地には残っているんだ。危険すぎる場所だぜ」

「それでも、アタシは・・・行かなきゃ。スタッドに会わなきゃいけない！」

ノアは、スタッドに会って自分のドキドキの理由を確かめなければならぬと思っていました。もちろん、そんなことは恥ずかしくないで、口が裂けても言えませんが。

「なぜだ？ なんのために会う？」

バーボンに冷静に問われ、ノアは言葉につまります。それでも、ノアはグツと拳を握りました。

「お礼を、お礼を言わなきゃ・・・いけない！ アタシ、まだ、なにも言っていない！！」

我ながら、言い訳がましい理由だと思いました、バーボンは特になにもいいませんでした。ただ、小さく溜息をつきます。

「お礼なら・・・治療してやった俺にも言ってもらいたいもんだが、バーボンが皮肉っぽく言うのに、ノアはバーボンにもまだお礼をいっていないことに今気づきました。」

「あ、ご、ごめん。バーボンおじさん、あ、ありがと・・・」

ノアがしどろもどろと礼を言うのに、バーボンはフツと面白そうに笑いました。

そして、急にバーボンは真面目な顔つきをします。

「・・・ノア。正直、今日お前がズタボロで倒れているのを見かけて、俺はハラワタの底が煮えくり返る思いをした。バツカレスの馬鹿が何を考えているかはしらねえが、俺はお前の幸せを願っている。危ないことはしてほしくはねえんだ」

「・・・うん」

ノアはしんみりとして、コクリと頷きました。バーボンがこうい

う風に言うということは、本当に心配してのことだからです。

バーボンはノアが小さい頃から、お世話になってる人です。バツカレスが無責任なところがある分・・・まあ、酔っぱらって城に一人で盗みに入れていうぐらいなんですからすでにお分かりでしょうが・・・このバーボン医師がノアの兄的存在、保護者のような役割を果たしていた部分も大きいのです。バーボンにとっても、ノアに対してはただの患者ではない以上の思いがあるのです。

「本当は盗賊なんて世間に顔向けできない稼業やめて、俺のところ
で助手としてでも働けば・・・」

「バーボンおじさん！」

ノアが言葉を遮ったので、バーボンは少しだけ苦い顔をします。

「・・・昔の思い忘れちゃったの？ 『人は定規じゃ計れない』。
どんな仕事をしようと、アタシはアタシだよ？ ノアだよ」

ノアが言うのに、バーボンはガシガシと頭を掻きました。そして、
また煙草を取り出して火をつけます。

「昔の俺の台詞なんて・・・出すなよ。チツ。だが、そうだな。ノ
アの仕事に俺が口だしていいはずねえな。悪い、今は忘れてくれ」

ノアは、バーボンの眼帯と義手を悲しげに見ました。バーボンは
気まずそうに、眼帯の方の目を、ノアからそらします。

「アタシは・・・大丈夫だって。また怪我したら、おじさんが治し
てくれるし」

ノアがガッツポーズをとると、バーボンは満更でもなさそうにか
すかに笑います。

「つたく、バツカレスもお前も勝手に言いやがる・・・ま、い
ずれにせよ、俺が治せないような傷なんかは負ってくるんじゃないぞ」

そうやってバーボンは立ち上がり、書棚から四つに折りたたんだ
古い紙をとって持ってきます。そしてそれをノアに手渡しました。

「これは・・・？」

「退化の大森林の地図だ。ま、地元の露店で買ったやつだからな。
正確かどうかは知らないが」

「あ、ありがと！」

「どうせ、言ってもきかないだろうからな。だが、決して無理はするんじゃないぞ」

「うん！」

ノアは心からバーボンに感謝し、大きく頷きました……。

心配してるであろうシュタイナとヤグルや、酔いが醒めて軽率な事を言ってしまったと後悔してるバツカレスに、今までの報告をしようかと悩んだノアですが、そここうしてる間にスタッドに追いつけなくなつては事です。報告は後回しにし、すぐに退化の大森林に向かいます。

鬱蒼としげる木々。もう昼近くだというのに、太陽の光はわずかな木漏れ日が申し訳ない程度に僅かに地を照らしています。

ひねくれたようにグニヤグニヤと曲がって生えている幹や枝。足を容赦なく絡みとるように群生してる蔦、砕けた岩の上にはびっしりと苔。油断してるとすぐに転びそうになります。加えてどこまで行っても同じ風景が延々と続きます。迷いの森といわれるのも納得がいきます。ノアのお腹がグウーと一際大きな音をたてました。ちよつと恥ずかしかったですが周りには誰もいません。リスがキキキと鳴きましたが、まさかノアを笑ったわけでもないでしょう。

「お腹すいた〜。チエ、失敗したな。バーボンおじさんとこで何か食べさせてもらえば良かったな」

ノアは立ち止まって頭をガシガシかきます。

しかし、花柄のエプロン姿のバーボンが、菜箸でなくピンセットを使い、怪しげなピーカーから紫色の液体の調味料を、そして、これまた形容しがたいモザイク必須の不気味な肉にかけてる姿を思い浮かべ、ノアの全身に鳥肌がたちました。

そういえば、以前にバーボンの手料理を食べて、ノアは最悪最低の腹痛をおこしたのです。独身で医学以外まったく無知の男の手料理など、凶器以外のなものでもありません。そんな失礼なことを

ノアが思ったせいで、いまごろ、バーボン先生は大きなクシャミをしているかもしれせん。

「なんか食べるものないかな？」

ノアは上を見上げます。果物でも実つてればこれ幸いなのですが、こんなところに・・・あら、あつた。

ちよつと開けた場所で、一本だけ大きな木があります。他の木は葉っぱだらけなのに、それだけは如何にも美味しそうなピンク色の実がたわわに実っていました。まさに食べてみるって言わんばかりです。

普通は怪しいと思うものですが、そこはノアのことです。ましてや今は空腹状態。ただてさえ少ない理性が働きません。よだれを垂らさんばかりの、可愛い女の子にはちよつとほど遠い、そんな危ない顔つきで、いつもより素早い動作で走りました。どれくらい早いかといえば、かの有名缶詰キャットフードを見た瞬間の猫なみです。まっしぐらなわけです。

尺取り虫の動きのように跳ね上がり、東京タワーに昇る巨大サルのように豪快によじ登り、あっという間にその木を制覇します。

そして念願の木の実をもぎ取りました。思ったより大きく、バスケットボールぐらいはあるんですが。それを両手に掴んでかぶりつこうとしました。

その時です。だいたいこのタイミングなんですよね。絹を引き裂くような女性の悲鳴が木霊しました。

ノアはもっていた木の実を落とす、目を丸くしました。今の声は切羽詰まった時の人間の悲鳴。差し迫った危機をつけてるのです。サツと腰のダガーを抜きます。

高いところにいるのが幸いしました。ノアは眉のところに手を当てて遠見を試みます。

いました。見つけました。ピンク色の長い髪をした少女。こんな森深くには不釣り合いなヒラヒラしたドレスを着ています。逃げようとする少女を追いかけるのは、木・・・？ はい。間違い

ない木です。根っこを足のようにして、枝を手のようにワサワサ動かし、鳥がつついて空けたような空洞の目を持つ木です。ノアが初めて目にする魔物です！ 名前は…ほくねんじん 朴念仁とでも呼んでおきましょう！

ノアは身軽に木から飛び降り、ピンクの髪の少女めがけて走りましました。

「まてまてまてーい！」

少女と朴念人の間に割って入り、勢い余って、片足で三歩ほどトントントンと、最後に前に手がでていたので、それはまるで歌舞伎役者の見栄きりのようです。顔をグルリと回して睨みをきかせました。完璧です。朴念仁も怯えて…というよりは呆れてたのかもしれないが、ピタリと動きを止めました。

「魔物にとつちや、人間を襲うのは本分かもしれないけど、この義賊ノア様の目に入ったとあっちゃあ、見捨てることはできないね！」
言葉が通じのかどうかは解りませんが、朴念仁は自分に邪魔をされたことだけは解ったようのでガサガサと頭を振ります。

「あ、あなたは…」

「いいから逃げなよ。こいつはアタシに任せといて！」

ノアは振り向きもせずと言います。

朴念仁が腕…のように見える四本の枝を広げました。ノアに掴みかかるうとします。

「へ！ トロいよ！」

ノアはわずかに身を屈めたかと思うと、シユタタと駆け出し、襲いかかる四本の腕を切り落としてしまいました。高性能高枝鋏でもこうはいきません！

朴念仁は、無くなった自分の手を物悲しそうに見やりました。

「ウオオオオオオオローン！！」

口らしき丸っこい穴の奥から、とんでもない悲鳴を上げます。自分の頭上に巣を作っていた鳥が驚いて、バサバサと飛び去りました。
「うわ！ なんて、声を出すんだ!？」

ノアが迷惑そうな顔で、朴念仁の胴体を切りつけます。

「ウオオオオオオローン！！！！！！」

さらに大きい悲鳴をあげ、ノアはたまらずに耳を抑えました。

「ダメ！ その子は傷つけると仲間を・・・」

ピンク色の髪の少女が言うが早いか、ドドドドツという地響きと共に朴念仁の群れが姿を現しました。仲間の悲鳴をききつけ集まってきたのです。数は十・・・いや、二十四はいるでしょうか！

「つとつと！ こりゃ、多勢に無勢だよッ!?」

振り回される腕をかわし、ノアは間合いを取りつつ、一体一体ずつ相手をしていきます。ですが、ノアがダガーを振るたびに・・・

「ウオオオオオオローン！」

「ウオオオオオオオオオオローン！！！！！！」

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオローン！！！！！！」

朴念仁は次から次へと断末魔をあげ、その度に敵の数が増えていきます。ノアはまだ戦えましたが、なにせ朴念仁の悲鳴のすごいこと。頭がガンガンしてきて、さすがに攻撃の手も鈍くなっていきます。

「つつ、このままじゃ・・・」

朴念仁の群れに押しつぶされ、さすがのノアも目を白黒させました。

「『火の精霊よ、赤き粉を盛大に散らせて、篝火を猛る風で靡かせよ・・・ファイヤーストーム！！』」

響き渡る不思議な呪文が聞こえたかと思うと、シャーッと赤い軌跡が朴念仁の足下に描かれました。それが魔法陣を描ききると、猛烈な突風が吹き荒れます。チツとどこかで種火がつき、それに引火しました。まさに炎の竜巻です。炎の風が靡き、朴念仁を飲み込んでいきます。悲鳴をあげようにも、炎が酸素を燃やしてしまうので声は響きません。朴念仁は哀れにもグズグズと無言のまま崩れていきます。炭へと化していきます。

「うわ、うわわわッ！ あっちー！ あっちやちやちや！！」

朴念仁と共に炎に巻き込まれたノアは飛び上がりました。このままでは一緒に灰になってしまいます。

「あっちゃっちゃちゃ！・・・あ、あれ？」

飛び上がっていたノアですが、不思議なことが起きているのに、ようやく気づきます。周りの朴念仁は次々と崩れていくのに、ノアの身体は燃えないのです。確かに炎に包まれているのですが、熱くも痛くもないのです。そういえば、周囲が燃えて空気が薄くなっているはずなのに、呼吸も楽にできます。

「な、なんだ？ これ・・・」

「魔法です。対象をこの子たちにしましたから、私たちはダメージを負うことはありません。安心してください」

後ろから少女にそう言われ、ノアは初めてそこで振り向きましました。ピンクの髪とまったく同じ色の瞳。とっても可愛い、とっても愛らしいとはこういうことを言うのでしょうか。黙っていても保護欲をそそられ、何がなんでも守らずにはいられない存在。そう形容するに相応しい少女でした。

パッチリと開いた目に長い睫。ほのかに朱を帯びた頬、そして食べ頃のサクランボのように艶やかな魅力的な唇。そんな娘が、これまた絵本のお姫様のような、フリルの沢山ついた可愛いドレスを着ているのです。可愛いに可愛いの乗法で、ノアが男の子だったら、そりゃもう一目でノックダウンしてしまったことでしょう。あまり自分が女の子であるという自覚が少ないノアも、何かよくわかりませんが完全に負けたような気がしました。

ですが、ノアが一番に目がいったのはそこではありません。ピンク色のロングヘアの上に、二本の白い耳。ピョンピョンと楕円形のそれが生えているのです。音のする方向にわずかにピクピクと動いていることから、それは作り物の類ではないのです。そう、この長い耳は、ウサギが進化したメリンの特徴なのです。

「・・・メリンの女の子？」

ノアがあんぐりと口を開けます。ノアだって、遠目にはメリンや

ファルを見たことがあります。ですが、メリンやファルは知能の低く野蛮なエテ公ことデムを嫌っている節があります。それゆえ、側で見たり、ましてや話すような機会なんてまずありません。一般人にしてもそうなので、ましてや盗賊なんて日の当たらない仕事をしているノアたちならばなおさらです。

そのメリンの少女は、ノアに向かってニコリと笑いました。ですが、すぐに目を伏せ、悲しそうに眉を寄せます。それを見て、なぜかノアの胸は少し痛みました。メリンの少女の目は、燃え尽きた朴念仁たちに向けられています。

「・・・ごめんなさい。私が、あなたの足を間違つて踏まなければ、襲つてくることはなかったのに。熱かつたでしょう。でも、こうするしか他に私にはなかったのです。本当にごめんなさい」

メリンの少女はポロツと涙を零しました。そして、積み重なった炭をわずかにどかします。すると、その下に小さな新芽がありました。よくみると、朴念仁がいた場所に、それぞれ小さな新芽が芽生えているのです。これは朴念仁たちの数の分だけあるんじゃないでしょうか。

「また大きくなるには時間がかかってしまいますね。でも、次に大きくなったときは・・・どうか魔物になりませんように。大きな、大きな立派な木に成長して下さいね」

メリンの少女は跪いて、両手を組んでそうお祈りをします。

ハンカチで目の端を拭い、メリンの少女はゆっくりと立ち上がります。そして、ノアに向かって再びニコリと笑いました。

「危ないところをありがとうございました。申し遅れましたね。私はメルメルといます」

そう言つて、メルメルは深くお辞儀をします。それだけで、優しく礼儀正しい子だと解ります。

「あ、アタシは・・・ノア。えっと、ジャスト城の外れの森に住んでいる盗賊なんだけど」

結果的に助けられたのは自分なので、ノアは複雑な気持ちでいま

した。気まずそうに鼻の下を擦ります。

「じゃすと城？　とうぞく・・・？」

たどたどしく復唱し、メルメルはちよつと小首を傾げます。よく見ると、唇はちよつと三ツ口になっているみたいです。上唇の真ん中が少し切れていました。

「え？　知らない？　アンタ、メリンなんだろ？」

ノアは不思議に思つて尋ねます。

メリンは、盗賊の森を越えた先に住んでいます。もしこの退化の大森林に来たとなれば、どのルートを利用したにしてもジャスト城は通過せねば来れません。

「えつと・・・私、少し前からここに住んでいて」

「え！？　ここに！？」

ノアはますます驚いて目を丸くしました。こんな危険な森にいただけでも不思議なのに、住んでいるというのだから余計に驚きです。

「あ、あの・・・その、私、ちょうど一年ほど前からの記憶が・・・なくて。辛うじて覚えているのは、名前だけなので」

メルメルはしよぼんとした様子で言います。二つの白い耳が、力無くパタンと前に倒れました。

「え、記憶が・・・ない？　記憶喪失なの？」

「はい。一年前、どうしてかこの森に倒れていまして・・・。そこを『ボーズ星人』さんたちに助けてもらったのです」

「ボーズ星人？　な、なにそれ？」

怪しげな名前に、ノアは訝しげな顔をします。

「ここに古くから住んでいる・・・原住人さんです。とても優しい人たちで、こんな私も受け入れて一緒に住まわせてくれているのです。今日は木の実をとるお使いにでて・・・道に迷ってしまつて」

ノアはフーンと顎をなでました。バーボンが言っていた第四の種族というのは、そのボーズ星人と呼ばれる怪しげな原住民かもしれないと思つたのです。

「うーん・・・。よし、なら、アタシと一緒に家を探してあげるよ。」

正直、アタシも道に迷っちゃってさあ」

「本当ですか!？」

メルメルは嬉しそうに手を叩きます。

「ああ。そのポーズ星人つてのに聞けば、もしかしたら退化神殿の場所もわかるかも知れないしね」

ノアの言葉に、今度はメルメルが目を大きくしました。

「退化神殿? あ。そこです! 私が住んでいる場所は!」

「えーッ!? な、なら・・・スタッドって知っている!? アタシ、その人を捜しにきたんだけど!」

ノアはガシツとメルメルの肩を掴みました。驚いて、メルメルの耳がピヨンと立ち上がります。

「え? スタッド・・・さん? 私は・・・知りませんけれど。そういうえば、長老様だったら・・・何か知っておられるかも。お客様がどうとか仰っていたので。私、そのためのお持てなしの木の実をさがしていたので」

「おお! おお! いいね! なんか、スタッドに近くなってきた!」

ノアはテンションがあがってきて、ガッツポーズを取ります。

「ああ、でも、良かった・・・。ノアさんのような人に出会えて良かった。私、これからどうしていいかと心細かったの」

メルメルは胸に手をあてて、心底ホツとしたような顔をします。

「ノアでいいよ! 歳だっておなじぐらいでしょ?」

丁寧なメルメルに、ちょっとノアは歯がゆさを感じていたので。もつとフレンドリーでいいよと、ノアはニカツと笑います。

「え? 呼び捨てでいいんですか・・・? たぶん、私は十六歳だと思えますが」

「じゃあ、同じ年じゃん。じゃあ、アタシもあんたのことメルって呼ぶからさ! アタシのこともノアって呼び捨てで呼んでよ」

メルメルは嬉しそうに、ニッコリと微笑みました。同年代の、しかも女の子の友人なんていなかったのですから当然です。

「はい！ ノア、どうか、仲良くしてくださいね　　よろしくお願
いします！」

「うん！ メル。よろしくね」

こうして、メルは思いがけず、ノアの旅の仲間となりました。

「あ、そういえば・・・木の実さがしていたって言ったよね？ ア
タシ、あそこで見かけたんだ！」

ハツと思いだし、ノアは猛ダツシユでさっきのピンク色のバスケ
ットボールみたいな果実をもってきました。

「ほら！ メル！ おもてなしだったら、これぐらい立派なのが
いでしょ！」

ノアはニカツと笑い、それにかぶりつこうとしました。そうい
え、お腹が空いていたのです。

「あ・・・。ノア。それ、朴念仁さんの毒の実・・・ですよ。食
べたら、三秒であの世です」

メルが蒼い顔をして言うのに、ノアはそのままの姿勢で硬直して、
ポロツと木の実を落としました・・・。

第二章 記憶をなくしたメリンの少女メルメル（後書き）

バーボンとメルメルの登場です。サブタイトルをメルメルの方にしたのは、やっぱり男の名前より受けがいいだろうと狙ったことですw 申し訳ない、バーボン先生！ ってことで。好きなキャラなんですけどねえ。ま、ちよい役ではないので。次回たぶん活躍してくれることと思います。

ゲームでは、朴念仁はただの雑魚キャラです。我ながらネーミングセンスが気に入っていたので派手に動いてもらいました。でも、実際はメルメルのファイヤーストームで一発なんですけどねw そこはゲームも小説も同じです。

第三章 七人のボーイズ星人

ノアとメルが揃えば鬼に金棒でした。朴念仁以外の魔物にも出くわしまして、下着だけを身につけた変態バンパイアや、その手下の吸血コウモリ。捨てられたシートに怨念が宿ったゴーストなどが出てきましたが、いずれもノアが一撃を加えるか、ノアがフアイヤーストームを放つと蜘蛛の子を散らすように逃げていきました。迷うような森も、一人では絶望に膝を抱えていたことでしょうが、二人なら鼻歌まじりに楽々踏破してしまいます。

「あら、ノア。ここ、さつきも通った道ですよ」

「ホントだ。じゃ、もう一度ダガーで印つけちゃえ」
なんて、あっけらかんとした様子で、アハハ、ウフフと笑い、また木に手近な幹にドカツと目印をつける始末です。

そんな機嫌良く進んでいた二人ですが、メルの耳がピクツと跳ねて何かを捉えました。慌ててノアの肩を叩きます。

「なに？ メル？」

「しっ！ 喋らないで・・・気づかれます」

メルは真面目な顔つきで言います。ノアもキュツと口を引き締めて頷きました。そして、メルが指さす方向を見ます。

水辺に座った毛むくじゃらの一頭の魔物。ゴリラの風貌をしていて、口がワニのように裂けています。そこからは凶悪な牙がのぞいていました。ガリガリと木の皮を食べています。座っている側には、巨大な棍棒が置かれていました。かなり強そうに見えます。

「な、なにあれ？ あれも魔物なの？」

「ええ。メルシーという子です。あの子には、私の魔法も効きにくいんです。それにちよつと乱暴者で、人間の姿をみると必ず追ってきます。ここは見つからないように行きましょう」

ノアは素直にコクリと頷きます。無駄な争いはしないに越したことはありません。あんな棍棒で殴られてはたまりませんし。

抜き足差し足忍び足で、ソロソロと二人は音をたてないようにその場を過ぎ去ります。しかし、ノアの鼻腔に何かがよぎりました。

牛乳を拭いてロッカーの中に放置した雑巾。バツカレスの半年間はきつぱなしの湿った靴下。納豆とクサヤと腐った卵をかきまぜたような臭いともいいまじょうか。もう臭いというレベルを越えて、痛い・・・いや、痛苦しいのです!!

「くっさー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

ノアは涙と鼻水を同時に放出しながら声をあげました。いや、あげざるをえないような強烈な異臭だったのですから仕方ありません！

「の、ノア!？」

メルが慌てます。耳がピーンと立ちました。

って、メルがなぜこの異臭に反応しなかったかといいますが・・・デムに比べてメルリンはかなり嗅覚が良いのです。良すぎるがあまり、あまりに強烈な異臭には麻痺して感じとれなかったという恐るべき理由があるのです。

もちろん、そのノアの悲鳴にメルシーが気が付かないわけがありませんでした。ムクリと起きあがり、ガバツと牙をむき出しにします。

「ウオウオウオウオウオツ!!」

威嚇の声を上げ、胸をボンボコ叩きならしました。それから、右手で棍棒を掴み、振り回します。左手にはツボのようなものを掲げていました。

「や、やばい! 逃げよう!!」

「え、ええ!!」

ノアはメルの手をとってかけ出します。しかし、メルシーはその巨大な体格にしては俊敏でした。人間のようないく本足で走ってくるのです。

「ぐえー! ください! ひどい! なんじゃこりゃああ!!」

ノアは逃げながら、涙をこぼしつつ、鼻水を垂らしつつ叫びまし

た。なんか、メルシーが近づいてくるにしたがって異臭まで寄ってくるのです。異臭の原因は間違はなくメルシーでした。

「臭い？ えつと・・・私はわからないのですが。もしかして、発酵したメルシーの乳の匂いなんでしょうか？」

メルはゼエゼエいいながら、そう言います。

「メルシーの乳!？」

「ええ。あ、あれです！メルシーならば必ず自分の絞り出した乳をもってるんです！」

メルはメルシーの持つツボを指さしました。ノアがそっちの方をチラリと見ます。

「うげええええー！ー！ー！」

間違いありません。あれからです。あれから強烈な異臭が放たれているのです。あのツボの口が、ノアたちの逃げている方向に向くたび・・・まあ、つまりはメルシーが走るときの動作で左手を下げたとき、その巨烈な悪臭がプー！ー！ーと香ってくるのです！

「あ、あんな状態のヤツなんて戦えないよッ！ー！」

敵が強い、強くない以前の問題です。あの異臭を嗅ぎながら戦うなんて不可能です。

メルもコクリと頷き、ザツと踵を返して瞬時に魔法を唱えました。

「『連なる霜。我が言霊に従い、立ち塞がる凍てつきし飛礫となれ。」

・・・ブリザード!ー!ー!」

ファイヤーストームとは違う魔法です。

青い軌跡が伸び、魔法陣を描きます。ヒューツと周囲が冷たくなつたかと思うと、地面から強大な霜柱が起きあがり、それが無数の飛礫となってメルシーに襲いかかります。

バシバシッとメルシーの黒い毛に氷の塊がつかますが、その走りは止まりません。雄叫びをあげ、ブンブンと棍棒を振り回しています。どうやら、寒さに強いようです。

「うう、やっぱり足止めにもなりませんか・・・でも、ファイヤーストームもあの子の毛を焼くのがせいぜいですし。ライトニングも

効果ないでしょうし。ああ、せめて上級魔法が使えれば」

メルが精神力を使い果たしてガクツと膝をつきそうになるのに、ノアはパシツとメルの手を取って再び駆け出しました。

「ゼエゼエ。しつこい！ このままじゃ、追いつかれる！！」

ノア一人だったら、何とか逃げ切れたでしょう。でも、いまはメルと一緒にです。メルは魔法が強い種族らしく、やはりデムやファルに比べて体力に劣るのです。

「つたく、あにやってんだ」

呆れたような声がありました。それと同時に、その声が出た方から何か放り投げられました。それはメルシーの前でガシャンと割れた音がします。

シューツという音と共に、清潔そうな消毒液の香り。ミントに近い匂いです。最低最悪な公衆便所に、美しい一輪の百合の花が咲いたのをノアはイメージしました。ノアを悩ましていた悪臭が消えたのです！

「ンガ！？」

メルシーは割れた瓶を見て、不可思議そうな顔をします。

「よくも俺の可愛い妹分を追いかけまわしてくれたな。嫁入り前だぜ。傷物になつたらどうしてくれる？ がさつだが、獣にくれてやるわけにはいかねえな」

「ば、バーボンおじさん！？」

なんと、木陰からバーボン医師が姿を現しました。ノアとメルに軽くウインクします。

こんな森林の中でもいつもの白衣姿です。フックの義手アタッチメントをガチャリと取り外し、蛇の尻尾のような鞭になった義手と取り替えます。

「おら、俺が相手だ。こいよ！」

バーボンが右手をの人差し指をクイツと動かして挑発します。

「ンウホンウホーツホツ！！！！」

メルシーは憤り、棍棒を振り回してバーボンに襲いかかりました。

バーボンはニヤリと笑い、胸ポケットから薬品の入った試験管を取り出します。それをメルシーの顔面に引っかけました。ジユアツという嫌な音が響きます。

「ンギヤアアアー！！ 又ガガガッ！！」

襲いかかるうとしていたメルシーは、目をやられて、痛みに滅茶苦茶に暴れまくりまします。

「おらよッ！」

バーボンがメルシーの攻撃を避け、鞭を振るいます。ビシュツ、ビシュツ！ ずいぶんと慣れた鞭捌きです。剛毛の部分は狙わず、顔や腹や内股といった比較的皮膚の弱い部分に狙いを定めます。

「キイーキイー！」

メルシーが嫌々と首を横に振ります。視力が奪われ、弱点ばかり狙われて、ダメージを受けているのです。もう為す術はありません。「さて、終わりだな」

バーボンが、露骨な髑髏マークの描かれた試験管を取り出しました。明らかに危険な色です。

「もう、止めて下さい！」

「メル！？」

哀れにも頭をかかえているメルシーをかばうように、メルがバーボンの前に立ちはだかりました。

「あん？」

「もうこの子は戦えません！ 戦えない子に、これ以上に何をしますか！？」

バーボンはメル顔をジッと見ます。しばらく見て、「ふむ」と言いながら試験管を胸ポケットに戻しました。代わりに煙草を取り出して火を付けます。

「優しいメリンのお嬢さんに言われちゃしょうがない。赦してやるよ」

バーボンがメルに向かってニツと笑います。メルはフウと安堵の溜息をつきました。

そしてメルは、グズグズと泣いているメルシーの頭を優しく撫でました。

「メルは優しいね……。朴念仁の時も、手加減したんでしょ？芽までは奪わなかったし。今回も自分を襲ってくる魔物をかばうなんてさ」

ノアの言葉に、メルは首を横に振ります。

「この子たちも……。不安なだけなんです。私たちと一緒に。迷子みたいなものなのだと思います。怖くて。寂しくて。だから、知らない人がくると、近寄ってきて欲しくないから……。きつと乱暴しちゃうんです。本当は、私。こんな魔力なんて……。いらぬ。これは人を傷つける力です。人を癒すことはできないの」

メルは、メルシーの額に自分の額を当てました。抵抗することもなく、メルシーもされるままにしています。つぶれてしまった目を、メルは悲しそうに見つめました。まるで自分が治してあげられない無力さを詫びるように……。

「……治せる。一時的に視力を奪っただけだ」

バーボンは心外だと言わんばかりにそう言いました。ノアもメルも目を丸くします。

「この薬を使えばな。これだって……。一時的に気絶させる薬だ。命までとろうなんて思わねえよ。医者が殺しをしちや洒落にもならねえ」

バーボンは、さっきの罇體マークの試験管を差して言います。

罇體マークなのは、ちよっとした冗談のつもりだったのです。まあ、一応は劇薬なので扱いを注意せよ、という意味合いでしかなかったのです。

バーボンは腰のポーチから、治療用具と、いくつかの薬を取り出します。そして、それをメルシーの目に塗布しました。鞭の傷跡も、丁寧に消毒液を塗って包帯を巻いてやります。

あまりに手際よく治療しているので、メルは感心してそれをジッと見つめていました。あまりに真剣に見つめられるので、バーボン

は居心地が悪そうに時折に咳払いをします。

「すごい……。誰かを、治せる、癒せる技術」

「あー。こんなのは別に凄くはねえよ。医術はちゃんと勉強すれば、誰にでも出来る。だけど、誰かを癒したいとか、誰も傷つけないって気持ち。これは誰もがもっているわけじゃねえ……。メリンのお嬢さん。お前さんの誰かを慈しむ心つてのほうで貴重なんだ。俺はそういう心を持った子こそ、医学を学ぶべきだと思うね」

薬箱をパタンと閉め、バーボンは小さく笑ってメルスの頭をポンと叩きました。メルスの顔が真っ赤になります。

「ウガー」

メルシーがゆっくり立ち上がります。

「お。薬縫ったばかりだしな。まだ目はぼやけているはずだ。あんまり動かないほうがいいぞ」

バーボンがそう言います。メルシーは解っているのか解っていないのか、コクコクと頷きました。

「ウガウガ」

メルシーは左手に持っていたツボをズイツと差し出します。

「礼のつもりか？ いらんよ」

バーボンは手を横に振ります。受け取ってもらえないと見ると、今度はメルの方にそれを向けました。

「いいえ。私も……。私がおかをしたわけじゃないです」

メルにも受け取ってもらえないので、メルシーは心なしか寂しげな顔をします。そして、奥の切り株に座っていたノアに目をつけました。自分が見られていると知って、ノアは思いつきり首を横に振ります。

「いらない！ 絶対にそんなのいらない！！」

「ウガウガウガ！」

拒否するノアでしたが、メルシーは嬉しそうにノアの目の前にそのツボを置きます。

「い、いらないって言うているだろ！ な、なんでだよ！？ なん

で、アタシ!!?」

「ウガウガウガ」

なぜかメルシーは喜んで、ツボを置いたまま森の奥へと帰っていき
ました。

「ちょよ！ おい！ こんな置いていくな！ なんで、アタシの時
だけ!!? コラ！ 待て!!!」

側にあるツボを見て、ノアはガツクリと肩を落とします。

「なんだよー。これ、どうしろっていうんだよー」

「・・・乱暴なメルシーが自ら乳をあげるなんて珍しいことなんで
す。拒否したのに渡す時は、確か・・・」

「奴ら、一番に餓えてそうなヤツを助ける習性があるんだよな。行
き倒れの動物を、メルシーが助けたって論文をみたことがある」
そうバーボンが続けました。

「だ、誰が一番に餓えてそうだ！ ふざけんなよ!!」

ノアがふて腐れるのに、バーボンとメルは顔を見合わせてプツと吹
き出しました。

「・・・そういえば、どうしてバーボンおじさん。こんなところに
？」

ノアは、ハツと思い出したかのように言いました。

「そりゃ、退化神殿のことを教えたのは俺だしな。ちょっと責任を
感じてな。・・・午前中だけで診察きりあげてこっちに来たってわ
けだ」

バーボンが頬をポリポリと掻きながら言います。なんだかんだ言い
ながら、面倒見がいいのです。

そして、バーボンとメルが、それぞれ自己紹介し合います。メル
の記憶喪失の下りで、バーボンは少しでも興味深そうな顔をしまし
たが、あえてなにも口にしませんでした。メルの方も、バーボンの
眼帯と義手が気になっっているようですが、初対面の相手に聞くこと
ではないと何も言いませんでした。

「しっかし、せっかく地図を渡したのに・・・まったく役だっとな

いじゃねえか」

バーボンが、ノアのポーチを指さします。ノアは、「あっ！」と言つて地図を引っ張り出しました。すっかり忘れていたのです。

三人が地図をのぞき込みます。

「正しければ、ここが退化神殿。ちなみに、いまここだ」

バーボンが指さしたところは、退化神殿よりもかなり離れた場所でした。

「なんだよー！ ぜんぜん進んでないじゃんかー!!」

ノアがブーツと不平を言います。バーボンは呆れた顔をしました。「ずっと同じ所グルグルと回ってるんだ。当然だろ？ 午後からでてきた俺が追いつくぐらいだからな。相当、道に迷っていたんだな」そう言われて、ノアは苦々しい顔をしました。

「でも、きつと・・・この地図ほどは距離はないと思いますよ」

「俺もメルと同意見だ。入り口から距離を測ってるんだが、この地図の三分の二程度の距離しかねえ。迷いやすいから、作った人間も大きく感じていたのかもな」

バーボンにメルと呼ばれたことで、メルはなにやらモジモジと出します。

「ま、とりあえず歩くしかないってことか」

ノアの言葉に、メルもバーボンもコクリと頷きました。

こうして女の子二人に、頼もしい医師バーボンが仲間に加わったのです……………。

粘土質な土塊を、泥水で溶き、塗っては乾かし、塗っては乾かし・・・何年も、手間暇をかけて作られた壁。山肌から切り出した石の柱を何十本も横に立てて、その外壁を支えさせています。

彫像のように立ち並ぶ、様々なデザインの柱。神殿に向かうためのタイルには、歴史を紡ぐ神話が壁画となって残っています。進むたびに、歴史がどう進んでいったのかが解ります。古代文字が読めないノアたちにとっては、さっぱり意味がわからない絵にすぎない

わけではありませんが。

正四角形の形をした神殿。無造作に蔦がからみつき、一見してただの小山のように見えます。ですが、入り口から見ると、その様相は明らかに計算して作られていることが解ります。門柱から見ると、外壁と建物の高さが一直線に・・・平行に見えるようになっていたのです。自然と人工物の調和。これが、この退化神殿を作り上げた人の狙いだったのではないでしょうか。

「すばらしい・・・。いや、すばらしいの一言だ。こりゃ、考古学者じゃなくても胸湧き血踊る！」

冷静なバーボンが、珍しく興奮したように鼻息を吹き出しました。オモチャをみつけた子供のような顔です。

「えー。ただの小汚い家じゃん」
ノアが顰めっ面をしています。言ってから、そういえばメルの家だったと慌てて自分の口を抑えましたが、メルは気にしていないように、帰ってこられた喜びに浸っています。

「なにが小汚いだ！ これでスタッズの論文の正しさが証明されたんだ！ 第四種族、ポーズ星人といえば・・・進化をやめて退化した劣等種族であるというのが今までのファルの学者たちの見解だ！
それが、こんな高度な遺跡を作る能力があることがここで証明されたんだ！！ これは世紀の大発見だ！！ スタッズが『種の平等説』を説いて久しいが、まさか・・・それが正しかったなんて！！
『ポーズ”星”人』ならぬ『ポーズ”聖”人』だなんて、くだらないギャグだと馬鹿にして途中で論文を読むのをやめてしまったことを、今にあつて俺はもー！！！！ れつに後悔してる！ ああ、あのときの俺の馬鹿！ レムジンの大図書館でいくらかでもスタッズの論文を読めたのに！！！！ もつたない！！！！ 実にもつたない！！！！」

大騒ぎしているバーボンを尻目に、ノアは耳の穴を小指でかきました。歴史に興味がないノアらしい態度です。

「ねえ、メル。それで、ポーズ星人ってのはどれくらいいるの？

結構、沢山なわけ？」

ノアが尋ねます。少なくとも、神殿の外にはそれらしき生き物は見あたりません。

「えっと……。長老を除いて、七人のボーズ星人さんがいます」「七人と一人で……。八人だけ？　ずいぶんと少ないんだな。ここにしかないの？」

「ええ。他には……。お会いしたことはありません」

メルの場合、神殿の扉が開かれます。バーボンは柱やタイルに夢中になっているので、ノアたちからはかなり遅れています。ノアは気にせず先に進むことにしました。

腐りかけた扉をあけると、ブワツと埃っぽい臭いが舞いました。ノアは思わず咳き込みます。

「メルメルです！　いま帰りました！」

メルが声をあげると、「ボー」という返事があつちこつちから返ってきます。

ト・ト・ト……。かなり遅い足取りで仲間が集まってきました。

全身真っ白で、体毛らしきものは一つもありません。顔のところだけがわずかに肌色。腰は青い布をまもっています。腕も足も棒のように細く、握ったらそのままポキッと折れてしまいそうです。

首はなく、ツルリとした頭と肩が一体化しています。まるで電車が通るトンネルを正面からみたような形の上半身です。顔はなんと口が一つの線。非個性を追求しすぎた手抜きしたような顔です。それも、七人とも皆が皆同じような顔をしているのです。区別がありません。

「メルメル。帰ったボー」

「無事だったボー。心配したボー」

「捜したボー。見つからなかったボー」

「人生とは探索……。探し求める時には見つからず、悠久の流れ

にただ任せる時に道は開かれる」

「お腹へつてないボー？ 我はお腹へつたボー」

「長老、心配していたボー。顔を出してあげると喜ぶボー」

「お客？ お客を連れて来たボー？」

七人がそれぞれ思い思いに口を開きます。それもかなり、かーなーりーりのスローテンポで。一人だけなんだか違う口調なのがありました。基本的には語尾に「ボー」がつくようです。せっかちなノアをイライラさせるには充分でした。

「あー！ もうー！！ スタッドは！？ スタッドはいるのか！？」

ノアが怒鳴ると、ボーズ星人たちは怯えたように震えました。まあ、三本線だけで表情がほとんどないので顔付きではわかりませんが。

「スタッド・・・？ スタッドは・・・」

「あー！ お前じゃ埒があかない！！」

あまりのスローテンポに怒り、ノアは喋ろうとしたボーズ星人の押しをけます。

「の、ノア！ あ、あんまり乱暴は・・・」

メルが心配しましたが、ノアにそんな余裕はありません。一刻もはやくスタッドに会いたいです。

「かの英雄。兼ねてよりの威風に備えるべく最果ての地へと・・・」

「わけわからん！」

なんだか頭の良さそうなボーズ星人が説明してくれましたが、回りくどい言い回しにノアは憤慨します。

「ちょ、長老様なら何か・・・知っているかもしれません」

メルがオロオロしながら言うのに、ノアは「それだ！」と言わんばかりに人差し指を振り回しました。

神殿の最奥。窓らしきものは見あたりませんが、天井の四隅から太陽光がとりこまれて部屋の中を明るく照らします。その採光が届かないところは、光苔や輝く鉱石などが補助しています。巧みに自

然環境を利用した照明です。

ようやく追いついたバーボンは、まだまだ興奮冷めやらぬ様子で、まるで小さな子供のように世話しなく、遺跡の隅々を舐めるように見ていきます。知的好奇心がどうしても抑えられないようです。土壁を採取し、試験管の中に入れたりもしていました。

もつとも一番奥の部屋。大きな広間になっているところに、その長老はいました。宴会場の舞台のような、ちょっと小高くなっているところにポツンと立っています。

長老というぐらいですから、さきほどの七人とは違う姿でもいいのですが・・・まるつきり見た目は同じでした。

「長老様。ただいま戻りました」

「おお、メルメル。帰りが遅かったので心配したぞ。しかし、よくぞ無事で戻ってきた」

見た目の間抜けさとは裏腹に、その長老はハキハキと喋ります。

ようやくまともに話ができる相手だと、ズイツとノアは前に進み出しました。

「なあ！ スタッド！ スタッドはここに来ていないのか!？」

いきなりのノアの登場にも、ボーズ長老は動じることはありません。細い目でノアとバーボンの姿を交互に捉えます。

「ようやく来たか・・・デムの者よ。スタッド殿の言われる運命の通りだな」

ボーズ長老の言葉にノアとバーボンが驚きます。ノアが慌てて掴みかかろうとするのを、バーボンが肩を掴んで制止させました。

「ようやく来た？ 運命の通り、だと？ まるで俺たちがここに来るのを予見していたみたいな口ぶりだな」

バーボンが訝しげにいうのに、ボーズ長老はコクリと頷きます。

「すべては運命なのだ。客人よ・・・退化した種族の言葉に耳を傾ける気持ちがあるならば語ろう」

意味深な台詞に、ノアとバーボンは顔を見合わせます。そして、二人とも強く頷きました。話を聞かなければなんとも判断できません

ん。

「結論から言えば、スタッド殿はここには来てはもらん。だが、昔に赤き髪の少女が来た時に告げて欲しいと頼まれた言伝がある」

ノアは目を丸くします。

「赤い髪の少女・・・あ、アタシのこと？ どういうこと？ スタッドは・・・アタシがここに来るということを知っていたっていうの!？」

「そう思ってくれて間違いないであろう。スタッド殿は、すでに我らよりも遙か先を見据えておられる。すべては運命。運命には逆らえないのだ」

淡々と、かつハキハキいう長老は、長老と呼ばれるだけあって賢そうでした。ですが、齒がゆい物言いは、さっきの難解な言葉を言うボーズ星人と大差ありません。ノアはイライラして、自分の喉をかきむしりたい気分にかられました。知りたいことが山ほどあるのです。

「・・・そのスタッドの言伝というのはなんだ？」

バーボンが尋ねます。冷たい感じの口調だったので、メルは不安そうな顔をしました。

ボーズ長老はもったいつけて、大きな咳払いをしてから続けました。

「スタッドの台詞をそのまま告げよう・・・。『ノアへ。ランドレークのラグナロク遺跡で待つ』」

ノアもバーボンも雷で打たれたような衝撃を受けました。メルも驚いて口元をおさえます。

「す、スタッドって・・・超能力者!? な、なんでアタシの名前を・・・」

「確かに遺跡で妙な力を得たという噂は聞いたが・・・予知能力でもありやがるのか? 信じられねえ」

バーボンが額を抑えて言います。論理的でないことは信じられない性質なのです。

「で、でも・・・ランドレークって？ ラグナロク遺跡って・・・？」

ノアがバーボンの顔を見て尋ねます。バーボンは苦い顔をしました。

「ラグナロク遺跡は聞いたことがねえ・・・。だが、ランドレークは・・・確か、滅びの都の名前だ。ファルの首都レムジンより遙かに北。魔神バルバトスがかつて完膚無きまでに破壊した大都市だ。いまじゃ、凶悪な魔物たちが占拠していて、誰も近寄れないほど危険な土地だと聞く。そんなところになぜだ？ なぜ関係もないノアに、スタッドはそんなことを言いやがる？」

バーボンがわけがわからぬ憤りを抑えて言うのに、ボーズ長老は首を横に振りました。

「それは我も・・・知らぬ。ただ運命。我は運命に従い、言伝を述べるだけ」

運命と繰り返す長老に、バーボンは降参といわんばかりに両手を広げます。ノアはガジガジと自分の爪をかじりました。

「なら、質問を変えよう。スタッドとあんたらはどんな繋がりがある？ なぜ、そんな言伝をあんたに残したんだ？」

「我らは・・・スタッド殿の盟友。スタッド殿は、この地に古くから住まう災厄を封じ、平安を与えてくれた。我らはここで誰にも知られず静かに消えていく運命。そして、スタッド殿は、魔神バルバトスを完全に封じなければならぬ運命に生きている。その前に、消えてゆく前に、我らはスタッド殿に全面的に協力しているのだ」

「魔神バルバトスを・・・完全に封じる？ だ、だって・・・スタッドはバルバトスを二十年前に封印したんだろ！？ それで平和になっただんじゃねえの！？ 完全にとってどういうことだよ！？」

昔から教えられてきた伝説が否定されたような気持ちになってしまったので、ノアはムキになって言います。

「確かに・・・聖結界エミトンは強力な魔法。だが、永続するものではない。魔神バルバトスの恐るべき力を考えれば当然。長き時を

経て、もはや強力な結界にも綻びが見えつつある。スタッド殿は、その封印を完璧なものとして動く動いている」

ボーズ長老がそう言った直後、グラグラと大きな地響きと揺れが起きます。

「う、うわわ！ 地震！？」

「・・・魔神バルバトスの封印が弱まったことで、この退化神殿に封じられし災厄。『悪魔』の一匹が目覚めつつある現象だ。魔神バルバトスと共に各地に封じられた悪魔がやがて次々と目を覚ますだろう・・・もう起きるまで間がない」

ボーズ長老の言葉から、この地響きは悪魔とやらが動かしているのだと解りました。地震を起こすなんて、なんていう力だろうと、ノアもバーボンも真つ青になりました。

「悪魔・・・？ まさか、伝説の代物だと思っていたが」

「あ、悪魔って・・・なに？」

「魔物の上級種だ。魔物よりも知性が高く、力も強い。なかには、メリンのように魔法を使うヤツもいるって話だ」

さっきの地震に驚いて、ボーズ星人たちが集まってきました。長老以外、みんな怯えてブルブルと震えています。メルはその一人一人の背中をさすり、「大丈夫よ」と声をかけます。

「デムの少女ノアよ。デムの男よ。我らの願い・・・聞き届けてはくれまいか？」

神妙そうな顔・・・といっても、いつも変わらない顔なんです。しかし、ボーズ星人にしてはきつと精一杯深刻な顔なのでしょう。

ボーズ長老が言います。

「悪魔が目覚めれば、人間には為す術はない・・・。我らは滅びる運命。だが、メルメルだけは違う。この子は間違って我らの地に迷い込んでしまった者。どうか、このメルメルだけは連れて逃げてほしい」

「長老様！」

メルが悲しそうに抗議の声をあげます。

長老とメルを見て、ノアは気にいらなそうに、プーツと頬を膨らませました。

「あんたたちはどうすんのさ？ さつきから滅びる運命・・・ってなんだよ？」

「我らは・・・争いを求めぬ。争うことを嫌い、進化をやめ、自己を捨て、誰の目にも止まらぬ日陰に逃げた者たち。我は我らであり、我らは我。調和こそが我らの本質」

「哲学的だな・・・。退化した種族であるボーズ星人が、そこまで知性を有していたとは。一なる全、全なる一。自我を捨てることにより、種族全体の調和を計ろうとしたのか。悟りの境地に近いんじゃないか？」

バーボンが関心して言うのに、メルメルは思いつきり首を横に振りしました。

「違います！ ボーズ星人さんたちは・・・ただ平和に生きていきたい。誰も傷つけないから・・・誰にも干渉せず、干渉されず。誰よりも愛が深いからできることです！ そうじゃなきゃ、記憶を失った私を受け入れて助けてくれたりなんかしません」

メルが強く言うのに、自分の言った台詞がちよつと理屈っぽつたかと反省して、バーボンは眉の付け根を揉みました。

ボーズ長老は、ボーズ星人全体を見回します。言葉を使わずとも、意思の疎通ができるようです。思考レベルに差はあれど、皆が同じことを思っただけなら、心を共有する能力があるのです。

「・・・数多くいた我らの数もここまで減ってしまった。この世界は我らには生きにくい。競争を下り、退化をした種族は滅びる定め。我らは、我らと世界に平和をくれたスタッド殿の恩に報いる。我らの命を賭し、この地に再び悪魔を封じて、世から消えゆく所存なのだ」

決意したかのように、ボーズ長老が言うと、震えていたボーズ星人たちが皆コクリと頷きました。そして皆が魔法陣が描かれた小さな紙を取り出します。長老も、七人もまったく同じものを持ってい

るのです。

「疑似魔法！？ まさか・・・そんな、長老様！」

それを目にして、メルが取り乱します。バーボンもそれが何か知っているかのようで、ギリツと歯ぎしりしました。

「スタッド・・・の野郎ツ！ まさか、ボーズ星人とその悪魔を一緒に心中させるつもりかよ！？」

「な、なに？」

ノアはわけが解らず尋ねます。メルメルが目尻に涙をためながら言いました。

「魔法が使えない者でも、魔力を持つ者が描いた魔法陣を通して・・・疑似の魔法を使うことができるのです。その場合・・・扱う人間の命を犠牲にして。スタッドさんが描いた魔法陣は、ボーズ星人さんたち皆の命を使って悪魔を封じ込めるものなんです！」

「な、なんだって！？」

ノアは驚いて飛び上がります。

「間違うな。これはスタッド殿の意思ではない。我ら、ボーズ星人全員の選択なのだ・・・。ただ無為に滅び行くより、意義ある死を選びたい。我らが望む最期の『我』だ」

達観しているボーズ長老が遠い目をしていいます。

「そんなのダメだツ！！！！」

我慢の限界に達していたノアが怒鳴りました。シーンと辺りが静まりかえります。

「死んでいい命なんてあるはずがないよ！！！ 死んだらお終いじゃないか！！ 何が意義ある死だ！ 何が滅び行く運命だ！ 自分で諦めちゃ、何もできないじゃないか！！！！」

「ノア・・・」

強い気持ちの入ったノアの言葉に、メルが微笑んで涙を零します。

バーボンは煙草に火を付けてフツと笑いました。

「・・・ノアよ。ありがとう。こんな我らのために。だが、この地の災厄を捨て置くわけにはいかぬ」

ノアがウインクし、ボーズ長老の眼前に指を立てます。

「倒せばいいじゃん」

そんな感じにあっけらかんと言うノアに、ボーズ長老はたぶん……驚いた様子でした。

「た、倒す……?」

「そうそう。気に入らないヤツなら、この拳でぶつとばしてやればいいんだよ!」

平和主義者のボーズ星人たちには倒すという考えはまったく思いもつきませんでした。長老と七人はそれぞれ顔を見合わせます。

「し、しかし……この地に眠る、悪魔『オルガノツソ』は魔神バルバトスの力を大きく受け継いでいる。魔物とは比べものにならぬ強大な力をもっているのだ。スタッド殿でも、苦心の末に封じたほどの敵。戦って倒すなど……」

「そんなのやってみなきゃわかんないよ! 命を賭けて封じる気があるなら、死ぬ気で倒したほうがいいじゃん!!」

ノアの明確な物言いに、ボーズ長老は衝撃を受けました。チラツと見やると、なんとボーズ星人たちがノアの言葉に呼応して拳を握りしめています。臆病で、戦うことが嫌いなボーズ星人がノアの言葉に勇気を与えられているのです。

「……ノア。お前はスタッド殿に似ている」

唐突なボーズ長老の言葉に、ノアは意外そうな顔をしました。

「スタッドに、似ている? アタシが……?」

ボーズ長老の目には、ノアの顔の上にスタッドの顔が重なって見えていました。

「何気ない言葉一つ一つが、皆の力となる……。世界から見捨てられた我らを、『価値ある存在』と違って高く評価してくれたのはスタッド殿だ。自我と共に、優しさや慈しみを忘れていた我らに……大事なものを取り戻してくれた」

ボーズ長老は親が子を見るような目で、優しくメルを見やります。

「そうでなければ、退化の大森林で倒れていたこの子を助けてやる

こともできなかつただろう……。我らはただ滅びるだけの愚者となっていた。スタッド殿もメルメルも、我らに愛をくれた。とても感謝している」

「いいえ、いいえ。長老様。私こそ……。多くを与えられました。記憶を失った私を、ここに置いて下さいました。私こそ、愛が与えられたのです。今度は、私が……。お返しをするときです！」

メルが強い目をします。メルも心優しい少女。しかし、その心の芯は太いものがあるのです。

「チツ。女の子二人だけに行かせるわけにもいかねえしな。俺も付き合つてやるよ、その悪魔オルガノツソつて輩も気になるしな」

バーボンが煙草に火をつけ、ニツと笑います。

「メル！ バーボンおじさん！」

ノアは嬉しそうな顔をしました。この二人がいれば百人力です！

魔神バルバトスだつて倒せるかもしれない！

「よっしゃ！ やつたる！！ 悪魔なんて、アタシが粉みじんにして、メルがそれを焼いて、バーボンおじさんが薬品漬けにしてやるよ！」

頼もしい勇者三人に、ポーズ長老は自分の内側から何かが出てくるのを感じました。自己を放棄して退化することを選んだ時から感じなくなっていた情熱です。パッションです。

「……。もう止めはしない。倒せるならば、運命に抗えるならば、進んでみるのもまた運命」

長老が何やら手をあげて、呪文を唱えました。すると、長老の後ろの土壁が崩れ、降りるための階段が現れます。そこ底は深く、赤いマグマのようなものが蠢いていました。

ノアがダガーを構え、メルメルがスカートの裾をしばり、バーボンが義手の鞭をカチャリと付け直します。さあ、出陣の時です！！

第三章 七人のポーズ星人（後書き）

メルメルとバーボンの加入する時の話はちよつと違つのですが、物語に深みをもたせるためにアレンジしました。

ゲームと小説じゃ、やっぱり違つので・・・話に矛盾がでないよう調整するのはなかなか難しいw ま、おかしいところがあつてもご愛敬で・・・と、まだまだ続きます。

第四章 カの四天王オルガノツ

どれぐらい深い地下なのでしょう。気が遠くなるような階段を下りた先は、幅広い回廊となっていました。ところどころ割れた地面からは、マグマらしき不気味な赤き光が見えてきます。

ブモーツブモーツと、くぐもった荒い息づかい。暗闇の中で、邪悪な双眼が浮かび上がりました。古めかしく粗悪な作りの王座に座り、苦しげに胸元を掻きむしります。

「・・・忌々しい。忌々しいぞ!!」

ドンと肘掛けを叩きます。大きな鼻からブモーツと息が吐き出されました。まるで牛のような顔。赤黒い肌をし、筋骨隆々とした体軀。山羊のような角に、腕や胸に黒々とした体毛が生えています。

「テメエがオルガノツソか!？」

ノアがダガーの先を、その王座にいる牛のような生き物に向けました。

牛のような生き物は、ギロツと目の前の三人をにらみつけました。あまりの苦しみに、目の前にいることにも気づいていなかったのです。

「・・・なんだ？ 貴様らは」

牛のような生き物は、ゆっくりと立ち上がります。大きいです。背だけでも、ノアたちの三倍はあります。

立ち上がったその瞬間でした。

何かキューンという音がしたかと思うと、金色の魔法陣が足下に光輝きました。牛のような生き物が苦しみます。

「グググ！ 忌々しい！ このオルガノツソ様に、こんな小癩な封印を施すとは・・・スタツドめ!!」

オルガノツソは、無茶苦茶に暴れます。そのことで、ビシツと魔法陣にヒビが入りました。

シューツと魔力が消えて効力を失いました。思いがけず、苦しみ

から解放されたオルガノツソは、キョトンとして周囲を見回します。
「・・・オオ！ ようやく、この封印から解放された。二十年のこの地獄の苦しみから解放放たれた！」

バーボンはそれを見て、顰めつ面をしました。

「チツ。もうちつともつてくれりや、その間に攻撃できたんだがな」
「グハハハ！ これで、思う存分にボーズの野郎どもを喰らえる！
！ 腹が減った！！ 喰らう、喰らうぞツ！！！」

オルガノツソが喜びに打ち震えながら、大笑いをあげます。

その台詞から察するに、封印されるまではボーズ星人を食べていたのでしょうか。長老が、ボーズ星人が減ったと言っていた理由が解りました。

「ボーズ星人さんたちを食べるなんて・・・ダメです！」
「そんなことはさせないよ！」

ノアの目を見て、オルガノツソはハツと何かを思い出しました。

「憎きスタッドと同じ目だ！ 許せん！！ まずは腹いせに、貴様らから血祭りにかけて喰らてやろう！」

オルガノツソは、王座の裏側から巨大な斧を取り出します。それも扱う者の体格に合わせた特大サイズです。メルシーのもっていた棍棒が可愛らしく思えてくるほどの凶悪さです。

「魔神バルバトス様に仕える四天王が一人！ 力のオルガノツソ様の前にひれ伏すがいいツ！！！」

オルガノツソが襲いかかってきました。戦法は見た目通りの力任せな攻撃です。振りかぶった一撃で、壁に大穴があきました。

「おいおい、なんてパワーだ！ 冗談じゃねえぞ！ 一撃でももらつちゃ、お陀仏だ！」

唸る斧を避け、バーボンが手早く薬品を選びとります。

「おら！ こいつでも食らえ！」

バーボンが試験管を二本投げつけました。それが割れ、化学反応を起こしてガスを発生させます。

「いまだ！ メル！」

ノアの叫びに合わせて、集中して魔力を高めていたメルが呪文を唱えます。

「『ファイヤーストーム!!』」

朴念仁に放ったものとは比べものにならない強烈な炎の嵐です。最初から悪意を持つ敵には容赦などしません。

ズガガガン!!

ファイヤーストームの炎が、バーボンの作ったガスに引火して爆発します。

「ぐぬあ!」

さすがのオルガノツソも堪らずに片膝をつきます。

「もらった!」

ノアが駆けまわります。町中で金持ちの財布をかすめ盗る時の動きです。

「『レッド・ステイル!』」

あまりに素早いため、姿や形が見えず、ノアの赤い髪と赤い服装だけが残像で辛うじて解ることから、バツカレスがそう名付けた必殺技です。

ズバ! ズババババツ!

通りすぎた後に、オルガノツソの皮膚が切り裂かれています。何事かと、オルガノツソはブルブルと怒りに震えました。

「ゆ、許さねえ! 絶対に許さねえぞお!!!」

オルガノツソは猛狂い、斧をズガンと深々地面に突き刺しました。

「あ! 『石つぶてえええーい!』」

名乗る必要もないような大層地味な名称でしたが、決して技自体がそうではありません。

深々刺さった斧を、無理矢理にスコップで掘り起こす仕事をします。なにせそれをオルガノツソの巨体がやるわけです。石つぶてというより、岩石落としか土砂崩れ並の威力です。

「あぶねえ!」

膨大な魔力を放って精神力を使い果たしていたメルを、バーボンが横抱きにかばいます。

「うきゃー!!」

ドトドトッと容赦なく覆い被さる土に、ノアが流されます。小石がゴツンゴツン当たってタンコブができます。

「ガツハツハ！　これが悪魔オルガノツソ様の實力よ！」

モウモウとする土煙を前に、できあがった小山を前にオルガノツソが笑います。

ガラガラと小石を落としながら、土山のとっぺんでノアが顔をだしました。土煙で顔は真っ黒。髪はゴワゴワです。ペツペツと口に入った砂を吐き出します。

「メル！　バーボンおじさん！」

ノアがハツと辺りを見回します。

「ここです！」

メルの返事がして、ノアはスポットと土山から身体を抜きました。声のした山の斜面を下ると、ちょうど麓にメルがいます。ノアと同じように真っ黒ですが、怪我はないようです。

「ノア！　バーボンさんが私をかばって！」

メルは泣きそうになりながら言いました。見ると、メルの膝元にバーボンが倒れています。額からは血を流しています！

「バーボンおじさん!!」

ノアが駆け寄ると、バーボンがうつすら目を開けました。

「・・・大丈夫だ。命には別状ねえ。前頭部に軽い裂傷、左上腕に打撲。肋骨三本にヒビ。右足にもダメージがあるが、骨折までは至ってねえ」

冷静に自分の状態を分析する余裕があることに、ノアはホツとしました。

「ほう。まだ生き残っていたか。まったくしぶといな！　害虫どもめ！　ジワジワなぶり殺しにしてくれるわ！　俺様が味わった苦痛はこんなものではない!!」

オルガノツソは斧を振り回します。風圧がノアの頬を打ちました。
「や、やべえな……。おい、ノア。メルを連れて逃げろ」

バーボンが弱々しく言います。ノアもメルも首を横に振りました。
バーボンを置いてなんていけません！

オルガノツソは意気揚々と近づいてきます。どんなに滅茶苦茶にしてやるうかとも考えているのでしょうか。時折、グフフなんて嫌らしい笑いが聞こえます。ノアたちを更に追い込むため、わざとゆつくりと歩いているようです。

「い、いいから……。逃げろ」

「おじさんは黙ってて！ 今考えてるんだから！」

ノアは生涯で初めて脳味噌をフル回転させていました。シューシュー湯気がたっています。

「ごめんなさい……。私にもつと力があれば。あんなにも疎ましく思っていたのに、今は力がないのが悔しい」

メルはポロポロ涙を流します。それがバーボンの顔にハラハラとかかりました。

「ガーツ！ 何も思い付かない！ 特攻！ 特攻あるのみだ！！」

ノアの頭がショートして爆発しました。

「馬鹿いうな……。ノアの足なら、ヤツの攻撃はかわし続けられるかもしれねえが。決定的に深手を与える手段がねえ」

バーボンは冷静に言います。

「くそ！ くそ！ どうすりゃいいんだよ！！」

ノアは拳で地面を殴りつけます。イライラしても、何も良い手段が思いつきません。しかし、オルガノツソは一步一步確実に近づいてきているのです。

「そこまでだボー！」

緊張はしるシリアスな場面なのに、気が抜けてしまいそんな間抜けな声がありました。ノアたちも、オルガノツソも思わずそちらの方を向いてしまいます。

七人のボーズ星人＋長老が、四人一組で騎馬を作っています。オ

ルガノツソの方を向き、本人達からすれば精一杯の凄んだ顔をしています。ですが、足だけは誰もがガクガクブルブル。無理をして、精一杯に立っているのです。

「め、メルメルをいじめるヤツは許さないボー！」

「あ、悪魔オルガノツソ！ 我らが相手だボー！」

「も、もう、仲間達を食べさせるわけにはいかないんだボー！」

「な、仲間と、メルとノアたちの敵討ちだボー！」

「聖なる戦い・・・かくも凄惨で無情な結末を一陣の風が・・・」

「あ、あとは我らに任せるボー！」

「わ、我らだつてやる時はやるボー！」

全員が力を合わせて、オルガノツソに向かいます。ポカンとしていたオルガノツソですが、涎をしたたらえて大笑いします。

「ガハハハ！ クソ生意気なボーズどもが！ 俺様に喰われるだけしか能のない貴様らが、自らまとめて喰らってもらうためにでてきたか！！ いいだろう、願い通り、貴様らをまとめて喰らってやる！！！」

ボーズ星人たちが怯えてジリッと後ずさりします。しかし、長老が手をあげました。

「ノアたちだけに、危険な目をあわせるわけにはいかん。我ら退化した種族とはいえ、この世界に住まう一つの生命体！ ボーズ星人の底意地！ 今ぞ見せつけてくれよう！！！」

長老の言葉に勇気づけられ、ボーズ星人たちが気合いを振り絞ります。

「やめろー！ 逃げろー！！！」

「や、やめてください！ ダメ！！！」

ノアとメルが必死に叫びますが、ボーズ星人たちの決心は固いものです。

オルガノツソは斧を担ぎなおし、ノアたちに向けていたつま先を、ボーズ星人たちの方に向けました。

「ガハハハ！ 封印が解け次第、ボーズ星人どもはオ・パイの命令

で一匹のこらず始末するはずだったんだがな……。それは、もうじっくり味わって喰らってやるうと思っていたが、どうやら貴様らで最後のようだな！ こうもあっさりカタがついちまうのも悲しい話だぜッ！！」

オルガノツソがオ・パイの名前を出したことに、ノアは驚きます。「オ・パイ？ な、なんで、ヤツを……。？ ヤツを知っているのか！？」

「フン。どうせ、ここにいる奴ら全員殺すわけだ。教えてやる義理はねえ！ そこで黙って見てな！ ボーズ野郎どもを倒したら、次は貴様らだ！ 俺様の体に傷をつけた罰だ！ 貴様らはじーっくり！ 時間と手間暇をかけて調理してやるぜ！！」

オルガノツソはニヤリと笑ってノアを睨み付けました。

ノアもバーボンも絶望に顔をしかめます。もう、打つ手はないのです。いま飛びかかって、どうしようもなことが解ったのです。

ついに、オルガノツソがボーズ星人たちの前に立ちはだかりました。怖くて、恐ろしくて、ボーズ星人たちは哀れにもガクガクブルブル……。尋常じゃないぐらい震えています。長老もそれは例外ではありませんでした。こんなんじゃないや戦いません。でも、逃げません！ 「み、皆のもの……。ゆ、勇気を、勇気を振り絞るのだ！」

たまらなくなり、メルが走り出しました。ノアがその手を掴もうとしましたが、スルリと抜けていってしまいます。

「メルッ！！」

「やめてえええええーッ！」

メルがオルガノツソの足に飛びつこうとしました。しかし、オルガノツソがそれにいち早く気づきました。蚊を払うかのように、凶悪な鉄拳を振ります！！

「邪魔をするな！ このウジ虫が！！」

メルが殴られる瞬間、一人のボーズ星人が騎馬から離れます。おかげで残りのボーズ星人はバランスを崩して倒れてしまいました。

「ダメだボー！！」

ボーズ星人がメルをかばって飛びつきます。それを見て、長老が、そして残りの六人のボーズ星人が、懐からあの魔法陣の描かれた紙を取り出しました。

「スタッド殿！ いまこそ、我らに力を！ 我らの命を使い、この悪魔オルガノツソを封じたまえ！！」

長老が叫びます。六人が同じ言葉を言います！！

紙に描かれた魔法陣が黄金色に輝きました！ 地下から照らすマグマの光よりも強烈な光です！

「う、うおおおおおッ！？」

メルをボーズ星人ごと殴りつけようとしたオルガノツソは、あまりの眩しい光に目を覆いました。光はますます強くなっていきます。『誰かを守りたいという気持ち・・・これが力となる』

どこからともなく不思議な声がありました。柔らかいけど、凜とした男性の声です。なぜか、ノアは懐かしい気持ちと共に、心の奥から勇気が湧いてきました。

ボーズ長老たちが持つ、魔法陣の形が変わります。ボーズ星人たちは驚きました。発動していた魔法が変わり、その魔法の対象が・・・メルをかばったボーズ星人に集まっていくのです！！

『勇気は力。僕の聖魔法は、勇気を力に変える！ 勇気よ、力となれ！ 力よ、全てを護る大盾となれ！ 聖波動クライク！！』

聖なる力が、メルをかばったボーズ星人を満たします。ゆっくりと、そのボーズ星人が立ち上がりました。

「力が！ 力が集まるボーーーーッ！！」

なんと、そのボーズ星人が踊り出します。

手を二回叩き、泳ぐような仕草をして、もう一度二回叩き、再び泳ぐような仕草を！ これは、そう、音頭です！

『ボーズ音頭でよよいがよい あんたも、あたしも踊りましょ』
はあーん（以後、繰り返し）』

どこからともなくBGMが流れてきます。いつの間にか、長老や六人のボーズ星人たちも踊り始めていました。

「な、なんだ、この間抜けな踊りは……ぐが、ぐががが！！」
唾然としていた、オルガノツソが突然に苦しみ出します。どうい
う効果かはわかりませんが、ボーズ星人たちが踊るたびに苦しんで
います。魔法陣が、ボーズ星人たちの立ち位置が魔法陣になってい
るのです！

「な、なにが起こっているんだ！？」

ノアが走ってきます。メルはその光景を見やって、口元を抑えて
いました。

「こ、これは……古代魔法です！ とても原始的……でも、な
んて力強く、純粋な！」

ボーズ星人が皆、額に汗しています。顔はハツラツとして、精一
杯踊っています。

「や、やめろおお……その踊りを、やめろおおお！！ こ、こ
れは……スタッドの野郎と、同じ、封印……魔法……がああ
あああああ！！」

「違うボー！ これは、お前を異次元に送り出す太古の魔法ボーッ
！！」

メルの側のボーズ星人がニヤリと笑いました。なんて、ニヒルな
笑いでしょう！ 明らかに他のボーズ星人とは違います！

ボーズ星人たちの踊りが一層激しくなってきました。それは、空
間を歪め、異次元の扉を生み出します。

「や・め・ろ……おおおお！ お、俺様は……まだ、何も、
喰って……ねえ！！ は、腹が減ったまま……異次元、なん
かにいきたくねええええー！！」

異次元が、オルガノツソを吸い込もうとします。しかし、オルガ
ノツソも必死に吸い込まれまいと抗います。斧を深々と刺し、四肢
を踏ん張ります。全身の筋肉が盛り上がりました。

「せ、せめて……貴様らの一匹でも……喰らってやるッ！！」

オルガノツソが片腕をボーズ長老に向けて突き出しました。あわ
や、踊りに夢中になっていたボーズ長老が捕まりそうになります。

「させねえよ!!」

バーボンの鞭が、ピシヤツとその手を払いました。

「な、なんだと? 貴様は・・・瀕死のはずでは!!?」

「知らねえのか? 医者は怪我しねえんだ。患者を治療できなくなるからな」

バーボンがニツと笑います。あの短時間で、自分の治療を終えたのです!

オルガノツソは悔しそうな顔をしました。

「どっせい!!!」

バーボンに気をとられていたオルガノツソに、強烈なノアの体当たりがお見舞いされました。

「空腹のまま、あつちで自分がしたことを後悔しな!!」

ツルリと、オルガノツソの握っていた斧の柄から手が離れました。

「あつ」と言った瞬間、異次元に吸い込まれていきます。

「あ。でも、これ、せめてものアタシからの饞別だ。あつちで食いな!!」

ノアが、腰のポーチにいれていた・・・朴念仁の毒の実の欠片を放ります。それもオルガノツソと共に異次元に消えていきました。

なんで、ノアが毒の実を持っていたかですって? それは、後で何とかして食べれないかという食欲のおかげです! 食べれないと聞けば、どうしても食べたくなくなるのがノアですから。

オルガノツソと毒の実が吸い込まれて消えると、それに合わせて異次元が歪んで伸びて・・・消滅しました。

「や、やった・・・ボー!」

「倒した・・・ボー!」

「あの、怖いオルガノツソをやっつけただボー!」

「かくも、勝利の美酒は芳醇で、濃厚かつ・・・なんとも表現しがたない、ボー!」

「我らがやったボー!!!」

「みんな生きているボー!!!」

ボーズ星人が口々に喜んでお互いに手を叩き合います。ボーズ長老もウンウンと頷きました。

「助けてやるつもりが・・・逆に助けられちまうとはな。チツ。スタツドのヤツに一杯くわされたぜ」

バーボンが、落ちた魔法陣の紙を拾います。

「どうということ？」

身体の汚れを払いながら、ノアは首を傾げます。

「スタツドさんは・・・命をかけた封印の疑似魔法をボーズ星人さんたちに渡したんではないんです。あれは偽物の印。ボーズ星人さんたちの勇気に応じて、発動する条件にであつたのでしょうか。本当の疑似魔法は、聖波動クライク。使用者の能力を最大まで引き出す補助魔法です。命なんて、かける必要のない魔法なんです」

メルの説明に、ノアはがっくりと肩を落とします。

「なんだよー。だつたら、最初からそれ使えば良かったんじゃないか。でも、なんでスタツドはそんな嘘を？」

「きつと・・・我らに、もう一度生きる喜びを思い出させるためだボー。危機に立ち向かわせることで、我らが本来の我らを取り戻すことをスタツドは願っていたボー」

メルをかばったボーズ星人がそう言います。ノアは目をパチクリさせました。

「あ、あんた・・・普通に喋ってるけど。っていうか、会話が成り立ってる!？」

「あ! そ、そういうえば・・・難しい言葉でも、スラスラ説明できるボー! わ、我はいつたい?？」

喋っているボーズ星人自身が驚きます。ノアも、長老以外とまともに会話が成り立つことに啞然としています。

「・・・失った自我を取り戻したのだ。メルメルをかばうことで、個は全、全は個の概念を越えて・・・お前は一人の人間となつただ」

ボーズ長老が、ボンとそのボーズ星人の肩を叩きます。ボーズ星

人は、感動してフルフルと震えていました。

「なら、名前が必要だな・・・」

バーボンが煙草をふかしながら言いました。

「そうだね。じゃあ・・・あんたは今日から『ボーズ太郎』だ」

ノアが指をパチンと鳴らしながら言います。

「の、ノア・・・」

「なんて安直な・・・」

メルもバーボンも頭を抑えます。

しかし、ボーズ太郎と呼ばれたボーズ星人は嬉しそうに飛び上がりました。

「やったボー！ やったボー！ 我は、ボーズ太郎だボー！！」

飛び上がっているボーズ太郎を前に、他の六人のボーズ星人が羨ましそうな顔をします。

「やがて、お前達もボーズ太郎のようになるであろう。もう、我がボーズ長老として・・・ボーズ星人の総意を語らずとも良い日が必ず来る。そう遠くない未来に、な」

運命と口にしなくなったボーズ長老は、晴れやかな顔をしていました。そんなボーズ長老自身も、自我を取り戻しつつあるのでしよう。ノアはそれを嬉しく思いました・・・。

それぞれ、退化神殿の上の階に戻っていきます。他のみんなが行くの見届け、ノアが階段を上ろうとしたとき、ボーズ長老が突然にノアを呼び止めました。

「なに？」

ノアが振り返って尋ねた時、ボーズ長老はさっきまでの晴れやかな顔とは違ってかわって、難しい顔つきをしていました。

「ノアよ。話しておきたいことがある・・・」

「話しておきたいこと？」

「メルメルのことだ」

ノアはキョトンとしました。階段の方を一度見ましたが、再び長

老の方に向き直ります。

「いいよ。聞くよ」

「ありがとう……。実は、メルメルの記憶を封じたのは我なのだ」
「え？ な、なんだって!？」

突然の告白に、ノアは飛び上がりました。ですが、ボーズ長老は「静かに!」と口に指を当てます。ノアは口にチャックをして頷きました。

「……メルメルは、一年前。ジャスト城下町の付近で我らが見つけた。迷っていたというより、デムの若い男数人に連れられていたのだ。メルメルは、メリンの少女だということで、デムから因縁をつけられていたのだと思う。ひどい暴行を受けていた……」

ボーズ長老が重々しく言うのに、ノアはギュツと拳を握りしめて、唇を噛みしめました。

「我らは……。そのときは、助けることもできなかった。オルガノツソに立ち向かったような勇氣とは無縁だったのだ。我らは……。暴行を受け終わったメルメルを……。気絶したメルメルを助けてやることしかできなかった。あれは、あまりにも辛い記憶。我は、その記憶を封じた。メルメルの心の奥深くに」

「そう……。だったのか」

ノアは悔しくて、悲しくて、胸に手をやりました。

ファルやメリンがデムを軽視しているように、逆にデムがファルやメリンを恨んでいることもあるのです。優位種であるファルやメリンを憎み、嫌って、力のまだ弱い子供や女性を襲う不屈きなデムがいるという話を聞いたことがありました。

盗賊という、人には疎まれる仕事をしているノア自身も、そんな嫌な経験をしたことがあります。同じデムなのに、蔑まれ、罵られ、否定される。そんな辛い過去があったからこそ、ノアにもメルを受けた苦しみが手に取るように解りました。ましてや、ボーズ星人や魔物という種族すら越えた愛を持つ、心優しいメルのことです。どれほど、心を痛めたでしょう。どれほど、悲しんだことでしょう。

身体の傷よりも、きつと心の傷の方が深かったに違いありません。

「・・・ノア。メルメルを連れて行ってやってくれ。このまま我らと共にいてはいけない。我は今回のことで悟った。いくら、記憶を消そうとも。いくら、放棄して忘却の中に生きようとも。やがて、人はそれに立ち向かわねばならぬ時がくる。メルメル自身が立ち向かわなければならぬ日が。その時に、ノア。お前が側にいてやってくれ」

ボーズ長老の真摯な想いが、ノアの胸に突き刺さります。ノアはコクリと頷きました。

「わかった。メルはアタシの友達だ。メルが辛い過去に立ち向かうとき、アタシが支えてあげる」

ノアの言葉に、ボーズ長老は嬉しそうに頷きました・・・・・・。

ノアとボーズ長老が、皆より少し遅れて長老の間に戻ると、何やら表から喧噪が聞こえてきます。何かが戦っているような音です。どうやら様子を見に行っていたらしいボーズ太郎が、血相を変えて戻ってきました。

「大変だボー！ ノアたちじゃない、剣をもったデムが、たくさん森で暴れているボー！！」

「デムだと！？ ジャスト城のヤツらか！」

バーボンは何かを知っているようで、渋い顔をしました。

「・・・オルガノツソの野郎が言ってる。オ・パイにボーズ星人の始末を頼まれたってな。実は、それに心当たりがあつてな。オ・パイは、どうしてか、ボーズ星人を目の敵にしているんだ。近々、軍をあげての掃討作戦を行うってもっばらの噂だったんだ」
この言葉に、ノアもメルも憤慨します。

「なんだよ、そりゃ！」

「ひどい！ ボーズ星人さんたちが何をしたっていうんですか！」

二人に詰め寄られ、バーボンは目を白黒させます。

「お、俺に言われてもな・・・」

「と、とりあえずどうするボー!? まだ退化神殿にまでは来ていなく、森の魔物たちと戦っているようだボー! でも、ここまで来るのは時間の問題だボー!」

あわあわと慌てるボーズ星人たち。長老は悲しそうな顔をしました。

「・・・やはり我らは滅びゆくしかないのか」

「もう! また! そんなこと言っな! アタシが何とかしてやる!」

ノアがドンと胸を叩いて言います。バーボンはそれを見て天を見上げました。

「おいおい、安請け合いは・・・」

「安請け合いなんかじゃない! う〜んと、え〜と・・・そうだ! あんたたちさ、ウチに来ればいいよ!」

ノアが捻り出した回答は突拍子もないものでした。

「ウチ?」

「そう! 盗賊の森! 南に行った方にある場所さ。そこだったら、バツカレス親分や盗賊の皆もいる。ジャスト城の兵士にみつかることもないような穴場だよ!」

ノアの提言に、長老以下六名は意識を共有して考えます。自我をもったボーズ太郎だけは仲間に入れず、ちよつとだけ淋しそうにしました。

「・・・本当に大丈夫だろうか? 迷惑にはならぬか?」

「大丈夫だつて! あんたたちぐらい平気だつて! 親分はそんな細かいこと気にする人じゃないし!」

ボーズ星人たちはコクリと頷き合います。ノアの好意を受け入れることにしたのです。

「決まったな。もう時間がねえ。俺らが困になって時間を稼ごう。その間に逃げるんだ」

バーボンが言うのに、ノアもメルも口を引き締めました。

ボーズ長老が、広間の隠し扉を開きます。入口を通らなくとも外

にでられるようです。神殿の裏手を上手く行けば、敵に見つからずに逃げれる事でしょう。

「案内なくて大丈夫？」

ノアが心配して聞くのに、ボーズ星人たちはニツと笑います。

「森を歩くのは慣れているボー」

「方向さえ解れば、なんとか辿りつけると思うボー」

ボーズ星人たちがそれぞれ出ていくなか、ボーズ太郎だけはグッと拳を握って立ち尽くしています。

「ボーズ太郎。あんたも早く」

ノアが急かすのに、ボーズ太郎はイヤイヤと頭を横に振りました。

「わ、我は逃げないボー！ ノアやメルやバーボン先生だけ置いてなんて行けないボー！」

「フツ。狙われているのは、お前らなんだがな」

バーボンは呆れたように言いましたが、どことなく嬉しそうな様子でした。

「・・・ボーズ太郎よ。お前がその選択をするというならば我は止めはせぬ。メルメルのことをよろしく頼む。そして、ノア。ボーズ星人を代表して深く感謝する。色々とありがとう」

ボーズ長老が深々とお辞儀します。ノアはなんだか照れ臭くなつて鼻の下をこすりました。

「いいって、はやく行きなよ。気をつけね！」

ノアはそう言つて隠し扉を閉めました・・・。

ガツガツガという無骨な軍靴の音が幾つもします。雪崩れこむように、ガチャガチャという喧しい音が神殿内に響きました。

脇構えに刀を構えた兵士たち。顔に鬼面をあて、鉄兜をかぶっています。これがジャスト城の兵士のスタイルです。まるで侍のようですが、下半身は旧日本帝国軍の軍服のようで、アンバランスです。その兵士たちの後ろからは、赤と青の派手なストライプをした道化師たち。二股に別れた帽子や、長い服の裾にボンボンがついてい

て、珍妙な白い化粧をしています。楽しそうにスキップしながら、ステッキをバトンのようにクルクル回しています。これがジャスト城の魔導師です。

兵士と魔導師は、ノアたちを逃がすまいと周囲を囲います。

「チツ。ずいぶん大掛かりだな」

自分の予想していたよりも数が多かったので、バーボンは気に入らなそうに言います。胸ポケットの試験管の残数をチラッと見やりますが、この人数を相手にするのは難しそうです。

「ほーほ。やっとこさついたっちょ！ エライ歩いたっちょ！」

「んだべー」

入口のほうから、早口で甲高い声とのんびりした低い声がします。兵士たちに比べて軽装で、ノアには見ただけで、すぐに傭兵の類いだと解りました。

早口の甲高い声を出していたのは、背が低く、真ん丸な目。上向いた鼻、出っ歯が二本でた奇妙な顔の小男です。

のんびりした低い声で返事していたのは、背がやたら高く、怒り肩で胴長。つぶってるのではないかというぐらい細かい目に、しゃくれた顎から下の歯が二本とびでています。

見事に対象的な二人は、ノアたちに向かってきました。小男はチヨコチヨコと忙しない足取りで、大男は一步を進むのが時間がかかります。

「見つけたチヨ！ 怪盗モア！」

小男がノアを指さしながら言います。ノアはあんぐり口を開きました。

「怪盗モアなあ？」

「そうだったっちょ！ ジャスト城の国宝エルマドルを奪おうとした極悪人モアだったっちょ！」

ノアの顔がみるみる赤くなります。怒りに震えました。

「誰がモアだ！ アタシはノアだ！ アタシはそんな絶滅した怪鳥みたいな名前じゃない！！」

小男は目をパチクリさせました。やっと追いついた大男のほうにやらポケットから紙切れを取り出して開きます。

「アホン。そうだべー。怪盗ノアになっっているべー」

「なにチヨ？ ダラ！ お前がモアだっって言っただっチヨ！」

小男アホンがツバを飛ばしながら、大男ダラに掴みかかります。

「読み間違えてたべー」

ダラが、紙をこちら側に見せます。

幼児でももう少し丁寧に巧く描けるだろうというノアの絵。その下に極悪犯手配書、怪盗ノアとありました。

「なんでお前はいつもそうだっチヨ！ せっかく決めてたのに台無しだっチヨ！」

「すまないべー」

漫才のようなやり取りにノアたちは半ば呆れムードです。

「アホンとダラ。差し詰め二人合わせてアホンダラだな」

バーボンがタバコに火をつけながら言います。

「ムキー！ 合わせるなっチヨ！」

アホンが地団駄を踏みます。

「と、とりあえず、モアでもノアでもいっつチヨ！ 逮捕チヨ！」

「よくなーい！」

ノアも抗議の声をあげました。ですが、バーボンがサッと前に進み出ます。

「秘宝エルマドールの窃盗疑惑が逮捕の理由だろ？ だが、ノアが盗んだって証拠はあんのか？」

何か言おうとしたノアの口を抑え、バーボンが尋ねます。

「し、証拠だ・・・っチヨ？」

明らかにアホンは動揺したようです。バーボンは涼しげに笑いましました。

「証拠もなしに、こんな僻地まで軍勢率いて来たつてののか。これで不当逮捕つてなったら、ジャスト国の威信に関わるぜ？」

バーボンの言葉に、アホンは「うっ」と身を引きます。

アホンが大した権力もない下つ端役人だとバーボンは見越しているのです。巧く話術で丸め込んだ方が、戦うより得策だと考えたのです。

「ぼ、ボスの・・・命令だつちヨ！ 逆らえばお仕置きされるつちヨ！」

「ボスだあ？」

バーボンは眉を寄せました。

「なにを悠長なことをやっている？」

アホンとダラの後ろから冷たい声がしました。二人とも青い顔をします。周囲の兵士たちにも言い知れぬ緊張が走りました。

「たかだか、ネズミを捕らえるだけにこんなに時間と人手がかかるものか・・・無能どもめ」

この嫌な声に、この嫌みな言い方に、ノアはハツとしました。

「オ・パイ！」

アホンとダラの後ろから姿を現したオ・パイがニヤリと笑います。そして手に持っている何かを放り投げました。

ドッシーン！！！！

それを見て、メルが口元に手を当てて悲鳴を上げます。ポーズ太郎は青ざめた顔でガクガク震えました。

「ひ、ひどい！！！」

メルの目尻に涙がたまります。

オ・パイが投げたもの・・・それはメルシーでした。ズタボロで、暗い目にはすでに何も映らず、舌がダラリと飛び出ていました。すでに息絶えています。腕や体に巻いた包帯から、ノアに乳をくれたメルシーに違いありません。

バーボンが義手の付け根をグツと握ります。

「私がこの神殿に来るのをなぜか邪魔したのでな。始末してやった」
ノアはギリツと歯ぎしりします。

断言はできませんが、もしかしたらオ・パイの危険な雰囲気を生野の勘で察知し、ここに来るのを止めようとしたのかも知れません。

「ボス！ お仕置きは・・・勘弁だつちヨ！」

「べ、べー」

アホンもドラも萎縮してしまいます。ですが、オ・パイは二人に目もくれません。

「最初から期待していない。だから、私が直々に来たのだ」

オ・パイが静かに進み出て、ノアの目の前に立ちはだかります。メルとバーボンをチラツと一瞥しました。

「ああ！ 本丸がでてくるとはな！！ くそつたれ！ 先手必勝だぜ！」

戦うしかないと判断したバーボンが、まず仕掛けました。ありつたけの試験管を投げます。

しかし、オ・パイはそれを難なく、なんと一つも割らずにパシッパシッパシッと受け取ってしまいます。

「なんて野郎だ・・・グフッ！」

バーボンが振るつた鞭を空中で受け取り、腹部に鉄拳を叩き込みます。オ・パイは気絶したバーボンの胸元に、試験管を戻す余裕も見せています。

「バーボンさん！ 『轟き叫ぶ大気、我呼ばれるは聖なる雷光。ライトニングー！』」

メルがすぐさま雷の魔法を放ちます。メルが持つ一番強い魔法です。稲光を伴い、雷の柱がオ・パイめがけて落ちました。

「ちやいやあ！」

「え！？」

オ・パイが高く跳び、雷の柱を蹴りつけます。垂直に落ちようとしていた雷は、オ・パイに蹴り上げられ、あらぬ方向に飛んで天井に穴をあけました。

何事もなかったように、オ・パイはその場にスタツと着地します。メルは精神力を使い果たし、その場にパタンと倒れました。

「『レッド・スティール！！』」

ノアは、倒れているバーボンとメルに駆け寄りたい気持ちを抑え

つけながら必殺技を放ちました。バーボンとメルに気をとられている、今しか隙をつくチャンスがないのです！

「……遅いな。まるでスローモーションだ」

オ・パイがランニングするかのようになり、タタタンと床を蹴ったかと思うと、ノアの高速移動に追いつき、ノアのダガーをヒョイツと取り上げます。

「そ、そんな……盗賊のアタシに追いつくなんて」

ノアはガクリと膝をつきます。スピードを生かせなかった城内ならともかく、必殺技を使ったトップスピードでの速さで負けたのです。

「……いくら早かろうが、ネズミはネズミに過ぎんだ」

オ・パイは見えないほど速い手刀でノアの首筋を叩きます。ノアはその場に倒れました。

「み、みんなボー、ボー！」

怖くて戦うこともできず、ボーズ太郎はオロオロとします。

オ・パイは憎悪を込めた目でボーズ太郎を睨みつけました。尋常じゃない殺気に、ボーズ太郎は気圧されてへたりこみます。完全に戦意喪失です。

「……くだらん。肩慣らしにもならん」

オ・パイは鼻を鳴らし、三つ編みをブンと後ろに払いました。

そして、クルリと踵を返します。

「全員。城に連行しろ。戻り次第、裁判だ……ククク」

そして、アホンとダラの間を通り抜け様にそう言い放ちます。

そのままオ・パイは出ていきました。オ・パイが過ぎ去った後、二人ともゴクリと息を呑みます。

「……あ、相変わらず恐ろしい人チヨ」

「……そうだべー」

メルシーの遺骸に、倒れている三人と、戦意喪失した一人。これをオ・パイ一人がそうさせたのです。勇猛果敢なジャスト兵士ですが、恐怖に震えるあまりカチャカチャという音を鳴らしていました。

これ以上の失態はできないと、アホンとダラはそそくさと、
気絶した四人を担ぎ上げる担架を探しにいきました……。

第四章 力の四天王オルガノツソ（後書き）

ゲーム中では、オルガノツソは最初のボスですが・・・こうまで強くありません。小手調べをする序盤のボスといった感じですね。なかなかネーミングは気に入っているんですが。

アホンとダラ。これもお気に入りキャラでした。ゲームでは鬼ごっこをして、逃げ切れれば助けてあげようなんてイベントになるんですが。ま、ちょっと小説だと・・・あれかなあと。最終的に、オ・パイが介入して逃げられなくなるのは一緒ですけどねえ。

こんな感じで、次回は・・・ジャスト国のレイ王子とかがでてきます。あとオ・パイの野望とかも明らかに。ようやく話が進む、かと。

第五章 無道の暗殺者オ・パイと好色王子レイ

まるで、電車ごっこをしているかのように、ロープで縦にくくられて歩かされているノア、バーボン、メルメル、ボーズ太郎。一人でも歩みを遅くすると、兵士の一人が槍の柄でゴツゴツ殴ってきた。

そのままジャスト城に連行されました。初めてみるお城に、太陽の光に照らされ純白に輝くその威容に、メルもボーズ太郎も驚いた顔をします。でも、観光気分の顔ではありません。これからどんな仕打ちが待ち受けるのかという不安の色が強いです。いつもは楽天的なノアですらうつむきかげんなので当然です。

城の中は、夜来た時と違って、たくさんの人々が往来していました。兵士たちは冷たい眼で一瞥をくれ、メイドさんたちは怯えたように顔を背けます。

やはり、デムの城では、メリンのメルメルや、ボーズ星人のボーズ太郎は珍しいらしく、誰もが興味津々です。チラチラと盗み見る視線が背後に感じられます。でも、連行されているノアたちに声をかける者など一人もいません。

二階に通され、大広間でようやく縦一列から解放されました。と思いきや、今度は横一列に並ばさせられます。

捕まった直後の時のように再度、念入りなボディチェックが入ります。ただ、メルをチェックする時が異様に長いです。ノアやバーボンはサツサツと全身を叩かれただけ、ボーズ太郎に至っては一秒もかかっていません。よく見ると、メルをチェックしている兵士は、鬼面の下から鼻の下がのびて、涎までたらしているようです。同じ女であるのに、その扱いの差に、ノアはギロリと睨み付けました。すると、メルをチェックしていた兵士はゴホンと咳払いをしてメルから離れます。

周囲にピタリとついていた兵士たちがどき、顎を上げて、先に進

めと指示しました。ためらっていると、槍の穂先でチヨンと背中を突かれます。ノアたちは渋々と横一列のまま、粗悪な赤い長絨毯の上を歩き出しました。

王の間。豪華絢爛、荘厳美麗、威風堂々・・・そんな言葉で表現したいところですが、実際には節約計画、実質剛健、貧乏暇なし・・・といった表現が適切と思えるほど、シンプルで寂しい部屋です。

装飾品は根こそぎとり外され、紋章入りのカーテンがかかっていただろう部分の壁だけが白く、他はちよつと黒く日焼けしているのでもるわかりです。王の像か騎士の像があつたであろう場所も、台座だけが無惨に取り残されていました。ステンドグラスであつた窓なんかは、なんとベニヤ板がはめ込まれています。しかも、へたくそに取り付けたせいで、斜めっているのが何ともはや・・・。

そんな質素な部屋に場違いなほど豪華な王座。王座だけはせめてと思つて残されたのでしよう。その上に座るのがジャスト国王です。恰幅よいどつしりとした貫禄、知性を感じさせる長い頭髪に白髭。まさに王様と呼ぶに相応しい出で立ちですが、太い眉は常に八の字です。目は忙しく泳いでおり、王としての自信も何もあつたものではありません。王座に座るのが申し訳ないともいわんばかりに大きな身体を縮こまらせ、頭にかぶつた大きな王冠も少し斜めがちです。ノアたちに視線も合わせようとしていませんでした。ただこの場から消え去ってしまいたいという感じで、モジモジとしています。

隣に座るのが王妃様。ノアが首をへし曲げた、三階の像にそっくりの顔です。美人ですが、能面のような作り物の顔。釣り上がった目に、深く垂れ下がった口元は、そこで固定されたように少しも表情が変わりません。頼りない王様を、チラッと見てから、ノアたちに冷徹な視線を送っています。

王様と王妃様のさらに横、二人の席よりは控えめに作ったある椅子の上には、レイ王子とマレル王女が揃つて座っていました。王様より立派な出で立ちで、レイ王子はキリツとした表情で真っ直ぐに

ノアたちを見ています。マレル王女は、ちょっと怯えた様子で、時折に兄と母の方を気にして視線を送っています。

「……さて、国王陛下。日々お忙しい激務の中、このような些末な懸案にまでご裁可頂かなければならぬことを心苦しく思っております。ですが、これら大罪人の悪行はそうせざるを得ないほどのものです。どうぞ、お許し願いたく思います」

オ・パイが部屋の隅から姿を現しました。王様はビクツと怯えたように震えました。

「う、うむ……。苦しゅうない」

王様はおののいてる子猫のように、プルプルと震えながら言いました。オ・パイはニヤリと笑って、胸に手を当てて深々とお辞儀します。

「さて、王族の皆様。かの者たちの罪状をまずご報告申し上げます……。まず、かねてより盗賊の森に住まい、先だつても城に忍び込んだ不屈きなバツカレス盗賊団の一員のノアです。すでにあえて申し上げる必要もないほど明白な犯行でしょう。主犯にして、もっとも罪深い者であります。不相応にも、昨夜、ジャスト国の秘宝エルマドールを盗もうとし、それが失敗したと見るや、野蛮なボーズ星人たちを焚き付けて、国家転覆を謀ったものです」

「なあ！？」

「や、野蛮つて！？ ノアやボーズ星人さんたちがそんなことをするわけないです！」

ノアとメルが声を上げました。エルマドールを盗もうとしたのは事実ですが、ボーズ星人を使って反逆を謀ったなんて事実無根もいいところですよ。ですが、オ・パイは無視して続けました。

「そして、町医者バーボン。かつては、その豊富な医療知識を、フアルやメリンにも認められていた優秀な医師だったそうですが……。いまでは、その権威は失墜し、浮浪者や盗賊まで、秘密裏に違法な治療行為をしています。今回は盗賊ノアに荷担し、その身を匿ったばかりか、その思想に共鳴して今回の犯行に荷担したものです」

バーボンがフンと、肩をすくめました。

「・・・おいおい。でっちあげもいいところだ。なにが違法な治療行為だ。ちゃんと治してやってるぜ」

オ・パイはそれをも無視し、今度はメルをジロツと見やりました。「メリンの少女。クラレ村に問い合わせてみましたが・・・何者かは不明です。ですが、いずれにせよ、我が国に不法に滞在していたと思われる者。スパイの可能性も考えられますな」

「スパイだなんて!? わ、私は・・・私は！」

メルが胸に手を当てて辛そうな顔をします。

オ・パイは何かを考えるように少しだけ目を細めました。ですが、すぐに首を横に振ります。

「大方、ボーズ星人どもに利用されていたのでしよう。利用されるだけ、利用されて、そのうちに殺されていたと思われませう。以前も・・・私はそのような例を知っていますからなッ」

オ・パイの目が鋭く輝きます。その尋常じゃない殺気に、王の間にいる誰もがゴクリと息を呑みました。ですが、すぐにオ・パイは目を閉じて怒りを消しました。何事もなかったかのような顔に戻ります。

「さ、さつきから・・・ひどすぎます。あなたが、ボーズ星人さんたちの何を知っているというのッ」

メルがついに泣き出しました。それを見て、なぜか、レイ王子が心配そうな顔をします。ノアはそと時に気づきました。レイ王子がずっと真っ直ぐに見ていたのは、メルのことだったのです。ずーっと、さつきからメルのことを見ていたのです。

「・・・パイ。その者たちの処分、いかようにするつもりだ？」

レイ王子がオ・パイに問います。まるでメルを助けるかのような絶妙なタイミングでした。さらにメルに苦言を告げようとしていたオ・パイは、その出鼻をくじかれたようで、一瞬だけ口をへの字にしました。

「ちょ、ちょっと待つボー！ わ、私の罪状がまだまだボー！！」

ボーズ太郎が慌てて余計なことを言いました。ノア、バーボン、メルだけじゃずると言わんばかりの勢いです。どんなことでも仲間はずれはイヤなのです。

「黙っている！ 貴様など、存在すること自体が罪だッ！！！」

「ガーーーン！」

いつも冷静なオ・パイが感情を剥き出しに怒鳴り散らします。ボーズ太郎はもちろん、側にいた王様も「ヒイ！」と悲鳴をあげて頭を抱えました。

マレル王女など、真っ青になっています。レイが優しくマレル王女の手を握りました。すると、マレル王女は少し顔を赤らめてホッとした感じになります。

場の空気が悪くなってしまったことに、怒りを急速冷却したオ・パイは、咳払いをして仕切なおしました。

「……ええ。以上の罪状から、全員死刑に相当すると思われませう」この言葉に、誰もが耳を疑いました。四人ともギロチンが自分の首に落ちてくるのを想像してしまいます。

「死刑だつて！？ じよ、冗談じゃないよ！！！」

「し、死刑！？ 死刑だボーーッ！？」

「横暴だぜ、王様ッ！！！」

それぞれ抗議の声をあげますが、オ・パイは涼し気な顔です。オ・パイの中では死刑はすでに確定なのです。

「……そんな罪には相当しないと思うが。とくに、そのメ、メリンの少女なんかは。もつと詳しく調べてだな」

レイ王子も死刑に反対のようです。ですが、どうにもメル鬮眞のようでした。「メリンの少女」と言うときに、赤くなりながら人差し指をツンツンと付き合わせています。

「ボーズ星人と関与を持っていただけで、その罪は充分に死に値します」

オ・パイの表情は変わりません。心底ボーズ星人を憎んでいるのでしょう。

「そんなに結論を急がなくてもいいだろう？ 父上。いかがですか？ 簡単に死罪にしまえば・・・民衆からは恐怖政治だとの非難をつけるでしょう。まずは罪人たちの言い分もよく聞くべきでは？」

オ・パイに話しても無駄だと思ったレイは、父親・・・王様に言います。急に話を振られて、王様はドキマギしたようでした。ですが、やがてコクリと小さく頷きます。

「そ、そうだな・・・。確かにレイの言う通りじゃ。ワシも死罪はちよつと重すぎ・・・」

オ・パイがカツと目を見開きます。

「国王陛下！！ そのようなことで、デムの王が務まりましようか！！？？ いいですか、罪には厳しい罰を！！！ 生ぬるいことをしていれば、盗賊どもが付け上がりまっす！！ 私が来るまでこの国はどうでしたか！！？ 税収は向上かず、国勢は低迷するばかり！！ 盗賊は横行し、ボーズ星人どもは我が領土で傍若無人に暮らしておったのです！！ これが国家と呼べるでしょうか！！？ 統治といえるでしょうか！！？ どうぞ、崇高なる采配を！！！！」

オ・パイがまくしたてるのに、王様はガクガク震えます。

「ヒイ！ わかった、わかったから・・・パイ、怒鳴らんでくれ！ ワシが悪かった！ 許してくれ！」

目尻に涙のため、王様はマントで頭をすっぱり覆いました。それを見て、王妃様は呆れたようにフンと大きく鼻息を吹き出します。

ジャスト国の風習で、王族といえど、女性は政には口をだしません。ただ、それでもオ・パイのやりかたは気に入らないと言わんばかりに、王妃様は深く座り直して、オ・パイをただ冷たく見ていました。

オ・パイと王様のやりとりをみて、レイ王子は唇を噛みしめます。

「パイ！ 証拠もなしに、有罪と決めつけるのか？」

「証拠？」

オ・パイは意外と言わんばかりに眉を寄せました。

「その盗賊ノアが、我が国のエルマドールを狙った証拠だ。話によれば、昨夜にそのノアを目撃したのはお前だけだと言うのではないか。確かにバツカレス盗賊団は、たびたび我が城にやってくる。が、いまこの城に宝と呼べる代物はほとんどない！俺が見ているだけでは、偵察にきているだけのようを感じる。実際の所、実害はないのだ。何も盗られてもないのに、死刑にまでする必要があるのか？」

レイ王子は必死になって言いました。盗賊が忍び込んだっただけでも犯罪ではありますが、それでも死刑にするほどでもないと考えているのです。

「・・・レイ王子。大臣であるこの私が見たといっているのに、それを信用してもらえないのは残念です」

その言葉とは裏腹に、オ・パイがクククと喉の奥で笑います。そして、パチンと指を鳴らしました。

大きな斧を抱えたアホンとダラがやってきます。ノアはそれを見た瞬間、何であるかわかりました。あのオルガノツソが使っていた斧です！

「確かに、エルマドールを盗もうとした証拠はございません。ですが、我が国の守護者オルガノツソ。かの者を、ここにいた四人が殺してしまったのは事実。・・・私としたことが、重大犯行を付け加えるのを忘れておりましたな。そう。魔神バルバトスを倒すために戦った、守護者オルガノツソをこの者たちが殺してしまったのです！！これが何よりもの証拠！これが国家に対する、いや人類に対する罪でなくなるといふのでしょいか！！？」

王族の皆が、目を丸くします。レイ王子ですら、驚愕の表情でその斧を見やりました。

「ま、まさか・・・。英雄オルガノツソを倒してしまったのか！？ノアは目をパチクリします。さつきから、オ・パイやレイが何を言っているのかさっぱり解りません。」

「ちょ、ちょっと待ってよ！オルガノツソって・・・魔神バルバトスの子分でしょ！？スタッドに退化神殿に封印されていて、そ

の封印が解けちゃったから、私たちが倒しただけだっただけだ！」

「そ、そうです！ ボーズ星人さんたちを食べようとしていた悪い悪魔です！」

ノアとメルが言うのに、レイ王子はガツクリとして、倒れるかのように着座しました。マレル王女が心配そうにレイ王子の手を握ります。それでいて、気にくわないといわんばかりに、ちよつと疎ましそうにメルを見やりました。メルはその視線に全く気づきません。「愚か者め……。ボーズ星人たちの甘言に惑わされおって。英雄スタッド以外にも、魔神バルバトスに挑んだ戦士がいたのだ。それこそが、四天王と呼ばれる、オルガノツソ、アルダーク、ビシユエル……。最後の一人は忘れたがな。彼らは、惜しくも魔神バルバトスに敗れ、各地に魔神の呪いで封印されていたのだ。その封印が解けたというのに、貴様らは彼を殺してしまったのだ！」

オ・パイがそう言うのに、ノアたちは驚愕します。そんな話はまったく聞いていません。だって、オルガノツソ自身だって、スタッドに封印されたことを怒り、魔神バルバトスの下僕だと名乗っていたではありませんか！

「う、嘘だ！ そんなの嘘っぱちだ！」

「そ、そうだボー！ オルガノツソは怖い悪魔だボー！ 長老も言っていたボー！」

「オルガノツソや四天王なんて名前、文献で見た覚えもねえぜ」

ノアやボーズ太郎、バーボンが口々に言います。ですが、オ・パイも王族たちも半ば諦めムードです。なぜか有罪確定となった雰囲気なのです。

「文献に載っていないのは、四天王のことは国家機密だからだ。いずれにせよ、オルガノツソがこの国の守護者であることに違いない。そして、退化神殿に眠っていた。それなのに、許可もなく野蛮なボーズ星人どもが、あの神殿を占拠していたのだ」

オ・パイがそう言うのに、ノアはグツと堪えます。オルガノツソはオ・パイの名前をだしていました。きつと裏で何か繋がりがあ

のです。そこを何かで上手くやって、ノアたちを罠にはめたのです。今何を言ってもオ・パイはのりくらりとかわしてしまうでしょう。「さて、国王陛下!!!? この重大犯罪人たちを、どうされますか!!!」

オ・パイが国王の耳元で凄みます。

「ヒイイ！ わ、わかった、死刑でも・・・なんでもしてくれえいー!!!」

投げやりな王様の言葉に、全員がガクリと肩を落とします。レイは眉を寄せて何か良い方法を考えようとしていましたが、何も思いつかないようで、親指の爪を悔しそうにかじります。

勝利を確信したオ・パイはニヤリと笑いました。

「・・・死刑は確定した。だが、そうだな。盗賊の森の場所を教えなければ罪をもっと軽くしてやってもいい。鞭叩きの上に斬首のところを、斬首だけにして楽に死なせてやるうではないか」

ぜんぜんおいしくない提案に、ノアはベーツと舌を出しました。

オ・パイはフツと笑います。

「そうか。いいだろう。死刑執行は明朝だ！ それまでは牢に放り込んでおけ!!!」

オ・パイがそう命令をだすと、兵士達はまたノアを一行にして地下へと連れて行きました……………。

ジメジメした地下牢。ムカデがはい回り、ネズミが赤い目をチカチカさせてチユーと鳴きます。

薄暗い頭上を横切る錆び付いた配管の繋ぎ目からは、鼻につく黒い汚水がポチャポチャとしたり落ちます。

そんな非衛生的な場所にノアたち四人は押し込まれます。

「ふんちヨ！ ふんちヨ！」

アホンが牢の格子扉を閉じようとしませんがビクともしません。腐食して蝶番が固まってしまっているのです。両足を格子に引っかけ、顔を真っ赤にし、全身のバネを利用して引っ張りますが、赤い錆が

パラパラ落ちるだけです。

「がんばれべー。アホン、がんばれべー。」
ダラが後ろで応援します。

「がんばれべーって何チヨ！ 気の抜ける応援なんていらないチヨ！
！ そもそもなんで応援してるチヨ！ お前も引つ張るチヨ！！」
「んだかー。わかつたべー」

呑気な動作で頷き、ダラが格子に手をかけます。

「ふんべれべー」

変な掛け声でダラが力任せに引つ張ります。ギギギと扉が動き、ガツチャーンと閉まりました。その衝撃で、扉を掴んでいたアホンが尻餅をつきます。

「アイタタ。でも、これで良いチヨ」

アホンが尻を叩きながら立ち上がり、ポケットから鍵を取り出して牢を閉めました。腐食しているせいで、キーという悲鳴みたいな嫌な音です。ボーズ太郎が耳を抑えました。あ。ボーズ星人の耳ってデムと同じ位置にあるんですけどね。ちなみにメルはパタンと耳を下ろすだけで充分のようです。

「ここで明日まで大人しくしてるチヨ！ そうそう。お前らの荷物はあるところにあるチヨ。だから心配しなくていいチヨ！」

アホンは牢の奥の大きなズダ袋を指さします。どうやらノアたちを入れる前に置いてあったようです。

アホンはフフンと笑って、腰に手を当てて行ってしまいました。ですが、ダラだけは微動だにせずに牢の中を見つめています。

しばらくして、アホンが駆けて戻ってきました。

「ボスが見張ってるって言ったのは、別にずっと牢の中を見てるって意味じゃないチヨ！ こんなカビ臭いところにはいたくないチヨ！
上で番してりゃいいんだチヨ！！」

「あー。んだかー」

ポンと手を叩き、ダラは頷きます。それで怒るアホンの後についていきました……。

つまらない漫才を見終えて、バーボンはズダ袋から煙草とマッチを取り出しました。そして火を付け、フーツと煙を吐きます。

「・・・これ、アタシの見間違じゃないよね」

ノアがガツクリと肩を落とします。メルもポーズ太郎もコクリと頷きます。

「一度、奴らの頭の中を開けてみてみてえもんだな。・・・みる、ご丁寧に武器まで入ってやがる」

バーボンは、ズダ袋から鞭を取り出し装着します。そしてダガーをノアに渡しました。

腰にダガーを差しながら、ノアはスルリと牢から出て行きます。そうです。鍵のかかった牢からスルリと抜け出たのです！ まるでマジシャンのようです。ですが、違います。これはマジックでもありません。

「あいつら・・・ほーんとに、アホなんだな」

「だから、アホンダラなんだろ」

バーボンもスルリと牢から出ながら言いました。メルやポーズ太郎もです。

どういうことでしょう。それは実に簡単な話です。堅牢な鉄格子ではありませんが、扉の横が腐食して、鉄が途中で折れていたのです。それで、まるまる一人が抜けられるような隙間ができていたわけです。これでは、いくら扉をしっかり閉めようが意味がありません。

意図せずに、簡単に脱獄できた四人はそれぞれ顔を見合わせました。

「・・・これから、どうしましょうか」

メルが不安気に言います。長い耳がヘタンと倒れていました。

「オ・パイの野郎は、ポーズ星人を深く憎んでいる。このままじゃすまねえだろうな・・・」

「なんで、そんなに我らが憎まれるポー！ 我らは・・・何もしないポー！ ただ静かに暮らしたかっただけなんだポー！！」

ポーズ太郎が困惑して言うのに、バーボンは苦い顔をしました。

「ファルやメリンがデムを蔑視しているだけじゃねえ。同じデムの中でも、差別や偏見つてのがあるんだ。盗賊や浮浪者なんてのは生きていく価値がねえって考えている奴らも多くいる。ましてや、ボーズ星人つてのは退化を選択した種族だ。デムこそが優秀な種族だつて考える一部の過激派にや・・・デム以外の他種は滅ぼしてもいいだろうつて主張するヤツもいる。オ・パイなんてその典型だな」

「そんな・・・。同じ人間同士で。なんで、そんなことが起きるんでしょう？ 悲しすぎます」

メルはポロポロと涙を流しました。

「オ・パイをこのままにしてはおけない・・・。それに、親分のところに行つたボーズ星人たちのことも気になる。いったん盗賊の森に戻ろう」

なかなか戻つてこないノアを、きつとバツカレスもシユタイナもヤグルも心配していることでしょう。急に来たボーズ星人たちを見て、驚いているかもしれません。とりあえず、親分に報告を入れようとノアは思ったのでした。

「・・・戻るのか」

バーボンが神妙な顔をして、何か言いたそうにいました。ノアは首を少し傾げます。

「うん。バツカレス親分に・・・オ・パイの横暴を伝えなきゃ。オルガノツソのこともある。何かきつと企んでいるに違いないんだ！ 親分だったら・・・何か考えてくれるかもしれない」

ノアは、バーボンが反対するかもしれないと思つていました。だって、顎に手を当てて、何か言いたそうにしていたからです。でも、バーボンは少し上を見上げただけでした。

「・・・そうだな。戻るか」

まるで上の空のように、バーボンは小さくそう言いました。ノアは変だと思いました。それ以上は追求しませんでした・・・。

牢獄から出て、長い階段を抜けると・・・そこは城の裏庭に続いていました。なにせ目隠しをされて連れてこられたので、ここが城

の中であつても、どこらへんの場所なのかまでは解らなかつたので
す。

階段の出口から、ノアが顔をヒョコツと出すと、アホンとダラが見張りをしている姿がありました。どうやら二人だけです。

しかし、この二人本当にマヌケなんでしょう。二人して同じ方向を見張っています。それも、なぜか牢のある階段とは反対側をです。何かから何を見張っているつもりなんでしょう。おかげで、ノアたちは誰にもバレることなくジャスト城を後にしました……。

なかなか戻らないノアを心配し、シユタイナやヤグルを含めた総勢二十名の部下を動員して、ジャスト城付近を偵察していたバツカレスですが、どこをどう捜してもノアがいた形跡がありません。

盗賊なんて形跡なんか残すわけないのが当然なのですが、それにしても忽然と消えてしまったかのようなのです。そして、なんの情報も手に入れられずに、落胆しながら盗賊の森に戻ってきた時でした。

切り株に頭を打ち付けて自分を責めていたバツカレスは、誰にも手がつけられないでいました。

そんな時に彼らは突然にやってきました。白い姿の奇妙な七人組。揃いも揃って「ボー」と鳴く珍妙な来客。

ボーズ長老の話で、ノアの無事を確認できた時にはバツカレスは天にも昇る気持ちでした。豪快に男泣きをし、ズズツと鼻水をすすって、祝杯の酒をボーズ星人たちとあけます。歓迎の印もこもったものでした。

「いやいや、長老さん！　うちのノアがお世話になりましたなーあ！　ういっく！」

「いやいや、世話になったのは我らのほうだ。……しかし、我らを逃がすために、デムの兵隊に囲まれて、ノアたちは果たして無事だろうか？」

ポーズ長老は注がれる酒を見ながら難しい顔をします。しかし、バツカレスは大笑いしました。

「あの一緒にいたバーボンって医者はまだもんじゃねえんです！
アイツなら、何をどうやっても・・・ノアを無事に連れて帰ってきてくれますって！ だから、心配するこたあねえ！ ガツハツハツハ！」

陽気に笑うバツカレスに、ポーズ長老も安心したように頷きます。よほど、バーボンのことを信頼しているのでしょう。ポーズ長老はクイツと酒をあおりました。

「バツカレス殿。我らを受け入れ、それだけにとどまらず、こんなに旨い酒を振る舞ってくれるとは・・・感謝する。ういっく！」
赤い顔をして乾杯をする二人です。あっという間に、酒樽が底をついてしまいました。

そんなことをしていると、突然にノアが茂みから飛び出してきました。全力で走ってきたのでしょうか。髪は散り散りに乱れ、ゼエーゼエーと肩で息をしています。

ノアの姿を見た瞬間、バツカレスの表情がなぜか一瞬だけ強張りしました。ですが、すぐにいつもの顔に戻ります。

「おー！ ノア、無事だったか！！ このポーズ長老さんから話は聞いた。しかし、俺が酔って変なこと言っちゃまってわるかったな。だが、とりあえず無事で良かった！！」

ガツハハハと笑うバツカレス。ポーズ長老にノアの安否を聞くまでの狼狽えていた様は、恥ずかしいのでまったく微塵も見せません。しかし、ノアは酒樽を睨み付け、首を強く横に振りしました。

「親分！！ な、なに昼間っから酒のんでんだよッ！！」

ノアは、ポーズ星人たちが無事に辿り着いて良かったという思いと、昼間から悠々と酒をあおっているバツカレスとポーズ長老を見て憤りを感じます。こんなに自分は大変な思いをしたというのに・・・という感じです。

「ノア！！」

「ああ、ノア、ほんとうに無事で良かった！」

騒ぎを聞きつけ、シユタイナとヤグルも顔を出します。そろそろと、盗賊の仲間達とボーズ星人たちが喜びの顔で出てきました。ですが、ノアの表情は硬いままです。

「メルメルよ。無事だったか！ ああ、ありがとう。ありがとう。ノア」

「長老様……。良かった。本当に」

「長老ボー！ 皆も元気だボー！」

ようやくノアに追いつき、メル、ボーズ太郎たちが姿を現しました。ボーズ長老と共に他のボーズ星人たちと再会を喜びます。

「よー。バーボン。久しぶりだな」

「久しぶり……。じゃねえよ」

コップに残った酒を最後までグイツとあおり、最後に茂みから出てきたバーボンをバツカレスは遠い目で見ます。バーボンはろくに返事もせず、そっぽを向いて小さくチツと舌打ちをしました。

「親分！ ボーズ長老から話は聞いたんだろ！？ 今、大変なんだ！ オ・パイが、ボーズ星人たちを狩ろうとしてて……。捜しているんだ！ アタシたちは捕まって、命からがら逃げてきたんだけれど……」

状況説明があまり得意ではないノアは、身振り手振りをまじえて必死に説明します。ですが、バツカレスもボーズ長老を含むボーズ星人たちも、誰一人動揺した様子はみせません。ノアは、なんだか自分だけが焦っていて変な気持ちになりました。

説明を終えても、バツカレスは空になった酒瓶をただじつと見ているだけです。それを部下達が不安そうに見ていました。ノアも喉をゴクリと動かします。

「……。だから、親分」

「バツカレス盗賊団はボーズ星人たちと共に……。この盗賊の森を離れるってことか？」

ちゃんと話を理解していたバツカレスはそう呟きます。ノアは親

分が理解してくれたものと喜びました。しかし、バツカレスはバーボンをギロリと睨み付けます。

「・・・らしくねえことをしたな。バーボン。そのままノアと一緒に逃げれば良かったじゃねえか。ノアを生かすために、俺らを殺すか？」

バツカレスの言葉に、バーボンは強く目を閉じます。

「バツカレス。俺は・・・俺はノアの幸せを願っている。このままじゃいけねえ。そのためならなんでもする」

バーボンがうつすら目を開き、バツカレスを睨み返しながら言います。

二人の話が見えてこないノアもメルもボーズ太郎も、そして盗賊の皆もオロオロとしました。

「アタシを生かすために・・・親分たちを殺す？　どういうこと？　なんで、そんな風になるんだよ！？」

ノアが尋ねた瞬間、森中が赤く染まりました。夕日でしょうか？　いえ、それにはまだ早いです。パチパチという音が遠くから聞こえてきます。なにやら熱気がユラユラと流れているのが解ります。

「オ・パイだ。チツ。やっぱりノアの跡をつけてきやがったか・・・」

バツカレスが腰のダガーを抜きながら、ゆっくりと立ち上がりましました。

「おい。野郎ども！　城の魔導士が森に火をつけやがった！　十人は風上に向かい、魔導士を倒して消火に当たれ。いいか、一人で行動するな。最低、二人ないし三人でチームになって対応しろ」

手早く指示を出すと、部下たちがそれぞれ動き出しました。

ノアの膝がガクガクと震えます。動きたいのに、何かしたいのに気持ちだけが焦って空回りします。自分は何をしたのでしょうか。どんなミスをおかしたのでしょうか。ノアの頭はパニックを起こしていました。

「な、なんで・・・？」

愕然としながら言うノアに、怖い顔をしていたバツカレスがフツとやわらげます。

「いいか。ノア。誰かを守りたいとか救いたいと思う気持ちは大事だ……。だが、自分の気持ちだけで行動しちゃいけない。自分の基準で人を救おうなんてムシがいい話なわけだ。ガツハツハ、これでまた一つ勉強になったな！」

バツカレスは優しく笑い、ノアの頭にボンと手を乗せます。ノアの目から大粒の涙がこぼれました。

「……俺たちをみすみす逃がしたのは、オ・パイの策略さ。泳がせれば、この場所に辿り着くと考えていたんだろう」

バーボンが煙草に火をつけながら言いました。

周囲の火も、徐々に自分たちのいる方向へ流れてきているようです。火の粉が空中で舞っていました。

「そんな……。バーボンおじさん、どうして？」

ノアが尋ねます。ですが、バーボンは首を横に振りました。

「ノア。いや、ノアだけじゃねえ。メルもだ。このまま上手く生き延びても、お前たちはお尋ね者だ。まだお前たちは若い。こんなところで犠牲になっちゃいけないんだよ。オ・パイの目的は、あくまでポーズ星人や盗賊団だ。お前達の命をとることじゃねえ」

バーボンは、オ・パイが尾行を放っていたことに気づいていました。ですが、ノアとメルのために、あえてバツカレス盗賊団とポーズ星人たちを犠牲にしようと考えたのです。オ・パイの意思を、ノアとメルから遠ざけるつもりだったのです。

バツカレスが頷くと、シユタイナとヤグルが、素早くノアとメルを羽交い締めにしました。

「離せ！ アタシも戦う！！」

「いや！ バーボンさん！ バーボンさん！！」

延焼していく森。燃えている箇所が風にあおられ、熱風が吹きまわりました。ポーズ星人たちが一カ所に集まります。皆、荒い息を吐いています。

「わ、我らは・・・火に弱いボー。長老、このままじゃ・・・」

ボーズ太郎は皆を心配していました。そういう自分も、熱風に当てられて苦しそうです。

「ボーズ太郎よ。お前は生き延びて、我らボーズ星人のことを後生にまで語り継いでくれ」

ボーズ長老はそう言って、ボーズ太郎の首に青いネックレスをかけた。

「これは・・・」

「火から身を守ってくれる魔法の入った鉱石・・・。これを身につけていれば大丈夫だ」

「長老!!」

ボーズ星人たちが、ボーズ太郎をノアの方に突き飛ばします。

「ダメだ! 死んじゃ・・・なんにもならないッ!!」

ノアが叫びます。メルが嗚咽混じりに祈ります。ですが、ボーズ長老は優しく、快くニツと笑いました。

「ありがとうございます・・・。心優しき、スタッドの意思を継ぐ少女ノアよ。我らはお前に会えて良かった。さらばだ」

ボーズ長老がそう言い、ボーズ星人たちがそれぞれ手を振ります。その瞬間、燃えさかる炎がその辺りを燃やし尽くしました。魔法士が放った魔法です。火に弱いボーズ星人たちは、アイスクリームのように溶けて、叫ぶ間もなく散っていきます。

「う、うそだああああ!!」

「いやああー!!」

「長老!! みんなーボーツ!!」

引きずられていきながら、ノアとメルが泣きながら叫びます。ですが、シュタイナもヤグルも手を決してゆるめず、ズルズルと二人をこの場から離していきました。呆然としていたボーズ太郎も、他の盗賊たちが同じように羽交い締めにして連れて行きます。

燃えさかる炎の中、オ・パイがアホンとダラを引き連れて姿を現しました。

「・・・ネズミが。こんなところに巣くつていたか。ボーズ星人どもども、害虫はまともて私が駆除してやる。しかし、アホンとダラの迫真の演技のおかげで、こつもあつさり貴様らの居場所がわかるとはな。礼を言つてやりたいぐらいだ」

オ・パイがそう言うのに、アホンもダラも驚いた顔をします。

「え？ え、演技だった・・・チヨ????」

「そつだべか???」

顔を見合わせて首を傾げる二人に、オ・パイは怪訝そつな顔をしました。が、すぐにバツカレスのほうを睨み付けます。

「バツカレス。協力してもらつぜ！」

バーボンが煙草を捨ててニヤリと笑つと、バツカレスは口をへの字に曲げました。

「くそつたれ。なにが協力だ・・・。ノアを守るためとはいえ、やりすぎだぜ」

「でも、俺はノアの幸せをまず第一に願つている！」

「ああ！ ああ！ 俺だつてそつだ！ 父親みてえなもんだからな！ ノアが幸せなのが一番だぜツ!!」

渋々とバツカレスがダガーを構えます。バーボンもその横に立つて鞭を振るいました。

「フツ・・・。ネズミがどこまでやるかな？」

盗賊の森の外れ。ノアとメルとボーズ太郎が、ようやく羽交い締めから解放されます。

「この先は、盗賊の森じゃない。メリンの領土だ。少し行けば、メリンの集落であるクラレ村に着く。そこまでは、オ・パイも追つてはこれないだろう」

シユタイナが先の森を指さしてそう言います。

振り返ると、赤く燃えている火がチラチラと見えました。あそこで今頃はバツカレスとバーボンが必死にオ・パイと交戦していることでしょう。

「俺たちは・・・親分ら加勢にいくよ。達者でな、ノア」

ヤグルが鼻の下を擦りながら言いました。名残惜しいとは思ってはいても、大好きなノアのために何かができることが誇らしそうです。

しかし、ノアはイヤだと首を横に振ります。駄々っ子のようにブンブンと勢いよく振ります。

「アタシも・・・アタシも行く！ でないと、みんな・・・みんな死んじゃうよ！！」

シュタイナもヤグルも、他の盗賊達も顔を見合わせました。そしてシュタイナがコクリと頷きます。

「ノア！ よく聞くんだった・・・。いいかい？ 親分やバーボン先生がどうして命を賭けてノアを助けたと思う？ ここで戻ったら、その親分やバーボン先生の気持ちを踏みにじることになる」

シュタイナが、小さな子供に言い聞かせるかのように優しい口調で言いました。

「大丈夫だって。俺たちは死に行くんじゃないさ。それに、あの強い親分が、オ・パイなんかに負けると思っかい？」

ヤグルが笑います。でも、ノアは笑い返せませんでした。辛くて悲しくて、引き留めなければいけないのに声ができません。何をいえばいいのか思いつかないのです。

「ノア。君はこれから、メリンやファルの長に出会ってこのことを告げるんだ・・・。オ・パイは何か恐ろしいことを企んでいるのかもしれない。それは、親分はそのことを予感してたと言っていた。今回、ボーズ星人たちが姿を現したことで親分はそれに確信をもったみたいだった」

シュタイナはそう言って、踵を返しました。そしてヤグルたちと共に、再び盗賊の森へと戻っていきました・・・。

それからどれくらいの時が流れたでしょう・・・。

ノアもメルもボーズ太郎も、その場から動けずにいきました。何度

も何度も盗賊の森に引き返そうと思いましたが。でも、いまさら引き返して何ができるでしょう。シュタイナの言うとおり、バツカレスやバーボンの行為が無駄になってしまします。そう考えてしまうと、どうしていいか解らないのです。

「スタッドに会いたい……。そうすれば、次にどうすればいいか解るかもしれない」

ノアはポツリとそう呟きました。

ずっと、ノアはオルガノツソとの戦いの時に聞こえたスタッドの声を思い出していました。そしてポーズ長老から伝えられたノアへのメッセージ。『ランドレークのラグナロク遺跡で待つ』という言葉。これが、今のノアの唯一の支えになっていたのです。

メルもポーズ太郎も顔を上げます。涙の痕が、線となって頬を伝っていました。

「そうです。スタッドさんなら、きっと助けてくれるはず……。事情を伝えれば、オ・パイをこのまま放っておいたりなんかしないでしょー！」

みるみるうちに、皆に気力がみなぎってきます。そうです。今できることをするしかないのです。ただ手をこまねいて、何もしていないよりは遙かにましです。

「そうだボー！ スタッドにお願いして、バーボン先生らを助けてもらっボー！！」

ポーズ太郎がヒョイと立ち上がります。手には、長老からもらったペンダントを握りしめていました。

「ああ。バツカレス親分もバーボンおじさんも……。きっと大丈夫だ。シュタイナやヤグルだっついてっているんだから。アタシたちは一刻も早くスタッドを連れてこよう！！」

その力強い言葉に、メルもポーズ太郎も強く強く頷きます。

「……アタシたちは、もう進むしかないんだ」

ノアは、ギョツと自分を勇気づけるために拳を握りました……

……。

第五章 無道の暗殺者オ・パイと好色王子レイ（後書き）

アホンとダラの阿呆さ加減はゲームの方がわかりやすいんですが、ゲームのネタをそのまま表現してみました。少しでも笑ってもらえればいいんですが・・・文章だと難しいですね。

いよいよ、ノアの旅立ちの時です。あ。オ・パイの野望・・・まだ明らかになっていませんね。嘘つきました。ただ非道いやツだというのは間違いない、かとw

次回はようやくテム以外の人々がでてきます。もちろん好色王子もでてきます。若い子たちだけになったんで、話もそれなりに展開が早くなっていく・・・と思います。

第六章 メリンの霊希碑

緑、緑、緑・・・見渡す限り緑一色の森。なんの変哲もない風景に、ノアもメルもボーズ太郎も辟易としてきます。緑は嫌いな色ではありませんが、こうまで緑ばかりだと逆に気持ちが悪くなつてきます。

スタッドと出会うため、雄々しく胸を張って歩みを進めていた三人でしたが、今はちよつと前屈みになっていきます。顔には、疲れとも失望ともとれる雰囲気かじみ出ています。

「あー。クラレ村つてのはまだなのかよあ」

ノアが叫びます。ですが、記憶を失っているメルはもちろんのこと、この中の誰一人としてクラレ村にいったことがないのです。どれだけ離れているのかも解らないのです。距離もわからずに、ただひたすら歩き続けるのは辛いものがありました。

「ああ、大丈夫？ ボーズ太郎」

メルがよろけるボーズ太郎を支えます。ボーズ太郎は青い顔をしてへろへろと座り込んでしまいました。

ノアもメルも、休憩しようかと頷きあつてその場に座ります。メルが小さく氷の魔法を使ってハンカチを冷やし、ボーズ太郎の額に当てました。ボーズ太郎の表情が少し和らぎます。

「メリンの住むクラレ村・・・。オ・パイは、私の存在を確認できなかったと言っていました。でも、私はメリンです。私はそこから来たんでしょか？」

メルが不安そうに言います。ノアは苦虫を噛みつぶしたかのような顔で頭をバリバリ掻きました。

「なんともいえないな。オ・パイのヤツが嘘ついている可能性もあるし」

「嘘？ そんなことをして、どんなメリットがあるんですか？」

「そ、そりゃ・・・うーん」

ノアは適当に言い出した手前、頭を捻って考えますが、考えられる理由は出てきません。

「まあ、クラレ村につきや解るって……。たまたまオ・パイが聞いた人が、メルを知らなかっただけかもしれないじゃない」

そんなことはないと思いつつも、ノアはそう言いました。「そうですね」とだけ言って、メルもそれ以上は追求しませんでした。

メルは物憂げな表情で、倒れているボーズ太郎をあおいでやっています。

しばらく、沈黙の時間が流れました。ノアは大きく息を吐いて、天を見上げます。高い、高い晴天です……。あんな恐ろしい出来事がおきてから半日として経っていません。それなのに、こんな平和を満喫しているのが、ノアにとっても、とても不思議でした。申し訳ないような気持ちも感じます。

「……ノア。一つ、聞いてもいい？」

静かにメルが口を開きました。

「うん？」

空を飛ぶ鳥を見ていたノアは、ぼんやりとした表情でメルの顔を見やります。メルはさつきと変わらぬ物憂げな表情のままでした。

「……バーボンさんは、……その。どういう人なんですか？」

消え入りそうな声で、メルはそう言いました。耳を澄ましているければわからないような小さな声です。よく見ると、メルは顔を仄かにピンク色に染めていました。

ノアだって女の子です。そこはピーンときた顔をします。顎に手をあてて、「はーん」の仕草です。

「なんでバーボンおじさん？ どういう人ってえ？」

ノアはずいっとメルに近づき、ちょっと意地悪してみたくなくて聞き返します。メルの顔がボツと紅くなりました。

「い、いえ……。別に深い意味は……。その……」

「深い意味い？」

ノアがしたり顔で、さらにずいっとメルに近づきます。メルの耳

がピンと立ちました。三ツ口がモゴモゴと恥ずかしそうに動きます。そんな風に紅くなっていたメルですが、急にシユンとした顔となりました。

「きつと・・・バーボンさんは無事ですよね。もちろん、バツカレスさんたちも」

メルがギュツと胸に手を当てて言います。ボーズ星人たちの死を哀しみ、バーボンやバツカレスたちの安否を心から願っているのです。

ノアも唇を噛んで、真面目な顔つきになりました。

「大丈夫。大丈夫だって。バーボンおじさんはそう簡単にはくたばらないよ！それに、バツカレス親分だって強い。もし、オ・パイに勝てなくても、あの場から逃げるぐらいのことはできるさ」

まるで自分に言い聞かせるかのように、ノアは言います。メルもようやく小さく微笑みました。ずっと不安だったのです。

ノアもニコツと笑い返します。

そして、「うーん」ともったいぶりながら、わざとらしく腕組みをしました。

「そう。バーボンおじさんねえー。そうだね。いつもはいい加減だけど、決めるところは決める・・・」

バーボンの話をしようとした瞬間、ガサガサと付近の茂みが揺れました。

ノアがバツと立ち上がってダガーを構え、メルが身体をすくめまです。ボーズ太郎はハツと飛び起きてキョロキョロします。

「誰だ！？でてこい！！」

オ・パイの追っ手かもしれない。ノアは喉をゴクリと鳴らしました。

観念したかのように、茂みから出てきたのは、青いマントの旅装束に、金の装飾の施された高価な剣を腰に下げ、王族の証である獅子の紋章ペンダントをした、あのレイ王子でした。

ノアもメルも目を丸くして驚いています。ボーズ太郎は、レイ王

子の顔を忘れてしまったようでキョトンとしていましたが・・・。
「安心してくれ。敵意はない。なかなか出るタイミングが掴めなくて・・・びっくりさせてすまない」

レイは両手をあげて、無害であると主張します。

「な、なんでジャスト城の王子の・・・あんたがこんなところにいるのさ？」

ノアの問いはもつともです。仮にも王族が、お供もつけずにこんな国境の森にいるなんて偶然にしても不自然です。

レイも承知しているようで、金色の乱れた前髪を払いながら軽く頷きます。

「・・・オ・パイのことだ。ヤツのことで謝罪しなければと思ったんだ。今回の事は、国を代表して、王子の俺が謝らなければならぬ。一大臣の好きにさせ、横暴の限りを尽くしているのは、王に力も人望もないせいだ。盗賊の森への侵攻も止めることができなかった・・・本当にすまない」

レイは辛そうな顔をして頭を下げます。そんなことを素直に謝られてしまい、逆にノアの方が戸惑います。

「あんたに恨みがあるわけじゃないし、あんたに謝ってもらってもね。別にいいよ。しょうがないことじゃん。全部はオ・パイが悪いわけだしさ」

ノアはばつが悪そうに頬を掻きながら言います。メルもボーズ太郎も同じ気持ちで頷きました。王族を恨む気持ちはなかったのです。「ああ。ありがとう。・・・だが、このままにしてはおけない。確かにオ・パイが来る前から、国は無駄な浪費がひどく、その対策に臣民に重税を科すような悪政を強いていた。ヤツが大臣になってからは浪費そのものは止められ、国家自体は貯蓄できる余裕ができたが・・・民に還元などされず、重税はますますきつくなっている」

シユタイナがそんなことを言っていたのとノアは思い出します。

圧政に耐えかねた年寄りなどが盗賊の森に逃げ込み、それを仕方なく盗賊たちが面倒をみたり、無事に町に送り帰してやってるので

す。そういった人たちから、国の極悪非道ぶりはノアもある程度聞いてはいたのです。

「で、部下や政治について悩んでいるそんな王子様が、なんでアタシたちを追ってきたわけ？ ただ謝りたいだけなんてわけないよね」

ノアが結論を急ぎました。レイはギクリとした顔をします。

「あ、ああ。お前たちはオ・パイを倒すつもりなんだろう？ 決して、盗み聞きするつもりはなかったんだが・・・スタッドの名を出していたよな」

ノアは腕を組んで、口をへの字にします。

「俺一人の力じゃオ・パイを倒せない。だから、お前たちの旅に同行させてくれないか？」

レイの目は真っ直ぐでした。なまじか美形なので、余計に真摯な感じがします。

ノアとメルが顔を見合わせます。メルはノアに任せるという目配せをしました。首をゴキゴキと鳴らし、ノアはフーツと大きく溜息を吐き出します。

「アタシは盗賊だよ」

「承知の上だ。今の王位に興味はない。権力は捨てたつもりで出てきたんだ」

それを聞いて、ノアの表情が少し柔らかくなります。ここまでの覚悟があるわけです。レイのことを少し信用しても良いと思ったのです。

「まあ、ジャスト城でアタシたちを助けようとしてくれたしね。アタシは仲間にして問題ないと思う。あんたらはどう思う？ メル？
ボーズ太郎？」

「良いと思います。いまは同じ気持ちを持つ仲間が一人でも多い方が心強いですし」

「賛成だボー」

二人ともコクコクと頷きます。

「私はメルメルと言います。よろしくお願いしますね。レイ」

メルがニツコリ笑うのに、レイは飛び上がらんばかりの過剰な反応をしました。

「あ、ああ！　メルメルっていうのか・・・そうか！　ヨロシク！」
キョトンとするメルの手を、無理矢理つかんでブンブンと握手するレイです。

「なんか、他の目的のが大きそうだけどな」

ノアはジト目で、はしゃいでいるレイを見やりました。

こうして、ジャスト城王子レイが仲間に入ったのです・・・。

レイ王子はよくありがちなただのボンボンではなく、腰の剣も飾りではありませんでした。

この森でも数多の魔物、朴念仁やメルシーなどが襲いかかっていますが、ノアと競うかのように、レイも輝くサーベルでバツタバツと切り伏せていきます。王国剣技は一通り習得しているのです。

なかなかの戦力ではありましたが、ただ魔物を倒した後に、決め顔をわざわざメルに向けるのだけは頂けません。まあ、メル自身は気づいてもいませんでしたが・・・。

後方支援のメルとボーズ太郎も、なかなか良いコンビネーションです。スタッドの魔法の影響か、ボーズ太郎は次々と戦闘補助や簡易治癒の魔法を会得していきます。メルの魔法も、使う度に研ぎ澄まされて、より正確で強力な威力をもたらします。二人揃って、ノアやレイをガツチリとサポートします。

そんな快進撃で小一時間も歩いたぐらいでしょう。ようやく、森の間に民家の屋根らしきものが見えてきました。

「クラレ村は、三種族会議をレムジンで開くときに通った場所なんだ。王族の俺か、メルが一緒なら入れてもらえるはずだ」

レイがメルにウインクしながら言います。

「・・・我でも大丈夫ボー？」

不安そうなボーズ太郎でしたが、レイはその肩をポンポンと叩き

ます。

「ボーズ太郎は、従者つてことにすれば平気さ」

「レイの手下ボー？」

ボーズ太郎は不満そうに口を尖らしました。レイは面白そうに笑います。

「誰かメルを知ってる人がいるといいね。例え、メルがあつた村に住んでなかったとしてもさ」

ノアの言葉に、メルがゆっくりと頷きます。

「・・・ねえ、レイ。メリンの村は他にはどれくらいあるんですか？」

メルの問いかけに、レイは少し困った顔をしました。

「メリンの集落は・・・その。クラレ村しかないんだ」

「え？ どういうこと？」

怪訝そうにノアが尋ねると、レイは考えるかのように上を見ながら、前髪を指先でクルツと巻いて弄びます。

「言葉通りの意味さ。メリンの首都ミルミ城と周辺の村々は、二十年前に魔神バルバドスに真っ先に滅ぼされたんだ。いまでも、魔神の呪いで色濃く汚染されていて、誰一人立ち入られない死の国。国を失ったメリンは、ほとんどがクラレ村に移つたんだ」

メルは長い睫を伏せ、うつむきます。

「・・・もしクラレ村にいたのでないとしたら、私はどこから来たのでしょうか。どうして、退化の大森林などでさまよっていたんでしょうか」

ノアがパチンとレイの頭を叩きます。メルが落ち込んでいることに気づいたレイは、慌ててフォローを考えます。

「あ、あの・・・。別にクラレ村だけじゃなく、レムジンにもメリンはいるからさ」

そう言うレイでしたが、メルは僅かに頷いただけでその暗い表情までは変わることはありませんでした・・・。。。

大きな、大きな、崖の縁。それこそジャスト城すら飲み込んでしまふような大きさの、まるで底の見えない深み。そんな断崖が、森を抜けた所がありました。

その崖に、今にも崩れ落ちそうな吊り橋がかかっています。崖の間に、崖に飲み込まれずに取り残された土地が点在し、その間を繋ぐように橋がかかっているのです。クラレ村は、こうした崖の間の土地に家を建てて成り立っているのです。

「・・・魔神バルバトスが暴れたせいで、こういう地形になったっていう話だ」

「じゃ、シャレにならないね・・・。いくら、神様だからって地形かえるなんてどんだけだよ」

ノアが目をパチクリさせながら言います。

「だから、ファルの剣士も、メリンの魔道士も歯が立たず・・・スタッドが封印魔法を施してようやく鎮められたんだ」

「ボー。やっぱりスタッドはスゴイヤツだボー！」

自分のことのように、ボーズ太郎は胸を張って言いました。

村の入り口につくと、メルとレイが先頭に立ちます。吊り橋の向こうのメリンらしき人物が、警戒したように手にもった棒を構えましました。

「・・・そこで止まれ。何者だ？」

メルと同じような耳。それが警戒しているようにピンと上に立っています。よく日焼けした浅黒い若者で、メルのように白ではなく、茶色っぽい色の耳をしています。

「俺はジャスト城の王子レイだ。危急の訳あって、レムジンに向かいたい。長居するつもりはない。どうか靈希碑れいきひの使用許可を村長殿にお伺い願いたい」

レイはハキハキと言い、自分の身分証であるペンダントをかざします。権力を捨てたつもりだなんて言っただけ、利用できるものはなんでも利用しようとしてことでしょう。その割り切った考えに、ちょっとノアは好感を持ちました。

「フン。デムの王子が・・・霊希碑を使いたいだと？」

メリンの若者は、小馬鹿にしたようにフンと鼻を鳴らしました。それから、チラツとメルを見やります。一瞬だけ驚いたような顔をしましたが、それでもすぐに視線を逸らしてしまいました。

「すみません。わ、私・・・その、退化の森で迷っていて。記憶がなくて・・・。すみません。わ、私をご存じありませんか？ 私はいったい誰なんですか？」

メルが青白い顔で、必死で尋ねます。不安が頂点に達したのでしよう。それは、いつものメルらしくありませんでした。

メリンの若者は、「うつ」と言つてメルから離れます。怯えたように、汚いものに触れるかのように、メルを避けたのです。メルが悲しげになり、上げていた手がダランと落ちます。ノアとレイ、ボーズ太郎は眉間シワを寄せましたが、ここはグツと堪えます。

「そ、村長に聞け。俺は・・・何もしらん」

苦々しい顔で、メリンの若者はそう素っ気なく言います。

「・・・霊希碑の件は、俺から伝えておく。村長の家は村の奥だ。あまり、ウロチヨロセずに向かえ」

逃げ去るように、メリンの若者は走り去っていつてしまいました。

「んだよー。あの態度はさ。気にすんなよ、メル」

ノアがメルの肩に触れます。メルは小刻みに震えていました。ですが、無理に笑顔を作ります。ノアはいたたまれなくなり、ギョツとメルを抱いて背中を叩きます。メルは為されるがままにしています。

しばらくして、メルが落ち着いたのを見て、四人は村の中に入っていきます。

「そういえば、レイ。霊希碑って何ボー？」

気まずい無言に耐えかねたボーズ太郎が尋ねます。

「魔法レポート装置さ。レムジンには、あの崖の先にあるガラガ山道を抜けていかなきゃいけないんだ」

レイが大きな崖の方を指しながら言います。確かに徒歩では行け

そうにありません。

ノアたち四人は、吊り橋を渡り、民家や道具屋がある場所に行きます。

道具屋の店先に珍しい薬草があったので、ノアがちょっと見ようと近づいてみるや、店主はバババツと品物をまとめて風呂敷にしまつてしまいます。そして、嫌な目で睨みつけてくるのです。

「・・・なんだよ、感じ悪いなあ」

「メリンもファルも基本的にデムを嫌っているからな。スタッドぐらいにならないと認めてもらえないんだ」

レイが気にしてもしょうがないと言います。

気づいたら、村人の全員がノアたちを冷たい目で見ているのです。老人も、女性も、子供も・・・長い耳をピンと立て、警戒に恐怖、敬遠や侮蔑といった視線を送っています。

嫌な視線をかくぐり、一番奥の立派な屋敷の前に来ます。白壁の豪華なシャトー。どう見ても、この村の権力者の家です。

大きな木の下に、さっき入口で見かけた若者が立っています。アゴをしゃくり、屋敷の扉のほうに促します。入れということです。

どこも家もそうですが、長い耳に合わせて扉が高くなっています。ノアたちは揃って扉をくぐりました。

デムに比べ、あまりこだわった装飾品は少なく、むしろ自然のものを自然のまま生かした家具が多いのが特徴です。大きなクルミを半分に分った小物入れ、曲がった木をそのまま使った柱。乾燥させた葉っぱをたくさん集めた絨毯。草を編んだカーテン。いずれも、ノアにとっては初めて見るものです。

玄関を過ぎてすぐの客間。巨木の年齢が克明に表れたテーブルの前に腰掛けた老人がピクリと長い眉を動かします。

「・・・デムの客人なあ、おみやあさんらかい？」

しわがれた声で言います。

ツルリと禿げ上がった頭から、毛もないむき出しの肌色の耳。まるで鳥の手羽先のように見えます。小さな体に不自然なほど長い眉、

目もすっかり覆われてしまっています。

「はい。お久しぶりです。メリンの村長。実は・・・」

「だまらっしゃい！ ワシヤ、エテ公が何よりもキラいなんじやい！ とつと自分らの住処へ帰えーりやん！」

メリンの村長は入れ歯が飛ばんばかりに怒り狂います。額には血管が浮き出ていました。

レイは呆気にとられます。まさか、しょっぱなから話を聞いてもらえないなんて想定していなかったからです。家を出たからといって、王族は王族。そんな態度をとられるなんて予想だにしません。

「ちょ！ 話ぐらい聞いてくれてもいいじゃん！！」

ノアが言いますが、すでに目の焦点が合っていない。

「だまりやあああ！ エテ公がしゃべると部屋が生臭くなるんじやあああ！？」

とりつく島もありません。頭に血が昇りすぎてしまったようです。悪口雑言、罵倒の数々。メリンの長老は、言いたい放題まくしたてます。身振り手振りを交えて、まるで論拠もないような非難をぶつけてきます。

「・・・だから、オメエーたちは！・・・ん？ この微かな香り
は」

説教にノリノリだったメリンの長老が、急に動きを止めます。そしてクンクンと周囲のニオイをかぎはじめました。

「こ、こ、こ、これは！？ ま、まさか・・・メルシーの乳！？
ま、まさか・・・エテ公がそんな高級な、芳醇な、まさに甘露と呼べるそれをもっているなどは、あ、ありえん！??」

メリンの長老の眉がグワツとあがり、血走った目がノアを捉えま
す。

「ノア。もしかして・・・あの退化の大森林でメルシーからもらったミルクをもっているのでは？」

メルがハツとして手を叩きます。そうです。イヤだというのに、無理やりにメルシーにミルクをもらったのです。

ノアがポーチから、メルシーのミルクが入ったツボを取り出します。もちろん、デムの嗅覚には有害な臭いがありますから。それは嚴重に、テープでフタをグルグル巻きに、幾重にも幾重にも……と、もう封印状態でした。

「ウホツ　くれ！　そいつをくれ！　くれ！　ください！　よこせ！　よこしやがれ！　さっさとよこさんかー！　いッ！」
焦点があっていない目で、メリンの長老が暴れ回ります。完全にとち狂っています。こんなグルグル巻きで臭いが漏れないようにしてあるにも関わらず、それがメルシーのミルクであると解る嗅覚からしても……いや、例えば鼻の良いメリンだとしても、かなり異常としか言いようがありません。

メリンの長老が飛びかかってきそうな勢だったので、ノアは思わず持っていたツボを引いてしまいました。しかし、メリンの長老は素早く、骨ばった腕でツボをもぎ取ります。

「うっひよおおー！　一年ぶりの乳じゃー！！」
グルグル巻きのテープリングをブチブチと引き裂き、描写できないようなかなり危ない顔つきで、ツボの中に顔を突っ込みます。ベロンチョベロンチョ、ズズズチャチャ、ビチヨジョヨ……かなりひどい効果音に相應しい、もう凄惨な飲用風景です。メルなんかは思わず吐き気を感じました。

ツーンとする臭いに、ノアもレイモイヤな顔をします。しかし、飲み終わったメリンの村長は輝いた顔をしていました。ビチヨビチヨになった髭を拭いながら、生まれたての赤ん坊の顔をしています。「いやー！　うまい！　うまかった！　こんなの、四十年ぶりくらいじゃ。新鮮かつ懐かしい味。コクと酸味が微妙なバランスで折り混じりあい、ワシの口の中でハーモニーを醸し出す！　まさに口内万博じゃあー！　！」

意味不明なことを叫びながら、メリンの長老はパーツとにこやかに微笑みます。

「……コホン。デムの諸君。失礼した。最近、魔物が凶暴化して

おりまして。なかなかメルシーのミルクを得るのも難しくなってきたのです。それでワシも気がたっておりましてな」

ホツホツホと年寄りらしく笑うメリンの長老は、さっきとは違ってかわって普通の人でした。吐く息はかなり臭いわけですが・・・。「ミルクをもらった礼です。ワシができることで良ければ、協力いたしましょう」

奪い取ったの間違いではありませんでしたが、ノアもレイも笑顔になります。これようやく話が進みます。

「では、メリンの長老。さっそくですが、霊希碑の使用許可をぜひとも頂きたいのです」

レイが真面目な顔をして言います。メリンの長老も真面目な顔で頷きました。

「・・・うむ。使っていたかには一向に差し支えありません。ですが、果たして霊希碑をテムの方々が扱えるかどうか」

メリンの長老が、チラツとボーズ太郎を見ましたが、きっとテムだけでなくボーズ星人も含めてのことだったのでしょう。

「扱えるって・・・。そんなに使うの難しいの？」

ノアが不安そうに尋ねます。テレポート装置・・・装置というくらいですから、もしかしたら専門的な知識が必要なのかも知れません。

「魔法力・・・か。以前、レムジンに行くときには、城の魔道士全員分の魔法力が必要だった」

レイが顎を抑えながらいいます。

「左様です。それに、我らメリンの誰かが案内人にならねばなりません。弱き魔法力では、魔神バルバトスの呪いが色濃く残る我らがミルミ城跡地に行くのは危険です。そのため、霊希碑はテレポートを願う者の力を計ります。無意味な犠牲者を出さぬために」

ノアは目をパチパチと瞬き、メルを指さしました。

「アタシらには、メルがいるじゃん！ メリンだし、魔力も強いしさー！」

メルは驚いた顔をしますが、メリンの村長はグツと押し黙ります。「そういえばさ、メリンの村長さんなら知ってるんじゃない!?」メルメルっていうんだけど、記憶喪失でさ。どこの娘かわからない? 家族とか知らない?」

「お、お願いします……。どうか、どうか教えて下さい」

メルは深く頭を下げます。メリンの村長は、眉を寄せ、唸るような仕草で、小さく溜息をつきました。

「……記憶を失っているそうでしたな。確かにメルメルという名前は……。知ってはおります。しかし、この村の者ではありません。そして、メリンの者でもありません」

メリンの村長は、悲しそうに、そして辛そうにメルを見やります。「メリンの者……。ではない? 私は……。では、私はいつたい……。なんなのですか?」

シヨックを受けたメルは、青白い顔で、震える唇で問います。

「……。それは、言えません。メルメルさん。それは、ワシの口から申し上げることではないのですじゃ」

意味深な台詞に、ノアとレイは眉を寄せて顔を見合わせます。

「ど、どうということポー?」

ボーズ太郎が心配そうにメルを見やります。メルは唇をグツと噛んで、俯きました。

「でも、あなたはメルのことを知っているんですよね? そう仰った」

レイが詰問すると、メリンの長老は肩を落としました。

「……。ええ。知っております」

「なら、なんで!? どうして教えてくれないのさ!!!」

ノアが怒鳴ります。しかし、メリンの長老は首を横に振りました。

「……。ノア。いいんです。もう」

メルがノアの肩に触れました。

「で、でも!」

「いいんです……。クラレ村の村長様。一つだけ……。一つだけ

教えて下さい。私の正体は・・・どうすれば解りますか？ どこに行けばいいのですか？」

メリンの村長は、眉間に皺を寄せ・・・そして、やがて小さく口を開きました。

「霊希碑を・・・越えなされ。それが、あなたの運命ならば・・・きつと道が拓かれるでしょう」

メリンの村長は、眉から覗く目でジッとメルを見やりました。それは、深い同情に溢れています。ただ、とても深い悲しみを帯びた目でした。

メルはただ、深く、深くお辞儀をしました・・・。

霊希碑。村長の家から出てすぐにある裏庭に安置されている灰色の石柱です。大きさは、このパーティのなかで一番大きいレイとほぼ同じです。170センチ程度ですね。

あ。ちなみに、メルが165センチ、ノアが158センチ、ボーズ太郎が150センチらしいです。とても余談でしたが・・・。

霊希碑には、水晶らしき丸い半透明な鉱石が、いくつも連なって柱の中に埋め込まれています。これで魔法力をコントロールしているのです。

メルが霊希碑の前に立つと、どこからか噂を聞きつけてきた住人達がゾロゾロと集まりだしました。

「・・・あの娘に？」

「無理だろ。メリンの者でないのに・・・」

「以前、デムの魔道士が使ったが・・・あれは特例だ」

囁かれるヒソヒソ話に、ノアは喉の奥で「グルル」といううなり声をあげます。

「霊希碑は・・・基本的にはメリンでないと使えません。この村にいるメリンですら、この霊希碑に認められるほどの魔法力を有する者はいないので」

メリンの村長が、メルの側でそう説明します。

「大丈夫。メルならできるって！」

「ああ。きつと、きつといけるさ！」

「メルメル！ 我は信じているボー！」

後ろからの仲間たちの声援に、メルは振り返ってニコリと笑います。

「………わかりました。やってみます」

メルが両手を開きます。メリンの村長が後ろに下がりました。

「霊希碑よ！ 私たちの願いを聞いて！ どうか、どうか道を拓いて下さい！！」

メルが懇親の祈りを捧げます。メルの魔法力が高まり、その力が・
・霊希碑の水晶に吸い込まれて輝かせました。霊希碑が振動し、
魔法力を増幅していきます。

「……ほう。久しく見ぬ、強力な力だ。三十人集まって、私に辛うじて認められた力とは訳が違うな」

なんと、頭に声が響きます。それは霊希碑からでした。霊希碑は、
どうやら人格とか感情を持ち合わせているようです。メルは驚いて
目を見開きました。

「で、では……認めてもらえるのですか？」

メルの問いに、霊希碑は黄金色に輝きます。

「力だけは充分だ。だが、その扱う力に意思が見られぬ……。心の弱さが感じられる」

「心の弱さ……」

メルは傷ついた顔をしました。

「なにい！？ お前がメルの何を知ってるって……ムガムガ！！」
怒鳴ろうとしたノアを、レイが慌ててその口を抑えます。

「意思なき力は方向性を失い、心なき思いはやがて汝が友を破滅に
追いやろう……。そのような者を送るわけにはいかぬ」

「そ、そんな！」

メルが呼び止めようとします。ですが、霊希碑の光はパーツと中
空に流れでいてしまします。

「待つて！ 待つて・・・お願い！！！！」

メルの本死の呼びかけも虚しく・・・霊希碑から魔法力の光が消え、普通の石柱に戻ってしまいました。もう声も聞こえません・・・

夜。今日はとりあえず、村長の家に泊めてもらうこととなりました。

客間のソファアの上で、レイとボーズ太郎が平行になって寝ています。レイはどこから持ってきたのか、ナイトキャップを。ボーズ太郎は、寝ても目が細いので起きている時と大差ない顔です。

ノアは、レイとボーズ太郎が寝ているの見届け、忍び足で客間から出て行きます。

ノアが向かったのは、村長が腰痛を治すために作らせたという人工温泉でした。村長の家の真ん中が吹き抜けになっていて、その部分に贅沢な天然石作りの浴場があるのです。

「メル？」

ガラリと扉を開け、湯煙の中で目を凝らします。返事は聞こえませんが、湯の奥で白い長い耳が見えます。メルに間違いありませんでした。

ノアは手早く自分の衣服を脱ぎ捨てます。まあ、ほとんど下着だけみたいな薄着なんで脱ぐのもラクチンなわけですが・・・

タイルの上を滑らないよう慎重に行くと、やはりメルがいました。湯船につきりながら、ここではないどこかを見つめています。

「メル」

「きゃー！」

ノアがメルの肩を叩くと、驚いたメルが両手を上げました。跳ねた湯が、バシヤンとノアの顔にかかります。

「うえっぶー！」

「あ、ご、ごめんなさい・・・。ああ。ノア・・・だったんですね」
ノアだと知って、ホツとしたような顔をしたメルでしたが、すぐ

に表情に暗い影が落ちます。

「・・・まだ気にしてんの？」

ノアが心配そうな顔を見ると、メルはコクリと頷きます。

「ごめんなさい。私のせいで・・・私の力が足りないせいで、皆さんが先に進めない。一刻も早く、バーボンさんやバツカレスさんたちを助けなければいけないのに」

バーボンとバツカレスの名前がでたことで、ノアもちょっと悲しげな顔になります。でも、ブンブンと首を横に振って気を取り直します。

「メル。アタシは・・・どんなことがあってもさ。メルを信じている。友達だもん。メルだったら絶対大丈夫だって。次はきつと上手くいくよ」

ノアの言葉に何一つ根拠となるものはありませんでした。でも、メルは胸がいつぱいになります。ノアの笑顔を見ていると、元気が分けられている気がします。

「ノア。私は・・・私は・・・」

ハラハラとメルの目から涙が落ちます。そして、ノアの肩に頭を寄せて泣きます。ノアはメルの頭を優しく撫でながら、満点の夜空を見上げました。

「・・・バーボンおじさんはさ、昔はファルの首都レムジンで有名なお医者さんだったんだ」

急にノアが話し出したので、メルは顔を上げて赤い目をパチパチとさせました。

「おじさんは、ファルもメリンもデムも・・・皆が仲良くなって欲しかったんだ。それで、『種の平等説』ってやつを説いてまわったんだ・・・」

「・・・種の平等ですか」

メルが尋ねると、ノアはゆっくり頷きます。

「そのとき、おじさんの口癖は・・・『人は定規じゃはかれねえ』って言葉。誰も勝てなかった魔神バルバトスを、愚かで野蛮なはず

のデムのスタッドが封印しちゃった。そして、デムであるバーボンおじさんが、ファルやメリンが驚くような治療ができた。こういうこともあるように、誰かを、何かの種族だとか、立場だとか、職業とかで差別するのはおかしいって主張したんだ」

「人は定規じゃ計れない・・・理論家のバーボンさんらしい。とても良い言葉ですね」

メルはちよつとうつとりした顔で、何度かその言葉を口の中で言いました。

「でも、ファルやメリンの人たちが・・・ただそれを納得したわけじゃないんだ。一部の人たちは、それを認めたくないって言ったんだ」

ノアが辛そうに言います。メルもそれに共感して切なそうな顔をします。

「おじさんは一部の心ない人たちから迫害されて、片目と片腕を・・・失った。でも、それでもおじさんは自分の言葉を曲げなかった」
メルは衝撃を受けます。バーボンの眼帯と義手は、そういう理由だったのです。

「そして、最後には奥さんのエリムさんまで・・・失ったんだ」

「奥さん・・・。バーボンさんは・・・結婚してたんですか」

メルは、どう反応していいかわからない様子でしたが、明らかに動揺を隠せないでいました。

「それから、バーボンおじさんは・・・エリムさんを亡くしてから変わっちゃった。レムジンを出て、ジャスト城の寂れた郊外で、ほとんど無料で近い診療をしている。自分の主張をやめて、アタシみたいな若い子供のために命を張るようになった。・・・そう、自分のことを捨てちゃったんだ」

ノアは悲しそうにそう言って、唇を噛みしめました。

「でも・・・。メル。あんだっただったらさ、バーボンおじさんを変えられるかもしれない」

「え？」

キョトンとするメルに向かって、ノアはニツと笑います。

「退化の大森林で、バーボンおじさんが攻撃したメルシーをメルがかばったじゃん。そのとき、一瞬だけ……おじさんの目が昔に戻ってたんだけ」

メルは回想します。二人がメルシーに追いかけられているとき、バーボンが助けに入ってくれたのです。でも、バーボンはもう戦えないメルシーに追い打ちをかけようとした。それをメルが哀れに思って、『もうこの子は戦えません！ 戦えない子に、これ以上に何をするんですか！？』と啖呵をきつたのです。今思えば、なんてことをしてしまったのでしょうか。メルはちよつとだけ後悔します。

「……そんな。あんなことで」

「うん。きつと、おじさんは嬉しかったんだと思う。アタシも容赦ない性格だからさ。敵となれば、フルボツコだけ……。メルは違う。メルは、誰かを優しく思いやれる心がある。おじさんもそう言っていたじゃん。もしかしたら、おじさんは……メルに医者になってもらいたいのかも。後継者にしたいのかもよ」

ノアの言葉に、メルの目に光が宿ります。どんなことでも、誰かに認められている……これ以上に嬉しいことはないじゃありませんか。

「ノア。私……やってみます！ そうです。バーボンさんに……昔を取り戻させてあげたい。私に……いえ、私が、それをします！ 私も誰かを癒せる医術を学びたい。そのためには、バーボンさんを一刻も早く助け出さないと！」

「うん。やる気だね！ もちろん後継者になるってことは……ま、上手くいけば、同居生活から……結婚なんて流れになることもよくあるだろうしね！」

ノアが茶化して言うのに、メルはボツと真つ赤になりました。

「の、の、ノア！ な、なにを！！？ 私は……そ、そんな！」

「くたびれたバーボンおじさんに、この美少女かあ……。ちよつとも

つたいないな！ ほら、なんだ、このデカイ乳は！ アタシと同一年には思えないこのナイスバディは！ おじさんなんて、一発で悩殺じゃん」

「きゃあ！」

ノアが、メルをガシツと掴みます。そりゃ、もう・・・メロソ？ スイカ？ いや、それぐらいの次元です。あどけない表情に合わないぐらいの抜群のプロポーションなわけです。

「いつもゆつたりしたローブで隠してたな！ ほら、このノア様に全部みせてみんさい！」

「イヤだ！ ノアだったら！ くすぐりたい・・・キャハハハハ！！」
遊女と遊ぶお代官様のような顔で、ノアが執拗にメルを身体をくすぐりました。

少女二人の楽しげな声が、深夜のクラレ村に木霊します・・・

翌朝。再び霊希碑の前にメルは立ちました。昨日のような、不安や迷いはもう微塵もありません。

「・・・まるで昨日とは別人のようだ。それほどまでに、先に進みたいというのか？」

「はい。私は・・・なんとんでも、先に進まなければいけないのです」

メルは強い目をして言いました。霊希碑はしばらく沈黙します・・・

『幾多の苦難が待ち受けていてもいいのか？ 数多の危機が訪れるとしても先に進むのか？』

「ええ。だとしても、仲間たちと一緒にならば乗り越えられます」

メルがそう言うのに、ノアとレイとボーズ太郎が前に進み出てコクリと頷きました。

『・・・なるほど。なるほど。よかるう。ならば、我らが故郷、呪われしミルミ城への道。ガラガ山道への扉を開こう！』

霊希碑に、パアーンという轟音と共にメル魔法力が吸い込まれていきます。そして水晶にそれが集約し、碑石の土台から大きな大きな虹色に輝く、光の橋となって・・・遙か向こうの崖にまで到達しました。

この騒ぎに、メリンの長老をはじめ、クラレ村の住民が集まって来ました。どうせどうやつてもダメだろうと思い、今日は誰も来ていなかったのです。

「おお！ な、なんてことじゃ!？」

「そんな・・・まさか、メリンで無い者に・・・霊希碑が道を拓いたというのか!？」

驚きに誰もが目を見開く中、ノアは得意になって「へへへッ、やったね。メル」と鼻の下を擦りながらメルに目配せします。メルも嬉しそうにニッコリと笑いました。

ノアたち四人が手を振って光の先に進もうとしたとき、メリンの長老が慌てて走り寄ってきました。

「ま、待って下され・・・。メルメルさん。あなたは・・・これから先に進むというならば、途中で『救いの小屋』と呼ばれるものがあります。そこに立ち寄りなされ!」

「村長!？」

「何を言われるんですか!？」

村人が驚いて、メリンの村長の身体を掴みます。しかし、村長の目はジツとメルを捉えていました。

その目には哀れみも同情もありません。ただ、何かとてつもないことを訴えているようでした。

「救いの小屋・・・ですか？」

「そうです。そこで・・・あなたの正体は明らかとなるでしょう」

「村長!!!」

「なぜ、あの者に教えてやる必要があるのですか!？」

村人たちが憤りに声をあげます。若者など、手に武器を持って威嚇するような状況です。

「クラレ村の衆……。もう、やめよう。国を失って、いつまでワシらは形だけの掟に従わねばならぬというんだ。あの娘もまた……。我らの仲間なのじゃ」

メリンの村長がそう言うと、誰もが苦しい顔つきになります。それがなぜなのかノアたちには解りませんでした。村人たちが必死に何かを守るうとしてしているのだけは伝わってきました。

村長の側にいた小さな男の子が、しばらくモジモジして……。ようやく意を決したかのように強く頷くと、メルの方に走ってきました。母親らしき女性が悲鳴をあげます。

「お母さんにお話しちゃいけないって言われていたけれど……。お姉ちゃんの良い人だと思う。だから、はい。これ。旅の幸運を祈るお守りあげる」

男の子は耳をピンと立たせ、そしてメルの手小さな何かを手渡しました。それは、手彫りで作ったメルシーの人形でした。

メルシーは凶暴な魔物ですが、メリンにとっては、最良のミルクをくれる最高の生物として、守護者のような扱いを受けているのです。

受け取ったメルは、思わずポロリと涙を流しました。男の子はギクリとした顔をしましたが、メルはその手を優しく握りしめます。

「ありがとう……。ありがとうね」

その光景を見ていた母親は、グツと胸を抑えます。そして、村人の誰もが何とも言えぬ顔でメルを見やりました。そこには一種の後悔。そして、懺悔の気持ちが見えます。

「……。メルメルさん。そして、デムの皆さん。次に来たときは、本当に客人としてもてなさせて下され」

メリンの村長がそう言います。メルはコクリと頷きました。

そして、クラレ村の人々が見守る中、ノアたちは光の橋を渡って行きました……。

第六章 メリンの霊希碑（後書き）

途中に寄る村です。あまり深いイベントではないのですが、レイが仲間に入り、バーボンの過去をチラリと。ちなみにゲーム中では風呂ではなく、崖の近くでノアとメルが語り合います。

メリンの村長・・・あまりゲーム中では重要なキャラでなく、ちよっと小説では豹変ぶりがおかしかったかなあと反省。ただ、メルシーのミルクで暴走しているところは残しておきたかったのでw

次は、メリンの村長が言った「メルメルはメリンではない」という発言の真意。救いの小屋で待ち受ける運命。そして、ミルミ城に住まう悪魔との戦い・・・とのことで、こつこつ期待、とw

第七章 速の四天王アルダーク

決して降り止まぬ黒い雨。それは封印された魔神バルバトスの呪いの涙だとされ、その雨に当たった土壌は、二度と植物が生えませぬ。

ガラガ山道は荒れ果てた土地。岩だらけの禿げ山でした。降りしきる雨だけでなく、急な勾配もノアたちにとっては厄介な障害でした。ツルツルと滑るだけでなく、水溜まりに隠れている窪地によく足を取られるのです。容赦ない雨に打たれ、油断を許さぬ不安定な足場に、皆の体力は確実に奪われていきます。

さらに最悪なことは、魔物がかなり強いのです。シーツのお化けのような、魔神の使い。蜥蜴の頭と人間の体をもつ、進化を誤った異形の戦士リザードマン。怨念によって動く亡霊、骸骨騎士スケルトンマン。いずれも強敵であり、ましてや集団で出沒します。ノアやレイでも一撃、二撃では仕留められません。二人がかりでようやく一体を動けなくし、メルが魔法で倒すというパターンでした。反撃を防ぐのや、傷ついたり弱った仲間を助けるのはポーズ太郎です。常に全力を強いられる戦いは、予想以上に酷なものであります。

メルもポーズ太郎も精神力を使い果たし、ノアもレイもへ口へ口でした。

「・・・どこか休める場所を探さない」と

レイはそう言つて、傷ついた自分の腕に包帯を巻きます。ポーズ太郎にもう治療する魔法力も残っていないのです。

「救いの小屋はどこボー？ 我らこそが救ってもらいたいボー」
げっそりやつれた顔でそう言うポーズ太郎。誰も返事をする気力もなく頷きません。

「・・・あ！？ あつた！！ あれじゃない？ ほら、あの茶色い屋根！」

ノアが遠くに何かを見つけて走り出します。レイにもメルにもそ

の場では判りませんが、ノアについてしばらく歩くと・・・
本当に小屋の屋根が姿を現します。

黒い雨のせいで、ところどころ黒ずんでしまった三角屋根。小屋
というには、普通の家一軒ぐらいはありそうなくらい大きな建物
です。ただ見た目が簡素なので、そう呼ばれているのかもしれない
ん。

柵に囲まれた庭らしき部分には、ちよつと大きな規模の菜園があ
りました。雨の被害から守るため、半透明なシートで作った屋根が
かかっています。日がなくても育つ作物なのでしょう。弱々しくは
ありましたが、それでも緑の葉を精一杯につけています。

魔物が徘徊する中、どうしてこの小屋だけは無事なのだろう・・・
そんな疑問をふと抱きましたが、それ以上に疲労のほうがか
つたのです。ノアは特に警戒することもなく、ドンドンと乱暴に扉を
ノックしました。

しばらくして、トトトという小さな足音が中から聞こえてきます。
ガチャリと内鍵を操作する音がし、扉が開かれました。出てきたの
は、小さなメリンの男の子です。上目遣いにノアの顔を捉えると、
「あつ！」と驚いた顔をしました。扉を開きつぱなしで、トトトと
引き返していつてしまします。

ノアは仲間たちと顔を見合わせました。ですが、こんなところで
立っけていても仕方ありません。盗賊なんで、無断侵入は得意中の
得意です。レイとメルが躊躇う中、ノアはズカズカと中に入ってい
きました。致し方ないと言わんばかりに、三人も後に続きます。

「ま、まて！ 先にはいかせないぞ！ シーラ母さんに悪さするヤ
ツはゆるさないぞ！」

メリンの男の子が・・・ナベを頭にかぶり、麵棒を武器に、鍋の
フタを盾に・・・といった武装で構えます。引き返したのは、これ
を取りに戻ったためでした。

「なんだよ。ボウズ、アタシらはちよいと休ませてほしいだけさ。
悪さなんてしないよ」

ノアが笑っています。「盗賊だけだな」と小さく付け加えましたが、男の子には聞こえていません。

「ほ、ほんとうか!？」

「ええ。大丈夫。私たちは旅の途中でここに来ただけ。怖がらせてしまったならごめんなさい」

メルが優しく微笑むと、男の子は麵棒を下げます。同じメリンなので安心したのでしょうか。

「ならいい。もしウソついていたら、矢よりも早いドラゴンの王。アルダークの炎に焼かれるんだからな!」

男の子はフンと鼻息を吐いて、かぶっていたナベを降ろします。

レイが目を大きく開きました。

「アルダークだって? あの、四天王のアルダークか?」

レイの剣幕に、男の子がギョツとした顔をします。

「う、うん。アルダークだよ……。アルダークは……。オイラたちを守ってくれてるんだ」

男の子の言葉に、四人は顔を見合わせて複雑な顔をします。

「アルダークについて知りたいのかい? なら、シーラ母さんに会うといい」

男の子の後ろから、誰かがでてきます。その顔をみた瞬間、ノアはダガーを構え、レイは剣を抜きました。

「あぶない!!」

「なんで魔物が!？」

ガラガ山道に出現するゾンビもどきです。青白い肌に、腐って落ちた目と削げた鼻。隙間だらけの茶色い歯。斬っても、突いても攻撃をやめない手強い敵です。

襲いかかってくると思いきや、ノアたちが戦闘態勢なのを見て、ゾンビもどきは「あわわ」と腰を抜かします。

「ゾンビのおじちゃん! まって! 悪さするなら許さないって言っただろ!!」

男の子がゾンビもどきをかばいます。その姿に、ノアもレイも眉

を寄せました。

「この救いの小屋では争いごとは厳禁ミョー」

「武器はいかなあ。武器は」

奥の通路から、プニョプニョした緑色の液体生命体のグリーン・スライム。スケルトンの上官にあたり、頑丈な鎧に羽根飾りが特徴のデス・コマンダーが現れます。いずれもかなりの強敵です。何度も危ない目に遭わされましたし、実際にレイの腕の傷は、このデス・コマンダーによるものです。無意識に、レイは自分の腕をかばっていました。

「ど、どういうことなのでしょう・・・」

メルが口元に手を当てて言います。デス・コマンダーがカパカパと口を開け閉めして笑います。

「魔物全員に敵意があるってわけじゃないってことさね。まあ、シラ母さんに会いなさい。そうすればどういいうことが解るさ。リツケル。案内してやんなさい」

デス・コマンダーが、リツケルと呼ばれた男の子の頭をポンと撫でます。獰猛に錆びた剣を振るっていた骸骨の指が、なんと子供の頭を優しく撫でたのです。ノアたちには驚きでした。

「よし！ オイラがシラ母さんのとこまで連れていってやる！ ついてこい！！」

リツケルは人差し指を掲げて、奥へと歩き出しました。ノアたちはそれに黙ってついていきます・・・。

魔物や子供は、他にもいました。でも、平和そうに、デムやファルやメリンの子供らと一緒にあって笑って談話していたり、一緒になって遊んでいたりますのです。

強くて逞しい魔物は、子供らを背中に乗せ。賢くて言葉が喋れる魔物は、子供らにお話を聞かせ。小さくて可愛い魔物は、子供らに抱っこされています。

人間の大人はいません。色んな魔物が、それぞれ己が特徴を生か

し、子供らの面倒をみているのです。

「なんだよ……。これ」

ノアはポツリと言いました。魔物は魔神バルバトスが生み出した邪悪な生物です。それは人間に害を為す者たちであるというのが定説でした。

「……。やはり魔物さんにも心があつたんですね」

メルは嬉しそうに、そして感動したように言います。朴念仁とかの魔物にも優しくかったメルらしい言葉でした。

「魔物との共存……。それが、この救いの小屋の実態か」

レイも剣の柄に手をかけたまま言います。油断させて、襲いかかってくるかもしれないと思っっているのです。見ていると、魔物が手を上げて挨拶したり、会釈したりしてくるので、ちょっと変な感じですか。警戒しているこちらが、ちょっとおかしいような感じですか。

「なにをボヤボヤしているの！？ 早く行くよ！」

リツケルは、大股で「いっち、にい、いっち、にい」と行進しています。ノアたちがちょっとでも遅れると、ブーツとむくれて怒るのです。周囲の観察はそこそこに、ノアたちはリツケルの後を追いました。

大きな台所。タタタタンという早い包丁さばきの音が聞こえてきます。コトコトという音で煮えるナベからは、食欲をそそるよい香りが漂ってきました。ノアたちに背を向け、流し台で調理している一人の女性がいます。

「シーラ母さん！ あやしいヤツを連れてきましたー！」

リツケルが敬礼して言います。料理に専念しているシーラは振り返りもしませんでした。心配でニコツと笑ったのが解りました。

「……。まあ、ご苦労様。これで今月何人目かしらね。リツケル」
優しい声でした。リツケルは満足そうに笑います。

「居間にホットケーキができているから、食べてきなさい。後は母さんに任せて」

「ホットケーキー！ はーいー！」

ホットケーキに釣られ、自分が連行したノアたちのことなどすぐに忘れてリツケルは駆けていってしまいました。シーラは子供らの扱いを心得たものです。「フッフ」とシーラが笑います。

ナベの火を消し、手をふきながらシーラが振り返ります。

白い長い耳からメリンであることが解りました。短くソバージュにしたピンクの髪。年相応に、目尻や口元にはシワがありました。予想を裏切らない優しいげな表情になぜか心安らぎます。まさに理想のお母さんです。

「救いの小屋にようこそ。きっとリツケルが失礼をしたことでしょう。ごめんなさいね」

シーラが微笑んで言います。しかし、すぐにその優しいげな表情が消えました。驚愕に変わります。その目は……メルを捉えています。

「め、メルメル……。まさか。メルメルなの!？」

「え?」

メルが驚いたような顔をします。

「ああ、ああ……。無事だったのね。良かった。本当に良かった。お父さんを追いかけてジャスト城に行ってしまうから。母さんは……どんなに心配したことが」

「お、おかあ……。さん?」

メルの焦点が揺らぎます。ズキリと頭が痛みました。目の前の女性を、必死で記憶の底から掻き出そうとします……。

「お父さんには会えたの? この一年間どしていたの?」

とても心配そうにシーラが言います。進み出て、メルの手を取りました。よく見れば、二人は似ているような気がします。親子と言われれば納得できるほどです。

「おとうさん……。? おとうさん……。つて???」

メルはつわ言のように尋ね返します。まだシーラをどういう風に認識して良いか解らないのです。そんな娘の姿に、シーラは怪訝そうな顔をしました。

「何を言っているの、メルメル？ ジャスト城の大臣になつたじゃない。自慢のお父さんじゃない。心配して、あなたは家を飛び出して行ったのよ？」

メルもノアもレイもボーズ太郎も・・・一瞬にして凍り付きます。「ジャスト城の・・・大臣？」

「それって・・・もしかして、オ・パイ・・・ボー？」
シーラはコクリと頷きます。

「ええ。オ・パイはうちの主人です。デムの方々に・・・。ボーズ星人？ メルメルったら、やはりお父さんに似て、色んな種族の・・・」

「ウソよ！！！！！！！！」

メルは叫びます。ここまで感情を顕わにするメルを誰もが初めてみました。憎しみを込め、怒りを込め、否定し、目の前のシーラを睨み付けます。娘にそんな目で見られ、シーラはたじろぎました。

「メルメル？」

「ウソよ！ ウソウソ！！ であらめもいいところ！！ オ・パイなんかがお父さんってことも！ あなたがお母さんってことも！！ みんなウソ！！ ウソよ！！！！！！」

メルはそう言って踵を返して駆け出しました。

「メルツ！！！！」

「メルメルボーツ！！」

ノアもボーズ太郎も捕まえようとしますが、スルリと抜けメルは駆けて行ってしまいました。リツケルがホットケーキをかじりながら居間から顔だけを覗かせましたが、勢いよく走ってくるメルに驚いてすぐに顔を引っ込めてしまいました・・・。。。

居間。リツケルや魔物たちに移動してもらい、シーラと向かい合
わせにソファアに座ります。脇の暖炉の火がチカチカと燃え、雨に
冷えた身体を温めてくれます。

テーブルの上にシーラが入れた温かい珈琲が置かれました。一口

飲むと、それだけで疲れがとれそうです。

「どうだった、ボーズ太郎？」

メルを捜しに行ったボーズ太郎が戻ってきます。ボーズ太郎は悲しげな顔で俯きました。

「・・・遠くには行っていないボー。すぐ外にいるボー。でも、ちよつと一人にして置いて欲しいらしいボー」

ノアは小さく溜息をつき、レイは拳をパンと手の平で打ち鳴らします。

「記憶喪失・・・ですか。でも、生きていてくれただけでも充分です」

シーラがそう言い、ソファーに深々と腰を下ろしました。

「さて。何かからお話しましょうか・・・」

悲しそうな顔でしたが、それでも気丈に振る舞おうとしているのが解つて、ノアもレイも複雑な顔をします。そういうところは、本当にメルにそっくりだとノアは思いました。

「・・・オ・パイが。その、メルの父親だというのは・・・本当なのですか？」

レイが尋ねるのに、シーラは少し目を閉じて考えるような素振りをみせます。それからゆっくり目を開いて、コクリと静かに頷きました。

「ええ。・・・私には、皆さんが言われている主人の方のイメージのほうが信じられません。主人公・パイは心優しい人です。この救いの小屋を・・・始めたのもあの人なんですから」

子供と魔物が一緒に共存するこの小屋と、あの無情無慈悲なオ・パイがどうしても繋がりません。ノアはバリバリと頭を掻きむしります。

「この小屋は・・・なんなん？　なんで、魔物が一緒にいるわけ？」

「魔物もすべてが争いを望んでいるわけではありません。ここは、そういった平和主義の魔物を保護する施設でした。やがて、魔神バルバトスのせい・・・人々が多く死に、たくさんの孤児が生まれ

ました。いまでも滅びた国のせいで保護が受けられず、捨てられた子供なども多くいます。そういった子供をも面倒みるために、私とオ・パイはこの救いの小屋を作ったのです。娘のメルメルもそれに賛同してくれて、とてもよく手伝ってくれました」

「ボー。メルメルは・・・退化した我らにもとても優しくかったボー」
「ええ。記憶を失っていても・・・その心は残っていたのでしよう。親が言うのもなんなのですが、とても気持ちの優しい娘です」

シーラが嬉しそうに頷きます。ノアは、朴念仁やメルシーに優しく接していたメルの姿を思い出していました。

「・・・メルはデムとメリンのハーフだったのか。だから、クラレ村の村長はメルメルをメリンではないと言ったのか」

「ええ。メリンもファルも自ら種の優越を信じています。そして、デムやボーズ星人は下等であると。私とオ・パイとの結婚もかなり非難されました。実際に、ミルミ城が崩壊した後・・・ほとんどのメリンがクラレ村に移ったのに、私たちは差別を恐れてこの呪われた地に留まったのです。メルメルもそれで辛い思いをしたことでしょう。でも、それでも・・・あの娘は泣き言ひとつ言いませんでした」

ノアは拳を握りしめ、レイが唇を噛みしめます。

「でも、どうしてオ・パイは・・・ジャスト城に？」

「デムが劣等種であるとされたのは、ジャスト国の腐敗が原因であると主人が考えたためです。国に働きかけなければ、この救いの小屋の・・・子供達も魔物達も本当には助けられないと思ったのです」
「耳が痛い・・・な。確かに、魔神バルバトスが暴れていた時にファルとメリンは国をあげ、率先して戦った。でも、父王は怯えて戦うことを放棄したんだ。デムは臆病者だと批判された。それからますますデムへの偏見が強まったと聞く」

レイは苦々しそうにそう言います。

「でも・・・。アタシらの知っているオ・パイはそんなヤツじゃない。誰かに情けをかけるなんて微塵も見せたことがない。なんで、

そうだったんだらう?」

ノアが言うのに、シーラは俯きます。

「わかりません。ただ・・・主人はある暗殺拳を極めた人です。ガラガ山道からクラレ村まで霊希碑を使わねば通れぬ道を、自ら脚力だけで登り切るような並はずれた力を持つ人なんです。そんな自分の力を知っているからこそ・・・簡単に人は傷つけたりはしませんでした。あの人は誰よりも優しい人でした。きっと、何か理由があるに違いありません」

シーラがきつぱり言うのに、ノアもレイも顔を見合わせて唸ります。

「そういえば・・・リツケルが言っていた、アルダークって・・・なんだボー?」

ボーズ太郎が思い出したかのように尋ねます。シーラは「まあ」と言って目を細めました。

「かつて魔神バルバトスと戦った四天王の一人です。今では悪魔となり・・・廃墟となったミルミ城にいるのです。主人と最も親交が深かった人ですから。虚ろな記憶から、きっと私を守っているつもりでいるのでしょう。ときおり、周囲の魔物に警告を与えるために空を飛び回っていますから」

「え?? ちょ、ちょっと待って・・・悪魔に守られている??」

ノアがパニックを起こします。

「ええ。この救いの小屋が魔物に襲われないのは・・・まあ、中に強力な魔物がいるおかげでもあるのですが。この周囲を縄張りになっているアルダークが目を光らせているからなのです」

あんぐりとノアが口を開きます。魔物がいるだけでもすごいことなのに、悪魔にまで守られているというのですから飛んでもない話です。

「え? 意味が・・・ちょっと。だって、四天王のオルガノツソは牛の化け物で。アルダークは・・・ドラゴンだっけ?? それが・・・魔神バルバトスと戦ったわけなの? それっておかしくない?

悪魔は魔神の下僕なわけでしょ??」

「? 俺にも話がよくわからないんだが……。四天王は魔神バルバトスと戦った英雄だろう? 魔神バルバトスに敗れて……。各地の守護聖人となったと聞いたが。オルガノツソは退化神殿。アルダークはミルミ城。ビシユエルはラグナロク遺跡に封印されているとそれがなぜ悪魔になるんだ?」

「わ、わけわかめボー???」

混乱する三人を見て、シーラは「なるほど」と小さく笑います。

「皆さんは……。魔物と悪魔の成り立ちをご存じではないのですか?」

シーラの問いに、三人とも首を横に振ります。

「ノアさんが言っていることも、レイさんが言っていることもどちらも正しいのです。魔物も悪魔も魔神バルバトスが生み出しました。それはご存じですね。では、どうやって生み出したか。それは……。魔神バルバトスに殺された人間が魔物や悪魔になるのです。彼らは元は人間なのです」

「ええ!?!」

「そ、そんな!?!」

ノアもレイもひどく驚きます。

「例外として、メルシーのような野生種もいますが。ほとんどの者は、魔物に変えられてしまえます。そして、そえが力の強い者だった場合は……。それよりもランクが上の悪魔に変えられるのです。より強かった四天王は魔神バルバトスに敗れ……。悪魔に変えられてしまいました。それをあの英雄スタッドが封じ、その地から移動できぬようにしたのです」

「そんな……。アタシたち、元人間を倒していただなんて」

ノアは自分の手を見つめます。いくら盗賊だからといって、義賊バツカレス盗賊団では殺しは御法度なのです。

「彼らは意思をすでに失っています。この救いの小屋にいる魔物などは別として、襲いかかってくる者たちはすでに人間ではありません

ん。倒すことが・・・唯一の救済になるでしょう。気に病むことはありません」

シーラは達観したように言いますが、ノアもレイもボーズ太郎もなんだか釈然としません。

「四天王で、魔神の呪いを受けながら・・・まだ自身の姿と意思を保っているのはうちの主人ぐらいでしょうね。でも、皆さんの話をお聞きする限りでは、もう主人も魔神の呪いの渦中にいるのかもしれません」

「オ・パイも・・・四天王？」

「そうだ！ 思い出した・・・。オルガノツソ、アルダーク、ビシユエル・・・そして、オ・パイ！ どこかで聞いたことがあると思ったら、そうだ！ なんて誰も気づかなかったんだ！」

レイが膝を叩いて言います。

ノアもボーズ太郎も、なまじオルガノツソの姿を見ているだけに余計に信じられませんでした。しかし、同じ四天王ならば・・・オルガノツソがオ・パイの名前を出したことに理解できます。

「最近地震も多く、噂では魔神バルバトスの封印が弱まっているとか・・・。それが本当ならば、アルダークと共に封印されている魔神の本体に何か異変でも起きているのかもしれない」

「魔神の本体？ 魔神バルバトスは・・・ミルミ城に封印されているの？」

「ええ。聖結界エミトンは・・・ミルミ城そのものを結界の一部として用いたのだと聞きます。あの中に魔神バルバトスが。そして、それを守るかのように速の四天王アルダークが住まうのです」

ノアは腕を組んで「うーん」と考えます。しきりに、左右に頭を捻ります。

「・・・じゃあ、その封印が解ける前に、バルバトスの身体をやっつけちゃうてのはどう？ もし、オ・パイが魔神バルバトスの呪いでおかしくなっているならさ。そうすれば助けられるんじゃない？」

ノアの何気ない言葉に、レイもシーラも啞然とします。封印され

ている者を倒す。そんな考えを誰一人抱かなかったのです。封印しているだけで充分だと思ってしまうていたのです。

「なんていうか。ノアらしいというか……。だが、そうだな。それは、ありかもな」

レイが笑って頷きました。実に短絡的な考えですが、それが一番はやい解決法だと考えたのです。

「ええ。メルメルのお友達は……。なんて、頼もしいのかしら」

ノアは頼もしいと言われて、「へへへ」と笑います。シーラは優しい目でノアを見つめました。

「ノアさん。主人と……。メルメルを……。どうか、どうか、よろしく願います」

黒い雨に打たれるままにし、メルは道ばたで、自分の足下に萎びた花を見つけました。まるで自分のようだと、虚ろな瞳で見やります。雨は、メルの涙の跡も消し去ってくれていました。

シーラが母緒であり、またオ・パイが父親であることも真実なのでしょう。ボーズ長老が施した記憶の封印も徐々に解け、メルは徐々にその記憶を取り戻しつつありました。でも、それだけにその事実は受け入れがたい、許容しがたいものだったのです。

「……。バーボンさんを傷つけたのが、ボーズ星人さんたちにひどいことをしたのが、私のお父さんだったなんて」

メルはギョツと目をつぶりました。血が繋がっているというだけで、こんなにも責任を感じてしまうのです。オ・パイの非道の行いが、まるで自分が行ってしまったかのようなのです。やるせない気持ち、後悔、どうしようもない哀しみ。それらに押しつぶされてしまいそうになります。

「……。風邪をひくよ」

「……。レイ」

いつの間にか側に立っていたレイが、サッと自分の傘でメルから雨を遮ります。

「私は・・・父を追って、ジャスト城に行きました。そこで、私は・・・」

メルは自分の両肘を抑えてブルツと震えました。デムの若者から受けた陵辱を思い出したのです。辱め、痛み、苦しみ、恐怖・・・フラツシユバツクするそれらが、メルの心を抉ります。

「私は・・・もう誰も信じられません。デムも、父も・・・誰も」
肩に触れようとしたレイの手を避け、メルは頭を抑えてしゃがみ込みました。

「・・・そういえば、ちょっと昔にオ・パイに言われた言葉がある」
レイがいきなり語り出します。メルの隣でしゃがみ込み、萎えた花をジツと見やります。その悲しげな青い瞳に、メルは思わず引きつけられました。

「父王が右往左往しているのを見過ごしている俺に、『発言する力がありながら、どうして黙っているのですか』と、ね。そう言われたんだ。俺も民のことを考えなかったわけじゃない・・・。だけど、自分は王じゃないから。そう自分に言い訳して、父上の悪政を見て見ぬ振りをしてきた。父の責任は俺にもある。俺はもう子供じゃない」

メルは小さく頷きます。親の責任・・・それを感じている気持ちに同調できたからです。メルとは違った形で、レイにも大きなプレッシャーがかかっていたのです。

「レイは強いんですね。そうして、レイは自分の意思でお城を出たんですから・・・私はただ流されるだけ。ノアやボーズ太郎・・・そしてレイがいなければ、私はここにはいない。ここまで来ることすらできなかつた」

「そんなことないさ。メルは十分に強い。メルがいたからここまで来れたんだ」

レイが、メルの首についているメルシーの人形を指さします。霊希碑に認められたとき、クラレ村の少年にもらったものです。メルはそれを見て、泣きそうな顔でギョツとそれを握りしめました。

「・・・納得いかないなら、納得いくまでオ・パイと話してみるしかない。俺には、奴は奴なりの信念を持って動いているように見えるんだ。根からの悪人だとは思えないよ」

「ありがとう。レイ・・・」

メルはレイの優しさに感謝しました。礼を言われて、レイの顔が紅くなります。

レイはこれがチャンスだと思いました。メルに気取られないよう、そろそろと、その背中にレイの手が伸びて行きます。

「私、大丈夫です！」

急にメルが立ち上がり、レイの目をしっかりと見て言います。

あわよくば抱き締めてしまおうというような下心を抱いていたレイは、びっくりして手を引っ込めてしまいました。

「私、お母さんとちゃんと話してきます！」

そう言って、メルは小屋に駆けて行きました。

ポツンと取り残されたレイは、メルを抱き止めるはずだった手をジツと見つめ、ガックリと肩を落とします。傘が落ち、雨がザーツとレイの頭に降りかかりました。まるで頭を冷やせと言わんばかりです。

「・・・せーっかく、メルを慰める役を譲ったのにな」

菜園の柵に隠れて様子を伺っていたノアが顔を出します。

レイはやけくそな気持ちで、大きく、それは大きく溜息を吐き出しました。

「メルは・・・強い。本当に強いさ。だから、好きになっただ。」

見た目は、純情可憐な一輪の華如く。でも、あのオ・パイにも物怖じしないで発言する勇氣をもっている。つけくわえて、海のように深く雄大で、全てを包み込むような優しさ。まさに天使。まさに天女。俺の一目惚れだ!!!」

ノアはニヤツと笑って茶化そうと思いましたが、レイがあまりに落ち込んでいたので、不用意な発言をしようとした唇を人差し指で抑えます。

「・・・メルが好きだから、仲良くなりたくてアタシたちの仲間になつたの？」

ノアの問いに、レイは皮肉めいた顔をします。

「見損なうなよ。国や民や、オ・パイに対する言葉に嘘偽りはないさ」

「へー。なかなか男じゃん。ただの軟派野郎かと思つてたけど、アタシはあんたのことキライじゃないね。安心しな。メルが相手かは知らないが、いつか報われる日がくるさ」

ノアが親指を立ててそう言うのに、レイは嫌そうな顔をします。

「悪いが・・・ノアは俺の好みじゃない」

ノアの額にピキピキと青筋が立ちます。

「ふざけんじゃないよ！　そういう意味じゃない！！　誰がアంతなんかと！！」

レイの顎に、ノアの強烈な膝蹴りがお見舞いされました・・・。

呼吸を整え、震える指を握りしめます。

メルの記憶はほぼ戻っていました。ボーズ長老が行った記憶の封印は、メルへのショックを少しでも和らげるため、一つの想起を起点に、ゆっくり連鎖的にほどけるものだったのです。

毎年、母に背丈比べをしてもらった大きな柱。優しい父が果物を積んで持ってきてくれたバスケット。メルがいつも座っていたお気に入りの椅子。なにもかもが一年前に過ごしていた場所だとハッキリ感じられます。ここは紛れもなく自分の家なのです。

脱衣場で、リッケルを風呂に入れようとシーラが手伝ってやっています。

メルがおずおずと近づくと、リッケルが先に気づきました。しかし、シーラはメルを見ることなく、穏やかな表情のままリッケルの上着のボタンを外してやっています。

「あ、あの・・・」

「このリッケルはね。あなたが一年前にいなくなった直後にここに

来たの」

メルが喋るのを遮るように、シーラが静かにそう言います。

「近年、魔物が凶暴化してきて、親を失った子供が増えてきている。お父さんもそれを憂っていたわ」

父であるオ・パイと、大臣として非情であったオ・パイがどうしても重ならず、メルは唇を噛みしめます。

「・・・この小屋を作ったとき、私はメルメルだけの母さんじゃなくなつた。この救いの小屋を必要としている子供たち、そして望んで助けてくれる魔物たちの全てのお母さんになつたの」

シーラはリツケルの頭を撫で、急にキツと強い目をしてメルを見やります。

「あなたがお父さんの何を見たかは本当にはわからない・・・でも、あなたが一緒に過ごした十五年間のお父さんは紛れもなく本物よ。それだけは信じて」

「はい」

メルは震える唇で返事をします。先ほどまで何も感じなかったのに、母の辛い気持ち、今では痛いほど自分に伝わってくるのです。「お母さんはお母さんの。お父さんはお父さんの。メルメルはメルメルの。・・・それぞれ果たすべき役割があるのだと思つたの。だから、私はメルメルの道を否定しません。例え、それがお父さんと戦うことになつてもね」

リツケルを浴場へ送り、シーラが立ち上がります。

「だから、仲間たちと・・・行つてらっしゃい。メルメル。・・・あなたの果たすべきことを果たしなさい」

シーラの唇も震えていました。ですが、シーラは決してメルから目をそらしません。向き合います。母として、シーラはすでにメルが何を選びとるか知っていました。だからこそ、娘の道を促したのです。

メルは母をジッと見返します。間違いありません。この人が自分の母親なんです。そうでなければ、こうまで自分を真剣に見てはく

れないでしょう。力強く送り出してくれなんてしないでしょ。

「・・・行ってきます。お母さん」

シーラはお母さんと呼ばれたことに、少しだけホツとした顔を見せます。

「きつと・・・お父さんと戻ってくる。だから、もう少し待っていて」

メルを心で込めた言葉に、シーラは目尻に涙をためて強く、強く、
・・・頷きました。

ミルミ城。かつてはメリンの中心であり、魔法大国として栄えた場所でもあります。

しかし、栄華を極めたのも今は昔。魔神バルバトスの破壊の爪痕は深く、城壁も屋根も門もいたるところ無惨に押し潰されており、所々に描かれている守護の魔法陣も効力を失っていました。終日降りしきる黒い雨で、淡い桃色であった壁も汚れてしまっています。今では、怪物たちが我が物顔で闊歩する魔窟と化していました。

魔神の身体が封印されている場所とあって、かなり敵も凶悪です。デス・コマンドーなどのアンデッド系や、変態の帝王などの吸血鬼系、隣の人に恋しちゃった・・・なんていう気持ちの悪いマツチヨな魔物もでできます。ネーミングはともかく、いずれも強敵ですし、中にはファイヤーストームなどの魔法を使うような輩もいます。ボーズ太郎がコールドバリアを習得していなければ、この苦難を乗りきるのには難しかったでしょう。

「魔神バルバドスはひどいやつだな。この城もう使いものにならないじゃないか・・・ゲホゲホ」

崩れ落ちたシャンデリアに触れ、埃が舞い、ノアが咳き込みます。「巨体な魔神バルバドスが怖れたのは、ファルの物理的な剣技ではなく、遠方からも攻撃できるメリンの魔法力だったみたいです。だから先にメリンが狙われたと・・・まあ、それは偶然だと思いますが」

流暢に解説してみせるメルを見て、ノアがパチパチと目を瞬きま
す。

「メル。あんた……。そうか記憶が戻ったんだっけ」

ノアが少し気まずそうな顔をしましたが、メルはニッコリと笑い
ます。

「記憶が戻っても、私は私です。メルメルです。ノアの友達である
のに変わりないわ」

「そうだよね。ゴメン。アタシが気をつかうなんて……。らしくな
かったよね」

ボーズ長老の言葉を意識しすぎていたのかも知れません。メルは
ノアが思っている以上に気丈だったのです。

「すごいボー。二人とも早くこっちに来てみるボー!!!」

先に進んでいたボーズ太郎がノアたちを呼びます。

「なんだ……。これ」

近づいたノアは、ポカンと口を開きました。

「ここが王の間への入り口だろう。ジャスト城とは比べものにもな
らないな」

見上げていたレイが、苦笑しながら言います。

背丈の五倍はあろうかという鉄扉。メリンの肖像や、不思議な魔
法文字が掘られ、それらでびっちり埋め尽くされている荘厳な大扉
です。比較的、メリンの建築物は、耳の長さを考慮して大きく扉を
設けているのですが……。それにしても、これは大きすぎます。

「全員で力を合わせないと……。開かないボー!」

ボーズ太郎が、腕を捲る仕草をします。ほんとうに針金みたいな
細い腕なので、ぜんぜん頼りなさそうなのですが……。

「いえ、待って……。この扉は、私一人で開けられます」

メルが手を挙げます。三人とも驚いた顔をしました。いかにも、
か弱そうなメルが、とてもこんな大きな扉を開けるとは思わなかつ
たからです。それを見てとったメルは、クスリと笑いをこぼしまし
た。

「力じゃ無理なんです。これは、魔法の力で閉じてありますから……」
メルが両手を合わせて呪文を詠唱します。それに呼応するかのように、鉄扉が光り輝きました。ギギギイという重厚な響きをたてて徐々に開かれていきます。

舞う埃にむせ返ります。埃が落ち着き、ようやく目を開いたとき、四人の顔が冷たく凍り付きました。扉の向こう、王の間に魔神バルバトスがいたからです。

姿形は人間に近いですが、何よりもその体長はおよそ30メートル。ノアがつま先立ちしても、足首にまですら届きそうにありません。それこそ城よりも大きいのではないかという巨大さです。さっきの鉄扉が小さく見えるぐらいです。

無骨な銀色の鉄仮面。巨大な二本の角が両脇から飛び出しています。庇の下は真つ暗で、生きている気配はしません。

指は三本。いずれも、鉄仮面と同じような無骨な銀色をしています。爪先はまるで大型クレーン車のアームです。どんな猛禽類よりも凶悪で、こんなのに掴まれたら、人間なんてすぐにバラバラになってしまうことでしょう。

王座を潰し、そのまま魔神バルバトスは片膝を立てて、しゃがみ込むようにしていました。身体の内側には黄金色に輝く魔法陣が展開しています。これがスタッドの魔法、聖結界エミトンです。

「……死んでいるみたいに見えるボー」

「死んでなんていない。ただ、いまは眠っているだけだ……」

レイが忌々しげに言って、ツラリと剣を抜きます。

「これが邪悪の元凶……。世界を恐怖に陥れた、魔神バルバトスか」

ノアは眉を寄せました。こんなのが暴れていたのです。これに比べれば、オルガノツソなんてまだまだ可愛いものだとなアは思いました。

ピクリとも動く気配のない魔神。ですが、とてつもない力を秘め

ているのは見ただけで解ります。できれば近寄るのだって勘弁したいぐらいです。

「でかいけれど・・・一斉攻撃したらやつつけられる、でしょ」

ノアがそう言っただけ構えます。残りの三人も最大限の攻撃を放とうと構えました。

「・・・お勧めはできぬな。魔神バルバトス様の肉体は無敵。下手な攻撃をすれば、その衝撃で目覚める可能性もあるぞ」

天井の隅から声がしました。よく見ると、端の部分が壊れているようで、天井に穴があいています。そこから雨が降り込んでいました。

天井に描かれた魔法陣の軌跡を辿るように、バツバツサと何か大きなものがグルグルと旋回します。

旋回していたものはゆっくりと降下してきます。コウモリのような羽を動かして、トカゲのような頭頂を持つ深緑色のドラゴンです。

瞳がサファイアのようにキラキラと輝いています。

「・・・四天王アルダーク」

ノアがポツリと言いました。それを正解だと言うように、アルダークはバツサと大きく羽を動かして、魔神バルバトスの前でホバリングします。ノアたちの髪が風圧で乱れました。

「フフフ。わざわざ、そのメリンの張った鉄扉の結界をほどいてくれるとはな・・・これで、あの狭い天井裏を抜けなくとも外にゆける。礼を言わねばならぬな」

アルダークは鉄扉を見ながらそう言います。どうやら、この部屋は封じられていたようです。

「れ、礼っていうなら・・・なにをくれるのさ!？」

ノアが皮肉に笑いながら問います。冗談を冗談で切り返してきたのを見て、アルダークは少しだけ嬉しそうに笑ったようにみえました。そういう人間臭さがまだ残っているのです。

「礼・・・。そうだな、苦しまずに殺してやるという礼はどうだ？

人間よ」

「そんなのごめんこうむるね！」

ノアがターゲットを、魔神バルバトスからアルダークに替えます。
「誇り高い四天王アルダークよ！ もう、人間の心は残っていないのか！？ 戦いを回避できないのか？」

レイが尋ねます。アルダークは首を横に振りました。

「・・・人間の心？ 何を言っている？ 私は魔神様の下僕が一人速の四天王アルダーク。魔神様に仇なす敵は全て破壊するだけだ！」
アルダークが高く上昇します。そして、先制攻撃。口から炎の球を吐き出しました。

「あ、危ないボー！ 『コールドバリアー！！』」

ボーズ太郎が咄嗟に氷の盾を張ります。四角い氷壁が中空に出現して、ジュジュツと炎の球が溶け散ります。

「ほう。魔法か・・・ならば、私も見せよう。 『轟き叫ぶ大気、我呼ばわるは聖なる雷光。ライトニング！！』」

雷の柱がノアたちをめぐけて落ちます！ なんと、魔法を使ったのです！！

「そ、そんな・・・私の使う魔法よりも・・・強い！？」

メルが啞然としているのに、レイが走ってきて、メルを横抱きにして雷の柱から助けます。

「ボーッ！ 雷を防ぐ魔法はまだ手に入れてないボーッ！？」

「ボーズ太郎！！ でえいいいい！！」

ノアがボーズ太郎にタツクルをかまし、持っていたダガーを放りました。雷の柱は、金属であるダガーに命中します。辛うじて、ノアもボーズ太郎も魔法を避けました。

「クハハハ！ 息をつく暇はないぞ！！ 『連なる霜。我が言霊に従い、立ち塞がる凍てつきし飛礫となれ・・・ブリザード！！』」

氷塊が降り注ぎます。それだけでなく、アルダークが連続して炎の球を吐き出しました。氷の飛礫に、炎の球の連続攻撃です。ボーズ太郎が、ヒートバリアかコールドバリアのどちらを使えば良いか迷ってオロオロします。

「よける！ 一発でも受けたらお終いだ！！ 防御は考えるな！！」
レイがメルをかばいながら叫びます。ノアは素早い足で逃げ、ボ
ーズ太郎はわたわたしながらも、なんとか攻撃をかわします。

「ちよこまかと・・・」

アルダークが少し降下してきました。直接に止めをさそうとの魂
胆です。その機会を、ノアとレイが見逃すはずもありませんでした。

「レッド・ステイル！！」

「見せてやる！ ジャスト王国に代々伝わる剣技！ 猛る獅子の牙
『レイジグファン！！』」

ノアが紅い閃光となって、アルダークの周囲を駆けめぐります。

レイの剣が黄金色に輝いたかと思うと、獅子のような鬣たてがみのオーラ
を放ちながら敵に突進します。

「うぐおッ！」

ノアは背中を斬りつけ、レイのレイジグファンがアルダークの
足に一文字傷を与えました。青白い鮮血が飛びます。アルダークは
怯んで、再び上昇しました。

「フッフ。この私の身体に傷を付けるとは・・・ただの人間ではな
いようだな」

「くっそー。固い、固すぎる！！」

「レイジグファンで・・・ヤツの足すら切り落とせないなんて！
？」

ノアもレイも手がジンジンと痺れていました。アルダークの鱗は
それだけ固いのです。必殺の一撃だったはずなのに、アルダークは
こんなものは負傷の内に入らないといった様子なのです。

「退きましよう！ このままでは勝てません！！」

メルが言います。ノアもレイも驚いて振り返りました。

「で、でも！！」

「このまま魔神バルバトスを放置していくわけには！！」

ノアもレイも口々に言いますが、メルの目が、何も言わせまいと
いう真剣さを含んでいます。

「父……いえ、オ・パイが昔に言っていたことを思い出しました。アルダークは、ファルの優秀な剣士であつたと。いくら悪魔になつたとはいえ、魔法が使えるとは思えません。何か裏があるはずですよ！」

「なに？ オ・パイだと……小娘……貴様は？」

メルの言葉に、アルダークは少し動揺したようです。その際に、ノアとレイは頷きあつて駆け出しました。

「ま、待て！ 誰が逃がすと言つたか！！？」

「それでも逃げるから盗賊なんだよッ！ ほれ、『バイバイ煙幕くん！』」

ノアが、懐からポイツと丸い玉を投げます。ヤグルにもらつたヤツの改良版です。玉にはノアの似顔絵が描かれていました。転がり落ちると、ブシユシユシユツともものすごい勢いで煙を吹き出します。

「グホオオア！」

大きな鼻でそれを吸い込んでしまったアルダークは苦しみます。たまらず、バツサバツサと天井の隅へと、新鮮な空気を求めて逃れました。

とりあえず、この間に、四人は無事に王の間から撤退したのでした……。

第七章 速の四天王アルダーク（後書き）

ゲームだと多角的に情報をプレイヤーに得させることができるのですが、小説だと一方的なので・・・全部を書ききるのが難しいw どうしても、質問攻め、説明口調なのはご愛敬ということw。

ミルミ城の設定はちょっと違いますね。本当はワープ装置なんかある迷宮なんですw まあ、小説にはそんなのいらんかなあとw ちなみにアルダークの台詞も、昔の資料には断片しか載っていない。「フツ、そんなに礼が欲しいのならば、苦しまずに死ねるといふ礼をくれてやるw」というのが正しい台詞らしいですが。ノアとのこういうやりとりで、こういう台詞を言わせたのか全く思い出せないのです。そこで、上記のようなやりとりで・・・無理やりに言わせています。うーん。なんか違和感w

仇が自分の親だった・・・王道設定まっしぐらです。はい。レイの境遇などもちょっと出せたので、まあ、良かったかなあと。

今回は・・・もちろん、アルダークとの決着です。アルダークが魔法を使える秘密。そして、攻撃の通用しないアルダークにノアたちはどう出るのか？ こうご期待・・・とw

第八章 破天荒！ ファルの少女ミャオ

息も絶え絶えに、全力疾走して逃げきった場所は、嚴重に守られていたであろう宝物庫らしき場所でした。金の王冠や、ダイヤの首飾り、山積みになされた金貨などが宝箱に無造作に放り込まれています。

「うっひょー！ お宝だぁーい」

金銀財宝に数々を前に、ノアの目が光り輝きます。水泳の飛び込みのように、お宝の山にダイブしようとするのを、レイが引っ張って止めました。

「そんなことをしている場合かよー！」

「あ。ごめんごめん・・・つい」

ノアは頭を掻いて反省している素振りを見せながらも、腰のポーチに金貨を放り込んでいました。すさまじい盗賊魂だと、レイは呆れた顔をします。

「・・・でも、こんなところに隠れていてもいつかは見つかってしまっポー」

ボーズ太郎は冷や汗を拭いながら言います。

「アルダークの魔法だけでも・・・なんとか阻止できればいいのですが」

メルの言葉に、三人とも頭を捻ります。ですが、なにも良いアイデアは思いつきません。

「ま、とりあえずさ。今の内に体力を回復しておこうよ」

言葉とは裏腹に、ノアは宝物庫を物色しています。目にも止まらぬ早業で、ポーチにポイポイと金目のものを詰めこんでいきます。

「ちよつと待って。ノア。その手に持っているものは・・・」

「え？」

メルがノアの手を指さします。ノアが今しがた掴んだ物は、いかにも高そうな紅い宝玉でした。中に竜のような顔が埋め込まれてい

ます。なかなか凝った細工です。

ノアがちよつと惜しそうに、メルにそれを手渡します。メルは訝しげに眉を寄せて、しげしげとその宝玉を見やりました。

「これは……『とうえいせき投影石』ですね。それもかなり強力なものです」
「投影石？」

「ええ。とても珍しい石なんです。貴重なもので……伝えたい情報などを、文字や絵ではなく、魔法力で立体映像として記録することができるとは」

「なにが記録されているの？」

ノアが興味津々で尋ねるのに、メルは少し考える素振りを見せましたが、やがて意を決したようにコクリと頷きます。

「……再生してみましょう」

メルが両手を開き、投影石に魔法力を注ぎます。パツと光りが放たれ、ノアたちはその場から数歩下がりました。

途端、頭上に魔神バルバトスが出現します。しかも、さっきの封印されていた状態ではありません。赤い目を輝かせ、ブーツと鼻息あらく、完全な戦闘体勢です。今にも突進してきそうです。それが拳を振り上げます。それを目の当たりにして、ノアもレイもボーズ太郎も腰を抜かしました。

「幻です！ 心配しないで！」

メルが言います。そういえば、気づけばミルミ城の外にいて、辺りは火の海です。でも、熱さもなにも感じることはありません。触れようとしても、そのリアルな映像に触ることはできないのです。

『うおおおッ！』

『倒せ！ 一斉にかかれ！！』

周囲で怒号が響きます。どうやら、ここは昔のミルミ城のようです。いま、まさに魔神バルバトスとの決戦の時なのではないでしょうか。三角の耳をしたファルたちが剣や斧を持ち、メリンは水晶玉や魔法の杖を掲げます。互いに声を掛け合い、連携して魔神バルバトスに突撃していきます。

レイですら見たこともない高等な剣技。メルが知っている以上の高度な魔法。それらが四方八方から繰り出されますが、魔神バルバトスは身じろぎもしません。無敵の青黒い筋肉が、それらを吸収してしまうのです。

魔神バルバトスが拳を振り上げます。たった一撃で、十人のファルたちが吹き飛びました。大きな足で踏みつけます。二十人のメリンが下敷きになりました。まさに地獄絵図です。魔神の一挙一動で、人が虫けらのように死んでいくのです。

「こ、こんなヤツ・・・勝てるわけ、ないじゃん」

ノアはガクガクと震えながら、幻影の魔神バルバトスを見上げました。魔神バルバトスは笑ったかのように、赤い目をギリリと光らせてノアを見下ろします。その爪先が、ノアに向かって襲いかかりました。

「うわーッ！」

幻と解っていても、ノアは思わず悲鳴を上げて身をかばってしまいます。

「おお！ 四天王だ！」

「四天王が来てくれたぞ！」

魔神バルバトスの三本爪が、ノアの眼前でピタリと止まります。ノアに重なっていた・・・そう、魔神バルバトスが狙っていた本来の人物が、その隙に逃げ出します。それは、ノアと同じ年ぐらいのメリンの少女でした。

ノアは恐る恐る目を開けてみました。瓦礫の上に立つ四人の人物。他の兵士たちが臆しているのにも関わらず、強い眼差しで魔神バルバトスを見据えています。

「あ！ 俺様の石つぶてを喰らえい！」

四人の中で一番大きな身体をしたファル。青い角刈りの頭に、割れた顎の壮観な顔つきの男です。それが、大きな瓦礫の一つを持ち上げて、斧で殴りつけました。それが魔神バルバトスの顔面にバカッと命中します。

「あ……あれは」

「力の四天王オルガノツソ……だ、ボー！ た、たぶん！」

牛のような風貌ではありませんでしたが、使う技も雰囲気もオルガノツソそのものです。きっと人間の時のオルガノツソなのでしょう。

『いくぞ、オ・パイ。ビシユエル。私に続け！！』

長身で覆面をしたファルの男が言います。長い双剣を持ち、目にも止まらぬ速さでビュンツと魔神バルバトスの方に飛び上がりました。魔神バルバトスは、自分の目の前にまで飛んできた男に驚いて硬直します。

「……アルダークだな、間違いなく」

レイはゴクリと喉を鳴らしていました。剣士として、アルダークの動きから目が離せないようです。

アルダークは流れるような剣捌きで、縦横無尽に魔神バルバトスを斬りつけ、斬り終わり際に何やら小さな石を取り出しました。

「あれは『魔法石』！？」

メルがそれを見て叫びます。

アルダークはその石を、両手を合わせて砕きました。メルの魔法に似た炎が、魔神バルバトスを包み込みます。

『フフン。相変わらぬ奇術だね。ほら、今度は私ことビシユエルの美しい魔法を見せてあげるよ』

長いメリンの耳。一見、女性ではないかと思間違えるほどの美青年が前に進み出ます。派手な服に、男のくせに顔には化粧までしてありました。

ブツブツと呪文を詠唱し、尋常じゃない強力な魔法を放ちます。

「なんて魔法力！ 私の……五倍。いえ、十倍はあります。しかも、こんな上級魔法を！？」

メルが驚きに目を見開きました。

ビシユエルが放った魔法は、巨大な凍てつく氷の刃。空気そのものが震撼し、無数の槍となり、それらが魔神バルバトスに一気に襲

いかります。

「いまだ、オ・パイ!!」

アルダークの声に合わせ、最後に後ろ手を組んだデムの男が走ります。シワやヒゲこそないものの、それはオ・パイでした。若い頃のオ・パイです。その目は冷徹ではなく、正義の光りに燃えていました。

「うおおおあちゃああ!!」

アルダークにも負けない程の跳躍力。魔法に苦しんでいる魔神バルバトスに、拳と蹴りの連打。何も通用しなかったはずの無敵の筋肉でも、それにはたまたまらずに顔をかばいます。

「ちい! しゃあ! ちゃあいあああ!!」

オ・パイの手刀が、魔神の仮面を砕きます。オ・パイの蹴りが、魔神の胸を抉ります。たった一人の人間の一撃が、魔神バルバトスを追い詰めていきます。

「うつつ。こんな男と・・・アタシは戦ったつてのによ」

「魔神も半端ないが・・・オ・パイもまた四天王最強と呼ばれていただけはある」

ノアとレイが拳を握りしめて言います。情けなく、悔しいですが、今の自分たちではこの戦いには到底ついていけそうにありません。レベルが違いすぎるのです。

「・・・お・・・お父さん」

小さい声で、切なそうな顔で、メルは戦っているオ・パイの背中を見やります。世界を守るために戦っている父の姿。それはまさしく、メルが幼いときから知っている父の姿に他なりませんでした。自分が生まれてもない時に、こうやって父たちが戦っていたのだと知って、メルは何とも言えない気持ちに押しつぶされそうになります。

メルの精神力がとぎれました。魔法力の供給を失った投影石は光りを失い、映像が消えてゆきます。そして、部屋も薄暗い宝物庫へと戻っていきました。力を失った投影石は、コロンと地面の上に転

がります。

「・・・あれだけ強かった四天王でも、魔神バルバトスの前に敗れたわけじゃ。恐ろしいことじゃよ」

転がった投影石をヒョイツと持ち上げ、嘸れた声がそう言います。映像の余韻に浸っていたノアたちはハッとしました。いつの間にか、一人のメリンの老婆が側と一緒に映像を見ていたのです。

「あ、あなたは・・・」

「ワシはミルミ城の最後の守人。ま、そう言ってもただ住んでいるだけの者じゃがな」

歯のない口でニカツと笑って、しわくちやの老婆がそう言います。「こんな危ないところに・・・住んでいるんですか？」

レイは訝しげな顔で問います。ですが、メリンの老婆は小さく笑っただけで答えませんでした。

「お主ら、あのアルダークを倒しに来たんじゃろ？」

「な、なんでそれを知っているボ」

ボーズ太郎は動揺して胸を抑えます。メリンの老婆はグルリと皆を見やりました。

「・・・ええんじゃ。そんなことはな。魔神バルバトスと戦った英雄が、今では魔神を守るために使役されておる。しのびないことじや。ワシからも頼む。ヤツを解放してやってほしいのじゃ」

メリンの老婆が手を合わせて言うのに、四人は顔を見合わせました。

「倒したいのは・・・やまやまなんだけれど」

ノアは、アルダークに手も足も出なかったことを思い出して唇を噛みました。

「・・・大丈夫じゃ。お主たちならきつと。ほれ、これを持っていきなされ」

メリンの老婆は、メルの手投影石を渡します。

「これの本当の名称は『龍王の瞳』。これはただ映像を記録して映し出すだけではない。本当の力は、偽物の映像を暴き、真実の姿を

見破る偉大なる龍の王の目なのじゃ」

「真実の姿を……」

メルはギョツと龍王の瞳を握りしめます。

「行きましよう。アルダークを倒しに……」

メルの言葉に、三人は力強く頷きました……。

再び魔神バルバトスの間。目を瞑って彫像のように動かなかったアルダークが、鎌首を上げて目を細く開きます。

「フフフ。やはり、また性懲りもなくやってきたか……。大人しく逃げれば良かったものを」

「うるさい！ やられっぱなしってのは性に合わないんでね！！」

ノアが髪の毛を逆立てて言います。アルダークは笑い、そして翼を大きく広げました。

「そうか……。ならば、もう二度と立てぬようにしてやろう！
今度は逃げれると思うなよ！！」

炎の玉を吐こうと、口を大きく広げたアルダークを前にメルが立ちただかります。

「……小娘。そういえば、オ・パイの名を口にしていたな」

「ええ。私の父です。我が父の友、アルダーク！！」

メルの言葉に、アルダークがピタツと動きを止めます。

「友？ オ・パイ……。シーラ。シーラ。シーラ？ ああ？ 誰

だ？ 私は……。私は。うおお、なんだ、この記憶は……。わ、私は魔神様仕える悪魔。速の四天王アルダーク！ う、うぐう……」

アルダークは頭を振って苦しみ出します。人間の時の記憶と、悪魔になった時の記憶が交差して混乱しているのです。

「アルダーク。さあ、本当の姿を……。！ 龍王の瞳よ！ 今ぞ、この悪魔の偽りを暴きたまえ！！」

メルは心を込めて、龍王の瞳を掲げます。それが、アルダークを照らしました。

「うお！？ そ、それは……。グググ。や、やめる。龍の王には、

「逆らえぬッ！！！」

アルダークが悶え苦しみます。その光りは、偽りのドラゴンの秘密を見通します。ドラゴンの姿は偽り。偽物の姿は消え失せ、元のファルの青年であった時の姿が後ろに浮かび上がります。

「うとうう・・・や、め、ろ！ おのれ！！」

人間の姿に戻ったアルダークは、光りから逃れるようにピョンと跳び上がりました。そして、空中で体勢を立て直し、構えた双剣でメルに襲いかかります。

「きゃああ！？」

メルが持っていた龍王の瞳が、アルダークの左剣の一閃によって砕かれました。そして、右剣でメルを突き刺そうとするのを、レイが割って入って止めます。

「姿は取り戻しても、人間の心は取り戻せないのか！！？」

「知らぬ！ 知らぬ！ 私は魔神様の四天王アルダーク！！！」

怒りに満ちた目で、アルダークはレイを押しやります。

「眼前の敵は滅ぼすのみ！ ニン！！ 轟き叫ぶ大気、我呼ばわるは聖なる雷光。ライトニング！！！！」

アルダークが魔法石を取り出し、印を結ぶ仕草をしながら石を砕きます。

「させません！ 轟き叫ぶ大気、我呼ばわるは聖なる雷光。ライトニング！！！！」

メルが咄嗟に放った魔法が、アルダークの魔法を相殺します。アルダークは信じられないといった様子で、目を見開きました。

「それが、あなたが魔法を使った秘密です。術者でなくても、魔法石を砕くことで石に込められた魔法を使えます。ですが、それは仮初めのもの。見かけだけは強力そうに見えても、実際には本物の魔法には遠く及びません！」

「グググ・・・。こんな子供らに、私の術が見破られるなど！！」

アルダークは飛び跳ねて距離をとり、深く構えてから、双剣を交差させて突進しました。レイの目がキラリと光り、皆をかばうよう

にして走り出します。

「速の秘技『天龍双牙てんりゅうそつが！』」

「猛る獅子の牙『レイジグファン！』」

交差する双剣と、縦に振り下ろされた剣。二人の剣技がぶつかり合います。レイが力負けしてジリツと後退しました。しかし、歯を食いしばって、王国剣技のプライドを守ろうと気合いを入れます。レイの渾身の力が、アルダークを少しずつ押しやります。アルダークが徐々にのけぞっていきます。

「そ、そんな・・・この、この私が！！？」

「ぬおおおおおおッ！！」

ちよつと王子様がしちやいけないような、鼻の穴をおっぴろげた真つ赤な顔で、レイはレイジングファンを振り下ろしきります。耐えきれなくなり、バキンとアルダークの剣が叩き折られました。

アルダークは折れた双剣を捨て、またもや飛び跳ねます。反撃のために、魔法石を取り出そうとした矢先です。レイの後ろに控えていたノアが飛び出して来ました。

「な、なんなんだ、貴様らはッ！！！！？」

「あんたと同じ、正義の味方ってヤツさッ！ 『ストライクアタック！！』」

ノアの新必殺技です。あのオルガノツソを異次元に突き飛ばした体当たりを参考に、ノアの猛烈なスピードが生み出す強力な体当たりです。

ノアの肘が、アルダークの身体の真芯をとらえます。空中にいたアルダークは、その場から突き落とされて地面に思いっきり激突しました。

それは皮肉なことに、速の四天王が、ノアの速度に敗れた瞬間でした・・・。

倒れたアルダークに、ボーズ太郎が魔法を施します。

「癒しの魔法だボー。『生命の息吹をかき集め、雫と為して癒しと

なれ・・・ヒール!」

緑色の光がアルダークに照射されます。しかし、アルダークの身体は治る気配がありません。

「・・・どうことだ?」

レイが尋ねます。ボーズ太郎は自分のせいではないと、ブンブンと首を横に振りました。

「・・・悪魔に改造された身だ。姿は取り戻せても、もはや私は人間ではない」

気がついたアルダークが目を静かに開きます。

「アルダーク・・・さん。記憶の方は?」

メルが心配そうに尋ねます。アルダークの目が優しげに笑いしました。

「そうか・・・。君はオ・パイとシーラの・・・。思い出したよ。

確かに、シーラの面影がある。ああ、私は、もう二十年も人間としての記憶を失っていたというわけか」

ゴホゴホとアルダークが咳き込みます。覆面に血の跡が滲みましました。

「そ、そのゴメン。アタシ、手加減しなかつたし・・・」

ノアが謝罪するのに、アルダークは首をわずかに横に振りました。「いや。全力で来なければ、私が君たちを殺していた・・・。それに、こうならねば私は記憶を取り戻せなかつただろう。いいんだ。

悪魔のまま一生を終えるよりは、ずっといい」

四人とも辛そうな顔をします。アルダークの目が虚ろになっています。でも、誰もどうすることもできないのです。

「他の四天王も悪魔に変えられたとなれば、強力な魔法を扱うビシユエルと、暗殺拳の使い手オ・パイは私など比べものならぬぐらいの強敵となるだろう・・・。心するがいい。そして、頼む。どうか、二人をも呪いから助けてやってくれ」

そう言って、アルダークは力無く笑いました。メルがギュツとその手を握りしめます。その温もりに、アルダークは安らぎに満ちた

顔となりました。

「ああ。シーラ……。愛しのシーラ。君は……。オ・パイを選んだが……。私は……。今でも……。君を……。見守り続けている……。あの世でも……。私は……。ずっと……。君を……。」

アルダークは静かに目を閉じました。それが人間に戻れたアルダークの最期でした……。

「長い間、とてもお疲れ様でした……。ね。アルダーク」

さっきのメリンの老婆が、音もたてずに入って来ました。

「あなたが、シーラさんをずっと想い続けていたように……。私もあなたを想い続けていたことに、とうとう気づかないで逝ってしまわれたのね」

哀しげな顔で、メリンの老婆は笑いました。そして、静かにアルダークの額に手をやります。誰からというわけでもなく、四人もそれぞれ手を合わせて黙祷しました。

「え？」

「な!？」

「ボー!？」

「きゃ!？」

老婆と共に追悼していた四人は、ふと老婆の顔を見て悲鳴をあげました。

さっきまでの老婆の姿ではありません。一人の美しいメリンの少女。それは幻影の魔神バルバトスに襲われた時、ノアと重なっていたあのメリンの少女でした。四天王の登場で辛うじて助かった彼女です。しかも、さっきの幻影の時のように半透明な姿です。龍王の瞳は割れてしまって、発動していないというのにどういうことでしょうか!？」

「さあ、逝きましよう……。アルダーク。せめて、あちらへの案内は私にさせてください」

美しいメリンの少女は、礼を言うかのようにノアとメルに向かって微笑むと、スーツと背景に溶け込むように姿を消しました。アル

ダークの遺体も、仄かな光りに包まれて同じように消えていきます。四人は啞然とその光景を見ているしかできませんでした……。あとにはあの四人がいるだけです。

「……幽霊、だったのかな？」

しばらくして、ノアがポツリと言います。

「ええ。きつと……ずっと、ずっと。亡くなってからも、アルダークさんを想っていたんですね。そして、悪魔になってしまった姿から助けたかったに違いありません。天国では一緒になれますよ……絶対に。こんなにも待っていたんですもの。報われないはずがありません」

ノアとメルが穴のあいた天井から、空を見上げます。すでに薄暗くなっていた空では、二つの星が小さくキラリと光りました。それは天に還った二人を象徴するかのようでした。

「……報われない想いか。いや、絶対に俺は報われてみせるぞ！」

「ぼ、ポー。何か知らないけど、レイが熱くなっているポー」

そんなそれぞれの切ない想いを胸に、こうして四人はミルミ城を後にしたのでした……。

一方、その頃……。ノアたちとは違う一行が、ガラガ山道のミルミ城よりも先に進んでいました。

山道よりも高い崖の上にある大きな……それはとても大きな岩それを一生懸命押している小男の姿がありました。これを落として、山道の道を塞ぐ算段のようです。真っ赤な顔で、必死になって押します。

「ふんちヨ！ ふんちヨ！」

「がんばれべー。アホン。がんばれべー」

必死に押しているアホンの後ろで、ダラが額に汗して応援します。

「ふんちヨ！ ふんちヨ！」

「がんばれべー。アホン。がんばれべー」

ピタリと、アホン動きが止まります。そして、ダラをジト目で見

やりました。

「だから、がんばれべーて何チヨ!? そんな気の抜ける応援はいらないって前も言ったチヨ!!! そもそも、なんでお前は押さないチヨ!? なんて、俺ばかりがこうやって力仕事しているチヨ!!! 力仕事はどう見てもお前の仕事だチヨッ!!!!!!」

「んだかー」

アホンが怒るのに、解っているのだから、解っていないのだから、ダラは呑気に返事をします。

「・・・お前、本当に大丈夫チヨ? ボスが、この道を塞げば、ノアたちが先に進めないって言っていたチヨ。ヤツらをレムジンに行かせないため、わざわざこんなメリン領くんだりまで来たチヨ。OKチヨ?」

アホンが事細かに説明します。ダラはコクリと頷きます。

「んだかー」

「・・・であるからに、いまここでこの岩を落とす必要があるチヨ」
「んだかー」

アホンは目を細めます。ダラは相変わらず同じ顔で頷くだけです。いよいよ怪しいです。アホンの話を理解できていないのかもしれないかもしれません。

アホンはジーツとダラの顔を見つめました。細い目からは、何を考えているのか全く読みとれません。

「なら、落とすべー」

いきなりダラがそんなことを言い出しました。

「へ?」

アホンは目を丸くしました。ダラが急に歩き出し、大岩を持ち上げて放り投げます。アホンがあれだけ苦労しても動かなかった大岩を、ダラはヒョイと軽々と持ち上げて投げ飛ばしたのです。

「だーーーー!? ど、どこに投げているチヨ!!!?」

「道・・・だべー」

それは確かに道ではありましたが・・・アホンが落とそうとした

真下ではなく、なんとその先の道に放ってしまったのです。アホンはサーツと青くなります。

「お前は馬鹿チヨ!? あつちはボスが・・・」

アホンが岩が投げられた方を見やります。崖から遙か先を飛び越えた道。道を行く一人の男。その頭めがけて、まさにダラの投げた大岩が引き寄せられるように飛んで行くのです!

「うぬおおおおおッ!!!?」

男は・・・そう、オ・パイは迫り来る脅威に気づき、咄嗟に大岩を蹴り上げて砕きました。そして、すぐにアホンとダラに気づき、鬼の形相で睨み付けます。

「ああ・・・。ダメチヨ。お仕置き確定・・・だチヨ」

「んだべーな」

「だ、誰のせいだと思っているチヨ!!!?」

アホンは泣きながらダラに殴りかかりましたが、ダラは長い手でダラの頭を抑えつけてしまいます・・・。アホンの怒りの拳は空振るばかりでした。

こんなアホンダラなやりとりがあつたわけですが・・・ノアたちはまいったーく知る由もありませんでした。

シーラにアルダークの件を報告し終わったノアたち一行は、救いの小屋で一泊し、翌日にガラガ山道をついに越えることができました・・・。

ガラガ山道を越えた先は、ついにファルの領土です。冒険者たちがここまで来た見返りというわけではないでしょうが、とても美しい大海原が広がっています。さっきまでの陰鬱な曇天の雨とは違って変わって、青々とした大空と白い雲がどこまでも続きます。海岸線の砂浜を歩きながら、ノアたちはその素晴らしい絶景に、今までの疲れが一気に吹き飛ば気がしました。

「うわー。アタシ、海なんて初めてみたよー」

「わ、我もだボー! 海の先が見えないボー! 果てしないボー!

「ええ。地平線というヤツですね。あの先には・・・未だ見ぬ世界があるのでしょうか」

ノアもボーズ太郎もメルも、海なんて見るのは初めてです。目をキラキラと輝かせて、さざ波や打ち上げられた貝殻にすら興味を示しては大騒ぎします。海というだけで、テンションが違います。

「まだ海洋学や航海術も、ファルやメリンですら未熟だからな。これから先、きつとこの海を渡る技術が見いだされるだろう。そうしたら、俺もぜひ海外に行つてみたいな。この世界の隅々まで見て回るんだ。そ、そうなつたら・・・メルも一緒に・・・」

いつもは冷静なレイも、ちよつと興奮したように語ります。そして、チラツとメルの反応を見やりました。

「アハハ。ボーズ太郎つたら」

「やったボー！ 我にも毛が生えたボー！」

ノアが昆布を拾つてボーズ太郎の頭に乘せたので、まるで髪が生えたようになったボーズ太郎はホクホクの笑顔で踊ります。動くたびに、パカパカと昆布がボーズ太郎の頭の上で跳ねました。そんなもんだから、メルはお腹を抱えて大笑いしました。レイの話なんてまるで聞いていません。

「アツハハハ！ いいね、ボーズ太郎　もつと踊れ　・・・」

で、何か言つた？　レイ？」

大笑いしていたノアが目尻の涙を拭きながら、レイを見やります。
「いや・・・。なんでもない」

レイはガツクリと肩を落としました。気持ちは、あの海の色のようにブルーなわけです。

「・・・と、そろそろ休憩しようか」

結構歩きました。山道よりは楽とはいえ、砂浜を歩くのはなかなか体力を消耗します。それに海をもつと堪能したいというのもありました。もちろん、そんなノアの提案に反対する者はいません。

それぞれ、荷物をおろし、休憩の準備を始めます。ノアとレイは、

拾ってきた長い枝と、テントの幕を使って即席の日除けを作ります。メルとボーズ太郎はそれぞれ、落ちている貝や食べられそうな海草を集めました。

思い思いに休息に入っている四人に、一人のファルの男性が近づいてきます。

「お前さんから、メリンから来たのかい？」

ほどよく日焼けした顔。にこやかな顔に、ちよつとオシャレな口ひげ。手ぬぐいを首にかけ、旅人の服に大きなリュックを背負った姿。自分たちと同じ冒険者なのではないかと、ノアにはすぐに解りました。

「ええ。これから、レムジンに向かうつもりなんです」

誰にも礼儀正しいメルがニコリと笑って言います。それを見て、ファルのおじさんもニコリと笑い返しました。とても人の良さそうな笑顔です。しかし、レイはちよつと警戒したように目を細めました。

「そうかそうか。私はその近くに住んでいる者でね。今日はちよつとした用事で『釣り人の海』まで来たんだが……。なかなか徒歩でレムジンを目指すのは珍しい。メリンのお嬢ちゃんがいて、テレポートを使わないのかい？」

ノアたちがキョトンとするのに、レイが小声で手短く説明します。

「……本当ならば、この釣り人の海からメリンの魔法でレムジンまで一気にテレポートするんだ。デムの人間でレムジンに立ち入る者は全くいないし、またファルの方がガラガ山道に行くこともまずないしね。レムジンは隔絶されていると言ってもいい」

コソコソ話をするのにも、おじさんはイヤな顔ひとつしません。メルがちよつと焦ったようにしながら答えます。

「あ、あの……。私まだ未熟で。まだテレポートまでは会得していません」

その言葉に嘘はありませんでした。レムジンに行ったことのあるメリンであれば、この釣り人の海からだったら楽々とテレポートの

魔法を扱えたことでしょう。でも、メルは一度もレムジンに行ったことがありません。どれだけの距離なのかも、どの位置なのかも不確かなのです。仮にレポートを扱えたとしても、下手をしたら海など真ん中に移動して溺れてしまうかも知れないのです。そんな危険を犯すわけにはいきませんでした。

「そうかー。それは難儀だね。途中には強い魔物を閉じこめた『ヤマンバ洞窟』があるしな。ま、昔には中には地下道を通ってくる者もいたぐらいだから。ま、なんとかなるだろう」

ファルのおじさんはそう一人で言っただけで笑います。ノアはチラリと、ファルのおじさんが背負っている重そうな荷物が気になってしまい、それをジーツと見てしまいます。いや、盗賊の習性なわけですが、ファルのおじさんはハツとその視線に気づきます。

「おや。可愛い盗賊のお嬢さん。私の持ち物が気になるかね？」

ファルのおじさんに言われて、ノアは目を瞬きました。

「あ。いや……。大きな荷物だなあと、思っただけ」
ノアは気まずそうに口をモゴモゴさせますが、ファルのおじさんは重そうにリュックを降ろします。

「どっこいしょと。いやー、実は娘に頼まれてね。なかなか魔物たちが凶悪になってきたんで、海に連れて行ってやれなかつたんだが、今年こそは……。ってね。それで、娘のために着る水着を行商から仕入れに行っただけで来たってわけなんだ。サイズがわからないので、あるだけ買ったからこんな始末だね」

ファルのおじさんがリュックを開くと、たくさんの色や柄とりどりの、水着が押し込められていました。いくらサイズが解らないからといって、全部を買うでしょうか。ちょっと感覚がずれている感じがしますが、人の良さそうなこのおじさんのことです。無理やりに買わせさせられたのかも知れません。

「あ。そうだ。ちょうどいい。さすがに娘のためとはいえ、こんなにはいらんからな。お前さんたちにも水着をやるう。どうせ、もっておらんのだろ？ せっかく海に来て泳がないなんてもったいない」

ノアとメルは顔を見合わせました。レイはメルに水着という言葉だけで想像して、鼻血を吹き出して倒れます。

「え……。でも。ただで頂くわけには」

「そもそも海とかがって入れるもんなの？」

躊躇う二人をよそに、ファルのおじさんはそそくさと、ノアとメルのスリーサイズを目分量で判断し、適当なものを選んで手渡しました。ノアには赤いツーピースの水着を。メルには白いワンピースの水着です。ついで、なぜか男性物の水着もあったので、それこそ本当に適当に選んでレイとポーズ太郎にも渡します。

「あ、ありがとう」

「いいんだよ。それじゃ、海を満喫しな エンジョイだよ」

ファルのおじさんは笑って、再びリュックを背負います。

「まあ、再びレムジンで会うこともあるかも知れないね。ふむ。それじゃあねー。『道なき者の道標。次元を越え、瞬く間に我を何処へと移せ……。テレポート!!』」

ファルのおじさんはテレポートの魔法を唱え、光と共に飛んでいってしまいました。それを見て、メルは目を丸くします。鼻血を出して倒れていたレイも飛び起きました。

「な!?! ま、魔法……。だと? 魔法石も使わずに!?!?」

レイの言葉に、ノアが意外そうな顔をします。

「だって、レムジンまでは……。魔法で行くのが当然でしょ? 何が不思議なんだ?」

「え、ええ。確かにそうなんですけど……。ファルが魔法を使うなんて……。まずあり得ないことだからです。アルダークさんのように、魔法石を使うなら別ですが」

「剣技などの体術に優れたファルで、魔法が使えるのは……。本当に限られた人物だけなんだ。それも、そういう人物は大抵が強い魔法力を持ち合わせていることが多い。あの男……。いったい何者だ?」

メルとレイが口々に言うのに、ノアは小首を傾げました。

「そういえば、アタシが盗賊だつてすぐ判つたみたいだし・・・。だからレイは、ずっとあのオジサンのことを胡散臭そうに見ていたわけ？」

ノアの言葉に、レイは首を横に振ります。

「いや・・・。魔法が使えるのは知らなかった。だけど、ファルが俺やノア、ボーズ太郎を見て普通に話しかけてくるとは思えなかったんだ。ファルはメリン以上に、デムを毛嫌いしているからね」

レイが難しい顔をして言うのに、ノアは「ふーん」と言いました。ファルだつて全部が全部そういう人じゃないだろうとは思いましたが、レムジンに行ったことがあるレイが言うのだから、きつと疑わずにはいれないような仕打ちをうけたのかもしれない。

ボーズ太郎が持っている水着を掲げました。

「とりあえず、これ・・・どーするボー？」

ボーズ太郎の言葉に、ノアもメルも手に持った水着を見やります。レイはメルが白い水着を持っているのを見て、再び鼻血を出して倒れました。

「まー。せつかくだし」

「着て・・・みますか？」

怪しい人ではありませんでしたが、その好意には甘えてしまおうと・・・。二人はいそいそと茂みに入って水着に着替えます。着替えた時には、すでに怪しい人のことなどすでに忘れてしまっていました。

即席の水着ショーが始まります。メルが恥ずかしそうに茂みから出てきました。

「うおおおおお！！ か、完璧だ！ 完璧すぎる！ メル！！」

「眼福だボー！ 眼福だボー！」

レイの口から湯気が吹き出ます。まるで沸騰したヤカンです。ボーズ太郎はなぜか両手を合わせて拝みだしました。

少し頬を赤らめた控えめな表情とは裏腹に、ボン・キュツ・ボンと、出るところは出て、しまる所はしまった完全なスタイル。スラリと滑らかな白く長い足。まるで計ったように作られたそのナイス

バディだけは、淫乱・淫靡かつ不条理に男心をくすぐるのであります。脇腹とへそまわりだけ布がなくて、チラリとワンポイントに生肌を見せつけているのが何とも憎らしいです。浜辺の注目は、まさしく彼女のためにあると言って過言ではないでしょう。

「フフン。では、お待ちかね。次はノア様の登場だぜえー」

ノアが茂みから顔を出し、ニンマリと笑いました。そして、もったいぶって、ゆっくりと茂みから出てポーズを取ります。右手は頭、左手は腰、右足は内股・・・水着モデルの定番ポーズです。

沸騰していたヤカンが急に冷たく、凍ってしまうのではないかというほど冷却されます。ポーズ太郎は前のめりに倒れました。いわゆる五体投地です。

「おい！ お前ら、なんだその反応は！？」

ノアが憤慨して怒鳴ります。レイは乾燥した海草みたいな顔で言います。

「・・・いや、だって、ノア。お前、いつもと変わらないじゃないか」

レイに言われて、ノアはハッと気づきます。いつもの服もかなり薄着なのです。胸当てはちよつと色が変わった程度ですし、違うのは、いつもの短パンとダガーにポーチがなくなっただけくらいしかありません。

「な！ でも、アタシの初の水着だぞ！！ メルと同じ女の子なんだぞ！！ 少しは盛り上げるよ！」

レイとポーズ太郎は、馬鹿にしたようにフンと鼻を鳴らして、肩をすくめました。

ノアとメル。並んで見れば一目瞭然です。メルは完全な女性であるのに、ノアはまるで幼児体型そのものです。胸はペタンコ。腰にくびれは申し訳ない程度。それよりも、筋トレのせいでちよつと無駄な筋肉が多すぎます。まさにアスリートです。この二人にテロツプをつけるとするならば、『新人モデルの美女』と、『熱血格闘技少女』といった感じでしょう。

「すまん。ノア。お前を見ても、俺は何も感じない」

わざわざ手を挙げて、真顔でハッキリ言うレイに、ノアがプツチーンと切れました。ええ、本当に何か切れた音がしたのです。

「レイ、ぶつとばす!!!」

ノアの鉄拳が、レイの頭上に雨霞と降り注ぎました………。

「そらそら、メル！」

「やりましたね、ノア！ 私だって！」

キヤツキヤとはしゃぎながら、海辺でバシャバシャと水をかけあって遊ぶノアとメル。それを砂浜に座って遠くから見やるレイ。もちろん、顔や頭はタンコブだらけですが。側ではボーズ太郎が砂山をせっせと作ります。そんな束の間の平和の一時です。

ノアに水をかけていたメルが、急にふと曇った顔をします。それに気づいたノアが、水をかけるのをやめて目を瞬きました。

「………こうやって、遊んでいていいのでしょうか。バーボンさんも、バツカレスさんも。今頃はどうしているのでしょうか。無事なんでしょうか」

胸に手をあてて、メルは今にも泣き出しそうな顔で言います。ノアはポリポリと頭を掻きました。

「なあ、メル。アタシだって……そのことを忘れたことはないよ。でも、いまジタバタしてもしょうがない。休める時には休む。少しの気晴らしも大事だよ。そうじゃなきゃ、スタッドの待つランドレークまでたどり着けないよ」

ノアの言葉に、メルは納得がいかない様子でしたが、それでもコクリと頷きます。ノアの言葉にも一理あると思ったからです。ここで焦っても、レムジンよりもさらに北にあるランドレークに辿り着くにはまだまだ時間がかかるのです。そんなことは頭では解っていても、感情で受け入れられないのです。

「でも、ちょっと、はしゃぎすぎているかもね……。そろそろ上

「がろうっ・・・おあつ!?!」

ノアがびつくりして飛び上がります。肘に何か当たったのです。

「な、なんだ・・・? 魚?」

「え? 魚にしては大きいような・・・」

メルが、水面で動く影を見て眉を寄せます。ノアの側で揺れているそれは、かなり大きいサイズです。

「ミャー!?!」

「うあ!?!」

「キヤー!?!」

バシャーン! 影が変な奇声を上げて水面から飛び出しました。

海水が、ノアとメルの顔に容赦なくかかります。

「うえ!?! な、なんだなんだ??!」

ノアが動揺して硬直していると、飛び出してきたそれはノアの鼻先でパチパチと目を瞬きました。縦に細長い瞳孔が、ノアをジツと捉えています。

「なんだなんだニャ?」

ノアの言葉を復唱して言います。ノアは眉を寄せました。すると目の前の相手も同じように眉を寄せます。どうやら、ノアの真似をしているようでした。

しかし、さつきからノアと鼻先をくっつけてるのです。相手の顔が近すぎて、その黄色い瞳しか解りません。

「あの・・・あなたは?」

まだ動悸がおさまらないメルは、大きく息を吸ったり吐いたりしながら尋ねます。すると、ノアの目の前から、相手がグルリと横に動きました。今度はメルに鼻先まで近づいて行きます。

「あの・・・あなたはニャ?」

今度はメルの真似をしているようです。胸に手を当てる仕草も真似します。

「い、いえ、お名前・・・を聞いたんですが」

優しいメルは、ニコリと微笑みそう言います。すると、相手は同

じように微笑みます。しかし、次にキョトンとした顔をして目をグルリと回しました。

「ミヤオ？ ミヤオの名前？ ミヤオは、ミヤオだよ」

突然、水から飛び出してきたこの人物はミヤオというらしいです。相手がミヤオと四回も言ったので、ノアもメルももう忘れそうにありません。

「あの・・・そうですか。ミヤオさん。私はメルメル。こちらはノアです」

メルが自分とノアの紹介します。ミヤオは再びノアを見やり、そしてメルに向き直ります。

「メルメル？ ノア？ 女？ 女だよ？ ミヤオも女。よろしくニヤー」

ミヤオが八重歯を出して笑います。いまいちよく解らない紹介でしたが、ノアもメルも愛想笑いで返しました。

「えっと・・・。ミヤオ。あんだ、見たところファルのようだけど・・・」

ノアがミヤオをジッと見やります。ノアより小柄ですし、幼い顔立ちからしても、二つか三つは年下でしょう。セミショートにしたエメラルド・グリーンの髪が印象的です。茶色い三角の耳と、尖った鋭い爪に、水面を叩いている長い尾っぽからしてファルには違いありません。

「あ。この子・・・裸、ですよ」

メルが口に手を当てて言います。ミヤオの全身を見やったノアは目を丸くしました。一糸まとわぬ、生まれたままの姿なのです。

「あ、あんだ・・・服は？」

「ふく？ 魚取るときに服きてたらぬれちゃうニヤ。ビチヨビチヨにしたら、コネミのおじちゃんに怒られるミヤー」

あっけらかんと言うミヤオは、魚をつかみ上げてニカツと笑います。ノアはなんだか肩をがっくりと落とします。

「な、なんか疲れるヤツだなー」

そんなやりとりをしていると、血相を変えたレイが猛烈な勢いで海に飛び込んで来るのが視界に入りました。水しぶきを立てて走ってきます。

「どうしたー!? 大丈夫かー!!!? 何があっただー!!!!!?」
ミヤオが興味を出して振り向くのとほぼ同時でした。ノアの二度目の鉄拳が、レイの顔面に炸裂します。

「お前は来んなー!!!」
哀れにも、レイはクルクルと軌跡を描いて砂浜に飛んでいきます。ポーズ太郎が作っていた砂山に頭から突っ込みました………。

ミヤオは、砂浜に無造作に置いてあったピンク色のTシャツを羽織って黒いスパッツをはきます。人前に出れる姿になったので、レイもポーズ太郎も目隠しを外すことが許されました。

「で、あんたはいつたい何者なんだい?」

ノアの問いに、ミヤオは目をパチパチとさせます。

「ミヤオはミヤオだよ」

もどかしいやりとりに、ノアは苦い顔をしました。そんな禅問答を求めているわけではないのですから。

「じゃあ、どこから来たんだ? ファルの領地とはいえ、こんな所はレポートでしか来れない辺境の地だ。首都レムジンか?」

レイの問いに、ミヤオは首を右に左に動かします。

「ファル? レムジン? なにそれ? 知らないニヤ。ミヤオはあつちから来たミヤ」

ミヤオは、ノアたちが向かおうとしていた先を指さします。

「……自分がファルだとすら解らないのか? んー、困ったな」
まさに迷子の子猫ちゃんです。この付近では魔物の気配はありませんが、この世間知らずの女の子を放っておけるわけがないのがノアたちです。なんとか素性を確かめ、住んでいた場所に送り返してやらねばなりません。

四人がどうすればいいか思索している中、ミヤオはレイとポーズ

太郎を興味津々で見っていました。

「なあ、お前。女かニヤ？」

ミヤオが、レイの目の前に顔を近づけて尋ねます。あまりに近いので、レイは目を白黒させました。

「お、俺が女に見えるか？俺は男だ！」

レイがちよつと怒って言うのに、ミヤオは目を細めます。そして、おもむろにレイの胸を撫でました。もちろん水着になっていたので上は裸なわけです。尖った爪が敏感な所を引っ搔いたので、レイは目を丸くします。

「あひゃ！な、な、ななな！！？」

「ちよ、ミヤオ！？？」

「ミヤオさん！！！」

女の子に触られているという恥ずかしさと、くすぐったさでレイが飛び上がります。

「おー。胸がない。真っ平らだニヤ。でも、ノアも真っ平らだニヤ」

「おい！どさくさ紛れに、なに失礼なこと言ってるんだ！！！」

ノアが怒りますが、レイとポーズ太郎が思わずそれに頷いてしまったので、ノアの怒りの矛先は、この二人に鉄拳と肘撃ちという形で向けられました。

「んー。お前は？」

ミヤオが目を細めたままに、ポーズ太郎を指さします。

「わ、我は・・・ど、どっち、だ・・・ポー？」

生物学的にハッキリしないポーズ太郎は迷います。ですが、まあ反応を見る限りは男だと思われるのですが・・・。

「うーん。解らないニヤ。でも、お前たちは男じゃないニヤ。男つてのは、こうお腹がポーンと出てて、頭がピカピカって光っているニヤ！」

ミヤオがそう言うのに、四人とも「へ？」という顔で首を傾げます。

「た、確かに・・・。男性にはそういう方もいますが。そういう外

見だけで性別を決めるのは」

メルが困ったように言うのに、ミヤオはまた首を左右に動かします。

「ミヤー。でも、コネミのおじちゃんが、ミヤオみたいなのを女だつて言つてたミヤ。ほれ」

ミヤオが、レイの手を取って自分の胸に当てます。レイの顔がみるみる赤くなり、ブシャーッと大量の鼻血が吹き出しました。

「・・・ミヤオの勝利！ ノアの負け！」

レイが親指を立てていいいます。

「ふざけんな！ バカヤロー！！！！」

ノアの振りかぶった三度目の鉄拳が、レイの顔面にめり込みます。本日、最大級の威力です。レイは痛みを感じる間もなく気絶してその場に倒れました。

「あの、ミヤオ。そうやって、男性の身体にむやみに触ったり・・・また自分の身体に触れさせたりはしてはいけないものなんですよ」

メルが優しく諭すのに、ミヤオはキョトンとします。

「そうなの？ なんでニヤ？」

「なんでもだ！ こんなスケベ野郎なんかにはとくにな！」

ノアが倒れてるレイの頭を踏みつけて言います。

「とりあえず・・・そのコネミさんという方が、ミヤオに間違つた知識を教えているようですね」

メルが顎に手を当て、困った顔をしています。

そんなことはお構いなしに、ミヤオはボーズ太郎に今度は興味をもつたようで、キラキラした目で獲物に襲いかかるような仕草でフリフリと尻尾を横に動かしています。ボーズ太郎はアワアワと慌てました。

「とりあえず、ミヤオ。そのコネミつて人のところに案内しな」

飛びかかろうとしたミヤオの首根っこを掴まえて、ノアが言います。狩られる危険から助かったボーズ太郎はフウと安堵の息をつきました。

「コネミのおじちゃんところに？ いいニヤー。案内するニヤ。美味しい魚もらせるニヤ」

なぜかミヤオはとても喜んでニコニコと笑います。その様子からするに、コネミという人物に相当なついでているのが解ります。

「その、コネミのおじちゃんてのはさ。何をしている人なんだい？」

ノアが聞くのに、ミヤオはニヘツと笑います。

「うーんとね、コネミのおじちゃんは、魚と戦ったり、女の怪物をメツて怒ったり、いっぱい魚たべたりするんだニヤー」

「はあ？」

「ど、どんな人なんでしょう・・・？」

ノアとメルは互いに変な顔をしました。まったく、想像ができない人物像です。とりあえず、お腹がポーンと出ていて、頭がピカピカで、魚と戦ったり、女の怪物を怒ったり、魚を食べたりする人・・・いや、全く意味不明です。ノアたちには理解不能です。

とりあえず、こうして、ファルの少女ミヤオと出会い、コネミという訳のわからない保護者にミヤオを帰すという新たな目的も得て、ノア一行は更に先に進むことになるのでした・・・。

第八章 破天荒！ ファルの少女ミヤオ（後書き）

ちよつと男性色が強い話になってしまったんで・・・まあ、寛容な気持ちで読んでやって頂ければ。無理やりに引つ張つてきた水着ネタなどは完全に小説オリジナルです。ゲームの絵担当の方に、水着のノア・メル・ミヤオを描いてもらったんですが。それを活かせられなかったので、今回、小説にて出させてもらいました。あ。ミヤオは話の都合上、裸ですが。ん？ 水着の絵？ いや、残念ながら手元にはもうありません。私の記憶の片隅から引つ張りだしてきましたw

アルダークの部分も、ほんとうはそんなイベントはないのですがw 話に深みを持たせるのに・・・人間の時だった話もチラッと。いずれ、人間だった四天王の話なんかも書けたらいいですね。もちろん、番外編ということ。まあ、ご期待の声があればの話ですがw 次回に続く釣り人の海とコネミさんの話は、ゲーム中のオマケ要素だったので・・・小説にするかどうかは悩んだんですが。ま、やはりそこは忠実に。もちろん、ゲームのような脈絡のないイベントにするわけにはいかないんで苦労しますがw

というわけで、今回はコネミさんとヤマンバ洞窟にいくという訳のわからん展開になりますw あ、コネミさんは実は私の友人がモデルなんですけどね。どうでもいい話でしたw

第九章 隠居者コネミと女魔物のステラ

ミヤオの案内で、ノアたち一行は釣り人の海を出て、ちよつとした南国風の森を抜けます。そこを越えて、誰もが絶句しました。あれだけ豊かな自然があつたというのに、森を抜けた先は一面の砂漠なのです。それも、地平線の彼方まで続くような大砂漠。海を満喫し、ちよつとしたバカンス気分だったので、今からここを歩かねばならないと思うと気が重いです。

「・・・なんだよ。これ。砂・砂・砂・・・砂しかないじゃん！」
ノアが、地面の黄土色のものをつまみあげます。サラサラと風の流れでそれは飛んでいきました。

「ここだけ気候がおかしいのでしょうか？ 後ろは森なのに・・・」
メルが振り返ります。ヤシに似た木がズラツと並んで生えています。しかし、今立っている地点を境にして、その先から急に砂漠となっているのです。まるで森が切り取られてしまったかのように不自然です。

「・・・この砂漠はもともとが豊かな森林だった。ファルが木々を伐採したせいで、この『レグー砂漠』は生まれたんだ」

レイがそう説明します。ノアもメルも眉をひそめました。この広大な砂漠を、人間の手が生み出したというのだから無理はありません。

「な、なんでこんなに木を取っちゃったボー？」

森で生きていたボーズ太郎は信じられない気持ちでいました。

森は生活に必要な豊かな恵みを与えてくれるものです。それを根こそぎにしてしまうことは、そこに住まう命を奪うことに等しいことです。それどころか、自分たちが受け取れる恩恵をわざわざ減らしてしまうことになるのですから・・・。

「ファルは、テムやメリンとは比べものにならないぐらいに文化が進んでいるんだ。レムジンに行けば、その意味がわかるさ」

「レムジン、ミャー。さあ、コネミのおじちゃんところに行くニャ！」

「お、おい！」
ミャオがレイの手を取って歩き出します。どうやら、コネミという人物はこの砂漠のどこかにいるようです……。

三十分ほど黙々と歩き続けました。ノアがさすがに砂だけの地形に飽きた頃、メルとミャオが何かに気づきます。メルの耳がピーンと立ち、ミャオが鼻をピクピクと動かししました。

「……誰かいます」

メルがそう言った瞬間でした。ちょっと小高くなつた砂山に、三人の人影が現れます。

「オ・パイ!？」

それは、アホンとダラを引き連れたオ・パイでした。ノアとレイが進み出て武器を構えます。メルは口元に手を当てて青白い顔になりました。

「なぜ、アンタがこんなところに!?!？」

ノアの問いかけに、オ・パイは目を細めます。

「フン。ネズミどもめ、貴様らの計画などお見通しだ。このままスタッドに会わせるわけにはいかぬ」

オ・パイがザツザツと黄砂を巻き上げて降りてきます。

「な!?!? なんて、アタシたちがスタッドに会おうとしていることを知っているんだ!?!？」

「ククク。あの町医者が喋ってくれたよ……。貴様の命を条件に出したら、すぐに吐いてくれた」

狡猾なオ・パイのことです。きつと、ノアを助けるとか何だのと言ったのでしよう。ノアの名前を出されて、バーボンが黙っていられるはずありません。

「パイ! お前はいつたい何を企んでいる!?!? なにが目的なんだ!?!?!？」

レイが怒鳴ります。そのただならぬ雰囲気、ミヤオはちよつとだけ不安そうな顔をしました。

「レイ王子。姿が見えぬと思いきや、このような悪党どもに与しているとは・・・お父上が嘆きますぞ」

レイは唇を噛みます。オ・パイはフンと笑いました。

「バ、バーボンさんたちは！！？　バーボンさんたちは無事なんですか！！！？」

青白い顔のメルが、気力を振り絞って聞きます。どうしても、目の前にいるのが自分の記憶にある父だとは信じられません。姿形こそ父であるのに、その持つ雰囲気はまったく違うのです。

「・・・盗賊共々、牢に放り込んである。貴様らを捕らえてから、まとめて処刑だ」

オ・パイはメルを見やってそう言いました。それは、娘に向かって喋る父の言葉ではありませんでした。それでも、ノアもメルも、バーボンたちが無事であることを知って少し安堵しました。

「パイ！　俺の質問に答えろ！！　ジャスト国の大臣であるお前が、いったい何をしようとしているんだ！！？　魔神バルバトスと戦った四天王であるお前が！！」

レイの言葉に、オ・パイは顎に手を当てて考えるような仕草をしました。

「ほう。やはり、オルガノツソだけでなく、どうやらミルミ城のアルダークまで倒してしまったようだな」

「ああ！　そこで、お前の過去を見た！　英雄スタッドの前身であったお前がどうしたというんだ！？　ガラガ山道にある救いの小屋！　シーラさんにも会った！」

まるでメルを言葉で代弁するかのよう、レイはたたみかけます。それでも、オ・パイの表情は変わりません。

「救いの小屋？　ククク・・・そんなものがどうした？　私の野望はただ一つ。魔神バルバトスを復活させ、魔神の力と恐怖によってデム・ファル・メリンの三種族を支配することだ」

オ・パイの言葉に、全員が凍り付きます。なんと、オ・パイの目的は魔神バルバトスの復活だったというのです！

「な、なんだって？」

「正気か！？ や、やはり・・・魔神バルバトスの呪いを受けて・・・」

呪いという言葉に、オ・パイは不愉快そうな顔をしました。

「私は私の意思で、魔神バルバトスを使役するつもりだ。オルガノツソやアルダークのように改造されて操られているわけではない。私は魔神の力を利用してやるつもりだ」

オ・パイが拳を握りしめてニヤリと笑います。相当なまでの自信です。

「そんなことが出来ると思っているボー！？ あ、あんな恐ろしい魔神を・・・」

ボーズ太郎がブルブルと震えながら言います。カツとオ・パイの目が見開かれました。

「フン！ できると思うから言っているのだ。魔神バルバトスが復活した暁には、貴様ら下等種族は根こそぎにしてやる！！ 恐怖という恐怖を味あわせ、痛みと絶望のうちに死に行くがいいッ！！」

向けられる尋常じゃない殺気に、ボーズ太郎はレイの後ろに隠れました。長老や仲間の仇ではありませんが、オ・パイの血走った目と睨み合うのはボーズ太郎には酷でした。

恐怖と、己の情けなさにブルブルと震えるボーズ太郎を見て、ノアは気の毒そうな顔をします。そして、キツとオ・パイを睨み付けました。

「なんで、そんなにアタシらやボーズ星人を憎むんだ！？ シーラさんは、アンタはとっても優しい人だって言っていた！！ それなのに、なんでだよ！？」

「それは、貴様ら・・・下等な人間が、私の娘を弄び、そしてそれをボーズ星人どもが連れ去って殺したからだ！！！！！！！！」

怒りに震え、オ・パイの殺気がさらに増します。側にいるアホン

もダラもちよつと離れ、ゴクリと喉を鳴らしました。

「殺した・・・？ なにを、言っているんだ？ ポーズ星人たちはアンタの娘を保護したんだ！！ メルメルはここにいるじゃないか！！」

ノアがメルを指さします。メルは不安そうにオ・パイを見やりました。父と娘の視線が交差します。

「・・・ふざけるな。私の娘は死んだ・・・死んだのだッ。私はその哀れな亡骸を目にしているッ！！」

オ・パイはメルを娘だとは認めませんでした。メルはショックを受けて目を丸くします。ノアもレイも驚きました。

「な、なんだって！？ シーラさんだって・・・メルが娘だって！！」

「メルはジャスト国の近くででさまよっていたんだ！ 大臣となつたお前に会うために！！ 他にメリンが俺たちの国にいるなんて考えられないだろう！！」

ノアとレイが猛抗議します。ですが、オ・パイは少し目を左右に動かしたただけでした。

「先ほどから何を世迷い言を・・・。シーラ？ メルメル？ 誰だ、それは？」

「え？」

オ・パイは額を抑え、首を横に振ります。そして、クルリと踵を返しました。

「グッ。そんなことは・・・どうでもいい。英雄スタッドの居場所が解れば貴様らは用済みだ。あとはヤツを殺すだけで魔神バルバトスの復活は完了できる。アホン、ダラ！ ネズミどもを倒し、ジャスト城に先に帰れ！」

「はいチヨ！」

「了解だべー！」

二人が返事をし、アホンが剣を、ダラは槍を構えます。オ・パイはそのまま降りてきた黄砂を登っていつてしまいました。

「ま、待って！ お、おとうさ・・・」

メルが呼びかけようと思いますが、オ・パイの姿はもう見えません。
「メル・・・」

ノアがそつとメルの肩に手を当てました。

「・・・大丈夫。ええ、大丈夫です。ごめんなさい。私、何も言えなかった・・・」

メルは胸に手を当てて、気持ちを落ち着かせようと大きく深呼吸しました。

「しかし、ということだ？ オ・パイは、まるでメルのことを知らないようだった。それどころかシーラさんも・・・」

レイが剣を納めて言います。

「・・・それは考えても解りません。今は先に進みましょう。父が魔神バルバトスの復活を企み、スタッドさんを殺そうとしているならば、何としても止めねばなりません」

メルは強い目をして、オ・パイがいなくなった後を見やりました。
「そうだね。じゃ、先に進もう！」

ノアが片手を上げて言うと、皆が「オー！」と答えます。

「ちょ！ 待つちヨ！ 俺らのことを忘れるなちヨ！！」

さつきからずつと戦闘態勢を堅持していたアホンが、怒りのあまり地団駄を踏みます。

「あ。アンタたちいたんだ？」

すっかり忘れていたノアが頭を掻きます。アホンが真っ赤になつて、頭から湯気を立ち上らせます。

「なんか舐められまくってムカツクちヨ！」

「そうだべーな」

「やれやれ。お前達を相手にしている暇はないんだが」

レイが剣を再び抜きます。アホンとダラが深く身構えました。

「行くちヨ！！」

「ふんりやだべー」

アホンが上段構えで飛び上がります。ダラが槍を振り回しました。

「ふんぎやチヨ！」

パコンと、ダラの槍の石突がアホンの後頭部に直撃します。アホンの目が飛び出しました。

「な、なにするチヨ！」

「すまんだべー」

気を取り直し、アホンは身を低くして、剣を水平に突き出して突進します。ダラも低めの突きを繰り出しました。しかし、それはアホンの進行方向です。槍の側面が、アホンの頬を引っぱたきます。

「ほんぎやチヨ！」

ズザザと、顔面を地面にこすりつけながらアホンが倒れます。

「やつぱりな・・・」

「ほんと、やる気あんのー？」

レイは呆れたように剣をしまいます。ノアはガツクリと肩を落としました。

「う、うう！ 馬鹿にするなチヨ！」

「馬鹿になんてしてないボー。アホだとは思うけどボー」

ボーズ太郎に言われ、アホンの顔がますます赤く歪みます。

「うづぐうう！！ 絶対に許さないチヨ！！！！」

アホンが立ち上がり、攻撃を続行します。しかし、再びダラによって妨害されてしまいました。息が合うコンビというのは良く聞きますが、合いすぎると問題です。二人して攻撃する方向が同じなので、どうしてもぶつかりあってしまうんです。

「ニヤハハハ！ もっとやれニヤ！！！」

「ミヤオがお腹をかかえて大笑いします。」

「もう！ お前、何を考えているチヨ！！！！」

「すまんだべー」

「もうその台詞は聞き飽きたチヨ！！！」

ついに、怒ったアホンの剣先がダラに向けられました。仲間割れです。

「アホらしー。さ、ほっというて先に行こ」

ボカスカ殴り合っている二人を尻目に、ノアたちはそそくさと、その場を後にしようとした。

「あ！ 待つチヨ！！！！ 今度、お前達を逃がしたら・・・ボスに、またまたまたお仕置きされるチヨ！」

タンコブだらけのアホンが気づいて言います。

「そんなの知らないよ！」

こんな二人のために残ってやる義理はありません。ノアが怒ります。

と、アホンとダラの後ろから猛烈な勢いで、何かがやってくるのが見えました。土煙を上げ、何か大きなものがやってきます。

それは、大きなサソリのような生物でした。長い毒針のついた尾をフリフリと左右に振っています。それは魔物デザート・スコープ・オンでした。

「あ？」「べ？」

アホンとダラは振り向く暇ありませんでした。パコ、パコーン！ 大きなデザート・スコープ・オンの鉄に弾かれて、二人は天高く飛ばされていきます。それは、二人のつまらない漫才にツッコミを入れるかのような的確さでした。「なんでやねん」という台詞を言ってくれば完璧だったでしょう。

「クソツ！ よりによって、砂漠で一番危険な魔物だ！」

レイが叫んで剣を抜きます。アホンとダラを相手にしていた時は全然違います。本当に真剣です。それだけ、この魔物が手強いということです。

「ミヤ？ ウイリアムだニヤー！」

ミヤオが何を思ったか、先頭に飛び出します。

「な！？」

「危ない！ ミヤオ！！！」

巨大サソリの前で、ミヤオが両手を振ります。アホンたちと同じように吹っ飛ばされると思いきや、デザート・スコープ・オンはパシパシッとまばたきしたようでした。

「チヨース！ 危ないところだったなー」

デザート・スコープオンの背中から声がします。見やると、一人の女性が顔を出しました。そして、手を軽く振ったかと思うと、ピヨンと飛び降りてきます。

それは、二十歳ぐらいの美女でした。薄紫色のシャギーヘアで、額に古びたゴーグルを付け、つなぎ姿という出で立ち。ジッパーがへそまでしか上がっていないのは、そのパツツンパツツンのはち切れんばかりのボディを収納しきれないからです。魅惑的な身体に、レイはすでに鼻血を出して倒れそうになります。

しかし、注目すべきは別にありました。その彼女は、デムでもメリンでもファルでもありません。薄緑色の肌に小さな角。赤紫色をした瞳。人間型をした魔物の特徴です。

「魔物・・・？」

ノアが警戒するのに、ミヤオが首を大きく横に振りしました。

「だいじょうぶだよ！。こっちがステラ。あっちの大きいのがウィリアム。ミヤオの友達ニヤー！」

ミヤオが紹介すると、ステラがニツと笑います。ウィリアムは挨拶の代わりに尻尾をフリフリと動かししました。

「ああ。アタイはステラだよ。このレグー砂漠を縄張りにしてる。・・・と、にしても、ミヤオ。珍しいな。お前がこんなに多くの友達を連れてくるなんて」

「ニヤハハ！ ノアとメルとレイとポーズには、釣り人の海で会ったんだよ！。コネミのおじちゃんとか行くんだニヤ」

「そう。でも、釣り人の海は、海の怪物がでるから行っちゃダメだつて、コネミから言われてるんだろ？」

「ごめんニヤー。ステラよりも強い怪物ニヤ？」

「怪物はないだろ、怪物は。でも、そうだな。アタイより強いヤツもいるかもね。だから、もう一人で行っちゃダメだぞ」

「はいニヤー！」

ミヤオの頭を撫でながら言うステラ。どうやら、ミヤオにとって

はお姉さんみたいな存在のようです。

「ま、ちょうどいいタイミングだ。コネミのここに行くなら、アタシのウィリアムに乗せて行ってやる」

ステラが親指を立てます。ウィリアムも、鉄をガチャガチャと鳴らしました。

「は、はあー。でも、アンタは魔物だろ？」

ノアがステラの顔をマジマジと見ながら言います。

「魔物だって別にいいだろ。アタイは人間が好きだしね」

救いの小屋にいた魔物たちの例もあります。ステラも、そういった類の魔物なのでしょう。ノアたちはステラの好意に甘えることにしました……。

ウィリアムは、徒歩よりも遙かに快適に進みます。ノアたちの足では間違いなく一日以上かかった道のりを、半日もかからずに踏破してしまいます。砂漠を自分の足で乗り越えずに済んで良かったと、ノアはフツツと安堵の息をつきました。

果てしなく広い黄土色の砂漠のなか、ポツンと存在するオアシスと、その側に立つ小さな建物が見えてきます。

「釣り人の湖っていう淡水湖さ。海やそこらへんの水辺じゃ見かけない珍しい魚がいるよ」

ゴーグルをしたステラが、ウィリアムのスピードを落とすために手綱を引きます。その姿はまさにライダーと呼ぶに相応しい姿でした。

オアシスから、ちょっと離れたところでウィリアムがピタッと止まります。そして、身を屈めました。ステラの指示通りにきちんと動くのです。これだけ強力そうな魔物を従順にさせて操っているステラは、かなり凄いのかもしれません。

「ミャオ。これをコネミに渡してくれ」

ステラは、ウィリアムから降りようとするとミャオに小さな封筒を手渡します。

「いつものやつニヤー。わかったー！」

皆がウィリアムから降りる中、ステラは手綱を握ったままです。ノアは首を傾げました。

「あれ？ ステラは来ないの？」

「あ、ああ。アタイは、ちよつと急いでいて・・・」

わざわざここまで連れて来たというのに、急いでいたただなんて言うなんて、おかしいかとノアは思います。

「ま、コネミによろしく、って伝えてくれ！ また機会があったら会おう！」

そう言つて、ステラはウィリアムと共に砂漠の彼方へと消えていきました・・・。

ミヤオに案内されるまま、建物の裏側に回ります。物置小屋には、扉が閉まらないくらい沢山の釣り竿やらバケツやらの道具が置かれています。ひっくり返った道具箱からは、ルアーがゴロゴロと転がっていました。ちよつと不気味な光景です。

皆で湖の方に向かうと、クーラーボックスを椅子がわりに、釣り糸を垂らしているデムの姿があります。ミヤオが言った特徴通りの人物。ピカピカと光る禿げあがった頭に、いったい何が詰まっているのかというぐらい、たつぶんたつぶんのお腹まわり。大きなお尻をちよつと動かしただけで、クーラボックスがミシミシというイヤな音を響かせます。

「コネミのおじちゃーんーん！」

ミヤオが飛びつきます。ですが、小柄であつても体格のよいコネミの身体はビクともしません。何事もなかったかのように、ゆっくりと振り返ります。

「おや、ミヤオ。一週間も姿が見えないから、死んだかと思いましたよ」

ニコニコと笑うコネミです。もう目が逆Uの字になっているぐらいの笑顔です。ですが、その口から放たれた言葉は棘がありました。

ノアたちは思わず顔を見合わせてしまいました。

「ニヤー！ 生きていたニヤー！ それより、おじちゃん！ 魚！ 魚！」

辛辣な言葉など気にせず、ミヤオはコネミのタップタップの二の腕にしがみついて甘えます。

「ハハハ。今釣りますからね。そこらへんに座って待っていて下さい……。おや、客ですか？」

コネミがノアたちに気づき、ペコリと頭を下げます。太陽の光がそれによって反射され、ノアたちは眩しい思いをしながらも頭を下げ返します。

「おー。ミヤオの友達！ なんかね、レムジンに行きたいんだって！」

「レムジンに？ それは珍しい……。しかし」

そうコネミが言いかけた時、地面が揺れました。グラグラグラ！ ちょっと立っているのも大変なぐらいです。慌てて、コネミは釣り竿を引き上げます。

「ボー？ この辺の悪魔……。アルダークは倒したのに、どうしてだボー？」

地震は悪魔が引き起こしている……。その話を信じているボーズ太郎は驚きます。

「ふう。最近、こういうのが多くて……。おちおち釣りもしていいられません」

コネミはリールを巻いて、竿を担ぎます。どうやら釣りを諦めたようでした。

「ま、続きは中で話しましょうか」

コネミは、自分の小屋に皆を案内しました……………。

コネミが緑茶を入れて、それぞれの前に出します。ミヤオにはミルクと小魚を出します。まるでネコのような扱いでしたが、ミヤオは喜んで小魚を頬張ります。

「・・・さて、確かレムジンに向かわれるという話でしたが」

コネミは相変わらずニコニコした顔のまま言います。

「ああ。陸路は初めてで道がわからないんです・・・。でも、驚きました。デムがレムジンの領土にいるなんて」

ミヤオの保護者であるから、てっきりファルだと思っていたのだとレイが言います。

「ハハハ。釣り好きがこうじて、魚が豊富なこんなところで生活しているわけですよ。それも、ファルから目の届かない、こんな砂漠のど真ん中ですが」

ミヤオのミルクを注ぎ足しながら言います。さっきの辛辣な言葉とは裏腹に、どうやら面倒見は良いようです。

「失礼かもしれませんが、ミヤオとはどういうご関係で？」

メルが恐る恐る尋ねます。コネミはミヤオの顔を見て、それからメルに向き直りました。

「赤の他人です。砂漠に捨てられていたのを、私が拾って、気まぐれにエサをやったら懐いたんです」

「ニヤー」

あまりに冷たい言葉に、皆が愕然としました。ミヤオだけは何も気にしていないようで笑います。

「そ、そんな言い方ないだろ！　まるでペットみたいな言いぐさじゃないか!!!」

とうとう我慢ならなくなったノアが怒鳴ります。ですが、コネミの顔色は変わりません。

「あー。すみません。あまり人と話さないせいで。悪気はないんです。ただ毒舌なだけで」

ニコニコと笑うコネミ。本当に反省してるのかどうかも怪しいです。よく見たら笑っているわけではありありませんでした。顔の形が、ただ笑っているように見えているだけなのです。端的に言えば、引きつっているわけです。こんな辺境の地で、あまりにコミュニケーションを取らないせい、顔の筋肉が強張ってしまっているだけ

なのです。決して笑っているわけではなかったのです。

「あ。そうだ。コネミのおじちゃん。ステラからまた預かったよー」
ミヤオがステラから預かった、あの封筒を取り出して渡します。

コネミはスツとそれを受け取って、チラツと裏表を見ました。

「またですか。本当に」

小さく溜息をついて、何を思ったかその封筒を開けもせずビリビリと破きます。

「あ！　なんで、見ないんだボー！？」

コネミは手紙を細々にすると、暖炉に放り込みます。もう完全に消し炭です。コネミの穏やかな見かけと違うのは、毒舌だけでなく行動もでした。

「そうそう。で、レムジンの件ですが・・・」

まるで手紙のことがなかったかのように、コネミは続けます。ノアたちはなんだか釈然としませんでした。手紙自体はコネミ宛だったものです。それをコネミがどうしようが、口出す権利はありません。

ノアは怒りを押し殺し、フーツと息を吐き出しました。ここでケンカしても、レムジンに行くための宛はないのです。ちよつと大人になったノアです。

「一応、テレポート以外では二つのルートしかありません。一つはヤマンバ洞窟という強力な魔物が徘徊するところを通るか。もしくは地下道です。いずれも、この砂漠から行けるんですがね。後者は・・・ちよつとお勧めできません」

そういえば、海で出会ったファルの老人もそんなことを言っていた。た。ノアは思い出します。こんなことなら、あの老人にテレポートで共に連れていってもらえばよかったと後悔します。

「なぜ地下道はダメなんですか？」

「地下道は・・・ほら、さっきみたい地震がいつくるかわかりませんからね。日増しにひどくなっていますし。地盤が崩れたら一巻の終わりです」

ノアは頷きます。オ・パイなんかであれば、きつと崩れ落ちる岩盤を蹴り飛ばしながら強行突破なんて真似もしてしまうのでしょうか。でも、ノアたちにそれだけの力と俊敏さはありません。

「じゃあ、ヤマンバ洞窟しかないが……っていうか、このネーミングは」

レイが口をへの字にしています。ずっと、この洞窟の名前をツッコミたかったのです。

「まあ、通称ですよ。本当は『レムジン洞窟』と、あんまりにそのまんまなんでね。ヤマンバの由来は、なぜかその洞窟に女型の魔物が集まってしまったからです。砂漠がこんなに広がってしまった、生態系が狂ったのかもですね。ときおり、この釣り人の湖にも悪さしに来るので……そのたびに懲らしめているのですが」

ミヤオが「女の怪物をメツて怒ったり……」と言ったのはこのことだったのです。

「女型の魔物が……。いくら魔物とはいえ、女に剣を向けるのは性に合わないが。仕方ないな」

レイが自分の剣をみて、ギョツとそれを握りしめます。さっきまでステラに見とれて、鼻の下を延ばしていたとは思えないほどの真面目な顔つきです。

「あー。いえ、ヤマンバ洞窟の魔物は……。それは悪魔と呼んでも差し支えないぐらいに強いのですが。本当に行かれるのですか？」

「ああ。もちろん。アタシたちは何としてもレムジンに行かなきゃいけないんだ。それに悪魔とはもう二体と戦ったことあるしね。心配ないよ」

ノアがそう言うのに、コネミは渋々と頷きます。

「はあ。そこまで仰るなら……。よろしい。私も暇ではないのですが、案内しましょう」

ヤマンバ洞窟。見た目はなんも変哲もない洞窟です。ただ女性物の香水のニオイがプーンと立ちこめていました。電車とかで、ほら。

中年女性から薫るアレです。あれを何十倍も強くした二オイです。バラなんだかラベンダーなんだか、ラフレシアなんだか。はつきりしろと言いたくなる二オイです。

口と鼻にハンカチを当てたノアたちは、武器を構えてそろそろと洞窟に入っただけでした。ミヤオとコネミは外でそれを見守ります。洞窟に入っただけ後……。剣を杖がわりに、ヨロヨロと洞窟から出てきたレイの顔は青ざめていました。顔中にキスマークです。服も上半身を脱がされていました。手形とキスマークが至る所につけられています。

「……こ、こんなに恐ろしいダンジョンは……初めて……だ」
レイはその場に倒れます。その後、レイと全く同じ状態のボーズ太郎が出てきて、やはり倒れました。

「……やはり。結婚適齢期を逃した女性は、人間でも魔物でも同じですか」

コネミは額に手を当てて首を横に振ります。まったく無傷のノアとメルが、げっそりと疲れた様子で出てきました。

「こいつら、ひっぺ返して連れてくるのはどんなに大変だったか……」

「なんで、あんなに殺気だっているんでしょう」

ノアとメルが口々に言います。

「男性型の魔物の数が極端に少ないんです。この洞窟から、私の所にわざわざ来るのも……きつと、私を狙ったことでしょう」

「えー!?!」

ノアとメルは目に、コネミが美化されて見えました。耽美系です。パッチリお目々と長い睫、儂いボディラインに、意味なさげな手を頬に当てたポーズ。バツクには赤と白のバラの花が咲き乱れます。

「ミヤオ。だから、ミヤオもコネミのおじちゃん以外は男を見たことがないミヤオ」

ミヤオが笑っています。いや、笑いどころじゃないんですが……
本人は面白ければどうでもいいようです。

「私も何度もミヤオをレムジンに送り返そうとしました。ま、正直・
・邪魔だったんで。でも、こんな状態ですからね。まあ、ともか
く。腹が減ってはいいいアイデアも出ません。私がせっかく釣った
魚を食べさせるのはもったいないんですが・・・・お昼にしましよ
うか」

コネミが肩に担いでいたクーラーボックスを降ろします。ミヤオ
が、サーツと敷布を引きました。ノアもメルも、レイとボーズ太郎
をその上に寝かせて介抱してやります。

「良かったな。レイ。人生で、こんなにモテること・・・・もうない
よ」

レイの傷の手当てをしながら、ノアが言います。

「モテたって・・・・あきらかに、七十とか八十とかの老婆の魔物も
いたぞ！ 若いのなんていなかったじゃないか・・・・ってか、なん
でノアだ！？ なんでメルじゃなくて、ノアが俺の手当てしてるん
だ！」

レイが、メルに膝枕してもらいながら手当を受けているボーズ
太郎を指さします。心底羨ましそうに、レイは指をくわえました。
ボーズ太郎は心安らかな天使の寝顔です。

「・・・アタシは膝枕なんて絶対にしないよ」

「ふざけるな！！ 誰も頼んでいない！！」

そんなやりとりをしている間に、コネミはクーラーボックスから
魚を取り出します。大きい。大きいです！ どうやってそんな魚を
入れていたのでしょうか。地球でいうところの、タイセイヨウクロマ
グロ級の大きさです。一本釣りで、男達が賞金目指して競ってしま
いそうなレベルです。例の男前なマグロ釣り俳優も手を叩いて賞賛
してくれそうな大物です。

ピクリとも動かず、ずるずるとクーラーボックスから出されてい
くマグロもどき。その目が、ギョロツと動きました。ビッチビッチ
跳ねます。死んだ振りをしていたのです。

「まだ息がありましたか・・・・。どうせ食べられるんだから、死に

なさい」

ボグウツッ！！ コネミの強烈なボディブローがマグロもどきに叩き込まれます。マグロもどきは昇天しました。ミヤオが「魚と戦ったり・・・」と言ったのは文字通りの意味でした。

「この辺の魚は強くて・・・。ただ釣っただけでは勝ちではないのです。文字通り、生きるか死ぬか。デッド・オア・アライブ。生半可な釣り人では通用しない世界ですよ」

コネミは、これまたどこから取り出したか、巨大な出刃包丁を握ります。プロ顔負けの包丁捌き。マグロもどきの解体ショーです。

小分けにされたマグロもどきの身。刺身なんて食べたことのないノアは、恐る恐るそれを手に取ります。そして、コネミが用意してくれた醤油につけて口に放りました。

「ん、んーッ！ 何コレ！？ 旨い、旨すぎるー！」

ノアの口に芳醇で濃厚な味が広がります。味の革命です。演出効果で、劇画タッチのノアの背景に、ロケット噴射で撃ち上がる富士山が描かれてもおかしくないほどの派手なりアクションです。

ノアだけでなく、皆がマグロもどきにがっつきました。ミヤオもネコ食いです。美味しいだけでなく、量も充分です。全員の体力が完全回復しました。

「さて。お腹はふくれましたが・・・。どうしたのですかね」

「アタシとメルだけが行く？ どうやら、あそこの魔物は男にしか興味ないみたいだし」

ノアの提案に、レイもボーズ太郎も首をイヤイヤと横に振ります。「いや、きつと、男がいなければいけないで・・・侵入者は襲ってきますよ。魔物ですし」

コネミがそう言うのに、レイもボーズ太郎もホツとします。どうやら置いて行かれる心配はないようです。

「コネミのおじちゃん。ステラにお願いしたら？」

ミヤオがペロペロと手の甲を舐めながら言います。

「え？」

コネミがちょっと驚いた顔をしました。ミヤオは呑気に伸びびをします。

「ステラだったら、きっと中にいる怪物の説得してくれるミャー」
ミヤオの提案に、ノアもメルも希望を見いだします。しかし、当
のコネミは渋い顔をしていました。ああ、でも表情は変わらない
ですが・・・俯いていて、顔に影ができていたのでそう見えたので
す。

「確かに。ステラであれば・・・きっと、ヤマンバ洞窟のヤツらを
鎮められるかも知れません。しかし、私の体が目的のあの女などに
・・・」

コネミは自分の両肘を抱いてさすります。いやいや、かなり気持ち悪いんですけど、とノアは思いました。

「し、失礼なヤツだな！！ ア、アタイは・・・ほ、ほ、ほ、本当
にお前のことが！！！」

洞窟の入り口の裏側に隠れていたステラが飛び出してきました。誰もがびっくりしました。どうやら、ずっとノアたちの後を付けていた様子です。

「な、何度も、何度も・・・ラブレター出したろうが！ い、一度も返事をもらってないけどさ！」

ステラが真っ赤になって言います。どうやら、ミヤオに渡したのはラブレターだったようです。

「なんで、魔物のあなたが私に惚れるんです？ それに、私は隠居して釣り生活を満喫してるのです。面倒ごとは、ミヤオ一人で充分ですよ」

相変わらずの毒舌に、ステラはプルプルと震えます。目尻に涙が溜まっています。

「コネミのバツキヤロオオオオオー！！」

ステラはウィリアムと共にものすごい勢いで去っていきました・・・

夜。腹を出して寝ているコネミを横に、ヤマンバ洞窟の前でノアたちは作戦会議をします。

「ヤマンバ洞窟・・・抜けるためには、ステラの協力が必要だ。そうだな、ミヤオ」

「ニヤー。ステラはこの辺でいちばん強い魔物ニヤ。きっと大丈夫ニヤー！」

ノアが膝をパチンと叩きます。ミヤオはゴロゴロと喉を鳴らしました。

「しかし、ステラさんは・・・どうやら、コネミさんに惚れているようですね」

「ああ。理不尽だ・・・。あんな、太った男のどこが・・・俺の方が・・・ブツブツ」

レイは口を尖らせて、人差し指同士を付き合わせます。

「でも、どうして・・・コネミと、そのステラをくつつ付ける必要があるポー？ 普通に、頼めば・・・」

この作戦の主幹を口にしたポーズ太郎を、ノアとメルがギロツと睨みます。ポーズ太郎は竦みあがりました。

「あれじゃ、ステラさんがあまりにも可哀想です！！」

「そうだ！ あそこで豚みたいに寝ているオッサンに、乙女の想いがどんなに一途か思い知らせてやらにや・・・アタシの気がおさまらん！！」

ノアは拳を握ります。いつの間にか、コネミに恋するステラを・・・スタッドに恋する自分に置き換えていたようです。恋の理由までは解りませんが、自分と同じように、かなりの年齢差というネックに加え、ステラの場合は種族の差というものもあります。困難な恋愛ほど燃えるものなのです。

「よし！ コネミとステラをくつつける作戦！ 明日より決行だ！

！！」

『オー！！！！』

『おー・・・』

女子三人の強い雄叫びと、いまちな男子二人の声、そして豚・
いや、コネミのイビキが砂漠の空に木霊しました……。

第九章 隠居者コネミと女魔物のステラ（後書き）

よーやくオ・パイの野望が明らかになりました！ ってか、もつと早くに出すつもりだったんですけどね。なんだか、タイミングが合わなくて。

女魔物ステラはオリジナルです。コネミとの話に深みをつけるために登場させました。次回、どのように冷血漢のコネミとラブラブにさせるか、ノアとメルが活躍するかと・・・てか、この話まだ続くんですか、申し訳ないです（苦笑）。ミャオがせっかく出てきたのに活躍の場がまだ少ないw はい。レムジンでは活躍してもらおう予定です。

地震の部分は・・・この時期にどうだろうかと本当に悩みました。本当は前の話でもたびたびだそうと思っていただけ。控えております。でも、十年前当時の設定のままなので。どうぞ、ご了承下さい。

第十章 ファルの大首都レムジン

搜索部隊をかって出たノアとメルの二人組が、ステラに追いついたのは夜もかなり更けた頃のことでした。正確には、縦横無尽に走らされたウイリアムが、疲れ果てて、ひっくり返えているのを見つけたわけなんです。．．．。それと搜索部隊が二人しかいなかったのも、熱血するノアとメルにレイもポーズ太郎もついてこれなかったせいでもあります。

昼の砂漠はこれでもかというぐらいの暑さですが、夜になるとそれが嘘だったかのように冷え込みます。

ノアたち三人は、女だけで焚き火を囲っていました。

さんざん泣きはらしたのでしょう。ステラの目は真っ赤に腫れあがっています。ノアがタオルを渡すと、目頭を抑えて再びさめざめと泣きはじめます。

「．．．つきしょう。コネミのバカやろ」

「ホントに好きなんです。コネミさんのことを．．．」

同情するかのように言うメルを、ステラはジロツと睨みます。

「なんだよ。どうせ、馬鹿にしてんだろ。あんなデブでハゲたオヤジを好きになるなんて．．．変だって」

「そんなことはないです！」

「んなことないよ！」

メルの否定に、ノアの言葉が重なります。立ち上がって拳を振るわせるノアに、ステラはちよつと驚いた顔をしました。

「アタシだって、猫背で冴えないオッサンを好きになったんだ！好きになるのに、容姿とか関係ないよ！」

ノアが力説するのに、メルも目を丸くします。

「ノア．．．？ ノアの好きな人って．．．もしかして、スタッドさん？」

メルの言葉に、ノアが真っ赤になります。熟れたトマト、茹でた

タコのようなです。

「な、な、な!?　だ、誰もそんなこと言っていない、ない、ないだろ!　どうして、そんなこと・・・解るのさ!？」

明らかに動揺を隠せないでいる姿に、メルはちよつと気まずそうな顔をします。

「え。その・・・ほら、ずっとノアはスタッドさんを追いかけているし。冴えない・・・と言っては失礼だとは思いますが、その、あまり目立たないというのが有名なスタッドさんの特徴だと聞いていたので。ただの私の勘だったんですけど。当たっていたんですか」

ノアはムツスリして、頭を掻きながらドサツとその場に座り込みます。

自分でもよく解らない感情を、人から直接に指摘されるのは恥ずかしいものです。でも、この気持ちは恋以外のなものでもないのだからとノアはすでに解っていました。いえ、もしかしたら、最初からそうだったのだからとすら思います。

「ああ!　そうだよ!　アタシが好きなのは・・・スタッドだ!　文句ある!？」

「文句だなんて・・・」
ぶつきらばうに言うノアを、メルはちよつとおかしそうに笑います。

「へえ。あの英雄スタッドを、ねえ。お前も物好きだね」
ステラもフツと笑いました。

「人のこと言えるか!　アンタこそ、あんな変なオヤジを!」
ムツとした表情でノアが言います。ノアとステラはジツと互いの顔を見合わせ、そして・・・どちらからというでもなく、ぷつと吹き出して、お腹を抱えて笑い出しました。

「ああ。でも、昔は・・・あんなヤツじゃなかったんだよ」
ステラが寂しそうに言うのに、ノアもメルも不思議そうな顔を見ます。

「全部、レムジンにいる元老院が原因さ」

「レムジンの元老院？」

「こんなファルの領地の外れに住んでいるコネミが、レムジンにどういう関係があるのかと、ノアは首を傾げます。

「・・・何度も、コネミはミヤオを元いた場所に戻そうとしたんだよ。でも、デムに育てられたミヤオをレムジンは受け入れなかったのさ」

「邪魔だったんじゃないの？ そう言っていたけど・・・」

「だから、本心じゃないのさ。コネミなりに距離を置いてるつもりなんだよ。まったく不器用なヤツさ」

「なんだかノアもメルも、コネミへの印象が変わってきてしまいました。」

「でも、変ですね。その話だとコネミさんはレムジンに行ったことがあるみたいに聞こえますが？ コネミさんは、ヤマンバ洞窟のせいでミヤオを帰せないと」

「不思議に思ったメルが言います。ノアも「そういえば」という顔をしました。」

「は？ コネミならヤマンバ洞窟なんか何度も行き来してるさ。アタイだって、そこでコネミに会って惚れちまったんだからね」

「照れくさそうに言うステラです。しかし、ノアたちは口をへの字にして考えこみます。」

「じゃあ、どうしてレムジンに行けないような事を言ったんだろ。ミヤオが、ステラに洞窟の魔物を説得してもらおうって言い出した時も、なんかコネミさんは乗り気じゃなかったようだし」

「アタイに？ あゝ、あそこの魔物は我の強い連中さね。洞窟を出たアタイの言葉なんて聞いてくれるかどうか。だからじゃないかね？」

「ステラがそう言いますが、ノアもメルも違うような気がしていました。」

「とりあえず、戻って話をもう一度聞いてみましょう」

「メルの意見に、ステラは嫌そうな顔をしましたが、二人ともそれ

は真剣な顔だったので、やがて渋々と頷きました……。

意識を取り戻したウィリアムに乗り、ヤマンバ洞窟に戻ってみると、さつきとは状況が一変していました。

何者かが洞窟の前で争った形跡があります。レイたちの寝袋や、さつき食べた魚の残骸が飛び散っているのです。

「な、なんだよ。これ？」

ノアが啞然としてみると、砂山から滑り降りてくるレイが見えました。剣を抜いているのを見る限り戦闘があったのでしよう。レイの後ろからは、ボーズ太郎が四つん這いでワタワタと砂をかきながら降りてきます。

「逃げろ！ まずい相手だ！」

レイが叫びます。そのレイの後ろから、何かが現れます。

ずんぐりむっくりした熊のような大きな身体。爆発したような赤いアフロ。鬼のような形相。ええ。いわゆるオバサン。典型的なオバサンです。しかもサイズは特大ですが。

「フンガー！」

巨大オバサンが拳を降り下ろします。あわや潰されそうになったボーズ太郎を、レイがスライディングして横に抱えて助けだします。

「な、なんじゃありゃ!？」

ノアが驚きながらもダガーを構えます。

「エリザベート?! なんて、あんな姿に?」

ステラがゴーグルを上げて目を細めます。どうやらステラの知り合いの魔物のようです。

巨大なオバサン・・・エリザベートは、当然ともいうべきか、同じ体格で目立つウィリアムに気づきます。

そのいきり立っている様子から、どうやら向こうはステラのごとは解っていないようです。逃げたレイたちを追うのを止め、怒号をあげてウィリアムに襲いかかります。

「チイツ！ いくよ！ ウィリアム!!」

ステラが手綱を引くと、慌ててウィリアムが戦闘態勢になります。両銃と両拳が、ガツシンと組み合います。背中にいたノアたちは、衝撃で降り落とされそうになりました。

「なんだよコレ！ 怪獣大決戦かよ？」

「ひっくり返えされる！！ 飛び降りな！」

ステラが手綱を離します。ノアはメルを抱えて、ウィリアムの背から飛びました。

「キィィィ！！！」

なんと、力負けしたウィリアムが仰向けにひっくり返されます。

ドツシーンと轟音、砂煙が巻き起こります。ガシガシとウィリアムは脚を動かしますが、起き上がれません。

「ブツホオツホ！！！」

勝ち誇った笑い声をエリザベートがあげます。

「ペツペ！ クソ、砂噛んじやつたじゃんか！ メル。大丈夫？」

ノアが砂から頭を上げます。メルも頭を左右に振りながら、「ええ」と答えました。

「砂漠でデザート・スコープオンを力で負かすなんて・・・」

レイがボーズ太郎と共に走って来ます。

「なんなんだよ、あれ！」

ノアが、腰に手を当てて高笑いをあげているエリザベートを指差します。

「俺にもわからない。ノアたちを待っていたら、ヤマンバ洞窟から出てきたんだ」

「あれはエリザベートじゃ」

「ワシらの仲間じゃ」

レイの背中から、ヒョコヒョコと二人の老婆の魔物が顔を出します。二人はまったく、そっくりの顔です。レイはサーツと青い顔をしました。

「アンタらは・・・」

ノアには二人に見覚えがありました。レムジン洞窟で襲いかかり、

レイに執拗にキスをしまくった魔物です。

「ソラ！ ラソ！」

ステラが声を上げました。ソラとラソと呼ばれた二人の老婆は目を丸くしたかと思いきや、ニタアツと笑いました。

「おお、ステラ首魁ぢやないか！」

「洞窟を抜け出し、はて何年ぶりぞ？」

悠長な挨拶はいらないと、ステラは手刀で空を切ります。

「アタイはもう首魁じゃない。今では双子の長たる、一番の魔法の使い手のお前らが今のリーダーだろ！ 教えてくれ、なんでエリザベートがあんなになっちまったんだい！？」

双子のソラとラソが、レイを間に挟んで顔を見合わます。

「魔神バルバトス様の命令ぢや！」

「レムジンにあるランドレークへの門に、立ち入らせぬためぢや！」

甲高い声で説明するソラとラソに、ステラは怪訝な顔をします。

「魔神バルバトス？ 確かにアタイらは魔神に造られた魔物だ。でも、スタッドが魔神を封印して以来は、アタイら意識を持つ魔物はその支配から抜け出たはずだろ！？ なぜ今更に??」

ソラとラソが、レイの背中に入れ替わって、再び顔を出します。

「魔神バルバトス様の封印は解かれつつあるのぢや！」

「魔神バルバトス様の力を受け、エリザベートは急激な進化を遂げたのぢや！」

ソラとラソは、エリザベートを指さします。

「もはやワシらの力でも止められぬ！！」

「ここにいる者ら、全てを殺すまで止まらぬ！！」

レイの肩からヒョイと折り、二人は手を上げます。そして、二人で両手を組み合ってエリザベートに向き直りました。

「おお！ エリザベート！ ここぢや！」

「魔神様に仇なす人間はここぢや！」

ソラとラソが甲高い声で、エリザベートを呼びます。

「あ！ このババア！！！」

ノアが止めようとしませんが、すでに手遅れでした。笑っていたエリザベートが、ノアたちに気づいてギロリと睨みます。そして、拳を振り回して突撃してきました。

「クソ！ 正面からやりあつては勝ち目はないぞ！」

レイは舌打ちして、レイジングファンの構えを取ります。

「おお！ エリザベー……ぐびえ！」

「こやつらを……ぶっぴい！」

ソラとラソがエリザベートに近づいて行ったのですが、大きな足に無惨にも踏みつぶされてしまいます。本当に、『全てを殺すまで……』なのです。

「ニヤーツー！！」

「ミヤオ！」

倒れているウィリアムを踏み台にして、ミヤオがエリザベートの後ろから飛びかかります。鋭い両方の爪を立て、素早い動作でエリザベートの頬を引っ掻きます。

「ブフォ！？」

「ニヤーツー！！」

鬱陶しいそうにエリザベートは頭を振ります。払ってくる攻撃を、ミヤオは巧みにかわし、ネコパンチを繰り返します。その動きは、盗賊のノアが「おお」と感嘆するほど見事なものでした。

「ミヤ！？」

連続攻撃をしかけていたミヤオですが、カんだエリザベートのアフロから触手のようなものが伸びてきます。それがスルリとミヤオの体に巻き付きました。よくわからない成分でできたヌメヌメの触手は、藻掻くミヤオにベトベトとひっついて逃れられなくします。

「今助けるぞ！ 『飛来剛刃！ 雷神の劍柱、テンペスト！！』」

レイが剣を持ったまま、その場で回転し出します。やがて金色の光りを帯びて高速になり、砲丸投げの要領で剣を放ります。ビューンと綺麗にエリザベートの頭上に飛んでいき、そこで空から雷光が剣に当たります。帯電した剣は、見事にエリザベートの頭上に突き

刺さりました。

「アングガガガ！？」

感電して、エリザベートの鼻と口から煙が吹き出ます。痺れたせいで、ミヤオをポロツと離しました。

「どうだ！ ジャスト国に代々伝わる奥義！」

「ニヤー？」

レイが落ちてきたミヤオを受け止めながらニヤリと笑います。

「グルルルル！！！」

「レイ！ まだだ油断するな！」

頭を振ってエリザベートが怒りの形相になります。それに気づいたノアが叫びました。

「な！？ ま、まだ動けるのか！？」

ミヤオを降ろしたレイが、腰から剣を抜こうとしますが・・・ありません。そうです。エリザベートの頭上に刺さったままなのです。テンペストは強力な奥義でしたが、剣を手放してしまうという弱点があったのです。

「し、しまった・・・。敵を一撃で倒せるのが前提の技だった」

「フンガガガー！！！」

「逃げるミヤー！！！」

ミヤオが、青ざめているレイを背中に抱えて走り出します。男一人担いでいるというのに、なかなか素早いステップでエリザベートの攻撃を避けます。

「ニヤニヤニヤ！ コネミのおじちゃん！ 助けてニヤー！！！」

あまりの猛攻にミヤオが悲鳴を上げます。

「コネミ？」

ステラが目を見張りました。すぐ側の砂山から、肉厚の手がポゴンと生え出ます。そして、ザバーツと砂を掻きながらコネミが姿を現しました。どうやら、エリザベートが姿を出した瞬間に隠れていたようです。

「やれやれ……。どうやら、私が戦わねばならぬようですね」
パンパンと服の砂を払い、コネミは深く嘆息します。

「久しぶりにやりますか……。ふんりゃッ！」

コネミが全身に気合いを入れます。脂肪が瞬時に鋼鉄の筋肉と化しました。膨大な量の脂肪全てが筋肉となったわけですから、まるで紐でキュツと縛ったハムのようなのです。ただ顔はそのままなので、顔と身体のギャップに気持ち悪さだけは倍増でした。

「コネミのおじちゃん！」

「コネミ！」

ミヤオとステラが呼びかけます。

「どいていなさい。私がやります！」

激震の足音を響かせながら迫り来るエリザベートに、ムキムキのコネミが立ちふさがります。

「どりゃッ！」

ボヒュツという風切り音と共に繰り出されたコネミの拳が、エリザベートのスネに当たります。いわゆる弁慶の泣き所です。これにはたまらず、エリザベートも涙を流して痛がりします。まさに鬼の目にも涙……。いえ、もちろん意味が違いますが。

敵の怯んだ隙を見逃さず、倒れかかったエリザベートの爪先を掴み、ジャイアントスイングの体勢です。ましてやエリザベートとの体格ですから、まるで風力発電のプロペラの如くグルグルとものすごい迫力で回します。そして、そのまま放り投げてしまいました。ヒューンと、遙か彼方へとエリザベートは飛んでいってしまいます。
「ふう……。やれやれ」

コネミは額をタオルで拭くと、もういつもの体型に戻っていました。ノアたちは、開いた口がふさがらないような状況です。

「なんだ、何がどうなっているんだ？」

レイもボーズ太郎も、困惑した様子でコネミを見やります。コネミは素知らぬ顔で、ゴシゴシと顔を拭い、脇を拭きました。

「おい！ コネミ！ こいつらは、レムジンに行きたがっているん

だ！　なんで、通れないなんて嘘を言うんだよ！？　お前の力なら・・・普通に通れるだろうが！」

ステラが問いかけます。ノアたちも、真剣な表情でコネミを見やりました。コネミは、観念したかのようにフウと溜息を吐き出します。

魔神の力を受けたエリザベートをあしらってしまつコネミの實力は皆に解ってしまいました。いまさら、なんの言い逃れもできません。

「・・・レムジンに行つてどうするのです？　あそこは、デムが行くところではありません」

そう言つコネミの前に、メルが一步進み出ます。

「私たちは、レムジンの先ランドレークを目指しています。危機に瀕している仲間たちを助けるため、そして目覚めつつある魔神バルバトスを再度封印するため・・・スタッドさんに何としても会わねばならないのです」

さすがにこの言葉には、コネミもステラもちょっと驚いた顔をします。コネミは何かを言いかけようと口を開きますが、思いとどまつて首を横に振ります。

「滅びの都ランドレーク・・・ですか。確かに、そこに行くためには、レムジンにある移送魔法陣を使わねばなりません。ただその為には、レムジンの最高機関である元老院。そして大司教ファラーの許可が必要になるはずですよ」

「俺が直接に取り合つつもりです。俺はジャスト国の王子です。話ぐらいは聞いてもらえるでしょう」

レイが王族の証であるペンダントを出しました。しかし、コネミはそれを見ても、苦い顔で首を横に振ります。

「少し・・・昔話をしましょうか」

コネミがその場にゆっくり座ります。ノアたちも、誰も何も言わずにその場にしゃがみました。

ステラとミャオは倒れているウィリアムを起こしに行きます。ウ

イリアムが無事なのを確認して、慌てて戻ってきてから、コネミの側にちよこんと座りました。ステラの反対にはミヤオが座りました。皆が聞く準備ができたのだと見て、コネミは静かに語り出します。

「・・・英雄スタッド。彼が魔神バルバトスを封印した業績は偉大でした。彼の影響により、今までまるで見向きもされなかったデムたち。私や一部の才能のある者だけは・・・という条件はありましたが、デムはレムジンに入ることが許されたのです」

コネミもレムジンにいたのだと知って、誰もが驚きを隠せないでいます。コネミはちよつと自嘲気味に笑って続けました。

「英雄スタッド。そして名医バーボン。互いに面識はなかったでしょうが、特に秀でていた話が出るのはこの二人です」

バーボンの名前がでたのに、ノアもメルも驚いた顔をします。

「コネミさん・・・。バーボンさんを知っているのですか？」

「ええ。レムジンでは有名人ですよ。会ったことはなくとも、レムジンにいるときは噂だけは毎日のように聞きました」

懐かしむように、遠い目をしながらコネミが自分の拳をさすりま

す。

「この二人ですが、実はその持つ思想も似ているものがありました。ファルの閉鎖的な種族差別を無くすよう、彼らは奮闘したのです。

ファルとメリンとデム。この三種族が協力しあい、平和を築いていくこと・・・。」

「人は定規じゃ計れない・・・」

ノアがバーボンの昔の決め台詞をポツリと言います。コネミはゆつくりと頷きました。

「しかし、ファルの元老院は聞き入れませんでした。『ファルとメリンは上位種族であり、デムはあくまで下位種族である・・・。突然変異で、類い希な才能を持つものがあることは認めても、全てを認めることはできない』。これが元老たちの見解でした。やがて、スタッドは自分の主張が受け入れられないと見るや、論文だけを残してレムジンから姿を消します。そして、バーボン医師は・・・最

後まで主張をやめなかったため、手酷い迫害を受けました。そして、やがては、私などもレムジンにいられなくなってしまうのです」

「コネミは今までにない、真剣な面持ちでノアたちを見回します。それでも……。それでもレムジンに行かれるというのですか？ あそこには非人道的な扱いしか待ち受けていません。それを受け入れるだけの覚悟があるのですか？」

「コネミの問いかけに、ミヤオが伸びをしながらミヤーと鳴きました。

「ミヤオは、レムジンに行ってみたい。ミヤオみたいなのが一杯いるんでしょ？ ならミヤオは行くよ」

純真な目で見つめられ、コネミは眉を寄せます。

「ミヤオ……」

「ミヤオは大丈夫だよ。ミヤオはノアたちと行くニヤ」

「ミヤオは、ノアとメルのをとってニツコリと笑いました。

「アタシたちは構わないけど。ミヤオはコネミと一緒にいた方が良いいんじゃない？」

「いえ。私からも願います。ミヤオをレムジンに連れて行ってやって下さい。今までは同種族から差別されるよりは私と共にいた方がよいとそう思っていました……。ですが、彼女はファルなのです。出私と必要以上に親しくしてはいけないと、わざと冷たい素振りをしていましたが……」

そう辛そうにコネミは言います。ミヤオに冷たく接していたのは、馴れ合わないためという理由があったのです。

「ミヤオ知ってるよ。コネミのおじちゃん、ミヤオがヒドイから守ってくれたミヤ！ レムジンにはミヤオの仲間がいるけれど、ミヤオにダメーってするから！ でもね、でもね！ それでも、ミヤオにはミヤオみたいな仲間がいるなら見てみたいの！」

コネミはハツとした顔をしました。ステラはフツと笑います。

「いつまでも子供じゃないのさ。ミヤオだってこのままじゃいけない。それはお前だって解ってたんだろ。レムジンには……。もしかし

の一喝です。しばらくは、ビビって悪さができないでしょう。今のうちに抜けてしまおうといい。それほど長い洞窟ではありません」

コネミの言葉に、半信半疑なノアとレイです。でも、信じる他ありません。コクリと頷きました。

「よし！ 行くよ！！」

ノアたちは拳を振り上げ、ヤマンバ洞窟へと入っていきました。……。

残されたコネミとステラは、見送っていたノアたちの背中がもう見えなくなり、真つ暗な洞窟の入り口を見やって小さく溜息をつきます。

「行つちまったな……。じゃ、アタイも帰るか」

コネミをチラリと見て、ステラは肩を落としながら踵を返そうと瞬間です。コネミが口を開きました。

「……ミヤオがいなくなつて、魚があまりそうすね。ウィリアムなら、がつつり食べてくれそうですが」

小さな声でしたが、ステラの地獄耳は聞き逃しません。パーツと明るいい顔になります。

「な、なら！！」

「……あなたは、料理ぐらいできるんでしょう。手伝つてくれるなら、私の家にきなさい」

「あ、ああ！ とつておきのアタイの手料理を食わせてやるよ！」

「私はグルメですから。美味しいものをお願いしますよ」

「任せろつてんだよー」

コネミとステラは、そんなやりとりをしながら家路へと戻つていったのでした……。

計らずとも、ノアとメルが『コネミとステラをくつつける作戦！』は大成功したようです。もちろん、先に進んでいくノアもメルもそんなことを知る由もなかったわけですが……。

ヤマンバ洞窟。洞窟自体はシンプルで真つ直ぐな道のりだったの

ですが、その距離はコネミが言ったほど短いものではありませんでした。ましてや薄暗い洞窟なのでどれくらい時間が経過したかも解りにくいのです。ようやく外に出た時には、朝日が昇っていました。抜けた先は大きな岩がゴロゴロしている荒野でした。魔物に見つからなさそうな場所を探します。そして巨人が転がしてきたような大きな大きな丸い巨石の下にテントをはりました。四人はそこでちよつとだけ仮眠をとります。一昼夜、寝ずに歩いたり戦ったりしていたのですから少し休みたくなるのも仕方ありません。

ちよつと一眠りしていたメルでしたが、フツと起きあがって周囲を見回します。そして、皆から離れて座り込みました。抜けるような晴天です。そんな中、昼寝をしているのが申し訳ないような気がしていました。

「どうしたニヤ、メル？」

ヒョイツと横から顔を出され、メルはちよつと驚いた顔をします。八重歯を剥き出しにして、ミヤオがニツと笑いました。

「え、ええ。こう明るいと眠れなくて……。ミヤオも……。眠れないのですか？」

メルが微笑み返すのに、ミヤオは同じような顔を真似しようとして口をモゴモゴさせます。でも、すぐに飽きたらしく、ミヤオのいつもの目を細めた笑いに戻りました。スルリとメルの身体を回り、その隣にちよこんと座ります。

「お昼寝はあんまり好きじゃないニヤー。コネミのおじちゃんも、あんまお昼寝すると、夜に眠れなくなるからダメーって言うニヤー」

「そうですね……。そうですね。コネミさんの言うとおりですね。メルはコクリと頷きます。そして、ミヤオの顔をジッとみました。」「……。ミヤオは、コネミさんが大好きなんでしょう？」

「うん。大好き。ミヤオに魚くれるし、いろんなことをいーっっぱい教えてくれるニヤー！」

「……。そのコネミさんと、離ればなれになって、寂しくはないんですか？」

メルの問題に、ミヤオは首を傾げます。

「・・・私は・・・寂しい。好きな人と会えないのも。辛いんです・・・。本当は・・・。お母さんに、ポーズ長老さんやポーズ星人の皆に・・・バーボンさんに、会いたい・・・うつつ」

メル長い睫から、パラパラと雫が飛び散りました。天真爛漫なミヤオを見ていて、幼い頃の気持ちをメルは思い出していたのです。気丈に振る舞わなければ、涙をながしてはいけない・・・そうは思いついながらも、溢れ出す気持ちは止まりません。こんなところで、昼寝をしてはいけない気がするのです。

「ミヤオ。コネミのおじちゃんと言ったよ」

ミヤオは空を指さします。メルは涙に濡れた顔をあげ、さきほどの抜けるような青空を見やりました。

「ミヤオはね。お父さんの顔もお母さんの顔も解らないニヤ。でもね、そんなお父さんやお母さんも、きっとこの空を見上げているよ、って。同じ空の下じゃ、誰も一人じゃないんだよ、って。きっとコネミのおじちゃんもステラも、同じ空を見てるニヤ。だから、ミヤオはみんなといつも一緒。メルやノアが側にいなくなっちゃっても、空がある限りは誰も一人じゃないんだニヤ」

「同じ空の下では、誰も一人じゃない・・・」

メルはポツリと呟いて、涙を拭きました。きっとミヤオはこの言葉の意味なんてわかっていないのかも知れませんが。でも、コネミがいかにもミヤオを大事にしていたのが解ります。

「・・・ありがとうございます。ミヤオ。レムジンで、仲間たちに・・・家族に会えるといいですね」

「うん　そしたら、空を見る人が増えるミヤオ！　もっともっと！　ミヤオは知らない人に会うニヤ！」

無邪気に手足をばたつかせて喜ぶミヤオに、メルも知らずうちに笑みが零れました・・・。

ファルの大首都レムジン。それは無秩序に広がる荒れ果てた地の

ど真ん中に、秩序と整然という言葉を持ってして現れました。

首都の中心にある大教会を中心に、街は正方形状に広がり、中央を大道路が十字に走っています。大きさはジャスト城と城下町あわせても足りないほど。その三倍か四倍かは軽くありそうです。

寸分狂わぬ測量を持ってして、わずかな歪みも許さずに真っ直ぐにのびる道路。合わせ鏡のように、ズ同じ形でラーツと連ねる家の壁。すべてが左右対称。完全なシンメトリー。左の屋根が赤ければ、当然に右の屋根も赤いです。左の家の芝生の長さが五センチであれば、当然、右の家の芝生の長さもきっかり五センチ。驚くことに街路樹なども、まったく同じような形のもので揃えられています。

街に入った瞬間、ノアたちは立ちくらみのようなものを感じました。あまりにも理路整然としすぎていて、塵一つのない綺麗すぎる町並みです。あまりに正確すぎて、見ているこちらが疲れてしまいます。

「なんだ・・・ここ。変な感じ」

「ええ。自然が・・・感じられません」

メルは側にあつた木に手を当てます。生命力が感じられないのです。ただの作り物のようです。

「これがレグー砂漠が生まれた理由さ。これだけの人工物を生み出すには、大量の資材が必要だったんだ」

レイが言います。ノアもメルも眉を顰めました。不自然なこの都を作るために、自然を破壊するなんてどういうことでしょうか。まったくその気持ちや考えが理解できないのです。

「アタシ・・・この街は好きになれそうにない」

ノアがふて腐れたようにそう言います。

街の真ん中でそんなことをしていると、沢山の兵士が走って来ました。いずれも青いフルフェイスの兜と四角い鎧に、槍や剣で武装しています。問答無用とばかりに、その兵士たちはいきなり攻撃してきました。

「な、なにするんだよ!？」

「黙れ！ エテ公ども！ 大人しく捕縛される！！」

くぐもった声で兜の中でそう言います。表情が見えないのですし、機械的なその声は冷徹に聞こえました。ノアたちは抵抗します。

「おい！ 待て！ 俺はジャスト国の・・・王子で！ は、話を聞け！！」

王子の証を取り出す間もなく、レイも剣を抜かざるをえません。

「なんだー！ お前らー！！」

抑えつけられようと羽交い締めにされたミヤオが怒ります。爪をたててガリガリと、兜を引っ掻きました。

「ええい！ 抵抗するといふならば、容赦はせん！！」

隊長格らしき人物が、剣を高々と掲げました。

素早く逃げまわっていたノアを、それを上回るスピードで頭から抑えつけます。槍でレイのもっていた剣を叩き落とします。魔法を唱えようとしたメルとボーズ太郎の首に槍の穂先が当てられます。引っ掻いたり蹴っていたミヤオを、左右から腕をとって捕まえます。あつという間に、ノアたちはファルの兵士達に抑えつけられてしまったのです。

「・・・グツ。さすがは武闘派ファルの精鋭兵士。街の中央まで誘き寄せて畳み掛ける戦術といい。俺たちが手も足もでないとは・・・」

レイは関心したように、払われた痛む手を抑えながら言います。

「勝手な発言をするな！」

槍の石突きで首筋を打たれ、レイは気絶してドサリと倒れます。

「・・・貴様らの罪状は不法侵入と抵抗罪だ。裁可は、ファラー大司教に仰ぐ。さあ、大教会に連行しろ！」

レムジンにやってきたノアたちは、いきなり捕まってしまったのでした・・・。

ジャスト城の時のように手枷をつけさせられ、大通りを大教会に向かって一列に連れていかれます・・・。

ファルの大司教ファラー。それはノアたちにとって、大きな出会

いとなるのでした・・・。

第十章 ファルの大首都レムジン（後書き）

体調不良などが重なってしまい、UPが遅れてしまったこと申し訳ありませんでした。まあ、コメントがないので読んでくれている人がいるのかも不明ですがw 一応w

さて、ついにファルの首都が出てきました。ここでDEMとメリンとファルの差別問題について、ようやく全貌が見えてくることと思います。若者達への成長の試練だと思えます。次話はそれほどお待たせせずにUPできるかと・・・まあ、頑張りますw

第十一章 大司教ファラーと元老院

レムジンの中央に位置する大教会。ここでは法と秩序の名の下に罪人を裁く……いわば、裁判所のような役割を果たす場所でありました。

整然とした街並み同様に、大教会もまた精緻な計測によって完全に屹立しているわけであります。端から段々に高さを増していつてちょうど中央で一番高くなるように建てられた塔。少しでもバランスを間違えたらひっくり返ってしまいそうな、急角度の斜めに延びる外壁。それらは正面から見ると菱形の宝石のようでした。その全体の形状に合わせ、窓や入り口も菱形の形になっています。

レムジンの建築技術の凄いこと。その調和の取れた見事な造りに見惚れてしまいそうでしたが、手首に巻かれていたジャラジャラとしたものがそういう気分にはさせてくれませんでした。

ノアたちは何とか脱出の機会を見いださそうとしますが、見事なまでの包囲陣形には隙がありません。前後は確実に抑えられ、左右の建物からも弓兵が狙っている気配がします。少しでも不審な動きをみせれば、すぐに射れる準備ができています。少しでも不審な動きをの兵士たちとのレベルは比べものになりません。

大教会の門を通り、背よりも遙かに高い玄関がいよいよ開かれまです。レイは苦い顔をしました。

「クツ。中に入ってしまえば、逃げるのが難しくなる……」

レイは小声でそう呟きます。メルもボーズ太郎も不安そうな顔をしました。

「レイ。大司教はどんな人なんだ？ 容赦なく、アタシらの首をはねちまうってことはないんだよね？」

ノアが問うのに、レイは首を横に振ります。

「わからない……。元老には会ったことがあるが。大司教は政治には関わらないからな。俺も会ったことも見たこともない」

つまりは、どういう裁きが下されるか予測すらつかないのです。もしDEM嫌いだっただとしたら、メルやミヤオは軽い刑ですんでも、ノア、レイ、ボーズ太郎には極刑が待っているという可能性もあります。それを考えると、とても気が重くなって来ます。なにせ、レムジンの恐ろしさはコネミからよく聞いていたのですから。

大教会の長い廊下を渡ると、ようやく聖堂に出ます。ジャスト城のホールよりも遙かに大きいです。長椅子が左右にズラツと並べられ、簡単に二百人ぐらいいは入ってしまいそうなスペースです。

中央の奥に聖壇があり、その後ろには巨像が建っていました。長身痩躯で、大剣を地面に突き立てて仁王立ちになっている勇ましい男性の像です。しかし、不思議なことにその顔の部分が深くえぐれていて、その表情がどんなものか全く解りません。

「神王しんおうと呼ばれた、我々が本来信ずるべき神の像だよ」

ノアたちは像に注意がいていたので、聖壇の前に立つ人に気づかなかったのです。

長いローブに、聖帯を首にかけ、手には錫杖をもっています。ピツチリと綺麗に分けた白髪混じりの七三分け。少し垂れた感じのネコ耳、端がピンと立っているちよつと洒落た口ひげ。そして優しそうな目元をした中年男性です。

ノアはどこかで見たとような気がして、目を細めました。

「お久しぶり。海は満喫できたかね？」

「あー！ あの、釣り人の海で水着をくれた、おじさん！？」

ノアもメルも目を丸くします。そうです。釣り人の海でたまたまあったファルのおじさんです。あの時は旅人の服とリュックを背負っていたので全く解りませんでした。ただの農家のおじさんにしか見えなかったのですから。

「はじめまして・・・ではないが、改めて名乗っておこうか。私がレムジンの大司教フアラーだよ」

その言葉に皆が衝撃を受けます。

「まさかとは思ったが、道理で魔法石も使わずにテレポートなんて

高度な魔法を使うわけだ。大司教なら納得がいく」

レイがちよっと気に入らなさそうに言います。ファラーはニコリと笑いました。

「そう言うな、レイ王子。私はただスタッドの言われた通りにあの場を通っただけだよ」

ファラーの言葉に、またまたノアもレイも意表を突かれました。

「スタッドだつて!？」

「なぜ、俺が王子だと!？」

二人が問いかけるのにも、涼しい顔でファラー大司教は片手を静かにあげました。その視線は兵士達に向けられています。

「・・・彼らは罪人ではない。捕縛を解きなさい」

その言葉に、兵士たちの間で動揺がはしります。隊長らしき人物が前に進み出て跪きました。

「ファラー大司教。恐れながら申し上げます・・・。ヤツらはデムを含む不法入国者。このまま解き放つのは危険かと。それに元老の方々の手前もありますし・・・」

「控えなさい。これはレムジンの司法。大司教ファラーの勅命ですよ」

左右にある回廊から、ファラーと同じような格好をした美少女たちが姿を現します。左から三人、そして右からも三人。それぞれ凛とした顔つきで、隊長を見やります。隊長は膝をグツと掴み、深く頭を下げ、部下にノアたちの拘束を解くよう指示しました。

「後は、この私に任せなさい。お前さんがたは下がってよろしい」
ファラー大司教が言うのに、隊長はこれだけは譲れないとばかりに首を振りました。

「し、しかし危険です!　せめて、護衛だけでも・・・」

その言葉が言い終わらないうちに、ファラー大司教が隊長の目の前に移動していました。錫杖を剣に見立てて、隊長の喉元に軽く添えます。レポートの魔法です。あの一瞬でそれを使用したので。隊長がゴクリと唾を飲む音がハッキリと聞こえました。

「私はファルでは一番の魔法の使い手だと自負しているつもりだよ」
これにはさすがに隊長もコクリと頷かざるをえませんでした。兵士たちに指示を出して、それぞれ聖堂から出て行きます。

「さて。これでゆっくりと話せるね」

ファラーが手をポンと叩いてニコリと笑います。そして、さきほどの六人の美少女たちがファラーの側に立ちました。

「あ、あの……。彼女たちは？」

勢揃いする美少女を前に、レイは鼻血を堪えながら尋ねます。

「ああ。私の娘たちだよ。私に次ぐ司教たちさ。これだけいるものだから、水着のサイズが解らず……。あれだけ必要だったってことなんだよ」

ファラーは大きく笑います。この六人が水着だったら……。そんな下卑た想像を浮かべて、レイは鼻血をまき散らしながら倒れました。

「あー。ちょっと刺激が強かったかな？ まあ、ここじゃなんだ。奥の部屋で話そうか……」

さすが大司教ともなると色々な客人がくるのでしよう。案内された応接室もかなり広いものでした。ノアたちの前にあるソファーに、大司教を中心にして、左右に娘の司教たちが座ります。

「長女アルマです」

一番左端の背の高いお淑やかな美人がペコリとお辞儀しました。

「次女フェルデだ」

その隣に座るショートカットで、釣り目の少女がニツと笑います。

「三女グリムアーですわ。うっふん」

さらに隣の盛り髪にした派手な美女がウインクしました。

「四女……。エカテナ」

三つ編みで眼鏡をかけた、ちょっと暗めな少女がファラーの腕を抱きながら言います。

「五女のテーテだよ」

ポニーテールの小柄な少女がニカーツと笑いながら言います。抜けた歯からして、まだ十代前半でしょう。

「末女のアングリーと申す。よろしく頼もう！」

一番右端の美人・・・ええ、美人とこの場合は言わなければ殴り飛ばされてしまうことでしょう。この六人の中で一番・・・その体格がよろしくいらっしやる、逆三角形ボディにバツキバツキの腹筋。まるで金剛力でも宿ったかのような角張った顔で、凄む・・・いや、微笑んでいます。

「これが私の娘たちさ。どうやら、末女のアングリーが、レイ王子を気に入ったようだね」

ファラーがそう言つと、さっきからジッとレイを見ていたアングリーがポツと赤くなります。

「照れるわい！ 親父殿！！ 恥ずかしいわいー！！」

そんな乙女なことを言いつつも、すかさずテーブルごしからレイに裸締め・・・いや、抱きしめにかかります。

「うごがー！」

「ダーリン、むっちゃ好きやねん！！」

レイの背骨がバギャギャっというような凄まじい音で悲鳴を上げます。

「まあ、そのへんにしておきなさい では・・・話を続けようかね」

真面目な顔を作り、ファラーが言います。名残惜しそうにアングリーはレイを離して自分の席に戻りました。レイは半死半生でしたが、ボーズ太郎の治療魔法でなんとか一命を取りとめます。

「・・・ファラー大司教。アンタは、スタッドを知っているの？」

ノアがさつきからずつと尋ねたかったことを聞きます。

「ああ。旧知の仲だよ。それも魔神バルバトスが封印される以前からのね」

そうにこやかに笑いながら言うファラーは、どことなくスタッドに似ているかもとノアは思いました。

「彼から聞いていたんだ。やがてノアという少女が、メリンやファールの仲間、ボーズ星人などを連れてレムジンに現れるだろうと」
その言葉にノアたちはさらに驚きます。

「どういうことでしょうか？ 私たちのことまでどうして・・・」

「メリンはメル。ファールはミヤオ。ボーズ星人はボーちゃんだミヤ」

ミヤオはボーズ太郎の頭をポスツと叩きます。

「ま、まるで予言者みたいだボー！」

ファラーは両手を広げ、目を細めました。

「『すべては聖剣エイストの御意思のままに』・・・彼ならそう答えるかな。詳しいことは解らない。ただ、魔神バルバトスの封印を完全なものにするには。ノアさん。お前さんの力が必要だと言っていた」

ファラーにしげしげと見つめられ、ノアは目を丸くします。

「ア、アタシ！？ そんな！ アタシはただ…スタッドに命を助けられて、そのお礼が言いたいただけで！ あ、いや…もちろんオ・パイや魔神バルバトスもなんとかして！ バーボンおじさんと親分も助けなきゃだけど！！」

「『すべてには意味がある』と、彼ならば答えるだろうね。彼とお前さんが出会ったのは何かの運命だったのだよ」

ファラーは立ち上がります。

「私は旧友との約束を果たさねばならない。お前さんたちをランドレークへ送ろう。そのためには、元老たちに許可をもらわねばならないが・・・」

「・・・元老たちは聞き届けてくれるでしょうか」

レイの問いに、ファラーは苦笑いをします。

「まあ、なんとかするしかないだろうね」

元老院議会議堂。まるで大教会に守られているかでもいるように、その裏側に正五角形の立方体のような建物がありました。左右には

大きな兵舎があり、有事の際にはすぐにも元老員たちを守れるようになっているのでしよう。いかにも権力者が考えそうなことだとノアは思いました。自分たちの民を優先的に守るためならば、兵舎は街の入り口に作るべきはずですから……。

政治的主導権はもっていなくとも、大司教ファラーの発言力は大きいものなのでしょう。議会招集を部下に命じただけで、すぐに元老たちが集まるという話になりました。

そして、ファラーと六人の姉妹に連れられ、議会議堂にノアたちはやってきたのです。

ノアたちのいる場所から、段々畑のように元老員たちの机が並び立ちます。まだ元老たちは来ていませんが、上から見下されるような威圧を感じさせられる部屋の作りに、ミヤオもボーズ太郎も落ち着かず、にそわそわとしていました。ノアもなんだか心許ない感じですね。ファラーと六人の姉妹たちはさすがに慣れているのか、何ともないといった顔ですが……。

ノアたちが席に着座してから数分が経過したでしょうか。一番高い位置にある扉が開き、元老たちが次から次へと入って来ます。数は十人。レムジンですから、ファールだけかと思いきや、メリンも混じっています。きつとミルミ城から避難してきた権力者なのではないでしょうか。

「……ファラー大司教。緊急を要する件と聞いたが？」

一番上に座っている、三十代半ばと思わしき壮年のファールが低い声で言いました。様子からして、きつと元老たちの代表なのでしょう。切れ長の目が、冷たい光を放っています。

「ええ。ドリード卿。率直に申し上げます。ランドレークへの門を……移送魔法陣の許可を頂きたい」

ファラーの言葉に、ザワザワと周囲が慌ただしくなります。ドリードはチラリとそれを一瞥し、目を細めました。

「魔神バルバトスに呪われし災厄の地。二十年もの間、閉ざされていた魔法陣を解放したいというのか？ それは、それなりの理由が

あつてのことであろうな？」

「ファラーはコクリと頷きます。ドレードとその視線が強くぶつかりました。」

「・・・英雄スタッド。彼が魔神にかけた封印魔法が、程なくして解けます。それを止めるために、彼らをランドレークにあるラグナロク遺跡に送らねばならない」

「さきほどとは比べものにならないぐらいに、元老たちがざわめきたちます。ドレードも驚きが隠せないよで、大きく息を吸い込みました。」

「あ、ありえない！ 我らが故郷、ミルミ城では・・・何の異変も感知されていないではありませんか！」

「ドレードの隣にいるメリンの青年が立ち上がって言います。」

「デイレアス卿。これは聖結界エミトンを施した本人・・・スタッドが言っているのです」

「ファラーが真面目な顔をして言うのに、デイレアスと呼ばれたメリンの青年はグツと言葉を詰まらせました。」

「・・・解せん。スタッド殿本人はどうした？ そんな重要なことをなぜ今まで黙っていたのだ？」

「ドレードは努めて冷静な顔で尋ねます。これには、ファラーも少しだけ間をおいて考えるような仕草をします。」

「スタッドの考えは、私にも計りかねます・・・。しかし、これは真実です」

「それを信じると？」

「そうと言うしか・・・ありません」

「ドレードは腕を組み、ノアたちをジロジロと見やります。」

「だが、そのデムたちを送る理由は何だというのだ？ その得体の知れぬ者たちを送り、どうやって魔神バルバトスの封印が解けるのを防げるというのだ？」

「予想していた質問だけに、ファラーは苦しげに眉を寄せます。」

「それも・・・わかりません。しかし、彼女はスタッドが認めた者

「たちです」

ドレードは話にならんと言わんばかりに首を横に振りました。

「それを信じる根拠がない。もしそうならば、スタッド殿が直接に我々レムジン元老院と交渉すべきはず」

「だから、エテ公は信用ならないんですよ……。いくら、英雄といえどね」

ディレアスはちょっと頬を膨らませて言います。カツとなったノアが飛びかかりそうになりますが、レイがグツと抑えつけました。ドレードはノアとレイを見やり、小さく溜息をつきます。

「……公の場だ。ディレアス卿。ファルとメリンの品格を問われる」

「あ、え？ ああ。失礼しました……。私としたことが」

ディレアスはバツが悪そうにします。どうやら、ドレードには完全に頭が上がらないようでした。

「少し、よろしいでしょうか。ドレード元老長閣下」

ノアを自分の後ろに引き下げ、レイが目礼しつつ前に進み出ます。

「……どこかで見た覚えがあると思えば、ジャスト国のレイ王子か」

「ええ。ご無沙汰しております……。下位種族なれど、私は一国の王子であり、デムの先頭に立つ者です。デムを代表してお願い申し上げます。どうか、ランドレークへの道を……。同胞、スタッドの願いをどうぞお聞き届け下さい」

レイはそう言って、膝を地面につき、両手を添えて頭を下げました。土下座です。一国の王子が、ファルとメリンの代表たちを前に平伏してお願いしているのです。それを見て、ノアの心の奥がなぜかズキリと痛んだような気がしました。

「お願いします！！」

レイが地面額をこすりつけ、心の底から声を出します。ノアたち、誰もが居たたまれない気持ちになりました。

「レイ……。アンタ」

「プハーツ！ エテ公が、エテ公の王子が……！ 頭を下げて、この私たちに……うつぶくぷー！」

ディレアスが吹き出します。これには、ノアたちは憤慨しました。「な！ ここまでして、お願いしてるってのに！！ テメエはそれを笑うのかツ……！！！」

「ひどいです！ あんまりです……！」

「最悪最低に意地が悪いだボー！」

あの温厚だったフアラージャ、娘たちもディレアスをきつく睨み付けます。

「……それが、仮にも施政者のとられる態度ですか」

ノアたちのあまりの剣幕に、ディレアスは青ざめた顔をします。

「う、うう……。何を！ わ、私はそもそも、エテ公なんかがこの街に入ること自体が……」

それ以上は発言するな、と言わんばかりにドレードの目がキラリと光ります。グツとディレアスは唇を噛みしめました。

「……頭を下げようが、何をしようが元老院の決定は変わらぬ。魔神の放つ悪魔が蔓延る魔都ランドレーク。仮にその閉ざされた扉を開き、悪魔どもがこのレムジンに雪崩れこまないという保証はない。それこそ魔神バルバトスを復活させることとなりうるやもしれぬ。そんな危険を冒してまで、移送魔法陣を使わせることを認めるわけにはいかない」

「悪魔だったら、アタシたちが倒せるさ！ もしレムジンに乗り込んできそうだったら返り討ちにしてやる……！」

ノアが拳を振り上げて言います。

「そ、そうだボー！ わ、我らは……もう悪魔を二体も倒しているボー！」

「ええ！ オルガノツソ、アルダーク……四天王と呼ばれる悪魔を退けた実績があります……！」

ボーズ太郎もメルも続いて言います。ドレードはそれでも顔色ひとつ変えません。

「オルガノツソ？ アルダーク？ ……聞いたような名だが。まあいい。だが、そんな悪魔二体程度であればレムジンの兵隊でも充分に倒せる。どうやら、まったく理解していないようだな」

そう意味深に言うドレードに、ノアたちはゴクリと息を呑みます。「ランドレークの悪魔。二十年前の数字であり、しかも混戦の中で無理やりに入口を閉じたような状況下だったからな……正確ではないが。ざっと数えて三千体、だ。三千体もの悪魔が跳梁跋扈するのが魔都ランドレークなのだ！」

誰もが言葉を無くしました。ボーズ太郎は指で数を数えていつて、ブルツと震えて頭を抱えます。

「…聞けば、お前たちはレムジンの兵士たちに、先ほど抵抗虚しく取り押さえられたと言うではないか。そんな者たちに、どうして任せられるというのだ？ 仮にランドレークに行ったとして、半日として生きてはいられまい。自殺をしに行くようなものだ」

ノアたちは何も言い返せません。確かに、ファルの兵士たちには為す術もなかったのは事実ですから……。

話は終わりだという感じに、ドレードが立ち上がります。それに合わせて、他の元老たちも立ち上がりました。

「魔神バルバトスの封印の永続は我々も願うところ……。そのための措置だ。諦め、己の国に戻るがいい。封印はスタッド殿が施したが、その永続は我々ことファルとメリンが保つ。デムに出る幕はない」

そう言うてドレードが踵を返そうとした時、『ミヤー！』という甲高い鳴き声が議会議堂に響きました。

「へん！ へん！ へんなのー！…！」

ミヤオです。ミヤオはピヨンと飛びはね、段々になっている元老たちの机の上に飛び乗ります。そしてその上を飛び回って、元老たちの顔を一人一人見やりながら「へんなのー」と繰り返します。

「ミヤオ!？」

メルが止めようとしませんが、ミヤオはピヨンと跳ねて、ドレード

の前に着地しました。待機していた兵士たちに緊張が走りますが、ドレードは「問題ない」と小さく言いました。

「……………お前はファルだな。あの一味か？ 何が変だというのか？」

「ドレード卿！ こ、こんな者を相手になど！！」

ディレアスは慌てて言いますが、ドレードはジツと間近で顔を合わせるミヤオから目を離しません。

「へんへんへんー。へんだよー。だってだって、ノアは……スタツドいうのに会いたくて、ランドレークいきたいニヤ？ バルバトスっていうの止めるんニヤ？ でも、この人たちダメーっていうニヤ」

ミヤオは首を左右に動かしながら、ドレードたち元老を次々と指さします。

「で、この人たちも……バルバトスっていうのが、動かないほうがいいニヤ？ だったら、どうして行っちゃダメーっていうニヤ？ ミヤオにはぜんぜんわかんないニヤ！！」

ミヤオはミヤオなりに、今の話を理解していたのでしょうか。やりとりの意味はわからなくても、ノアたちが何をしたいのか。そして、元老たちが何をダメと言っているのかは解っていたようです。

「この娘は……」

元老の一人が、ドレードに耳打ちします。

「……………ああ。おそらくレグー砂漠の環境下で生き残ったのだらう」

ドレードはどこを見やるでもなく、そうポツリと呟きました。

「なーんだ！ 優秀なファルではなく、『捨てられた忌み子』だったんですね！！」

ディレアスがポンと手を叩いてそう言います。ドレードの目がカツと見開かれました。その迫力に、ディレアスが腰を抜かします。

「……………捨てられた？」

「忌み子？」

ノアとメルが目丸くします。ファラーはグツと目をつぶりました。

「ミヤア？ 『い・み・ご』ってなーにニヤ？」

ミヤオは興味津々という感じに、ドレードの周りをクルクルと回ります。

「この子供は、なにか欠点があつた。だから、まだ幼いうちに捨てられた。それがたまたま生き残っていただけのことじゃ」

元老の一人が、冷やかにミヤオを見ながらそう言います。それは同族を見る者の目ではありません。

「優秀なファルらしからぬ欠点……。例えば、理知的な知性などがなければ、このレムジンでの記憶を魔法で消去してから捨てられるのだ。この子供は、昔にレグー砂漠に捨て置かれていたんでしょ。うな。あの環境下で、今まで生きてこれるなんて奇跡ですがな」

ガツハツハと一人の元老が笑い出すと、他の元老たちも揃って笑い出します。ただ口をへの字にして考えこんでいるドレードと、腰を抜かしているディリアスを除いてでしたが……。ミヤオも何がおかしいのか解らず、ただ真似してガツハツハと笑います。

「優秀じゃなきゃ……。子供を……。捨てる！？ そんなフザケた話があるかッ！！！！」

ノアが怒鳴り散らします。しかし、元老たちは笑うのを止めません。

「……………そうして、我々は今まで生き残ってきた。優秀な者たちだけを残したからこそ、この華麗華美なファルの首都レムジンが今なお世界に君臨しているのだ」

ドレードが振り返って言います。その目には、何か寂しげなものが浮かんでいました。しかし、その真意を確かめる間もなく、踵を返し、元老たちを引き連れて議会堂をでていきました……………

議会堂を後にし、ファラーに連れられてやってきたのは大教会で

はありませんでした。街の西方の外れ、理路整然とした街並みとはちよつと違う古いお屋敷です。

ファラーとレイが何やら管理人と話している間、ノアとメルは近くにあった公園のベンチで座って休んでいます。目の前の砂場では、ミヤオとボーズ太郎がじゃれあつて遊んでいます。

「……人っ子ひとりいないね」

ノアが膝の上に顎をチヨコンと乗せ、目だけで辺りを見回します。良い天気だというのに、子供の姿どころか、人の姿をみることもありません。

「ええ。ファラーさんにお聞きしたら、子供たちはなんだか学校というところで勉強するそうです。朝早くから、夜遅くまで……」

勉強という言葉に、ノアは渋い顔をしました。そういえば、盗賊の森にいたときはシュタイナが勉強を教えてくださいました。読み書きから、算数まで……でも、ノアは身体を動かしている方が好きで、じつとそんなことをやるのがいつも苦痛だったのです。

「じゃ、アタシとかミヤオとかボーズ太郎とか。学校いけないバカばっかが、こんなところにいるんだね」

「そんな……ノアったら」

ノアはブーツとふくれっ面で不機嫌でした。でも、メルはそのノアの気持ちがるるので、ただ心配そうにします。

「……ゴメン。メルに当たっても仕方なかった。アタシが許せないのは、このファルのやり方だよ」

ノアの言葉に、メルも同じだと頷きます。

「ええ。あれは……あんまりです。ミヤオが……かわいいそうです」

メルの瞳がミヤオを捉え、少し潤みます。ミヤオは何も知らずに無邪気に遊んでいます……。

「……コネミさんの言っていた通りだ。元老院は腐ってる。ミヤオだって、こんなところに置いてはいけないよ」

ノアが立ち上がってミヤオを呼びます。ボーズ太郎を追いかけま

わしていたミヤオの耳がピクピクと動き、猛ダツシュでノアの元にやってきました。

「呼んだミヤ？」

「ああ。ミヤオ、アンタはどうするんだい？ このレムジンにいたいの？」

ノアの問いに、ミヤオは首を少し右に傾げます。

「ミヤオは……。んー、ミヤオは、ミヤオみたいな一杯みたらもういいニヤ。ファラーだいしきよーでしょ。アルマ、フェルデ、グリムアーにエカテナ、テーテ、アングリーでしょ。で、それからそれから……」

元老の名前を一つ一つ言い出しそうだったので、ノアもメルも「もういいから」と止めます。

「……。で、どうします？ コネミさんのところに戻りますか？」

今度はメルが尋ねます。ミヤオは左に首を傾けます。

「んー……。んーん。ノアとメルとレイとポーズちゃんは、でつかくて悪いヤツをやつつけるミヤ？ コネミのおじちゃんがバルバトスは悪いヤツって言うってたミヤ。それをやつつけるミヤ？」

ミヤオの問いかけに、ノアもメルも顔を見合わせます。

「んー。やつつけるっていうか……。まあ、復活させないのが目的なだけね。まあ、そうだね。間違っではないと思う」

ノアがそう答えると、ミヤオの目がランランと輝きました。

「じゃあ、ミヤオもバルバトスやつつけるー！ ノアについてくるー！」

ミヤオがはしゃいで言います。走り疲れてヨロヨロとやってきたポーズ太郎に、テンションが上がったミヤオがガブリと噛みつきました。頭をガツシリと捕まえられて、ポーズ太郎は半泣きに悲鳴を上げます。

「……。ミヤオ。よく考えなよ。魔神バルバトスって、滅茶苦茶こわくて強いんだよ？ そんなのと戦うことになるかもしれないんだよ？」

「そうです。危ないことが・・・たくさん待っているかもです」

ノアとメルがそう言うのに、ミヤオはパチクリと目を瞬かせます。「なんで？ だって、バルバトスって悪いヤツでしょ。だから、みんな困ってるんでしょ？ それをミヤオが倒せば、みーんな嬉しいミヤ。ドリードもデイレアスも、ダメーって言っていたけど。倒したら、きつと嬉しいミヤ。コネミのおじちゃんが、良いことはいっーっぱいしていいんだって言ってたニヤ。バルバトス倒せば、みーんな嬉しくなつて、みーんな仲良しになれるよ。きつときつとそうだよ！」

ノアもメルも驚きます。魔神バルバトスを倒して、ファルやメリンにも認められたスタッドのようになれると言っているのでしょうか？ いいえ。きつと違います。ミヤオは、種族間の差別や、自分が受けた不当な扱いを越えて、皆が仲良くなる方法をただ言っているだけなのです。

「ミヤオ・・・。アンタつてヤツは」

「ああ。ミヤオ。その心は誰よりも優しいのに・・・」

ノアとメルに抱きしめられ、ミヤオは目を白黒させます。

「ミヤー。皆仲良しがいいニヤー。ねー？」

ミヤオがポーズ太郎に笑いかけると、何がなんだか解らないといったようにポーズ太郎は困惑の表情を浮かべました・・・。

こうしてミヤオという新しい仲間が正式に入ったのでした・・・。

公園で他愛もない話をして過ごしていると、しばらくして、ファラーの長女のアルマがやってきます。

「皆様。どうやら話がついたようですわ」

お淑やかな美女、アルマがニコリと笑って言います。ノアたちはアルマについて、公園を出ていきました。

「なあ、アルマさん。ちょっと聞きたいんだけど」

ノアが言うと、アルマは人の良さそうな笑顔でコクリと頷きます。

「あー。ランドレークってどのへんにあるの？ もしかして・・・

歩いてとか、行けない？」

移送魔法陣が使えない以上は、徒歩も覚悟しているノアでした。どうい道のか解りませんが、這ってでもいくつもりなのです。しかし、せめて方角だけは聞いておかないと・・・ということなのです。

アルマは、静かに天を指さしました。それから、指先をちよつとだけ北の方に向けます。角度はほぼ垂直です。

「へ？」

「・・・だいたい、この方向ですわ。レムジンを北に半年。そして、世界一とも呼ばれる山脈を命がけで登って降りてで・・・まあ多く見積もつて一週間ほど。そして、それからさらに雪原を三日三晩かけて歩いてようやくたどり着ける場所です。まあ、普通に行ったら間違いなく凍死するか、食料が尽きて餓死でしょうね。秘境も秘境ですから」

さらつとそんなことを言つてのけるアルマに、ノアはゾーツと背筋が凍る思いをします。

「・・・では、スタッドさんは？ ああ。テレポートを使っているのでしょうか。でも、テレポートを使う以前はどうやって行き来していたのですか？」

メルの問いに、アルマは人差し指をクルリと回して円を描きました。どうやら良い質問だという意味のようです。

「ランドレークは、遙か昔はボーズ星人たちの故郷であつたと・・・スタッド様はそう論文に書いていらつしやっています。まあ、レムジンの学会は異端説だとして認めていませんけどね」

「ボーズ星人の・・・」

「故郷？」

自然とボーズ太郎に視線が集まります。ボーズ太郎は首を横に振りしました。

「し、知らないボー。そ、そんなの長老も言っていなかったボー！」
アルマはコクリと頷きます。

「ええ。遙か昔のことですし……。しかし、二十年前にレムジンと並ぶ大首都がランドレークに存在する以前から、移送魔法陣はすでにランドレークとレムジンを結んでいたのです。その移送魔法陣はメリンの魔法とはちょっと違います」

「・・・古代魔法」

メルが呟くのに、アルマは再び指で円を描きます。正解とのことです。

「ボーズ星人が、遙か昔に・・・古代魔法を用いて、ランドレークと今あるレムジンとを結びつけた。そう考えた方が自然ですね。現代にある魔法よりも高度であつたといわれる古代魔法ならば、もしかしたら私たちが考えているよりももっと優れた移動手段があつたのかもしれない」

「へー。アンタらすごいんじゃない」

ノアが言うと、ボーズ太郎は照れたように頭をかきました。

「ボー。おだてても、私の力じゃランドレークには行けないボー」
そんなやりとりをしながら、あのお屋敷の門をくぐります。かなり広い庭園ですが、ほとんど手入れがされておらず、放置されていて荒れ放題です。

正面玄関の前に、レイとファラー、そして、その娘たちが立っていました。

「ファラー大司教、ここは？　なんで、アタシたちはこんなところに・・・」

実はノアたちはなぜここに案内されたか全く聞いていなかったのです。

「ここはバーボン先生のお屋敷だぜ」

次女のフェルデが鼻の下を擦りながら言います。ちょっと色黒なところを除けば、男の子っぽいその姿はちょっとノアに雰囲気似ているかもしれません。

「バーボンさんのお屋敷!？」

ノアが驚く前に、メルが飛び跳ねました。

「な、なんで？ アタシら、別にバーボンおじさんの名前なんて・・・」

「うっふん。バツカレス盗賊団。その専門主治医がバーボン先生だなんて調べがついてますことよ。ノアちゃんがバーボン先生と古くからの馴染みだなんてすぐに予想が付きますわ。レムジン大教会の情報網を甘くみないで欲しいですこと」

三女グリムアーが、無駄に色気をはなつてクネクネしながら言います。ローブの下から揺れる巨乳を見て、レイの鼻からブツと鼻血が飛び散りました。

「・・・元老院の指示で・・・テムは宿とれないから・・・泊まるなら・・・ここしか・・・ない」

四女エカテナが眼鏡の奥から陰気なオーラを放ちながら言います。でも、相変わらずフアラアの腕を握ったままです。

「ほらほら！ 早く入ろうよー！」

五女テーテが、ミヤオと一緒ににはしゃぎながら言います。

「うむ！ そうさのお！ まずはゆるりと座って作戦会議だのお！ 売り物件にだされておったんであるが、不動産屋とは話つけちゃう！ 安心してここをレムジンの本拠地に使うがいい！！」

末娘のアングリーがグチャグチャ何かを噛みながら言います。どうやらスルメのようです。口の端から脚がピョコピョコと動いて見えます。

「ほら、ダーリン！ 親父殿も！ ささと、入らんと！ レムジンの兵隊にみつかったら面倒だわい！」

「お、おい！ は、離せ！」

「ガッハツハ！ 照れんでよろしいわい！」

アングリーがレイをがつつり掴んで持ち上げます・・・片手で。その反対の手で、バーンと玄関を押し開けました。ええ。別に鍵がかかっても開きそうな勢いです。

長年使っていなかった中は、なんだか埃っぽい感じがします。六人の娘たちがそれぞれ手分けしてカーテンと窓を開きに向かいます。

「これが、バーボンおじさんが住んでいたところかー」

ノアは興味津々に、居間にあるものを見回します。金の燭台、煉瓦の暖炉、剥製の熊、高価そうな調度品の数々……いえ、別に金目の物を物色しているわけではありませんが。それなりに良い暮らしをしていたのだということが伺わせられます。

「これ……もしかして」

メルが恐る恐る棚の上にあつた写真立てを手に取ります。上にかぶっていた埃を払い、ノアがそれをのぞき込みました。

笑っている十代後半と思わしき青年。白髪があるわけでも、眼帯をつけているわけでもない幸福そうなその人物はバーボン本人でした。その隣に、いかにも優しそうな女性の姿。おっとりとしたお嬢様のように、愛らしい感じがします。その彼女は親しげにバーボンの腕に自分の腕を回していました。

「あ。エリムさんだ……。懐かしい。レムジンにいたから、滅多に会えなかったけれど……。盗賊の森に来てくれたときは必ずアップルパイ作ってくれたんだ。『男所帯で甘いお菓子なんて滅多に食べられないから可哀想』って言うてね。アタシのことを娘ってか……。妹みたいに可愛がつてくれたんだ」

ノアが説明するのに、メルはなんとも言えない複雑な顔をします。

「あ。メル……。ごめん。アタシ、メルの気持ちも考えないで……」

「いえ。いいんです。ただとても素敵な女性だな……。って思ったから」

そうは言いましたが、メルはちよつと寂しそうな顔をしていました。

「この時のバーボンさんは……。とても幸せそうですね」

「うん。そうだね……」

メルは写真のバーボンをもう一度じつと見つめ、それから静かに元の場所に写真を戻します。

「ノア。すべてを解決したら……。私がアップルパイを焼いてあげ

ますね」

「え？」

唐突にそんなことを言い出すメルの本意をはかりかねて、ノアは首を傾げます。

「私もエリムさんに負けてられませんから……。私とエリムさんのアップルパイ。どっちが美味しいか判定して下さいね」

メルがニコツと笑って言うのに、ノアは大きく頷きました。

「おい。ファラー大司教が呼んでいる。裏庭にきてくれって」

レイがヒョイツと居間に顔を出して言います。

「あ。うん。今行くよ」

ノアもメルも頷き、レイについて行きます。どうやら他の皆はすでに裏庭に行っているようで、レイはわざわざノアとメルを探しに来たようでした。

「なあ、レイ」

前を歩くレイに、ノアは呼びかけます。レイはチラツと振り返りました。

「議会議堂で土下座したじゃん。アタシ、あのときアンタのこと、ちよつと格好いいなって思ったよ」

「ええ。私もそう思いましたよ」

ノアとメルがそう言うのに、レイはカーツと赤くなって、前を向いてしまいます。

「な、なんだよ……。あんなみつともないところ、さっさと忘れてくれよ」

耳の先まで真っ赤になっていることから、きっと心底はずかしいのでしょう。ノアとメルは顔を見合わせてクスリと笑いました。そして、二人で示しあわせて、左右からレイを挟む形にして両腕をとります。

「お、おい！　なんだよ！？」

両腕に絡んでくるノアとメルに、レイはドギマギしました。意外とこういうことにはシャイなレイです。

「ほら、美女二人を案内するんだからさ、腕くらい組むのが当然だろ」

「ええ。そうですよ。レイ」

二人に言われ、レイは口を少しモゴモゴ動かしましたが、結局は何も言わずにそのまま三人揃って歩き続けました……。

海に面した絶景。裏庭からは、緩やかなU字を描く岬を一望できるようになっていきます。さざなみの音に、爽やかに吹き抜ける潮風が心地よいとても良い場所です。

老朽化してはいますが、素敵な白いウッドテーブルとチェア。そこにフアラールたちは座っていました。

「さて。作戦会議といこうかね」

フアラールが席に座るよう促し、ノアたちもフアラールと向かい合わせに座ります。

「陸路は当然ながら、聖剣エイストの力があるスタッド様ほどの魔法力でもない限りはテレポートも不可能ですね」

アルマが言うのに、フアラールはコクリと頷きます。

「やはり移送魔法陣を使うほかはない。こうなれば道は一つ……重々しく言うフアラールに、皆がゴクリと唾を飲み込みます。

「ここは強行突破しかないだろうね！」

さぞかし良いアイデアがでてくるものと思いきや、あまりの作戦に皆が椅子からズッコケます。

「え、ええー？ で、でも……そんなことをしたら、大司教の立場がないだろ！？」

「それに、先の元老たちとのやりとりで警戒されているのでは？ 見張りの兵士の増員が考えられるし……」

ノアとレイがそう心配そうに言うのに、フアラールは首を横に振ります。

「世界の命運がかかっているのだよ。私の立場などどうでもいい。それと見張りは我々に任せてほしい。必ずお前さんたちをランドレ

「クに送り届ける。それが私の宿命なのだよ」

「ファラーと六人の娘たちが親指を立てます。」

「私の血を受け継いでいるだけあって、この娘たちもファールながらそれなりの魔法力を持っている。ミルミから避難してきた手練れのメリンの魔法使いがいるが、それでもそれなりに時間ぐらいは稼げるさ」

「久し振りに大暴れできますね」

「うっし！ 腕がなるぜ！！」

「うっふん。邪魔するならお置ききですわ」

「……やっちゃおう」

「アハハ！ 時間稼ぐどころかみんな倒しちゃうもんね」

「おう！ ダーリンのためならば、命なんて惜しくないわい！」

六人の娘たちもそれぞれやる気のようにです。アングリーがレイに向かってバツチリとウインクしたので、レイはなんだか気分が悪そうに青くなりました。

「ファラー大司教。それに司教のみんなも……」

「ノアたちは、自分たちのためにこうまで協力してくれることを心からありがたく思いました。」

「さて。話は決まったね。決行は……明日の晩がいいだろう。それまではここでゆっくりと……」

「ファラーがそう言うって立ち上がるうとした瞬間、地面が大きく揺れました。」

「こ、こ、これは何だポー！！？」

「ミヤー！ ユラユラするニヤー！！」

ボーズ太郎とミヤオが大騒ぎして飛び跳ねます。まだ収まりません。ゴゴゴゴゴという深い地鳴りと共に、揺れはますますひどくなつていきます。

「な、これちよつと……半端ない！？」

「なんだ！？ 天変地異の前触れか！！？」

ノアとレイも立ち上がれず、地面に手をつけて顔をあげるのがや

つとです。

「み、皆さん！ あれを・・・あれを見てください！！」

メルが何かに気づき、なんとか空を指さします。皆が揺れを耐えながら、メルの指さす方向に目をやります。

最初、黒い雲が海の上を覆っているものだとばかりノアは思いました。しかし、よく目を凝らすと、小さな黒い粒のようなものが集まって、ひとかたまりになって動いているのだと解ります。それはだんだんとこちらに向かって近づいてきているようでした。グニヤグニヤと形を変えながら、どんどん大きくなっていきます。

「あ、あれは・・・ガーゴイル？ そんな・・・あんなに多く、だと？」

レイが唾然として言います。ようやくノアの目にもそれがなんだか解りました。二本の牙を剥き出しにし、大きな翼で飛び交う怪物。赤い目をぎらつかせ、咆吼をあげています。それが何十、何百、何千・・・いえ、何万もの大群を作り上げているのです！

「馬鹿な！ ランドレークに住まう悪魔だ・・・。なぜそれが・・・」

「フアラーも信じられないと言わんばかりに頭を振ります。

「理由なんてどうでもいい！ 狙っているのはきつとこのレムジンだ。なんとかしなきゃ！」

ノアがそう言います。ひどくなっていた揺れはようやく収まってきました。どうやら、あの悪魔の集団がやってきたための地震だったようです。きつとレムジンに住まう他の人々も、この地震のせいだ、あの異様なガーゴイルの集団に気づいたことでしょう。

皆が立ち上がり、それぞれ武器を構えます。

急に襲来したこのガーゴイルの大部隊とノアたちはどうやって戦うのでしょうか。そして、ノアたちはスタッドの待つランドレークに無事に着くことがはたしてできるのでしょうか・・・。

第十一章 大司教ファラーと元老院（後書き）

少し遅れましたが、十一章のUPです。なんだか時折にチェックに来て下さる方がいるようで・・・感謝ですね。

ファラー大司教は、本当はデムでジャスト城の執事だった・・・という設定だったのですが、まあゲーム中では許されても小説では違和感がありましたので。娘の司教たちも後付設定です。コネミさんらへんからかなりオリジナルになってます。議会議堂でのやりとりももつと短いですが、ゲーム中にはバーボンの屋敷もできていませんからw ガーゴイル襲来もありませんw

次章ではレムジンを守るためにガーゴイルとの死闘がはじまります・・・と。

第十二章 死闘！ レムジン陥落！？

ガーゴイル大部隊が到着する前に、レムジンには守備を固める猶予がありました。ドレード元老長の指揮下で、ファルの兵士たちとメリンの魔法兵の部隊が即座に結成されます。

街の外壁に魔法兵たちの第一陣が構え、住宅区の間弓兵の第二陣、そして大教会と元老院議会議堂があるところに最後の防衛ラインである第三陣の歩兵部隊が配置されます。

ノアたちは一番の最前線である第一陣に向かってまっしぐらに走っていました。

「やっぱり大事なものは元老たちの命ってことかよ！」

街の中心部に兵士が集まりつつあるのを見て、ノアは心底イヤそうな顔をしました。

「しかし、事実上の司令塔だ。ドレード卿が倒れば、否応なしにレムジンの防備は崩れるさ」

ファラーが魔法で空を飛びながらそう言います。高くから敵と味方の動きが見えるなかなか便利な能力です。

「ファラー大司教。あと、どれぐらいでヤツらはこのレムジンに着きますか！？」

レイの問いかけに、ファラーは海の方を向いて目を細め、眉を寄せます。

「・・・あと十五分と見たが、。徐々にスピードを増しているね。」

だが、どうやらメリンの魔法部隊の射程距離には入ったようだ」

そう言い終えないうちに、外壁の上から、様々な魔法が放たれます。

ドヒューン・・・ドババババン！ キューイーン・・・ズガガガガン！

炎、氷、雷・・・各自得意な魔法が放たれます。それが当たった何体かのガーゴイルは落ちていくのですが、一向に数が減っている気がしません。むしろ下手な刺激に、敵はいきり立ってますます勢いを増していくかのようです。

「あんなに強い魔法を・・・使っているのに。まったく手に負えないなんて」

メルが不安気に言います。敵の勢力はどれほどだと言うのでしよう。皆目検討もつきません。メルだけでなく、他のみんなも顔を曇らせます。

「ええーい！ 気張れ！ 気張らんか！！ ヤツらを街の中に入れてささせてはいかん！！ レムジンを我らが故郷ミルミ城の二の舞にしているのかのじゃあ！！」

外壁に並び立つ魔法兵の先頭で、大きい湯を入れているメリンの老人がいます。そう言う自身も魔法の杖を振るい、湯を入れながらもファイヤーストームやブリザード、ライトニングという魔法を使つて応戦しています。

「魔法兵長殿とお見受けする。戦況はいかがか？」

ノアたちより一足先に、ファラーがその老人に声をかけました。

「おお！ ファラー大司教！ 見てみるがええ！ どうもこうもあるかい！ ワシらの攻撃などじゃビクともせん！！ 今は猫の手も借りたい・・・いや、ファルの手はかりておるがな！ そういうことじゃなくてな！ こんなこと、魔神バルバトスが直接攻めて来た時以来の危機的状況じゃわい！！」

魔法の音に掻き消されてしまわぬよう、魔法兵長は大声でそう言いました。

「食い止めきれんだろうか？」

ファラーの問いに、一際大きな魔法を放つてから、魔法兵長は重々しく頷きました。

「・・・うむ。悔しいが、せいぜい数を少しばかり減らすのが関の山じゃ。だが、ここで食い止められるなどは考えておらん。この

ままいったん陣を退き、わざと敵を中に誘い込む。そして、外から魔法で狙い打ちにし、内から弓兵と歩兵で畳み掛ける。ドレード閣下の策は、確実に前後から仕留める戦法じゃ」

ニヤリと魔法兵長は笑いましたが、その目は笑ってはいませんでした。そうです。敵の数を考えたとき、この戦法がどうしても上手くいくようには思えないからです。しかし、他に方法がないから致し方なく行わなければならないということなのです。

ファラーが壁から降りてきました。ノアたちの戦闘準備は万端です。

「・・・このままではレムジンは崩壊する」

重々しく言うファラーに、ノアも唇を噛みしめます。

「でも・・・逃げるわけにはいかない」

勇気を奮い立たせます。ポーズ太郎も、震える身体を一生懸命押さえつけます。

「来おつたぞ！！ 左右に散れ、各自最大の魔法を持って向かい討てッ！！」

魔法兵長が指示を出すと、二人一組になって、メリンの魔法兵たちが左右に散らばっていきます。

ついにガーゴイルの先頭が、ガシツと外壁にとりつきました。大きな咆吼をあげ、つむじ風を巻き起こしながら、我先にと、次から次に、壁に激突するのもお構いなしに乗り込んでいきます。

左右に散った魔法兵たちは、一人が攻撃魔法を使い、もう一人がそのサポートをするという見事な連携をとり、乗り込んできたガーゴイルを誘導して行きます。そうです。わざと街の中に誘いこんでいるのです。

「娘たちよ、メリンの魔法兵たちのサポートを！ 出来る限り分散させ、敵の戦力が固まるのを阻止するんだよ！」

ファラーが指示を出すと、司教の娘たちがそれぞれ走り出します。見た目はただの少女でも、有事の際の心構えはちゃんと出来ているのです。魔法兵に負けないぐらいの魔法で、ガーゴイルたちに立ち

向かっていきます。

「私たちも行こう！」

ノアたちも遅れを取るまいと走り出します。

ガーゴイルが壁からのつそりと顔を出しました。ちょうどノアたちの目の前です。遠方で見ただ感じよりも、遙かに大きい姿です。大柄な大人よりも一回りは大きいでしょうか。

顔は狼のようで、コウモリのような羽と、ドラゴンの様なかぎ爪を持っていきます。炭のように真っ黒い身体をしており、鱗のような固い皮膚で覆われていて、それはまるで石の鎧を着込んでいるかのように見えます。

「二十年前、魔神バルバトスがミルミ城を陥落させる時に使役したポピュラーな悪魔どもだ！ まさかこんなに数がいるとは思わなかったが、魔物より遙かに手強い！ 油断するな！」

「こんな怖そうな悪魔のどこに油断するポーおー！！」

レイの忠告に、ポー太郎が泣きながら反論します。

「ミヤー！！ 悪いヤツはやつつけるニヤー！！」

先頭を走っていたノアよりも先に、ミヤオが飛び出します。高く跳躍したかと思うと、ガーゴイルの顔にとり付いて、爪を立てて引っ掻きます。

「おー！ 頼りになるじゃん ミヤオ！」

ノアがピューッと口笛を吹きました。そして、ミヤオが続いてガーゴイルの胴体にダガーで斬りつけます。

「轟き叫ぶ大気、我呼ばれるは聖なる雷光。ライトニングー！！」
ノアとミヤオがその場から飛び跳ね、怯んでいたガーゴイルの頭上にメルが放った雷の柱が見事命中します。ガーゴイルは消し炭と成って消え果てました。

仕掛けようとしていたレイが、抜いた剣を手にポカーンとします。それは周囲の兵士たちも同様で、あつという間に一体の悪魔を倒したのが、女の子たちだったということに驚いているようでした。

「よし！ まずは一体！！ 次々いくよ！」

「ニヤー！」

「ええ！！」

ノアとミヤオとメルは一丸になって、次のガーゴイル目指して走り出します。

「お、おいおい。うちの女子は・・・強いなあ」

「ま、負けてられないボー！」

レイとボーズ太郎が顔を見合わせてニヤリと笑いました・・・。

次から次へと、ガーゴイルたちは侵攻してきます。ノアたちの活躍もあり、敵の数は確実に減っているはずでした。しかし、それよりも乗り込んでくる量が多いので・・・楽になる気配がありません。「おい！ 右にいるぞ！！ 第三通りを通って中央に向かわせる！」

「負傷者！ 救護班はどこだ！ 回復魔法を使えるのをこっちにまわしてくれ！！」

「第六班！ 音信不通！！ 安否不明！！！」

兵士たちの叫び声が、あっちの通りからも、こっちの通りからもします。

「混乱しているね。指示が行き渡っていない・・・」

建物の影に隠れながら、周囲の様子を伺っていたファラーが言います。顔は煤で汚れ、高価そうだったローブも今やボロ切れのようです。

最初、ファルとメリンは違う陣形をとっていたはずですが、今では両方がごっちゃになってしまっています。当初計画されていた戦法ではありません。いまでは弓兵が追い込み、歩兵と魔法兵両方で仕留めていくというスタイルです。

「それだけ、敵の攻撃が苛烈なんです」

レイが額の汗を拭いながら言いました。もう何体も敵を斬っています。剣先はちよつと刃こぼれし、敵の黒い血がべつとりと付いていました。マントの裾でそれを拭いますが、もう何度も拭っている

のでマントの方もネットネットに付いていて意味がありません。

「・・・固い！ 固すぎなんだよ！ アイツら！」

「ニヤー。ミヤオの爪もヒリヒリするうー」

ノアはダガーを握っていた手を握ったり開いたりさせます。ミヤオは自分の爪を見て、悲しげにペロペロと舐めました。固い敵に斬りつけているせいで、手がジンジンと痺れて感覚が鈍くなっているのです。

「ええ。攻撃力はさほどでもありませんが・・・。防御力が高すぎます。ライトニングでも、一発や二発でも倒せない時がありますしメルもホウと溜息をつきました。かなり魔法力を消耗したようで疲れ切っています。

「多勢に無勢だ・・・ボオー」

ボーズ太郎もフラフラです。さつきから負傷した兵士をかたづけしから治療しているのです。頬は痩けて今にも倒れてしまいそうです。

「・・・ああ。キリがない。しかも、まだ」

ファラーは頭上を見やります。皆も自然と頭上を見やりました。千体近くのガーゴイルがレムジンの周囲を旋回して飛んでいます。それはハゲタカのように、弱った人間をさがして飛び回っているのです。

「クソ・・・。どうすりゃいいんだ」

そうやって、ノアが悪態をついて地面を殴りつけた時です。何かが微かに聞こえました。

「・・・さーん。・・・かあさーん。・・・かあさーん。・・・おかあさーん！」

子供の声です！ ノアたちは一斉に声の方に振り返りました。

「お母さーん！ どこ！？ どのなのー！？ うわああーん！！」
小さな女の子がぬいぐるみを引きずりながら、大通りを歩いているではありませんか。

「そんな馬鹿な！ 民間人がなぜ！？ シェルターに避難している

はずなのに！」

「ファラーが驚いて声を上げます。」

兵士以外の人々は、各家にシエルターがあつて、そこに避難しているのです。そこに逃げこんでいればまずは安全です。だから、街の中に誘い込んで戦うという無茶な戦法がとれたわけなのですから。

獲物を物色している目ざといガーゴイルたちが、その無防備な少女に気づかないわけがありません。何匹かが旋回を止めて降りてきます。

「危ない！」

咄嗟にノアたちは飛び出していました。しかし、ガーゴイルの方が女の子に近いです。大きな牙が、その小さな女の子の頭上に噛みつきこうとした瞬間でした。

「・・・下郎め。失せろ」

剣筋一閃。目にも止まらない一撃が、迫ろうとしていたガーゴイルたちの上を奔ります。そして、一刀両断。ガーゴイルたちは真っ二つになって崩れて落ちました。

「ド、ドレード元老長？」

ノアは目を疑いました。しかし、間違はなくそれはドレードです。自分の身の丈ほどもある長剣を片手に、女の子をかばうように立っていました。

「・・・お前たちか。まだレムジンにいたとは、な」

ドレードは青白い顔をして、ノアをチラリと見やります。その顔は非常に疲れていました。ずっと戦い続けていたのでしょうか。よく見ると、傷や埃にまみれています。

「この子を・・・議会議堂に」

近くにいた兵士に、泣きじゃくる女の子を託します。兵士は敬礼して、女の子を抱きかかえて走っていきました。

「お前たちはレムジンとは関わりない者たちだ。さっさと立ち去れ。ガーゴイルどもがシエルターに気づきはじめた・・・。兵の回らな

いところでは、シエルターを壊されて民間人が無防備に襲われている。全て壊されるのも時間の問題だ。もう防ぎきれそうにない」

どうしようもないと言わんばかりにドレードは首を横に振ります。

「ドレード卿。あなたが最前線に出て、誰が指揮を？」

ファラーは少し咎めるような言い方をしました。

「……誰が指揮をとろうと同じことだ。お前たちの言ったことの方が真実だった。魔神バルバトスは復活するのだろう。遅かれ早かれ、このままレムジンは滅びる。それならば、一匹でも道連れにしたほうがマシだと考えただけのこと。それがファルの戦士だ」

ドレードはフツと笑って言います。気障な笑い方でしたが、ノアたちが初めてみるドレードの笑みです。

「……理性的なドレード元老長閣下の言葉とは思えませんね」

レイがそう言います。なんだか、ちよつと怒っているようでした。

「……レイ王子」

「民の指導者たる人が、そう簡単に滅びるなんて口にすべきではないと思います。指導者は民を守る義務がある。そのためにはどんな手段も用い、決して諦めるべきじゃない！ あなたの背中にはファルの……いや、レムジンにいるファルやメリンたちの命がかかっている。だったら、それを救うべく最後まで最善を尽くすべきです！ 敵を道連れにすることがあなたの役目じゃない！！」

レイの言葉に、ドレードは軽く目を伏せました。その言葉を噛みしめているようです。ゆっくり目を開くと、もうその瞳には、ノアたちへの冷たさは消えていました。

「……フツ。デムに、真の王がいたわけか。我々が気づかなかった。いや、違うな。認めたくなかったただけなのだ。ファルよりもデムが優秀だということに。英雄スタッド、医師バーボン。かの二人をして、デムの有能さは証明されていたのにな。我々は見ぬように、気づかぬようにしてきた」

自嘲するドレードに、メルが首を横に振ります。

「それは違うと思います。優秀とか……優秀じゃないとか。ファ

ルだからメリンだからデムだから・・・ではないと、私は思います。私はそれをノアから・・・教わりました」

自分の名前を出されて、ノアはちよつとびっくりした顔をします。ドレードは何も言わず、ちよつと考えるように自分の足下を見ました。

「俺たちは諦めません。レムジンに残つて・・・最後まで戦う。そして、皆を助ける」

レイはそう言つて、そのまま踵を返して行つてしまいます。慌ててポーズ太郎もそれを追いました。メルとフアラーは軽く一礼してからレイたちに続きました。ミヤオだけはちよつと迷つた素振りをして、「バイバイ」と手を振つてから皆についていきます。

ノアは一人残されるドレードを見て、ちよつと気まずそうにしながら口を開きました。

「んー、あ、あのさ。アタシは・・・ちよつとアンタのこと見直したよ。偉い人なんて、真つ先に逃げたり隠れたりするもんだろ！でも、一番偉いアンタが前にでて戦っているんだ」

「・・・私は元老である前に、戦士だ」

ドレードがノアに振り返つてそう言つた瞬間でした。ノアの方を向いたドレードの目が、ノアの先にあるものをとらえて驚きに見開かれます。

「おい！ 伏せろッ！！」

「ミヤオ？」

ドレードがノアの横をすり抜けて走つていきます。そして、ちよつと振り返つたミヤオを抱きかかえるように飛びました。

「うにゃああ！？」

左手の建物の隙間に隠れていたガーゴイルの一匹が、鋭い爪を振り下ろしたのです。それが一番最後を歩いていたミヤオを狙っていたのでした。

鋭利な一撃で、ミヤオをかばつたドレードの左腕がズツパリと切れて吹っ飛んでいきます。それでもミヤオが地面に叩きつけられな

いよう、ドレードはミヤオを抱えるようにして、自分の背で地面に着地しました。

さらに追撃しようとしたガーゴイルでしたが、ノアたちの総攻撃にあつてすぐに倒されました。

「大丈夫か！？ ボーズ太郎！！」

ボーズ太郎が、すぐさまドレードの失った左腕の治療を始めます。最低でも出血を止めなければ死んでしまいます。

「ど、どうして・・・ミヤオを助けて、くれたニヤ？」

ドレードは苦しそうに顔を歪めていましたが、フツと口元を笑わせました。

「これは・・・罰、だろう。お前たちを信じなかったことと、家族を捨てたことを看過した事だな」

「え？」

ミヤオは首を傾げます。それはノアたちも同じでした。しかし、フアラールが何かに気づいたようで眉をピクリと動かします。

「ドレード卿。もしかして・・・ミヤオさんはあなたなの？」

ドレードはミヤオの目をジッと見ます。ミヤオもドレードの目をジッと見ました。

「・・・妹だ。今は亡き父と母が、レグー砂漠に捨てたのだ」

「ミヤオの・・・家族？ おにい・・・ちゃん？」

ミヤオは戸惑ったような顔をします。いきなり知らされた真相ですから、動揺するのは致し方がないことです。

「・・・血は止まったポー。でも、腕は」

ボーズ太郎が申し訳なさそうに言います。吹き飛んでいった腕は瓦礫のなかで、もはやどこにあるか解らないのです。さがしだして繋げている暇もなかったのです。

「・・・世話をかけた。片手だけでも充分だ」

ドレードは無い腕を隠すかのようにバサツとコートの袖を降ろします。そして、長剣を杖がわりに立ち上がりました。

「ちゃ、ちゃんと治療した方がいいポー！ もう無理は・・・」

心配する皆をよそに、ドレードはクルリと背を向けます。

「無理ではない。私はレムジンの指導者、元老長だ。その責務を果たす。レムジンは陥落させぬ」

この言葉に、レイもフアラールも強く頷きました。これが本来のドレードの姿なのです。

「・・・この危機を乗り越えたら、ミヤオ。私とゆっくり話してはもらえないか？」

ドレードが尋ねるのに、ミヤオは目をパチクリとさせました。

「うん。・・・うん！ 解ったニヤ！」

嬉しそうにミヤオは笑います。背を向けていたので解りませんが、ドレードは少しホツとしたように見えました。

「・・・ノア。持っていくがいい」

ドレードが胸ポケットから、金色の鍵を取り出してノアに突き出します。

「これは？」

「ランドレークに繋がる移送魔法陣の部屋に入る鍵だ。場所は議会議堂の裏口にある」

ノアの手になんかを渡し、ドレードは長剣を振るいました。負傷したドレードを餌食にしようと、いつの間にか多くのガーゴイルたちが迫ってきていたのです。

「行け！！ スタッド殿の元に！！」

こう言って、ドレードは敵陣の中へ突っ込んでいきました・・・

元老院議会議堂正面。そこに辿り着くまでに、幾百ものガーゴイルたちを倒さねばなりません。終わり無く迫りくる敵軍ですが、先ほどよりは戦いが楽になっています。というのも、きつとドレードが最前線で指揮をとりはじめたからでしょう。兵士たちの動きがスムーズかつ効率よく、格段に良くなっているのです。

「・・・このままガーゴイルを放っておいて、私たちだけランドレ

「クに行くのはいいことなのかな？」

道の途中で、ノアはポツリと言いました。勢いで目指しましたが、なんだか後ろ髪を引かれるような思いをずっと抱いていたのです。

「・・・ノアさん。お前さんが行かなければ、これ以上の悲劇がおきるかもしれないだよ」

ファラーがノアの肩をポンと叩きます。

「でも！ アタシは！！！」

ノアは納得ができませんでした。だって、ファルもメリンも皆力を合わせてレムジンを守ろうと戦っているのです。最初はレムジンという街は好きになれませんでしたし、そこにいる人々も高慢で横暴な人ばかりでイヤだなと思っていたのは事実です。でも、それでも、ノアはこのレムジンを何とか助けたいと思っていたのです。

「・・・『死んで良い命なんて一つもない』。スタッドはアタシを助けてくれた時そう言った」

ノアはグツと手渡された鍵を握りしめて言いました。

「お前さんは・・・若い頃のスタッドに似ているね」

ファラーは懐かしむような顔でノアの顔を見やります。

「え？ それって・・・確か、ボーズ長老にも言われた」

「ああ。彼もボーツとして見えるように見えるが、そうやって深く悩んでいたもんだ。『人が全員幸せになるにはどうしたらいいか』・・・そんな人のことばかり考えているヤツだったよ。ノアさん、お前さんも・・・ぶっきらぼうでちょっと雑な女の子に見えるが、そうやって人のことばかり考えているんだね」

誉められたのか、貶されたのか解らなくて、ノアはボリボリと自分の頭を掻きました。

「レムジンのことは心配しなくてもいいさ。強力な助っ人と呼んだからね」

「助っ人？」

ファラーがそれを説明しようと口を開く前に、バツサバツサという無数の羽ばたき音と共にもの凄い風が吹き抜けます。

顔を上げると、何やら街の中央にガーゴイルが集結しているのが見えます。真つ黒い黒雲のように見えます。それを見て、メルは眉を寄せました。

「あれは・・・魔法陣？」

「なにをする気なんだ？」

ガーゴイルたちの動きは何やら規則性をもっていて、メルの言う通り魔法陣を描いているようにも見えます。

「『常闇の石窟に眠る者よ。我大いなる門を開きたもう。光明への怨恨を胸に掘進し、示威せよ・・・サモン・ロックキング！！』」

ガーゴイルたちの中心から、甲高い魔法の詠唱が街中に響き渡ります。そして、稲光がガーゴイルたちを包みます。それぞれが魔法力を帯びて黄金色に輝きました。

「なんだと！？ 召還魔法・・・それも、こんな上級な魔法！？ い、いつたい誰が！！？」

フアラールが目を見開きます。大司教が驚くほどの魔法です。それが如何に危険であるかは、魔法を扱えないノアにも解りました。

ガーゴイルがピタツと動きを止めます。そして、そのガーゴイルたちの中央から、何か大きなものが現れて出てきます。それは大きな、大きな巨岩でした。山ほどもあるかと思われるそれが、尖った先端を下にして出てきたのです。魔法陣を形成していたガーゴイルたちは、無惨にもその大岩に押しつぶされて叩き落とされて行きま

す。
「そ、そうか・・・。ガーゴイルはそのために送り込んできたのか！ あの、デカイのを・・・街の中心に落とすために！！」

フアラールだけでなく、皆の顔に絶望が浮かびます。ガーゴイルの相手だけで手一杯だというのに、もう為す術がありません。しかし、考えている暇もなく巨石は徐々に落下を始めています。

「ウゴゴゴゴゴッ！！！！」

巨石の落ちる音でしょうか？ いいえ、違います。なんと、巨石が鳴いたのです！ よく見ると、それは人の形をしてました。尖つ

た先端に、四角い目のようなものが付いています。魔法陣の端からは、指先らしき小山が見えました。そうです。山のような巨石は、一体の悪魔だったのです！

「ま、魔神バルバトスと同じぐらい大きさがありそうボー！！ な、なんだボー！！？」

「グッ、あれはロツクゴーレムだ。伝説の類だとばかり思っていたが、ランドレークにある巨石が魔神の魔力を受け、人の魂を得て形を為した怪物だ」

レイが剣を握りしめながらいいます。エリザベートなんかよりもっと大きい相手です。どう戦えばいいのかと思案を巡らします。

「あれが、元人間かよ！？ 信じられるか！」

ノアが叫びます。ランドレークに行きたいけれども、こんな状況では本当に行けません。あんなのが街中で暴れたらひとたまりもないのですから。かといって、ノアたちの力でどうにかなるようなものでもなさそうです。どしたらいいか解らず、ノアは頭を掻きむしりました。

「・・・迷うなんてノアらしくねえな」

ノアの頭を誰かがポンと叩きました。聞いたような声です。ノアはハッとして振り返りました。

「バーボンおじさん！！！？？」

「おじさんじゃねえって」

煙草をふかしながら、バーボンはニツと笑います。なんと、いつの間にかバーボンがノアの横に立っていたのです。

「バーボンさん！！？」

「なんで、どうして・・・おじさんがここに！？？」

ノアとメルが詰め寄ります。バーボンはジャスト城に囚われの身になっているはずです。それがどうしてレムジンにいるんでしょうか？

「俺だけじゃねえぜ。ほら」

バーボンが親指で指し示します。そこには、バッカレス、シユタ

イナ、ヤグル・・・そしてバツカレス盗賊団の皆が集結しているのです！

「親分！！ シュタイナ！！ ヤグル！！ それにみんなも！！」

「おう！ ノア！！ なにやら苦戦しているみたいじゃねえか！！
ガツハツハ！」

腰に手をあてて豪快に笑うバツカレス。その姿はなんだか懐かしく感じて、思わずノアは涙ぐみそうになりました。

「・・・でも、どうして？」

メルがバーボンの顔をジッとみて尋ねます。久し振り会ったせいか、メルはちよつと緊張気味です。バーボンは目を優しく細めました。

「フアラー大司教の計らいさ」

バーボンがフアラーを見やります。フアラーはしたり顔でコクリと頷きました。

「疲れたー。父さんのようにテレポート上手くないから、時間かかっちゃまったよ」

バツカレスの横で、疲れた顔をしているフェルデが魔法の杖を振りながら言います。

「ごころうさん。フェルデ。実は・・・ガーゴイル部隊が迫っていると見た時、私はこのフェルデをジャスト城に送り込んだのだよ。」

さすがにこの多人数をテレポートするのは大変だったみたいだがね「フアラーがそう言うのに、ノアたちは驚いた顔をします。」

「そ、そんな・・・。なんで？ アタシは親分やバーボンおじさんのことは言っていないのに！」

「そうか・・・強力な助っ人とは、盗賊団のことか。全部、スタッドの指示ですか？」

レイが何か勘づいたように言います。フアラーはコクリと頷きました。

「ノアさんの事も知っていたんだ。スタッドがバツカレス盗賊団を知らないはずがない・・・。何かあった際には彼らに助力を求め

よう言われていたんだ。バーボン医師がいたのは幸運な偶然だったけれどね」

何もかも見透かされているような気がして、ノアはなんだかあまり気分がよくありませんでした。

「スタッドはいつたい・・・何をしようとしてるんだろ」

「そいつを見つげにランドレークに行くんだろが。さっさと行って帰ってこいや！」

バツカレスがノアの頭をガシガシと撫でつけます。

「で、でも・・・いくら親分たちが来たからって、あんなデカイのを」

ノアはロックゴーレムを見やります。もう身体の半分が出ています。それがブンブンと腕を振り回すだけで、近くにあった建物が吹き飛びました。あまりにスケールの違う敵に、ファルの兵士たちも、メリンの魔法兵たちも茫然自失としています。

「フン。オ・パイなんかとやりあうのよりはマシだ。ああいうバカデカイのをトラップに引っかけるなんざ、楽なもんだぜ。おい、野郎ども！ ありったけのロープを持ってこい！ で、周りの兵士どもに協力させて、大穴掘るぞ！ 急げ！！」

「はい！」「わかりやした！」「おう！」

バツカレスの指示で、盗賊団が四方に散ります。

「で、でも・・・」

ノアが心配そうに言うのに、バーボンが大丈夫だと親指を立てます。

「心配するな。ああ見えて、やるときはやる男だ。なにせ、あの魔神バルバトスを落とす穴にはめた男だからな」

その言葉に、ノアたちは目を丸くします。

「噂話じゃ、スタッドが一人で魔神バルバトスを封印したかのように言われているが・・・。実際には多くの人が協力したんだって聞く。聖結界エミトンが発動するまでの時間を稼いだのが、あのバツカレスなんだぜ」

バーボンが言うのに、バッカレスはフンと鼻を鳴らしました。

「つたく、おしゃべりめ。俺様はそんな柄じゃねえ。大穴を掘って欲しいって頼まれたから、ただ掘っただけだ」

「親分……。スタッドと知り合いだったんだ。そんな話きいてない……」

ノアが言うのに、バッカレスは気まずそうにポリツと頬をかきました。

「……んー、その、あれだ。オメエと、スタッドは……。あー！もうよ！ そんな話グダグダしてる時じゃねえだろ！！！ ほら

！ ノア！ テメエはさつさとランドレークに行け！ バーボン！ テメエはさつさとそこらへんに転がっているヤツら治療しろ！！」

バッカレスはそう言うのと、走って行ってしまいました。バーボンはフツと肩をすくめます。

「信じる、俺たちのこと……。大丈夫だ。さ、俺は怪我人を助けてくるか」

バーボンは傷ついた兵士たちの方に向かって走っていきました。「うう！ エテ公！ わ、私に触れるな！！」

ちょうど、通りの端に座っていたメリンを治療しようとバーボンが屈むと、慌てて逃げようとしています。しかし、立ち上がれずにまたしゃがみ込みました。

それは、元老院のディレアスでした。膝に大きな傷を受けて血が出ています。

「アンタ……。避難してたんじゃないの？」

ノアが尋ねると、ディレアスはバッスが悪そうにします。

「ド、ドリード卿が……。前線に出てしまっつて。どうしていいか解らないのだ。他の元老たちは……。あの大きな悪魔を見るや否や、レムジンから逃げ出してしまうし。私は……」

なんともメリンの指導者なのに情けない話です。しかし、他の元老が真つ先にレムジンを見捨てて逃げてしまったのに、それでもまだここに残っていただけはちょっとマシですが。

「・・・チツ。ほら、自分で傷口だせ。そのままじゃ治してやれねえじゃねえか」

バーボンが言うのに、ディレアスは首を横に振ります。

「け、汚らわしい！ デムが！！ 治療なんてしなくていい！」

そんな風に言うディレアスの頬を、ピシヤリとバーボンが引っぱたきます。

「な！？ わ、私を・・・この、私をぶ、ぶつた・・・」

「うるせえ。患者はお前だけじゃねえんだ。さつさと次の治療にいきてえんだよ。お前以上の重症人もいるんだからな」

バーボンはディレアスのズボンの布を破り、黙って治療を始めます。

「う、うう・・・。そ、そうだ。思い出した。その眼帯。思想犯の医者バーボン！」

ディレアスがそう言うのに、バーボンはチラッとディレアスの目を見やりました。

「お前を街から追い出したのは私の・・・ち、父だ。そんな私を・・・治療しようっていうのか」

ディレアスが皮肉を込めていうのに、バーボンはそれでも手を止めません。

「・・・俺は医者だ。人の命に正規を使うつもりはねえ。人は正規じゃ計れねえんだ」

その言葉に、ディレアスは驚いたような顔をしました。しばらく、バーボンの治療している様を見て、そして、何かを考えるかのように眉を寄せて俯いてしまいます。

「バーボンおじさん・・・」

「バーボンさん・・・」

ノアとメルが何とも言えない気持ちでバーボンの背中に呼びかけます。

自分を迫害した者たちを相手に治療を施するなんて、あまりにも皮肉な現実です。しかし、バーボンは黙々と治療を行っていました。

もう、バーボンは昔の思いを取り戻していたのです。

「あ？ まだんなどころにいたのか。ほら、さっさと行け！ 治療の邪魔だ」

ノアとメルはコクリと頷きます。

そして、ここはバツカレス盗賊団とバーボンに任せて、議会議堂の裏へと走っていきました……。

議会議堂の裏手に回っていくだけでも、多くのガーゴイルたちが妨害して来ます。まるでノアたちがそこに行くのを防ごうとしているかのようです。

ノアが、レイが、ミヤオが、それぞれ全力で戦いますが、いくら倒してもキリがありません。メルやボーズ太郎の魔法力も切れてしまいそうです。

五分かけてほんの数歩進めればいいぐらいのペースです。これではいつまでたつても目的地に着きません。

「……先に向かってくれ」

魔法を放って後方支援してくれていたファラーが、急に前線に進み出てきます。

「え？ ファラー大司教？」

戸惑うノアたちを前に、ファラーはフツと振り返って笑います。そのファラーの目の前には、おびただしい数のガーゴイルが集まっています。

「……私の魔法力も、あとテレポート一回分だ。私はこいつらを連れて遠くへテレポートする」

「そ、そんな！ そんなことって……!!」

「後のことは頼むよ。では、それじゃね。『道なき者の道標。次元を越え、瞬く間に我を何処へと移せ……テレポート!!』」

「ファラー大司教!!!」

ノアと最初に出会った時のように、にこやかに笑ったかと思うと、光に包まれてファラーは消えてしまいました。周りにいた沢山のガ

「ゴイルと共に……」

ノアはグツと拳を握りしめます。レイはその肩にそつと手をかけました。

「……行こう。俺たちために、ファラー大司教は道を切り開いてくれたんだ」

「……うん」

ようやく議会議堂の裏につきます。そこは大きな倉庫になっていました。一見して何の変哲もない四角い建物です。ここに重要な移送魔法陣があるとはちよつと思えませんが、逆にこつこつという風に目立たない風にしてあつた方が安全だと考えたのかもしれない。

ノアが金の鍵をとりだして、倉庫の鍵穴に差し込もうとした時、なんだか違和感を覚えます。

「あれ？ 開いてる……」

扉を軽く押すと、鍵を回していないのににも関わらず扉がギツと開きました。最初から鍵がかかっていなかったのでしょうか？

「ど、どうということボー？」

ノアが鍵穴をのぞき込むと、なんだかいじつた形跡があります。無理にこじ開けた感じです。

「ミヤオたち以外に、ランドレークに誰か用があるニヤ？」

鍵穴をジツと見ていると、ノアたちの周囲がフツと暗くなります。振り返ると、ガーゴイルが数体囲んでいました。ファラーがテレポルトさせたというのに、まだ残りがいたのです。

「う、うわあ！ マズイ！！」

ノアたちは慌てて扉の中に入ろうとしました。しかし、ガーゴイルの獠猛な爪が迫ります。

「どっせーい！！」

飛びかかろうとしていたガーゴイルの頬に、大きな張り手がぶちかまされます。それに意表をつかれた他のガーゴイルたちも、がっぷりと組まれて、うっちゃり、そして次のヤツは上手投げに放り投

げられました。大きなガーゴイル相手に強引な力業です。

「ダーリン！！ 助けにきたわーい！！！！」

ファラーの末娘アングリーです。汗と埃で化粧は乱れ、カツラは・
・ええ。カツラがズレで禿頭が見え隠れしています。それを見た瞬間、レイの口から魂が抜け出てしまいそうになりましたが、慌ててポーズ太郎が押し戻します。

「アングリー！！」

「おう！ 親父殿に言われ、ここを死守すべく司教たちが集まっておるわい！ 何人たりとも、ノアちゃんたちの後は追わせないので安心しなさい！！」

アングリーはカツラを放り、そしてローブをビリビリと破きました。それは娘・・ではありません。分厚いタイヤみたいな大胸筋そしてバッキバッキに割れた腹筋。そうです。アングリーは女性ではなかったのです。ええ。まあ、もう最初に見た瞬間に解ることだとは思いますが・・。

「ワシは、ファラー大司教を護る鉄壁の神官！！ 神官戦士アングリーである！ 猊下の身をすぐお側で守るため、娘の司教様の振りをしておったが・・もはや変装する意味もないわーい！ 前任者コネミ神官長殿に負けてはおれーん！ 行くぞ、怪物どもめ！！」

そう大声で名乗り上げて、アングリーはガーゴイルたちにダブルリアットをかまします。ちなみにチラツとレイに向けてウインクをしたように見えたのは・・気のせいでしょう。

「私たちに任せて、行っちゃてー」

「ええ・・。ここは大丈夫」

五女のテーテと、四女のエカテナがレポートで飛んできます。ノアたちをランドレークに行かせるため、皆が協力してくれているのです。ノアはなんだか胸に熱いものが込み上げてきました。

「ありがと・・。うん。スタッドを連れて、必ず戻るよ！ だから、だから・・頼むね！！」

ノアは、テーテとエカテナだけでなく、レムジンにいる皆に呼び

かけるように言いました……………。

倉庫の中は狭い通路になっていました。入ってすぐに、異常な状況だと気づきます。

「な、なんだよ……これ!？」

ガーゴイルの死体がいくつも通路に崩れ倒れているのです。それも一体や二体じゃありません。通路を覆わんばかりになっているのです。

「……やはり、俺たち以前に入ってきたヤツがいるってことだな。しかも、ガーゴイルが攻めてくるのに乗じてだ」

「ええ。しかも、相当に強い人です……。魔法を使った形跡がありませんし、メリンではないですね」

レイとメルがガーゴイルの死体を調べながら言います。

「ファルでもないニヤァ。だって、ミヤオみたいに引つ掻いたり、ドリードお兄ちゃんみたいに剣とかで斬った感じじゃないもん」

ミヤオがガーゴイルの鼻先を突つくと、ボロリと崩れました。

確かに拳で殴ったような跡が見られます。

「しかも、ほとんどが……。一撃で倒している。こんな事を出来るのは一人ぐらいしか思い当たらない」

「……オ・パイ」

ノアは重々しく言いました。きっとその予感はずしいでしょう。

この混乱に乗じて、オ・パイはランドレークに向かったのです。

いくら超人的な肉体をもつからといって、さすがに陸路を走っていないには無理があります。となれば、移送魔法陣を使うことを考えるのは当然と言えば当然でした。

「……………遅れてはられない。行こう、ランドレークに!」

こうしてノアたちは、悪魔が総攻撃するレムジンを後にし、スタッドの待つランドレークへと向かうことになったのでした……………

第十二章 死闘！ レムジン陥落！？（後書き）

ちょっと無理やり気味に展開が激しいですが、二つに章を分けることもないと思っただので・・・ご了承下さいw

ノアたちをランドレークに送るため、皆が協力してくれる話となつていきます。ドリードもディレアスも小説だけのキャラだったのですが・・・なかなか頑張ってくれたかと思えます。ええ。この展開にもつてくの大変でしたw

後付で、大司教の娘たちとかも出しちゃったんですが・・・いやー、あまり人数多いと扱うのが大変ですね。まあ、埋もれないように気を付けてたんですが、すみません。間違いなく埋もれてましたねw

バーボンとバツカレスは、ゲームではこの段階では出てきませんが、スタッドが出てきてからの話になるのですが。いや、忘れられると困るのでw ちょっとバーボンの心境変化とかを描くところがなかったの・・・それは残念ですね。

次からはついにランドレークの話になります。まあ期待していただければ幸いですw

第一三章 知・・・美の四天王ビシユエル

極寒地獄。そう言い表すのが適切な猛吹雪。一年中、周囲は半ば雪に埋もれ、一面の白銀世界です。冬將軍はこういう場所からやってくるのかもしれませんが。そう思わせるような場所、それが不毛の地ランドレークでした。

移送魔法陣に送られたのは、まったく人のいない小さな廃村でした。魔神バルバトスに荒らされた形跡がないことから、寒波に耐えかねて村を棄てたのかもしれませんが。食器に積もった埃の量から、それが何十年も昔なのが解ります。

着いてまず困ったのが衣服でした。なにせ十分に準備も出来ずにやって来てしまったのです。ほぼ裸に近いノアや、薄着のミヤオなんかは危うく冬眠するところでした。しかし幸いなことに、移送先だった民家の中に、置き忘れてあった厚手のコートなどの防寒具があったのです。ちょっと埃っぽく古びていますが、何も着ないよりはマシです。この際、文句は言っていられません。

扉がバタンと開き、頭や肩に雪をたくさん積もらせたレイが飛び込んできます。慌ててポーズ太郎が雪を払ってやり、メルが炎の魔法を使って暖をとらせます。レイは青白い顔をして、ガタガタと震えていました。芯まで冷え切ってしまったようです。

「どうだった？」

ようやくレイの震えが収まったのを見て、ノアが尋ねます。レイはコクリと頷いて、肩に担いでいた鞆をテーブルに放りました。中から缶詰や乾パンらしきものが転がります。

「村を出て少し行ったところに、軍の宿営天幕があった。相当、昔の物だったが、中にはまだ保存食がある。これは一部だ。食料問題は当面は大丈夫だな」

レイはニツと笑います。しかし、ノアもメルもひどく真面目な顔をしています。

「・・・外には出られないの?」

ノアの問いに、レイは眉を寄せます。そして小さく溜息をつきました。

「ああ。吹雪がこれじゃ・・・。村の外にちよつと出て戻ってくるだけで死にそうになつたぐらいだ。さすがに俺もランドレークの地理がどうなっているか知らない。闇雲に外に出ても、死に行くよなものだよ」

レイの言葉に、皆が落胆して肩を落とします。

「・・・オ・パイはどうしたんだらうボー」

ボーズ太郎がポツリと言います。移送魔法陣を通つて、このランドレークにノアたちより先に着いているはずです。しかし、ノアたちがここに着いた時にはすでに姿も形もなかったのです。この吹雪の中、ノアたちは立ち往生しているというのに不思議なことでした。「あの男なら、吹雪の中でも駆けていきそうだな・・・。でも、この悪天候の中でラグナロク遺跡にすぐに辿り着くとは思えない。今は急いで事を仕損じるより、じっくり確実な方法を考えるんだ」

レイはそう言いますが、それでも自信はなさそうでした。まるで自分に言い聞かせるように言つたようです。それが、ノアたちを余計に不安にさせました。

「・・・ああ。レムジンでは、バーボンさんや皆さんが戦っているというのに」

「ミヤー。お兄ちゃんやファラーのおじちゃんも心配だニヤ」

メルが泣き出しそうな顔をします。ミヤオもいつになく元気がありません。

「大丈夫だつて! レムジンは、親分たちがいるんだし。なんだか勝算ありそうだったし! きつと!」

ノアは皆を元気づけようと言いますが、頷いてはいても、みんなは心の中では葛藤していました。早く先に進まねばならない・・・でも、この自然現象が足止めしてくるのです。どうしようもないことだとはいえ、それだけで納得がいくものでもありませんでした。

「ま、まあ・・・とりあえず、食事にしよう」

重苦しい沈黙を破るべく、レイが持つてきた食料を指さして言い
ました。

缶詰に詰め込まれていた保存食は、美味しくもなんともありません。なんだか味付けを間違えたんじゃないかというような微妙な味に加え、パサパサとしたような食感もよろしくありませんでした。そんな食事だけでも更に気持ちが沈んできそうです。

「・・・さすがにラグナロク遺跡は載っていないか」

レイが乾パンを口にしながら、紙切れを見やり呟きます。ノアもそれを覗き込みました。

どうやら、宿営所から食料と一緒に地図も見つけたようです。そこにはランドレークの地理が描かれていました。村や街らしきところが赤い点になっていますが、その上にはバツ印がついています。どうやら、それはバルバトスに破壊された場所を表しているのです。それを見る限りだと、いまノアがいる村以外は全滅しているようです。まあ、二十年も前の情報なんですけど・・・。

「本当は、ここ全部がランドレークという大きい都だったみたいだ」
レイが細長い半島をした大陸全部を指でくくりまわす。

「え？ これ、全部？ レムジンなんかよりも、もっともっと広いじゃんか！」

ノアは驚きます。地図で見える限りでも、都市というより、もう国家という感じだったからです。

「ああ。そのランドレークの一部に、ファルたちが寄留していたよ」
うだ。それもこの移送魔法陣がある村を中心に、ほんの一部分だけ」
レイが、ノアたちのいる廃村とその周囲を差します。それは半島全体の半分にもなりません。確かに、地図上にはここからほんの少し先までしか街や村の名前がないのです。その先にはまだ大陸が続いているのに、あとは空欄しかないのです。

「古代都市ランドレークは、本当はボーズ太郎たちの住処だったんだらうね」

レイがボーズ太郎を見て言います。ボーズ太郎はキョトンとした顔をしました。

「そういえば、着込んでいるアタシたちよりも軽装だしね。寒さには強いんじゃない？」

ノアに言われ、この寒さの中で、上着一枚だけのボーズ太郎は自分自身を見やりました。

「ボー。暑さは苦手だけど、寒さはへっちゃらだボー。確か、長老が昔に……『我らの故郷は最果ての雪降る地にあった』って言うていたことがあったボー」

「なんだ。それなら、俺じゃなくてボーズ太郎に周囲を見てきてもらえばよかったな。おかげで、寒さで凍える思いをさせられたよ」

レイが苦笑いして言うのに、ボーズ太郎が今思いついたかのように頷きます。それがあまりにも滑稽で、ちよつと皆に笑顔が戻りました。

「……でも、長老様であつたら、ラグナロク遺跡の場所を知っていたかもしれないね」

メルがちよつと残念そうに言うのに、ノアもレイも頷きました。

「んー。我らは記憶が……遠い昔の記憶はあやふやだボー。だから、解らないと思うボー」

ボーズ太郎が申し訳なさそうに言います。ちよつとだけでも手がかりがあればいいのですが、まるで指針になりそうなものがありません。

「ミヤー。コネミのおじちゃんが言つてたニヤ。『困った時は、自分の恥辱をさらけだしてでも教えを請いなさい』って。ちじよく……ってなんだか解らないけれどニヤ」

ミヤオがニヤハハと笑いながら言います。

「いや、教えを請えつて言つても……来いと言つたスタッド本人がここにいれば、本人に直接聞けるだろうが。今は教えてくれる相手がそもそもいない」

レイがミヤオに諭すように言いますが、ミヤオは解っていないよ

うで首を傾げます。そのやりとりを見ていて、ノアがハツと何かに気づきました。

「スタッドに直接教えてもらおう・・・か。いや、その手があった！」
ノアがポンと手を叩いて立ち上がります。いきなりのことだったので、レイもミヤオも目を丸くしました。

「そうだよ！ スタッドに教えてもらえばいいんだ！」

目を瞬いているメルに、掴みかかるようにしてノアは言います。

「で、でも・・・。レイの言うとおり、ここにスタッドさんは・・・」

「いや！ 別に本人じゃなくてもいいんだ！」

ノアは確信を得た顔をして、ボーズ太郎を見やります。

「ボーズ太郎！ オルガノツソをアンタたちが倒そうとした時、スタッドから渡されたっていう魔法陣の紙あつたる！ そいつだよ！ そいつを出して！」

ノアがボーズ太郎を揺さぶります。それを聞いて、メルが目を輝かせます。

「あ！ ああ！ そうです！ そうです！！ あの聖波動クライクを秘めていた魔法陣！！ あれにはスタッドさんの魔法力が込められている！！」

メルも勢いづき、ボーズ太郎を揺さぶります。二人に揺さぶられ、ボーズ太郎は目を白黒させました。オルガノツソと戦っていないレイとミヤオは未だ解っていないくて、呆然とした顔で三人を見やっています。

「ボー。こ、これだボー！」

ボーズ太郎が、腰から紙切れを取り出します。最初、ボーズ星人たちの命を使って敵を封じる疑似魔法だと思われていたあの紙です。それには、実はボーズ星人たちの能力を引き出す補助魔法が込められていたのです。

「このボロイ紙が・・・なんだっていうんだ？」

レイが尋ねるのにも関わらず、ノアはボーズ太郎からそれを取り

上げ、メルに渡しました。

「スタッドさんのことです。この聖魔法が込められた紙に、何かヒントがあるかも知れません！」

メルはその紙をしげしげと眺め、それからちよつと魔法力を紙に込めてみました。その瞬間、何かがパチンと弾けます。聖波動クライクを表して魔法陣が変形し、なんだか歪んでいきます。

「ビンゴー！ アタシの勘はやっぱり当たっていたー！！」

ノアが、レイがさっきまで持っていた地図と、その魔法陣の紙をテーブルの上に並べます。

なんと、あの紙に描かれている魔法陣が、地図にある半島と同じ形になっているのではありませんか。そして、その魔法陣の半島の上の方に丸い印がついていました。

「も、もしかして・・・これが？」

「ああ！ きつと、ラグナロク遺跡だー！！」

ノアたちは喜びに歓声をあげました。目的地が解ったのですから当然です。

「で、でも・・・。場所が解っても、行けなければ意味がない・・・ボー」

喜んでいるノアたちに、ボーズ太郎の冷静な一言が突き刺さりま

す。

「そ、そうだよな・・・。どうすれば」

そう言つて悩み出した時です。ドンツと突き抜けるような振動。

大きな地震が突然、ノアたちを襲います。

「ギニャー！！？」

「ど、どわわわわ！？」

「キヤーー！！」

「ま、またかよー！ レ、レムジンの時よりも・・・お、大きい！？」

「またガーゴイルが・・・やってくる・・・ボー！！？」

四人が、なんとか互いに支え合つて立ちます。しかし、揺れは収まりそうにありません。

「グゴオオオオオ！！！！！」

地震の地鳴りとは違う、何かの咆吼が外から聞こえて来ます。

「な！？ 敵だ！！！」

這いながら、レイは腰の剣を抜いて、外の扉を開きます。

強い吹雪が入り込むと同時に、目の前にドア一杯の岩石が現れます！ こんなものはさつきまでありませんでした。その岩石はモゾモゾと動き、屈むような動作をします、そして顔らしき物を扉に近づけて、緑の目を輝かせながら再び吼え猛ります。

「ロックゴーレム！？ クソッ！ みんな、この家から出る！！！！！」

レイが叫びます。皆、それぞれハイハイするようにして裏口から抜け出ました。凍てつく寒さが襲ってきませんが、皆逃げるのに必死で、そんなことお構いなしです。

「グゴオオオオン！！！」

ズガーーン！ ロックゴーレムの大きな拳が、その家を叩きつぶしました。間一髪、最後にレイが滑りてた直後の事です。あと一秒でも遅れていたら、家と一緒にペシャンコでした。その衝撃のせいなのか解りませんが、とりあえず地震の方はなんとか収まります。

「なんてこった！ レムジンのこのヤツよりは小さいみたいだけど、それでも家一軒よりデカイじゃんか！！！」

拳を打ち合わせ、雄叫びを上げているロックゴーレム・・・いえ、ロックゴーレムJrとでも言った方が適切でしょう。もう相手は戦う気満々のようです。

「いくら廃村とはいえ、こんな村の中にまで敵が入ってくるなんて反則だボー！！！」

「ニヤー！ 寒いけど、やっつけるしかないニヤー！！！」

この寒さの中、戦うには不利でした。この寒さで身体は意識してなくてもガクガクブルブルと震えます。厚い手袋のせいで武器を持つ手も確かではありません。ミヤオは爪をたてるために手袋を脱いでいますが、すでに血の気を失って青白くなっています。メルも鼻

先が凍り付き、気を付けないと呪文の詠唱を間違えてしまいそうです。対して、人外の身体をもつロックゴーレムJrは寒さなんて気になりません。吹雪だって、そよ風ぐらいにしか感じてないでしょう。そんな相手とは、ハンデキャップがあります。

ロックゴーレムJrが、ノアたちに向けて拳を振り上げました。

「みんな！ まず一撃くるよ！！！」

ノアが警戒に声をあげます。皆、必死にその攻撃を避けようと構えました。

「『鬼子畏れる久遠の業火。地獄より来たりたもう炎王の息吹。汚れし大地を、大いなる災厄の爆熱で灰燼と為したまえ・・・エクスプロード！！！！』」

呪文の詠唱がロックゴーレムJrの後ろから響き渡ります。長い詠唱のはずなのに、一言二言しか喋っていないようなスピードで聞こえてきます。

地が割れてマグマが吹き上げ、天が裂けて太陽の炎が火柱として注がれます。二つの巨大な炎が渦のようになり、ロックゴーレムJrを中心にして混じり合い、溶け、進って、大きな輝きを伴った大爆発となります。

「グガオオオオオッ！！！」

大きな叫び声をあげて、ロックゴーレムJrは悶え苦しみます。しかし、その苦しみも一瞬でした。あつという間に、炎の連続爆発に飲み込まれて蒸発してしまいます。本当に一瞬のことでした。

構えていたノアたちは、状況がつかめず、そのままの状態で硬直してしまいます。

「詠唱するのにベテランでも一分以上はかかる上級魔法を・・・数秒で。しかも、これほどの威力！」

メルはガチガチと歯を鳴らして震えます。それは寒さのせいだけではありませんでした。

「フフン。これでも手加減したただけどねえ。あんな小者の悪魔に、本気で魔法使うなんて私の美学に反する」

甲高い声。でも、それは男のものでした。ロックゴーレムJrがいた場所、まだ残り火が燻っている上を、ファッションショーで歩くモデルのように腰を振りながらノアたちに近づいてきます。

レイより頭一つぶん大きい長身痩躯。メリンの長い耳を入れれば、かなりの高さがありそうです。まるで作り物のように均整がとれた美しい顔と身体。それを彩る派手な衣装。色白の肌の上には更に化粧がされています。切れ長の目に施したアイラインが、何よりも強い自己主張を表していました。

「こ、こんなところに人が・・・？ アンタは・・・いったい？」
その男はパタンと手に持つ魔法書を閉じます。その分厚い本も、金箔やら朱色の房やらで彩られています。何から何までゴージャスです。

「それは私が尋ねたいところだよ。この辺境の地ランドレークに少年・少女がどんな用事だと言うんだい？ 美しい私が、美しく助けてあげたんだ。まさか秘密ってことはないだろうね？」

縁のない眼鏡をカチャリとあげ、妖しげにメリンの男は口元をニヤリとさせます。どうやらかなりのナルシストのようです。美に強い拘りがあるようです。

「ア、アタシたちは・・・ヘークシヨイ!!!」

答えようとしたノアが大きなクシャミをしました。飛んだ唾を見て、メリンの男は不愉快そうな顔を一瞬だけします。しかし、すぐにさっきの妖しい笑みに戻ります。

「・・・このランドレークにいて、『バルンサー』を使っていないとは命知らずにも程があるねえ」

ノアたちは顔を見合わせ、全員が同じように首を傾げました。

「まあ、口で説明するよりも・・・かけてあげた方が早いね」

男は人差し指を立て、ブツブツと何やら魔法を詠唱します。光りの束が地面に散り、それがノアたちの足下から照らします。

「お？ おお！ な、なんだ！？ 急に寒くなくなっただ！！」

「ミャー!!! ポカポカしてくるニャ!!!」

さつきまでの震えがピタツと止まります。身体の芯から暖かくなり、これなら半袖でも大丈夫そうです。こんな吹雪の中だというのに驚きです。

「補助魔法の一つだよ。初歩的なものだけれどね。私ぐらい美しく応用がきけば、例えこの極寒でも熱帯地方のようさ。そちらのお嬢さんは使えないのかな？」

からかうように言う男の言葉に、メルはグツと唇をかんで俯きま

す。

「ありがとうボー！ これでラグナロク遺跡に行けるボー！！」

「ボーズ太郎！」

安易に目的地を言ってしまったボーズ太郎を、ノアが叱咤します。

「あ！ し、しまったボー」

「ラグナロク遺跡？」

長い耳は伊達ではありませんでした。ちゃんと聞いていました。ピクリと長い耳が動いたかと思うと、男は顎に手を当ててちよつと考えます。

「・・・へえ。あんな遺跡に行きたがるのが、まだいたなんてね。

これで今年に入って三回目だね」

男の独り言に、ノアたちは目を丸くします。

「三回目だつて！？ だ、誰がきたんだ！？」

男は眼鏡をカチャリとあげて、長い髪の毛を掻き上げます。

「フフン。興味あるの？ いいだろう。一人目は英雄スタッド。二人目は我が同胞オ・パイとその従者。そして、最後は君たちだよ」
わざわざ一本ずつ指を立てて説明してくれます。いちいち、その動作が大仰で気障つたらしいのですが、ノアはそんなことにツッコミをいれられるような心境ではありませんでした。

「我が・・・同胞・・・だと？」

レイが眉を寄せます。皆、警戒したように構えました。

「ああ。私の名は知の四天王ビシユエル。ああ、美の四天王でもいいんだけれどね」

予想していただけに、皆に衝撃が走ります。

「そ、そういえばどこかで見た顔だと思っていたんだ！」

「ああ！ ミルミ城の投影石で見た顔と同じだ！ ここまで気づかなかったなんて！」

ノアとレイが武器を構え直します。

「ボー！ な、なんてことボー！！ 我、余計な事を・・・」

ボーズ太郎は一人、自責の念に駆られて頭を横に振っています。

「フーン？ 何か勘違いしていない？ 私は戦う気はないよ」

殺気立つノアたちに対して、ビシュエルは肩をすくめました。

「戦う気はない・・・だと？ しかし、オ・パイの同胞だと・・・」

レイが剣を突きつけながら言いますが、ビシュエルは涼しい顔をしたままです。

「ああ。かつての同士さ。でも、別にいま組んでいるわけでもない。ヤツにはヤツの目的があるんだろうが、私には関係のないことさ」

あっけらかんと言うビシュエルです。ノアたちは互いに顔を見合わせました。そして、とりあえず、それぞれが武器を下ろします。

「・・・じゃあ、オルガノツソヤアルダークみたいに。魔神の呪いを受けているわけじゃないのか？ 見たところ、悪魔になってはいないようだけれど」

ノアが訝しげに言うと、ビシュエルは吹き出すように笑いました。

「この私が・・・悪魔に？ アハハハ。あり得ないねえ。確かに二十年前に魔神バルバトスにやられはしたが、逆にその力を利用させてもらっているさ。私が昔のままの美を保っているのはそういうわけだよ」

言われてノアたちは気づきましたが、ビシュエルは二十年前に見た過去の映像そのままなのです。シワーつ増えています。

「私やオ・パイぐらい力が強いならば、魔神の呪いなんて跳ね返せる。オルガノツソヤアルダークなどは魔神に取り込まれて、記憶どころか姿まで変えられてしまったようだがね」

ビシュエルは肩を振るわせて笑います。かつての仲間であっただ

るつに、どうして人事のようにそんなことが言えるのかノアには解りませんでした。

「ま。同胞たちの悪名が触れ渡るのは、私の名声にもキズがつくからね。各地に守護聖人として封印されてるとか適当な噂ながしたけど・・・」

ノアの訝しげな視線に気づき、ビシュエルは付け加えて言いました。

「それで、四天王の噂が・・・妙なことになっていたのか」

レイが納得したように頷きます。ビシュエルはニツと笑いました。「そもそも英雄スタッド殿の登場で、四天王の存在なんてほとんどの人が記憶していないしね。私たちが活躍したミルミ城もすでない・・・。過去に魔神と戦い、英雄と呼ばれたこの私が、この辺境の地で人知れず美しく生きる・・・ああ。なんて美しい薄幸の物語だろうか。まさに美人薄命！」

美人薄命とは意味が違うような気がしますが、とりあえずビシュエルは悦に入つて空を仰いでいます。雪原にバラの華が散つてもおかしくないぐらいの雰囲気です。

「と、とりあえず、悪人じゃないんだね。助けられたしね。ありがとう。ビシュエル。アタシたちは・・・もう先に行くよ」

悦に入っているビシュエルを邪魔してはいけないかと、ノアが恐る恐る言います。しかし、ビシュエルはすぐにノアたちに向き直りました。

「フフン。君たちの実力でこのランドレークを行けるとは思えないけれどね。さっきの小さいロックゴーレムなんて、ここでは一番弱いぐらいだよ」

それを聞いて、ポーズ太郎がブルツと震えます。レイが目を細めました。

「何が言いたい？」

「えー。美しい私にそれを聞いちゃう？ まあ、今回は大目にみてあげよう。つまりは、私が協力してあげようと言っているんだよ。」

仲間になってあげるってことさ」

ウインクして言うビシュエルです。随分と上からの物言いでしたが、その実力を考えれば仕方がないことなのかもです。

「私の美しい魔法は、きつと役立つと思うんだけどねえー」

「・・・なぜだ？ そんなことをして、何のメリットがそっちにある？」

レイの問いに、ビシュエルは顎をなでてちょっと考えます。

「興味がある・・・じゃ、ダメかな？ オ・パイの形相がただごとじゃなかったからね。察するところ、君たちは英雄スタッドでなくオ・パイと敵対しているのだろう？ オ・パイの強さは一緒に戦っていたから知っている。弱い君たちが、彼を同じ場所に向かってどうするのかとても興味があるんだ。この辺では娯楽がないからねー」
まるで映画でも見に行こうと言わんばかりのビシュエルの態度に、一同はちよつと複雑な顔をしました。

「それに、強い者の味方をするより、弱い者の味方をした方が美しいじゃない！ 弱き者を助ける知の四天王ビシュエル・・・ああ。

もちろん美の四天王でもいいけれども！ いい、とても美しい、私！！」

身体をくねらせて身悶えするビシュエル。どうやら、本当に自分の美しさが優先のようです。

動機は不純でしたが、それでもビシュエルの魔法力は魅力的です。ノアたちは悩んだ末に、コクリと小さく頷きました。ビシュエルは満足そうに髪を払って笑います。

「そう 損はさせないよ。じゃあ、ヨ・ロ・シ・ク、ね？」

「え、ええ・・・」

なぜか、ビシュエルはメルに向かって言いました。メルはちよつと気まずそうに目を逸らしながら頷きます・・・

こうして、知の・・・いえ、美の四天王ビシュエルがノアたちの仲間に入ったのでした。

三千体の悪魔が跳梁跋扈する魔都ランドレーク・・・そう言ったのは誰だったでしょうか。それはまさにその言葉通りで、村を出たノアたちに、息もつかせぬほどの悪魔の群れが襲いかかってきます。レムジンを襲ったガーゴイルはもちろん、ロックゴーレムJr。それだけでなく骸骨騎士スケルトンマンの親玉であるキング・スケルトン。八本の首をもつヤマト・ドラゴン。強力な上級魔法まで使いこなす、悪魔の中の悪魔と呼ばれるアーケデーモン。古の資料にすら載っていない超強力な悪魔たちが立て続けに迫ってくるのです。一匹一匹が、それこそオルガンツソやアルダークと同じぐらいに強いのです。

しかしながら、ビシユエルは口だけではありませんでした。その強力な悪魔たちをほぼ魔法の一撃で蹴散らしてしまいます。

「ファイヤーストーン・・・」

「フフン。『エクスプロード!!!』」

「ブリザー・・・」

「エレガント! 『ダイヤモンドダスト!!!』」

「ライト・・・」

「アハハーン! 『スパークプラズマ!!!』」

なにせ上級魔法を使っているのに、下級魔法を使っているメルよりも詠唱が早いのです。しかも、決め台詞をいちいちつけた上に、極めて本人が美しいと思っっているポージングまで決めています。ウザイことこの上ありませんが、それでも実力はノアたちよりも数段上でした。

「す、すごいな・・・。俺たちが出る隙もない」

レイが感嘆して言うと、ビシユエルはチツチツと指を横に振りました。

「フフン。さすがの私でも、もっと先に進めば一筋縄じゃないよ。醜くしぶとく生き残っているヤツらがでてくる。そいつらは、さすがに君たちが相手してくれないとしんどいね」

そうは言っているものの、ビシユエルはさほど深刻そうな顔はし

ていません。まだまだ魔法力には余裕があります。

しかし、まったくノアやレイ、ミヤオの出番がないというわけでもありませんでした。ビシユエルが魔法を放った後に隙ができるので、そこを護らなければなりません。そうすればやはり怪我人がでてくるのでポーズ太郎が治します。

「大丈夫？ 疲れてないかい？」

ビシユエルがメルにそう尋ねます。しかし、疲れるはずがありません。メルは村を出てから一度も魔法を使っていないのですから。放つ前に、ビシユエルが敵を倒してしまうのですから。メルは下唇を噛みました。

「・・・いいえ。大丈夫です」

小さくメルはそう答えます。ビシユエルは「ふーん」とだけ言うて行ってしまいました。

「なあ、ビシユエル。アンタのその化粧品ってどこで調達すんの？」
「うん？ ああ、私は化粧品はまとめ買いするタイプでね。同じメーカーじゃないとダメなんだよ。だから、あと百五十年ぶんぐらいはストックがあるよ」

「百五十年！？ ど、どれだけ長生きするボーー！！」

「ニヤハハハ！ シワシワになっちゃうミヤー！」

「アハハ。失礼だねー。魔神の呪いのおかげで歳をとらなくなったって言ったじゃない。寿命だってどれだけのびたか解らないしね。

ああ、私の美しさは永遠の罪かもしれないよ」

「自分でよく言うなあ。俺なんかそんなこと恥ずかしくて・・・」

「ん？ レイ。君だって化粧すれば化けるかもよ」

「え？ そ、そうかな・・・」

「うげー！ レイが化粧！ みたくなーい！」

戦いに余裕があるせいでしょうか。そんな無駄話をしています。ビシユエルはアツという間に仲間に溶け込んだようでした。

いいんでしょうか・・・。レムジンでは死闘が繰り広げられているのに。いいんでしょうか・・・。魔神バルバトスが復活するかも

しれないのに……。こんな和やかに会話していいんでしょうか。メルは疑問に思います。でも、口には出せません。出したら、なんだか他の気持ちまで吐露してしまいそうだからです。言っちゃいけないことまで言ってしまういそうだからです。それがなんなのかまでは口に出してみるまでは解らないのですが、それはとても真つ黒くてイヤなものだとメルは感じていました。

「……なんだろう。なんだか心がザワザワする」

メルは胸に手を当て、チラリと目の前にいるノアたちを見やりました。なんだか、この数時間でメルよりも遠くに行ってしまった気がします。

ビシユエルに向かって微笑むノアが、ビシユエルの肩を叩くレイが、ビシユエルの耳を狙うミヤオが、ビシユエルに踏まれそうになるボーズ太郎が……。なんでしょう。気に入らないのです。メルにとってなんだかとっても遠い人に感じられるのです。なんだか、それはとてもイヤな気持ちでした。

「私……。なんでここにいるんだろう」

メルは立ち止まります。でも、ノアたちは気づきません。どんどん先に行ってしまう。きっとそのままラグナロク遺跡に着いて、ようやくメルがいなくなっただのに気づいても「まあ、いいじゃん」とか言っただけにきてくれないような気がします。

「私は……。必要ないんじゃない。別にいらんじゃない。……」

自分の足下を見ながらメルはそう呟きます。いままで心の隅で考えていたことを、思わず口にして泣き出しそうになってしまいました。

メルには上級魔法は使えません。自分はそれなりに魔法力が強いと思ってきましたが、それはテムやボーズ太郎の中にあつてです。レムジンの魔法兵たちが扱う魔法は、自分よりも遙かに強力でした。そして、ファラーや娘の司教たちも、メルよりも遙かに魔法力が高いに違いないのです。それを肌で感じて、メルは自分の能力に疑問を覚えていたのです。もし、自分がビシユエルぐらいの魔法力があれば、レムジンでもガーゴイルたちに好き勝手させなかつたでしょう。

う。そう考えると、とても惨めなのです。

ノアやレイ、ボーズ太郎にミヤオは・・・それに気づいていません。ボーズ太郎は同じ魔法を使うにしてもジャンルが違います。今やもうメル魔法がお荷物になっていて、誰にも知られていないだけなのです。そのことに甘えていたのではないかと・・・そうメルは感じてしまいます。

「私は・・・バーボンさん。私は・・・お母さん。・・・私は・・・どうしたら」

溢れ出す涙を覆おうとして、メルは顔を手にやります。涙なんて流したくありません。でも、涙が止まりません。

メルは視線を感じ、ハツと顔をあげました。自分よりも遙か先にいるビシユエルが振り返ります。その顔は悪意に満ちていました。

「ここでお別れしたほうが・・・君のためだよ」

「君の代わりは私がやってあげるから。それが彼らのためだよ」

「君はいらないんだ。もうお帰り」

言葉が聞こえるわけではありません。しかし、その表情から、メルはそういうメッセージを受け取りました。

「ああ・・・。私は・・・。私は・・・うつつ」

メルは跪いて泣きじゃくりまわす。小さい子供のようにしゃっくりを上げて泣きじゃくりまわす。

暗闇に沈む心に、人々が見えます。

メルに暴行した男たちが「メルンだと思って、何様のつもりだよ」と憤ります。

ボーズ星人の長老とその仲間たちが「メルメル。お前が我らを見捨てて殺したのだ・・・」と責めます。

霊希碑が「心なき思いはやがて汝が友を破滅に追いやる・・・そう言ったではないか」と罵ります。

クラレ村の人々が「純血のメルンではない・・・」と冷たい眼で見ます。

オ・パイとシーラが「お前は私たちの子供ではない。メルメルは

死んだのだ』と拒否します。

そして・・・最後に、バーボンがでてきます。バーボンはエリムを抱きながら『お前なんて嫌いだよ。向こうに行け』と言います。それらが何度も何度も繰り返され、メルを心を決ります。

「ああ・・・ああ!!」

メルは自分の首をしめます。この苦しみから、この悲しみから・・・救ってくれるなら！ 死の方がいい!! そうなのです!!

『ダメだ。メルメル。しっかりしなさい・・・』

メルはハツと我に戻ります。そして、自分のポケットの中に入れていた・・・あのスタッドの疑似魔法の紙を取り出しました。それは会ったことも、話したこともないスタッドの声のようでした。なぜか、スタッドの声だと感じたのです。

「スタッド・・・さん？」

メルは何かに気づきます。何かを示されたような気がします。辺りを見回します。

「なに？ 誰？ 誰・・・なの？」

それは泣き声でした。小さいけれど・・・本当に小さいけれど、メルの耳には聞こえます。

「どこ？ どこにいるの？」

メルは道から外れて、氷ついた藪の中に入っていきます。凍り付いた木の間をすり抜けて行きます。すると、ちよつと広い場所にできました。道ではありません。一面の雪のせいでわかりませんけれども、大きな原っぱのような場所なのかも知れません。

「グスグス・・・」

小さな泣き声でした。すすり泣きです。メルは雪をかき分けるように進んでいきます。

「誰？ 泣いているのは・・・」

かき分けて行くと、青い布が見えました。もう少しで雪に埋もれ

てしまうぐらい小さな子供です。布は、その子がしているマフラーでした。

「どうして・・・泣いているの？」

そう言っつて、自分が泣いていたのを思い出したメルです。慌てて自分の目の周りを拭き取ります。

その子は顔を上げました。綺麗な顔をしたファルの少年でした。子供時代のファル特有のちよつと大きいネコ耳。澄んだ海のようなアクアブルーの髪と、それと全く同じ色をした大きな瞳。色白の顔には、頬と唇が淡く朱に染まっています。ちよつと長い揉み上げがチャームポイントでした。

泣いていてもその魅力は衰えません。メルは思わずその少年の魅力に引き込まれそうになります。

「おねえちゃん・・・だあれ？」

少年は舌足らずの口でそう尋ねます。顔つきから年齢は十才くらいだとメルは思いましたが、声を聞くとなんだかもつと幼いような気がします。

「私は・・・メルメル。あなたは？」

メルは怯えさえないようにと、できる限り優しく言います。

「ボクは・・・シャリオ」

シャリオはシャックリをあげながらもそう名乗ります。メルは解つたとコクリと頷きました。そして、しゃがんでシャリオと視線を合わせます。

「ねえ。シャリオ。どうして・・・泣いていたの？ お姉ちゃんに教えて・・・」

なんでそんなことを聞かねばならないのか、メルメルは自分で不思議でした。もつと他に言うべき事があつたでしょう。でも、なぜか泣いている理由・・・それを聞かねばならないような気がしたのです。

シャリオは、自分が泣いていた事を思い出し、ポロポロと再び涙を零しはじめました。メルは優しくシャリオの頭を撫でてあげます。

「お、お父さんと・・・おか、お母さんが・・・あ、悪魔に・・・悪魔に！！」

それだけの説明でしたが、シャリオに何があったのかメルは理解します。

シャリオは泣きながら、自分が来たであろう轍のような跡を小さな手で指さしました。メルがその先を視線で追うと、小さな掘つ立て小屋のようなものが見えます。どうやらシャリオはそこから来たようでした。

「メル！？」

メルがシャリオに言葉をかける前に、背中から大きな声がします。ノアです。ノアたちが、いなくなつたメルを心配して戻ってきたのです。メルが心配していたように、そのままラグナロク遺跡に行つてしまうようなことにはならなかつたのです。

「その子は・・・どうしたの？」

「ランドレークの住人か？」

「ミャー。ミャオと同じファルだにゃー！・・・お前、男か？」

「ボー！メルメル、急にいなくなつたら心配するボー！」

仲間が口々にそう言います。シャリオはちよつと気圧されていますが、「大丈夫よ」とメルはその背中をさすりました。

「この子・・・シャリオっていうんだけれど。この子の両親が・・・あの小屋で悪魔に襲われているみたいなの」

メルが指さす小屋を、ノアたちはチラリと見やります。

「・・・罨だよ」

ビシユエルがシャリオを冷たく見下ろしながら言いました。

「罨？」

「ああ。高等な悪魔が使う常套手段さ。あの小屋自体が悪魔で、入った瞬間に丸飲みされるって仕掛け」

ビシユエルは手の平をヒラヒラと振りながら言います。

「そ、そんなこと！ほんとうに、お、お父さんと、お母さんが！」

涙を流しながら、シャリオは首を横に振ります。

「その子供も悪魔が変じているのさ。信用しない方がいい。ランドレークの諺は『信じる者は裏切られる』だよ」

「そ、そんな……。でも、シャリオが嘘をついているようには、私には……」

メルがシャリオをかばいますが、ノアたちはなんだか半信半疑のような感じです。

「証拠を示そうか？ このランドレークで今まで襲われずに君たちはあそこで生活していたの？ ましてや人里離れたこんなところに住んでいたわけ？ こんな雪しかないところで食べ物はどうしていたのさ？ 両親が悪魔に襲われたのに、なんで君はこんなところで泣いてるの？」

ビシユエルが次から次へと質問するのに、シャリオは言葉に詰まります。

「……で、今襲われたから助けて欲しい？ なーんて、話が出来過ぎじゃない？」

ビシユエルの言っていることは筋が通っていると、ノアもレイも頷きます。

「で、でも！ ほんとうに！！ ほんとうに！！」

必死にシャリオは言いますが、もうノアたちにもその言葉は届かないようです。

「……行こう。メル。アタシたちはこんなところで立ち止まってはられないよ」

ノアが言うのに、皆がコクリと頷きました。メルは驚きに目を見開きます。

「そ、そんな……。もし、シャリオの言っていたことが本当だったら……どうするの？」

ノアとレイは悲しげに顔を見合わせました。

「メル。こんなところに子供がいるわけがない。俺たちですら命が危うい場所なんだ。あれだけ凶悪な悪魔たちがいた場所だ。もし子

供が本当にいたら、真つ先に殺されている……」

レイは睨むようにシャリオを見据えてから言います。それでも、メルは首を横に振りました。

「私は……私は……！ このシャリオを……信じます。私は……あそこへ、この子の両親を助けに行きます……！」

メルは震える身体を抑えながら立ち上がります。そして、掘つ立て小屋に向かって走りだしました。

「メル……！」

ノアたちは慌てて捕まえようとしますが、メルはその手をかいくぐって行ってしまいます。

「……行きたいなら好きにさせればいいよ。さあ、先に進もう」

ビシユエルは肩をすくめて言います。ノアたちは困ったような顔で、必死に雪をかきわけて進むメルを見やりました。

「そう……」

「……だね」

ノアとレイが小さくそう言ってコクリと頷きます。

そして、先頭を歩き出したビシユエルの後に続いて、先来た道に戻って行きました……。

シャリオを信じ、その両親を助けに行こうとするメルはどうなるのでしょうか。そして、ノアたちは本当にメルを見捨てて行ってしまふのでしょうか……。

第一三章 知・・・美の四天王ビシユエル（後書き）

今回はメル視点の話でしたね。一番、不安定なキャラなんで・・・他のキャラに比べて劣等感高めです。

ビシユエルはもうちよつと真面目なキャラだったので・・・なぜか色物キャラに。うーん。ちなみにゲームでは仲間になることはなく、ただの難敵として出てきます。

ちなみに悪魔が跳梁跋扈とかありますが、ゲーム中では四天王以外は強くて魔物です。でも、ゲームって・・・ほら、最初のボスよりラストダンジョンの魔物のほうが強いつて設定じゃないですか。ですから、敢えてw もう四天王以外の悪魔がいてもいいかなーとw ちなみにヤマト・ドラゴンは・・・『郵便さんですよ』とかふざけた名前だったので、「由来は？」なんて聞かれると困るので変えてありますw ええ。結構、魔物とかの名前は適当なんで。新しく作ったヤツもでてきてますね！。

で、今回はシャリオは実は・・・どうなのよ？ って話になりま。まだまだランドレーク編は続きますので一つご鼻屑の程をw

第十四章 無敵の四天王・・・

ミルクの甘い香りがします。柔らかく優しい産着にくるまれ・・・大きな手に抱っこされて、ユラユラとどこかへ連れていかれている途中です。

背の木々から木漏れ日が顔に当たって、ちょっと眩しいです。自分を運んでいる人の顔は、その光りの影になってよく見えません。でも、それが男性であり、自分にとっても愛情を注いでくれるであろうことを感じます。

自分を抱っこしている男性が急に立ち止まりました。赤ん坊は、なんだかちよつと不安になります。

「・・・それで、本当にオメエはいいのか？」

これは聞いたことがある声です。そうです。バツカレスでした。抱っこされているノアの向かいに立っています。

「・・・ああ。この子・・・ノアに賭けてみることにしたよ」

男が名残惜しそうに、ノアの額を優しく撫でます。それがとても心地よくて、でも同時になんだかとても切なくて・・・赤ん坊のノアは泣き出しそうになります。

そしてコクリと一つ頷くと、思い切ったように、男はバツカレスにノアを手渡ししました。バツカレスは、慎重に、大事に、ノアを受け取ります。

「後悔・・・しねえんだな？」

バツカレスが重々しく尋ねます。男は答えずに、クルリと身体を反転させて行ってしまいました・・・。

「・・・行かないで！　なんで？　なんで・・・置いていっちゃうの？」

ノアは男が行ってしまうのが悲しくて、寂しくて、大泣きします。

もう二度と会えないような気がしたからです。

バツカレスはそんなノアを見て、苦い顔をして目をきつく瞑りました……。

グニャーと世界が一転して、真っ白な雪原。

ザツ、ザツと、ノアは雪を踏みしめながら歩いていました。

「……あれ？ アタシ……なんで？」

フラフラとおぼつかない足取りで、目の前にいるビシュエルに付いて歩いています。歩きながら寝てしまったとでもいうのでしょうか？ ええ、なんだか頭がボーッとしています。

「赤ん坊の……時の夢？ え？ でも……アタシ、親分に赤ん坊の時に、宝と間違えて拾われて」

混乱する頭で、ノアは必死に夢の内容を思い出そうとします。あの夢が本当なら、バツカレスは赤ん坊を誰かに託されたのです。では、ノアを抱っこしていた男は誰だったのでしょうか？

ノアは赤ん坊の時に、バツカレスが宝と間違えて拾ってきた……そう教えられて、それに何の疑問も抱かず今まで信じてきたのです。

「あの人は……いつたい？ 誰……だったんだろ」

それを深く考えると、頭がズキリと痛みます。なんだか知ってはいけないことのような気がします。誰かが記憶の上にヴェールをかけ、それを見てはいけない秘密のことのようにしてしまっただような感じですよ。

「……何も考えなくていいよ。さあ、ラグナロク遺跡に急ごう」

ビシュエルが振り返りもせずにあります。ノアが顔をあげると、何やら横笛みたいなものを吹いていました。その音色を聞くと、なんだか猛烈に眠気が増してきます。

「んー……んんっ!!」

ノアは眠気に抵抗しようと首を横に振ります。

そして、周囲を見て気づきました。眠っていたのはノアだけでは

ありません。レイもボーズ太郎もミヤオも・・・なんだかブーツと空を見上げて夢心地だったのです。歩きながら焦点が合っていないその様は、かなり危ない人のようでした。

「な！？ お、おい！！ 目を覚ませ！！」

ノアが慌てて、三人の頬を全力で引っぱたきます。

パン！ パン！ パパン！！

「ブーツ！？」

「ミヤツ！？」

「いてツ！？」

三人は痛みあまり飛び上がります。どうやら完全に目が覚めたようでした。

「わ、我は何を・・・」

「ミヤー！？ あれあれ?? 美味しい魚は?? コネミのおじち

やんはどこニヤ????」

「おー。いてえ。なんで、俺だけ・・・両方の頬が腫れてるんだ?」
皆が正気に返ったのを見て、ノアはホーツと大きく胸を抑えて息を吐き出しました。

「アタシたち、なんだか寝ぼけていたみたい」

ノアが言うのに、三人とも変な顔をします。

「・・・は? 歩きながら、寝てたつていつのか? この俺が?」

レイは信じられないと言わんばかりに眉を寄せます。

「凶悪な悪魔がでてくるこんなところで、寝たりなんてするわけないボー！」

ボーズ太郎もコクコクと頷いて言います。ミヤオはグルリと目を回しました。でも、四人とも寝ていたのは確かでした。道中の記憶がまったくないのですから。

「・・・・・・・・催眠魔法が得意な悪魔もいるからね。気をつけないと」

先を歩いていたビシュエルが戻ってきて、ちょっと欠伸をしながら言います。まるで自分も眠っていたと言わんばかりです。

さっきの笛はもう吹いていません。それどころか手にも持っていない。いつ吹き止めたのでしょうか？ ノアはちよつと首を傾げました。

「・・・あ！ メル！ メルは！？」

ノアがメルのことを思い出します。

そういえば、さつきシャリオの両親を助けに行くのに単独で小屋に乗り込んでいったのです。それから先の記憶がすっぱり全く途絶えています。メルが雪をかきわけて小屋に向かうところ・・・そこまでの記憶しかありません。

「い、急いで引き返そう！ な、なんでメルを置いてきちやっただ！？」

「ボー！ そんなこと我に言われても！！」

いつも冷静なはずのレイが取り乱し、ボーズ太郎に掴みかかります。

「ニヤー！ もしあの家が悪魔だったら、メルは今頃バリバリムシヤムシャー！！」

ミヤオの言葉に、ノアもレイもボーズ太郎もサーツと青くなります。

「た、大変だあ！！ い、いそげッ！！」

ノアたちは慌てて、来た道を引き返して行きました。

「・・・うまくいかないものだね」

ただビシュエルだけは、冷たい眼で走っていくノアたちを見やりました・・・。

それは、丸太で作られた簡素な小屋でした。デッキの手摺り越しに、メルは中をそつと覗き見てみます。ですが、カーテンが閉められていて中は解りません。

「・・・シャリオの両親はこの中に」

呟いた自分の手が震えていることに今気づきます。そうです。ここら辺にいる悪魔たちは、メルレベルよりも遙かに上の強敵ばかり

りです。仲間が一緒にいるならともかく、一人でどうにかしようというのは無謀なことでした。

メルは心細くなり、無意識にチラツと後ろを振り返ります。でもそこには誰もいません。すぐに首を横に振って考えなおしました。

「私が……。私がやらなきゃいけない」

そう自分を奮い立たせて、玄関の扉に手をかけます。どうやら建物自体が悪魔で、そのままバックリということは無さそうでした。鍵はかかっていないようです。メルはそつと扉を開きます。

滑り込むように中に入ると、薄暗い中でメルは目を細めました。玄関や廊下には、絵画や写真立て、靴などが落ちて散乱しています。何かと争った跡でしょう。ドキンドキンとメルの鼓動が徐々に早くなります。状況を見るに、悪魔が襲ってきたのは間違いないからです。

魔法を使って灯りを出したかったですが、敵に気づかれてしまうかもしれないので使えません。薄暗いのを我慢して、メルは壁を背にし、足音を忍ばせてゆつくりと奥へと進んでいきます。

廊下の突き当たりに黒い甲冑が置かれていました。それを敵だと思ったメルはドキツとしますが、シャリオの父親の趣味が何かなのでしょうか。人騒がせなことです。しかし、なぜか背中側を向けて置かれていたのですが、メルは特に気に留めるでもなく、甲冑には近づきませんでした。

廊下を過ぎて、狭い居間に入ります。居間のテーブルには、食事の中だったのでしょうか……。三人分のスープやパンが置かれています。しかし、それはすでに冷めきっていて、しかも皿のいくつかは無惨に下に落ちていました。クロスは途中で裂け、椅子も倒れ、グラスは割れています。それだけで事の凄惨さが見てとれるようでした。

ガチャン。居間の奥にある台所から何かが落ちる音がしました。跳ねるように、メルの身体がビクンとします。しかし、逃げるわけにはいきません。メルはいつでも魔法を詠唱できるように構えなが

ら前に進みます。

「・・・キキキ。しかし、妙な家だな。ガキ一匹だけ逃げたが・・・」

「・・・の加護を得ていたからな。さぞかし強力な魔道士でもいるかと思つたが。これは・・・様に」

何やら誰かが話ているようです。メルはゴクリと唾を飲み込みながら、そつと台所を盗み見ました。

「誰だ!？」

急にかけられたその声は、台所からじやありませんでした。メルが入ってきた廊下側からしたので。メルは驚いて硬直してしまいます。

「なんだ!？」

「あのガキか!？」

廊下の方から悪魔の一体が入ってきます。それは、なんとあの突き当たりにあつた黒い甲冑でした。頭部はなく、鎧の胴体と足だけです。そして手には手斧を持っています。それは、首なし戦士のアクス・デュラハンでした。

そして、台所にいた悪魔二体も入ってきます。人間の身体に獅子の頭がついた半人半獣ベヒモスに、アークデーモンの幼体であるカエルのような姿をしたグレムリンです。

いずれもビシユエルは一撃で倒していましたが、それは凶悪で強い悪魔たちです。

「違う。メリンだ! しかも女だ!！」

「なんだと? さっきのファルのガキじゃねえのか!？」

前後を挟まれます。最悪の状態です。

「『ファイヤーストーム!』!」

メルは咄嗟に魔法を唱えました。説得が通じる相手でないのは既に解っています。一体だけでも先に倒せれば状況が変わるかもしれません。そう判断してのことでした。

迫り来る炎に、ベヒモスは身じろぎもしません。大きな口をバク

ンと開いたかと思うと、なんとその炎を口の中に入れてしまいました。口の端からポーポーと火がでて、鬣たてがみを燃やしているのですが全く意に介しません。モシャモシャと食べて飲み込み、ポフツと煙のゲップを吐き出しました。

「キキキ！ そんな下級魔法が我々悪魔に効くはずもないだろうよ！」

グレムリンが、プクーツと膨らませたお腹をパンパンと叩いて笑います。

「今日はファル二匹だけでなく、メリンの女も食えるなんて嬉しいぜ」

ベヒモスがニタリと笑いました。その言葉だけで、シャリオの両親がすでに胃袋のなかなのだと解ります。

「な、なんてことを・・・！」

「諦める。ここは魔神バルバトス様の領土。人間が立ち入った時点で死は決まっている」

頭がないので、どこから声がでていのかは不明です。アクス・デュラハンは、メルを逃れられぬようガツシリと掴みました。

「うつつ！ 私に・・・私にもつと力があれば！！」

悔しくて唇を噛みます。そして、メルは死を覚悟しました。どんな魔法を使っても、今のメルではかすりキズひとつ付けることはできないでしょう。諦めたようにダランと手を落とします。

「よしよし。大人しくしていれば一瞬で喰ってやるから痛みはねえぜ！ いただきまーす！！」

下品な口をベヒモスが大きくあけます。紫色の舌がヌラヌラして、四本の牙は凶悪です。ダラダラと滴り落ちる涎は酸っぱい臭いがしました。今からこの中に行かなければならないのだと思うと、メルはとても気分が悪くなります。そして、食べられることを覚悟してギョツと目を瞑りました。

メルが目を瞑って数秒。いつまで経っても、痛みも衝撃も来ません。メルは恐る恐る目を開いてみました。

「・・・キ？　おい。どうした？　さつさと喰っちゃまえよ」

メルは目の前にいるというのに、口を開けたままでベヒモスは動かなくなっています。グレムリンは訝しげに思って、その身体を小突きました。それでも、ベヒモスは一向に動こうとしません。

「・・・あ、アガガガガ！」

途端、ベヒモスの身体が激しく痙攣しだします。メルは何事かと目を見張りました。ベヒモスの血管が浮きあがり、それがどす黒く変色していきます。

「お、おい！！」

グレムリンとアクス・デュラハンが心配しますが、ベヒモスの様子はますますおかしくなっています。白目を剥いて、泡を吹き出し、その場でゴロンと倒れてしまいました。そして、ブチツという音がしたかと思うと・・・倒れているベヒモスから血が噴き出します。そして、痙攣が止まり・・・動かなくなっています。

「・・・し、死んだ。なんだ、何が・・・おきた？」

「女！　なにをした!？」

目の前でいきなり仲間が死んだのです。動揺したアクス・デュラハンが、メルを肩をきつく掴んで揺すぶります。でも、メルにも何が起きたのか解らないのです。メルが何かをしたわけではないのです。

「さっきの下級魔法に何かがある・・・いや、しかし、そんなことができる魔法など・・・。グオツ!？」

「『レイジングファン!』!』」

廊下から、レイが黄金のオーラを纏って突進してきました。いきなりの襲撃に驚いたアクス・デュラハンでありましたが、上手く斧でそれを受け止めて直撃を避けます。

「メルーツ!!!」

ノアの声です。そして、ノアたちが連なって居間に雪崩れこんできました。

「ノア・・・。ノアーツ!!!」

メルは思わず叫んでしまいます。それは喜びに満ちていました。ノアたちが自分のために戻ってきてくれたのです。嬉しくないはずがありません。

「ゴメン！　メル！　アタシどうかしてた！！　メルを置いて先に行っちゃうなんて！」

レイに反撃を仕掛けようとしていたアクス・デュラハン。それを蹴っ飛ばしながらノアが言いました。

「ううん。私・・・私こそ、謝らなければいけない。勝手なことをしたんですから」

メルがそう言うのに、ノアもレイもニツと笑います。

「うぐぐぐぬ！　貴様ら、いったい！？」

「ニヤーン！　これで皆元通りに仲良しニヤーン！」

クルクルと回転しながら飛んできたミヤオが、アクス・デュラハンの肩口をガリツと引っ掻きます。そこにあつた肩当てが悲鳴をあげました。鬼のような顔が描かれていたのですが、それが苦痛に顔を歪めます。

「うがああー！　お、俺の顔を・・・よ、よくも！！」

肩当てが激高します。てっきり装飾だと思っていた肩当てが、実はアクス・デュラハンの本体であり弱点だったのです。実は、これがさつきから喋っていたのです。

「ああ！　もう！！　うるさい！！　『ストライクアタック！！』」

ノアの体重をかけた肘撃ちが決まります。ミヤオの一撃でヒビの入っていたアクス・デュラハンの顔がパリーンと砕けてしまいました。そして鎧は膝をつき、ピクリとも動かなくなります。

「な・・・なん・・・ギユウ！？」

いきなりの襲撃です。仲間がやられて、臆病風に吹かれたグレムリンでした。が、その身体を誰かの手が鷲掴みにします。そして、クツと力を入れるとポキリと何かが折れる音がしてぐったりしました。その手は、台所の方からのびていました。

「だ、誰だ！？」

メルをかばうように、ノアとレイが進み出ました。あの悪魔三匹以外に誰かがいたのです！

「・・・騒がしいネズミどもが」

台所の影から進み出てきた男を見て、ノアたちは目を丸くします。「オ・パイ!?」

それは、オ・パイでした。その後ろには、青白い顔をしたアホンとダラもいます。

「な、なんで・・・あなたが・・・あなたがここに!?!」

一際、驚きが大きいのメルでした。口に手を当てて半ば叫ぶように言います。それには応えず、オ・パイはチラツと倒れているベヒモスを見やりました。ノアはそれで気づきました。ベヒモスの身体にあるのは死至突の痕です。同じ技を受けたノアだからこそ解つたのです。

「オ・パイ・・・。アンタ、もしかしてメルを・・・?」

助けたの? とノアは聞こうとしましたが、オ・パイがギロツと睨みつけてきたのでその先の言葉は言えませんでした。

「・・・神王の加護とやら、どうやらガセだったようだな」

オ・パイは独り言のようにポツリと言います。その言葉の意味はノアたちにはわかりませんでした。それだけでなく、後ろにいるアホンとダラも不安そうに顔を見合っています。やはりこの二人でも解らないのでしょうか。

「悪魔どもの考えなどくだらぬ。・・・行くぞ」

オ・パイは鼻を鳴らし、ノアたちの横を通り過ぎて、そのまま行ってしまうおとしました。それをメルが止めます。オ・パイの腕を掴んだのです。

メルが攻撃されるものと、皆に戦慄が走りました。しかし、オ・パイは相変わらずの冷たい眼でメルを見やっただけでした。

「お・・・お父さん。シャリオ、シャリオの・・・両親は?」

胸を抑えつけ、不安と恐怖と悲しみが入り交じった複雑な目で、メルは・・・父を、オ・パイを見やります。

「・・・両親？ この小屋には、子供が一人いただけだ。私と、あの悪魔が来たせいで、慌てて逃げていったがな」

オ・パイの言葉に、メルは眉を寄せます。

なぜオ・パイたちが悪魔とここにいたのか。そういう謎もありましたが、それよりもシャリオの両親がいなかったとはどういうことでしょうか。あのベヒモスは、両親を食べたと言ったのです。メルはそれをちゃんと聞いていました。

「・・・フン。どういうことかはわからんが、あの怪物どもは・・・あそこにある人形を喰らっていたようだがな」

オ・パイが台所の中を指さします。そこを覗き込むと、マネキンが・・・ええ。なぜか倒れているマネキンが二体あったのです。

その二体は、頭から嚙られたような跡があります。頭と上半身がまるまる無くなっているのです。残った下半身の衣装から、どうやら男性と女性をそれぞれ模しているようです。

「・・・どういうこと？ これが、シャリオの両親？」

ノアはメルに尋ねますが、メルも解らないと首を横に振ります。その時でした。誰かが玄関から入ってくる音がします。

「・・・あーらら。ちよつと来るタイミングが早かったか。一つが上手くいかないと、二つめもダメだね」

ビシュエルです。ノアたちとオ・パイを見て大げさに両手を広げたかと思うと、居間の柱に手をかけながら、額を抑えて嘆く振りをしてみせます。

「・・・話が違つぞ。ビシュエル」

オ・パイがビシュエルを睨み付けます。ビシュエルはフフフと笑いました。

「私だつて、まさか派遣した潜入者どもと・・・私たちが鉢合わせるなんて思っていなかったさ」

親しげに話している二人を見て、ノアたちの身体が強張ります。

床に倒れてたグレムリンが、目をギョロツと動かし、ムクリと起きあがりました。まだ生きていたのです。すごい生命力です。

「キ、キイ！ ビシユエル様！！ オ、オ・パイ様が乱心を！！
わ、私や・・・このビヒモスを手にな・・・」

グレムリンは最後まで言い切ることなく、ボツとその身を炎で焦がしました。そのまま溶けて蒸発します。ビシユエルが魔法を使っていたのでした。

「おしゃべりなヤツだ・・・。ま、どうせ、こうなってしまうては計画はおじゃんだけどね」

大仰に肩をすくめ、ビシユエルは高笑いをあげます。

「・・・計画？」

もう聞かなくても解るような気がします。それでも、ノアは聞かずにはおられませんでした。ビシユエルは残酷に笑います。

「ラグナロク遺跡の場所・・・だよ。ここに私も何年もいるが、その場所だけは解らないのさ。スタッドのヤツが何か魔法をかけて隠しているのかもしれない。君たちなら、その場所を知っている。だから、紳士的に案内してもらおうと思ったのさ」

みるみるうちに、ビシユエルの肌が青白くなっていきます。耳も尖り、頭から山羊の角のようなものが生えてきます。その姿は人型の悪魔でした。

「じゃあ、アタシたちを・・・。まるつきり、あれは作り話だったというのか！？」

「フフン。そうさ。騙っていたのさ！ このまま騙されていれば、ラグナロク遺跡までは生きていられたのに・・・まったく、バカな子たちだね！」

ビシユエルが口笛を吹くと、蜥蜴に甲冑をつけたような姿をしたアークデーモン二体が姿を現します。どうやらずっとビシユエルの側で隠れていたようです。

「・・・くだらぬ茶番だ。最初から締め上げて吐かせればよかったものを」

オ・パイが気に入らなさそうに言います。

「それじゃ、つまらないよ。それに、力づくで口を割る連中じゃな

いさ」

ビシユエルが、すでに戦闘態勢のノアたちを見て面白そうに言います。

「フン。貴様に頼った私が愚かだった……。私は私でラグナロク遺跡を見つける」

「好きにしなよ。ただし……。私の邪魔だけはさせないよ。もし邪魔をすれば……。魔神様に……」

オ・パイとビシユエルがにらみ合います。しかし、オ・パイが先に目を逸らし、そのまま脇をすり抜けて行ってしまいました。慌ててアホンとダラもそれに続きます。

「……。ビシユエル!!」

「フフン。何人たりとも魔神バルバトス様の復活を阻む者には容赦しないよ! 知の四天王ビシユエルの美しさと恐ろしさ、その身に存分に味わうがいい!」

小屋から出て、雪原を平地とほぼ変わらぬスピードで歩く上司に耐えかね、ついにアホンとダラが悲鳴を上げました。

「ボス!! 待ってほしいチョ!」

「ほしいべー!」

不快感を隠すことなく、オ・パイは振り返ります。その距離はかなり開いていましたが、容赦なくアホンとダラのいるところまで殺気が叩きつけられます。しかし、それでもアホンたちは気力を振り絞って向き合いました。

「なんなんだチョ! さっきの、悪魔といい! なんで、ボスはあんなのと知り合いなんだチョ!?!」

アホンの必死の抗議でした。しかし、オ・パイは顔色一つ変えません。

「……。ノアたち死ぬべー」

ダラがぼそりと言います。アホンは苦々しい顔をしました。

「そうだチョ! あのビシユエルって悪魔……。普通じゃなかった

「チヨー!!」

アホンが両手を振り回して言います。ダラも大きく頷きました。

「……だとしたら、どうしたというのだ？」

そう冷徹に言うオ・パイです。アホンとダラはもどかしそうに口をモゴモゴとさせます。どう説明すればオ・パイに解ってもらえるのか解らないのです。

オ・パイの服がグイッと引っ張られます。オ・パイはチラツと下を見やりました。

「ヒックヒック……」

シャリオでした。シャリオが、オ・パイの服の裾を掴んで泣いているです。オ・パイは眉間にシワを寄せました。

「ボ、ボクの家に行った……お姉ちゃんが、悪魔に。悪魔に殺されちゃうよ！ た、助けて……お願いだよお！」

シャリオは泣きじやくりながら必死で言います。

オ・パイは何故かきつく目を閉じました。聞きたくないと言わんばかりです。歯を食いしばっているせいで、顎にエラが張ります。額には血管が浮き出ます。しかし、グツと堪え、しばらくして開いた目は、それら全ての感情を飲み込んでいました。いつもの暗殺者の顔です。

「……もうすでに死んでいる。行ってももはや手遅れだ」

その言葉に、シャリオは衝撃を受けます。茫然自失、愕然とした表情です。散った涙がポタポタツと下の雪をわずかに溶かしました。オ・パイはそのシャリオの顔すら見ません。口をへの字にし、掴んでいるシャリオの手を振り払って踵を返しました。

「こ、こんな子供に何を言うチヨ！」

「あんまりだべー！」

頭からボンと煙を吹き出したアホンが怒ります。しかし、オ・パイは何も答えません。アホンは肩をいからせてオ・パイの元に近づきます。

「……見損なったチヨ。ボス！ お仕置きでもなんでも後で受け

るチヨ！ 俺たちはノアを助けに行くチヨ！！」

アホンの言葉に、ダラが槍を背中から取り出します。そして、アホンはシャリオの手を取りました。

「俺たちと一緒に行くチヨ！ お姉ちゃん……ノアやメルメルは、俺とダラが助けてやるチヨ！」

シャリオの目に光りが戻ります。大きく頷いて、アホンの手を強く握り返しました。

アホンとダラ、そしてシャリオは……小屋への道を引き返します。途中で一度だけ振り返りましたが、オ・パイが身じろぎもしないのを見て取るとそのまま行ってしまうました。

ポツンと取り残されたオ・パイは、小屋をチラツとみやり、それから自分の足下の雪原を睨み付けます。シャリオの涙の跡、そして小さな靴の跡が残されていました。その側にはちよつと大きなアホンの靴跡です。これらがオ・パイの心をざわつかせていました。

さきほど飲み込んだ全ての感情を拳に握り込めます。そして、雪原に向けて一撃。拳を振り下ろしました。雪が、土が吹き飛び……小さなクレーターが出来上がります。

「……さすがはオ・パイ殿。無敵の四天王と呼ばれるだけありますね」

「む！？ 誰だ！！？」

すぐ横から声がします。気配は全く感じませんでした。オ・パイは目を見張ります。自分が気づかないうちに、これだけ接近してこれるなんて武術の達人でもない限りあり得ないことだったからです。「はじめまして、かな。どうも」

木立の影から、男が姿を現します。決して武人とか達人とかいう類の人物ではありません。特徴すらない、みすばらしいデムの男でした。古びた丸眼鏡の奥からは温厚な笑みが浮かんでいます。

「スタッド……？ 貴様は……スタッドか！！？」

オ・パイは聞いていた情報を思い起こし……それがすべて当て

はまる人物であると、それがスタッドであることを察します。スタッドの容姿は聞いていたものの、会うのは初めてだったのです。

何も返事をしないことが証明であると、オ・パイは不敵に笑います。

「これは好都合！ 貴様を捜すのに、ラグナロク遺跡とやらに行かずともすむとはな！！ ここで引導を渡してくれよう！！」

オ・パイが構えます。身体中から凄まじい殺気のオーラが迸りました。

それでも、スタッドは怯むことはありません。さすがは魔神バルバトスを封印した男だと、オ・パイは思いました。相手にとって不足はありません。

「・・・オ・パイ殿。戦う理由がないですよ」

「フン！ 貴様がそうでも、私には戦う理由があるのだ！！ シェイ！！」

一足飛びに間合いを詰め、オ・パイの目にも止まらぬ拳突きが繰り出されました。それは、スタッドの真芯を捉えていました。しかし、フツとスタッドの身体が消えます。

「な、なに！？」

「『憂う女神の願い。浄化の言霊。聖なる水。悪しき者の意を流したまえ・・・セイリカバー』」

何やらスタッドが魔法を使います。そして、戸惑うオ・パイの額を軽くチョンと突きました。パーンと何かが弾け、光が飛び散ります。オ・パイは一瞬だけ視力を失い、よろめきました。

「お、おのれっ！！ な、何をした！？」

オ・パイは慌てて後方に飛び跳ねます。痛みはありません。しかし、何か魔法がかけられたのに違いがありませんでした。

「・・・魔神の呪いを解きました」

スタッドは人差し指を立てて笑います。その呑気な姿は、オ・パイの一撃を避けたようには見えません。

「な・・・んだと？」

オ・パイは自分自身を見やります。何も変わったことはありません。

「もう会話が魔神バルバトスに聞かれることはありません。もう『野望を抱く無情の暗殺者』の振りはしなくてもいいんですよ」

自信満々に言うスタッドでしたが、オ・パイは訝しげな顔をします。しかし、スタッドの表情からは『僕を信用して下さい』という言葉しか読みとれません。

「あなたの力が必要です。ノアを……いや、ノアたちを助けてやってください」

スタッドはニコツと笑ってそのまま立ち去ってしまいます。

「お、おい！ 待て！ スタッド！！」

オ・パイはその背を追いかけますが、すぐに見失ってしまいます。周囲を捜しますが、どこかに隠れているわけでもなさそうです。でも、さっきのスタッドは間違えることもない実体でした。

自分の拳を見つめます。何度も人々を追いつめてきた、死に満ちた邪悪な拳です。しかし、今のオ・パイには何よりもそれが頼もしく思えていました。

「……ふ、ふははははは！ 見事、私を出し抜きおたわ。スタッドめ。私もヤツの手の上で踊っていたネズミというわけか」

オ・パイは大きく笑い、そして小屋のある方向に振り返りました。

「よかるう！ スタッド！！ 貴様の手の平で踊ってやるわ！！ 死の舞踏ならぬ……死の武闘をな！！！」

その目はもはや、あの冷徹な暗殺者のそれではありませんでした。
……。

第十四章 無敵の四天王・・・（後書き）

ビシユエルはやっぱり敵だった・・・なーんて、ベタな話ですが王道で安心して読んで頂くためにはこういう展開のほうかw

オ・パイの挙動が怪しくなってきましたが・・・どうなんでしょうか。スタッドの言う魔神の呪いとは？ シャリオの両親が人形なのは？ ビシユエルと対峙したノアたちは・・・！？ 次章、緊迫の展開、だと思えます。

第十五章 四天王VS四天王

小屋の壁と天井が、ドカーンと勢いよく吹き飛びます。

灼熱の炎が、冷たい吹雪が、交互にノアたちに襲いかかつてきます。

「凍てつく霜柱に包まれし牢獄。永久なる眠りを望む氷の女皇。その絶対零度の靈威を示さん。大いなる厳寒の氷結にて死滅させたまえ・・・ダイヤモンドダスト！！！！」

ビシユエルが魔法を放ちます。星のような形をした氷塊が、外の吹雪とは比べものにならない猛吹雪を放ちながら全てを凍らそうと震動します。

「あ、危ないボオー！ ヒートバリア！！」

咄嗟にポーズ太郎が炎の壁を生み出しますが、それよりもレベルが高い上級魔法は楽々とその障壁を打ち砕きます。

「うつつ！ ファイヤーストーム！！」

メルがポーズ太郎の後に魔法を唱えます。それでもダイヤモンドダストは止まりません。メルのファイヤーストームを消し去り、皆を吹き飛ばします。

「ボー！！」

「キヤアア！！」

「どうあー！？」

「うあああ！！」

「ニヤー！！」

崩れた壁から、ノアたちは吹っ飛んでいきます。魔法で氷漬けにされ、そして自然にも氷漬けにされてダメージは深刻です。

「チヨ！ シヤリオ！ ぜ、絶対に俺たちの後ろにいなきゃダメチヨ！」

「う、うん！」

「べー！！！！」

アホンがシャリオを背にして剣を構えます。

ダラがブンブンと槍を振り回し、ビシユエルに向けて突進しました。

「フン。醜いね……。邪魔だよ！」

ビシユエルが指を弾くと、魔法の飛礫がダラを急襲します。たまらずダラは防御して止まります。

「クソ!!! レイジングファン!!!」

「ああん？ そんな低級な剣技が私に通じるはずもないだろ」

レイが渾身を込めて打ち込んだレイジングファンを、ビシユエルはこともなげに素手で弾きます。

「・・・美しくないね。『激怒の稲光よ、呼び起こせ。天界に居城を構えし偉大なる雷帝。御使いたちを伴い、大いなる裁きの雷槍にて崩落させよ・・・スパークプラズマ!!!』」

空いた天井から、黒雲が立ちこめ、そこから雷を伴った槍のようなものが姿を現します。それも一本だけでなく、大きい槍に連なるように、無数の小さな槍まで頭を覗かせます。

「ま、まずい！ アレが振ってきたらお終いだ!!!」

「ボー！ ボー!!! 雷を防ぐ魔法・・・そ、そんなものなかったボー!!!」

ボーズ太郎は今まで習得してきた魔法を必死に思い出しますが、雷に有効な防御魔法はないのです。炎・氷・雷・・・その中で最高位の威力を誇る雷だけは、どんな魔法でも防御できないのです。

「雷は雷の魔法じゃなきゃ・・・でも、私のライトニングじゃ」

メルは魔法を唱えようと思いますが、ビシユエルの唱えたスパークプラズマは尋常じゃない規模です。それこそ辺り一帯を全て消し飛ばしてしまわんばかりです。そんなものに太刀打ちできるはずがありません。魔法を唱える指先がカタカタと震えます。

「レイ！ アンタのテンペストだ!!!」

ノアが叫びます。ビシユエルに果敢に斬りつけていたレイはハッとしました。

「わかった！ 『テンペスト！』」

レイがその場で回転しだし、剣を勢いよく放ります。

「・・・ほう。いわゆる避雷針か。考えたね。でも、私の魔法を甘くみるなッ！」

無数の槍のいくつかは、レイの帯電した剣に引かれてぶつかり合います。しかし、すべてが消せたわけではありませんでした。テンペストを逃れたスパークプラズマが地上に打ち降ろされます。電撃が雪の上を進りました。ノアたちは紙くずのように全員が吹き飛ばされます。

「カカカ！ 恐るべきは、ビシユエル様の魔力よ」

ビシユエルの後ろに控えていたアークデーモンが笑いました。

「まさに・・・。だが、まだヤツら生きているようだ。これはどうしたことか？」

もう一匹が首を傾げます。というのは、倒れているノアたちは虫の息ながら呼吸をしていたからです。

「手加減しているからに決まっているだろ。こんなヤツら、その気になれば一撃で倒せる」

ビシユエルがつまらなさそうに言うと、アークデーモンは手を叩いて笑いだしました。

「そうですね！ 悪魔四天王ビシユエル様の超魔力に敵う者なし！」

「スタッドなど恐れるに足らず！ 魔神バルバトス様復活の暁には、もはや敵などないですな！」

浴びせられる美辞麗句に対しても、ビシユエルはフンと鼻を鳴らすだけでした。

「クソ・・・。アホンやダラまで応援に来てくれたつてのに・・・アタシたちは、ここまでか」

雪に半ば埋もれ、片目だけを開けてノアはつぶやきました。

絶望的な状況です。誰一人立っていません。もう戦える者がいないのです。レイもボーズ太郎も仰向けでピクリともしません。ミヤオもつづくまって動けません。メルも隣で荒く息をついていました。

そして、アホンとダラムシャリオをかばうようにして奥で倒れていました。

「・・・つまらないな。私が美しく輝くために、少しは抵抗してくれよ」

ビシユエルはノアの前でしゃがんで言います。その瞳は黒く淀んで濁っていました。

「・・・な、なんで。アンタは魔神に従うんだよ？　魔神に・・・操られているようには・・・見え、ない」

ノアが苦しげに聞きます。ビシユエルはニタリと笑いました。

「・・・私は魔神様に感謝しているんだ。この永遠の美しさを下さった方だ。だけど、正直な話は魔神バルバトスの復活なんてどうでもいい。私が、私自身の美しさを知れる。その瞬間を得るためだけに私は生きているんだ」

身悶えして悦に入るビシユエルです。その狂気 of 笑顔は異常でした。もはやメリンであるどこか、悪魔ですらありません。ただ自己顕示欲に溺れる者の狂気そのものでした。

「・・・どこが美しいんだ。アタシの目の前には、世界で一番、醜い男しか・・・見えない」

そのノア of 言葉に、ビシユエルが目を剥きます。目が血走っています。

「こ、この私が！！　み、み、み・・・醜い！？　ど、どこが、どこがあ！？　この美しい・・・頭脳も魔法も美貌も完璧な私のどこが・・・醜いというのきやあああああ！？」

言葉にならない叫びをあげて、ノアの頭を踏みつけます。力一杯に踏みつけます。

「う、ぐ！　ああッ！」

額から血を流し、ノアが悲鳴を上げます。

「や、やめて！」

「ひどい・・・ボー！」

「・・・ニャー！」

ます。そして魔法陣を指で描きました。

「『常闇の石窟に眠る者よ。我大いなる門を開きたもう。光明への怨恨を胸に掘進し、示威せよ・・・サモン・ロックキング!!!』」
「いけたかだかに、魔法を詠唱します。それは、ノアたちにも聞き覚えがある詠唱でした。」

「う・・・。この魔法、は」

「ウファハハハ！ そうだ。レムジンにロックゴーレムを召還したのは、この私だ！！ あの時はガーゴイルどもに魔法陣を描く手助けをさせ、遠隔で呼び出したが！！ ここであれば、私の描く魔法陣と魔法力だけで事足りる！！ レムジンを壊滅した恐怖の悪魔を！！ 私がここに直々に呼んでやろう！ そして、醜く完璧に！ 貴様たちを・・・塵も残さずに殺してやる！！！！」

ビシュエルが描いた魔法陣が天高く舞い、巨大化して回りだします。ガーゴイルこそいないものの、それはレムジンで見たものと全く同じでした。

「さあ！ 来い！！ 魔神バルバトス様が復活しつつあることで、私の魔力もここまでになったのだ！！ 貴様らを殺し、スタッフを殺し、私はレムジンとミルミに戻る！！ 醜い三種族は滅ぼし、この私だけが、世に美しいまま永遠に生きるのだああああああ！！！！！！」

狂気をまといつつ、高笑いしながらビシュエルは手を広げます。

魔法陣は光り輝き、ロックゴーレムを呼び・・・。。。。ませんでした。何者も現れません。ただ光り輝くだけです。やがて魔法陣は魔力を失い、その光は消えていきました。

「な！？ な、なんだと・・・ロックゴーレムは、ロックゴーレムは・・・どうしたのだああ！！？ なぜ来ない！！？」

「・・・封じられたか、破壊されたか。そうしたならば、召還など出来ぬ」

オ・パイが姿を現します。それに、ビシュエルは少なからず動揺します。ですが、すぐに努めて平静を装おうとしました。眼鏡をか

け直して目を細めます。

「封じる？ 破壊される？ あり得ない……」

信じられないといわんばかりに、ビシュエルは首を横に振ります。「フン。オルガノツソもアルダークも……貴様もそうだ。そう傲りが過ぎる。だから、魔神バルバトスに倒され、良いように使役されているのだッ！！！！」

オ・パイが双拳を振り下ろします。グシャ、グシャッ！！ ビシュエルの方を向いていたアーケデーモンたちの頭が一瞬で碎けます。「な！？ オ・パイ！！！！ 狂ったか！？」

「狂っているのは貴様だろう。ビシュエル。四天王時代から、貴様の感覚には辟易している……ここで終わりにしてやる」

オ・パイはそう言っただけ深く構えました。

「お、おお！ ボスが……ボスが来てくれたチヨ！ ボスは俺たちのこと見捨てなかつたチヨ！！」

「……ボス……だべー！」

アホンとダラが、痛みもなんのそので喜びます。オ・パイは少しだけニヤリと笑って応えてみせました。

「ぐっ……。しかし、貴様は魔神様の呪いを受けて……」

「ククク、残念だが、もはや何ともなくてな。何の憂いもない！」

ビシュエルは慌てて魔法書を取り出します。しかし、オ・パイの攻撃の方が早かったです。

「チャイア！！」

下から掬い上げるような掌底打ちです。

「ぐぶあ！」

呪文の詠唱を封じられ、ビシュエルは舌を嚙んでしまいました。

「う、うぐう！」

「シイッ！」

間合いをとろうとしたビシュエルですが、オ・パイの足払いで転倒してしまいます。

「……いかに巨大な魔法を扱おうとも、それを放つ間が無ければ

意味がないな」

「ま、まで！　までっ……っぷあ！」

「シエイツー！！！」

哀願するビシュエルの顎を、バシンと蹴り上げます。眼鏡が割れて飛んでいきました。

「待てと言われて、待ったことがあったか……ビシュエルよ」

オ・パイの実力は、同じ四天王のビシュエルを遙かに越えるものでした。

「そ、そんな……バカな。この、悪魔の身体を……手に入れた、私、がッ！」

鼻血をダラダラと垂らしながら、ビシュエルはブルブルと震えます。悪魔となつてからは遙かに強力な魔法を使えるようになり、詠唱スピードすら人間では追いつけないほどです。それなのに、オ・パイに抗うことすらできません。一度だつて反撃できないのです。

「終わりだ。ビシュエル。オルガノツソとアルダークの元に逝くがいい」

オ・パイは人差し指をピンとのばし、ゆっくりと弓を撃つときのように構えます。死至突です。その技を知っているビシュエルの顔に絶望が浮かびました。

「お……お父さん」

メルが起きあがって眩きました。ハツとメルの方を向き、ビシュエルはニタリと笑います。

「まだだ！　まだ切り札はある！！」

ビシュエルはそう叫び、腰から横笛を取り出しました。そして、いきなりそれを吹きだします。怪しげな音色が響きわたりました。

「……ぬう！」

オ・パイは額を抑えて頭痛を堪えます。ノアや、レイ、ミヤオ、ボーズ太郎も苦しみます。この音色はとて不愉快なのです。

「オ・パイ！　オ・パイよ！　聞け！　前に言った通りだ。魔神バルバトス様が言った通り、ボーズ星人どもは災いを招く！！　現に

君の娘メルメルは、下等な人間に辱められた挙げ句、ボーズ星人らにさらわれて殺された！ 娘の敵討ちのために、君は魔神バルバトス様を復活させなければならぬ！！ そして恐怖と力による支配を！！」

畳み掛けるようにビシユエルはオ・パイに語りかけます。オ・パイは眉を寄せて首を横に振りしました。

「我が同胞オ・パイよ！」

「ダメーッ！ お父さん！！」

ビシユエルの声が、メルの言葉に掻き消されます。オ・パイの目がギリりと光を取り戻しました。

「・・・ぐあ！」

オ・パイの無骨な手が、ビシユエルの細い首を絞めます。

「・・・ククク。ビシユエル。貴様は魔法だけでなく、幻術を得意とするんだっとな」

片手で簡単に持ち上げられ、ビシユエルの顔が醜く歪みます。

「な、なんだと・・・わ、私の、催眠は・・・か、完璧に・・・」

「完璧に？ ククク。ああ。完璧だっただろうな。大いに役立った・

・・・おかげで、シーラやメルメルを守れたのだからな」

オ・パイがニヤリと笑うのに、ビシユエルは眉を寄せます。

「ど、どうということだ？」

「この私が貴様の幻術にかかったと思っただか？ 勘違いするな。かけさせてやったのだ！」

「なあ！？」

オ・パイがビシユエルを思いつきり空に放ります。

「メルメル！」

オ・パイがメルに目をやります。メルはジツとオ・パイを見つめました。その目は、もう冷酷な殺人鬼の目ではありません。メルの記憶にある、優しく強い父のものでした。

「力を扱う者が、力を恐れてはならぬ。仲間を・・・ここまで共にやってきた友を見よ！ お前が守るべき者たちだ！」

父の言葉に、メルは目を大きく見開きます。オ・パイはそう言うてから空中に飛び上がり、落下してきていたビシユエルを蹴り上げました。

「シィアツ！」

「ぐぎゃああ！」

「・・・いまだ！　メルメル！！！」

オ・パイが叫びます。

「は、はい！」

メルは立ち上がりました。ズタボロの仲間たちを見やります。自分に力があれば、こんなことにはならなかったはずです。それをメルは悔しく思います。

自分の迷いを断ち切ります。全てを壊してしまうかもしれない・・・そう思い、制限していた力を解きひらきます。力強い詠唱、力強い魔法の力。本来のメルが持つ魔法の力が迸ります。

「『神王が生みし魔法の源泉主たちよ。久遠の業火をまといし地獄の炎王。永久凍土の牢獄に眠る氷の女皇。空と光を統べる偉大なる天界の雷帝。幼き術者の祈りと願い、寛容なる御心にいざ届かんとを！』」

炎が、氷が、そして雷が・・・それぞれの力が球体となり、メルの詠唱に従ってポツポツと周囲に現れます。地が震えます！　空が震撼します！

「バ、バカナ！？　あ、あれは・・・炎、氷、雷の上級魔法を一度に放つ究極魔法！？　この、この私でも使えない、伝説上の魔法を！？　あ、あんな小娘がツ！！？」

ビシユエルが空を舞いながら、驚愕して震えます。

「ぐうッ！」

炎の球がメルの足を焦がします。氷の球がメルの指を裂きます。雷の球が肩を抉ります。魔法を制御しきれれていないのです。

「・・・お願い。私の、私の身体はどうなってもいい！　仲間を・・・仲間たちを守って！」

メルの必死の祈りが響き渡ります。

「・・・メル！」

「・・・メルメルボー！」

「・・・メル、ミヤー！」

「ピンクの娘チヨ！」

「メル、ベー！」

ノアが、レイが、ボーズ太郎が、ミヤオが、そしてアホンやダラまでもがメルを応援します。

「ん？　なんだ、チヨ？　シャリオ！　どうしたチヨ！？」

アホンとダラの後ろに隠れていたシャリオが、フラフラと前に出てきます。その瞳は普通ではありません。煌々と青白く光り輝いています。

「『・・・聞け！　汝ら、その幼き術者を主と認め、力を貸し与えよ！』」

小さいシャリオの口から出たとは思えない凛々しく威厳ある声。魔法の詠唱のようにも聞こえるそれに、メルの周囲を巡っていた魔法の球たちがビクツと反応したかのようでした。

そして、魔法の球たちが、メルの周りを秩序正しく回り始めます。炎の球は炎の球で一カ所に集まり、炎をまとった強面の巨人に。氷の球が集まり、眠り続ける儂げな美女に。そして雷の球が集まり、槍を携えた武人に。そうです。それぞれの魔法の統括者たちが姿を現したのです！

「・・・そ、そんな！　そんなバカなことか！！」

「シャアアツ！」

「ぐがつ！」

オ・パイが再びビシユエルを蹴り上げました。ビシユエルはまたまた高く飛び上がり、蹴った反動を利用してオ・パイは地上に向けて急降下します。

「『アルティメット！！！！！！！！』」

メルが両手を突き出して究極魔法を放ちます。炎が、氷が、雷が、

・筋状に延びていき、三重の螺旋を描いてビシユエルに激突します。猛烈な光。一度その光が収斂したかと思うと、辺りの空間が凝縮して大爆発を起こします!!

「・・・フン。最期こそ、美しく逝けたではないか。さらばだ、ビシユエルよ」

オ・パイがスタッと着地して言います。空を見やるとビシユエルらしきものは見あたりません。メル魔法の威力があまりにも強く消え去ってしまったのです。

力の全てを使い果たして、メルはその場に倒れそうになります。さつとオ・パイが走ってきてそれを抱きとめました。

「・・・お父さん」

メルは虚ろな目で、それでも父親をしっかりと見やります。ポロリと大粒の涙が零れてしまいました。オ・パイはコクリと小さく頷きます。

「すまなかつたな。メルメルよ」

ギョツと、メルをオ・パイは抱きしめます。メルもその抱擁に應えるように抱き返しました。そして、ゆっくりとメルをその場に座らせてやります。

「・・・アホン、ダラ。無事か？」

オ・パイが声をかけると、アホンとダラはすぐに立ち上がって寄って来ます。

「俺たちは無事チヨ！でも、ノアたちが・・・」

全員が瀕死の状態でした。特にノアがひどく、今にも気を失ってしまいそうです。

「・・・治療魔法が使えるボーズ星人が、ああではな。どうしたものか」

オ・パイはチラツとボーズ太郎を見ました。ボーズ太郎も完全に気を失っています。回復魔法が使える者は、今動ける者の中には一人もいません。

「仕方あるまい。一度、レムジンに戻って・・・」

「ボ、ボクがやる！」

シャリオが声を張り上げました。オ・パイは意外そうな顔をします。

「シャリオ！ 回復魔法が使えるチヨ!?」

「んだが、シャリオは・・・ファルだべー。魔法は・・・」

訝しげな顔をしたアホンとダラですが、それでもお構いなしにシャリオは両手を合わせました。

「高貴なる慈しみの雫。鳴動するは生命回帰の調べ。壮大なる救済の協奏を響き渡らせたまえ・・・ゴツドキュア!!!!!!」

シャリオが詠唱とともに両手を開くと、薄緑色の雨が辺りに降り注ぎました。それは不思議と温かく、とても優しい感じのする雨です。

「チヨ!? なんだチヨ!? キズが・・・塞がっていくチヨ!!」

「おー。なんだか、活力が湧いてくるべー!!」

アホンとダラが喜びに飛び跳ねます。痛みが、疲労が、寒さが・・・あらゆるダメージをその雨が癒してくれるのです。

「う、うう・・・ん? ああ!？」

雪と瓦礫に、半ば埋もれていたノアが飛び跳ねます。レイやボーズ太郎もむくりと起きあがります。ミヤオが顔をあげて歓喜に鳴きました。

「な、なんだ・・・これ! あ。鼻血も止まってるし・・・歯が、歯がまた生えてきてる!？」

ノアが口の中を指でなぞって驚きます。ビシユエルに蹴り飛ばされて折れたはず歯が、また再び生えてきているのです。

「よ、良かったな。ノア! 一応、お前も女だから・・・うげッ!」

「誰が一応、だ!」
安堵に微笑むレイに、ノアの拳が振り下ろされます。それでも、ノアもレイも笑顔を崩しません。それだけの奇跡が起こったのですから当然です。

「・・・こんな癒しの魔法は、二十年前の戦乱時にも見たことがな

い。大司教フアラを遙かに凌ぐ魔法力だな」

オ・パイは腕を組みながらシャリオを見やります。メルも「凄い魔法」と言っつて、コクリと頷きました。

「でも、なんでファルのシャリオが魔法を・・・使えるんだチヨ？」

「フン・・・。剣技はファル、魔法はメリン。そんな事を言い出したのは、レムジン元老院どもだ。自分たちの種族優位を示すために誇張しているに過ぎぬ。実際には、ファル以上の剣士がデムにもいる。魔力を持つファルや、メリンの剣士なども確かに存在しているのだ。表舞台に出てこないだけでな」

そう説明するも、アホンもドラも理解できないようで首を傾げています。オ・パイは気にいらなそうに口をへの字にしました。

「ああ。お姉ちゃんたち・・・良かった。あ！お父さん！お母さん！」

ノアたちに向かって微笑んだシャリオでしたが、何かに気づいて走り出します。

シャリオの向かった先には、あの台所にあつたマネキンが・・・。いえ、マネキンの上に何かが覆い被さっています。ぼんやりとですが、人影のようです。それはファルの夫婦でした。

『シャリオ！無事だったんだな』

『ああ。シャリオ！よく頑張ったわね』

その人影たちが、シャリオの頭を撫でます。ぼんやりとしていて、先の風景が透けてみえてしまっています。しかし、シャリオは満足そうに撫でられるままにしています。

「・・・ねえ。あれ、どういうこと？ま、まさか・・・幽霊？」

ノアが言つと、ボーズ太郎がブルツと一つ身震いしました。

「・・・いえ。魔法力です。あの人形に魔法力が投影されています。シャリオの魔法力が、あの両親を生み出しているんです」

よく見やると、メルの言つとおり、シャリオの身体からオーラがでていて・・・それが両親の影に結びついていました。

「どういうことだ？　じゃあ、この小屋には・・・シヤリオしかいなかったってことか？　後は、あの魔法力で生み出された両親しか？」

レイが尋ねますが、誰も答えられません。どういふことなのか誰もさっぱり解らないのです。

「・・・ビシユエルが、この小屋には神王の加護とやらがあり、普通の悪魔では立ち入れないと言っていた。そこで、悪魔の身体ではない私であれば、入っていけるものと考えてここに送り込んだのだ。ラグナロク遺跡の居場所を突き止めることを条件にな」

隣でオ・パイがサリリと言います。そこで、ノアはオ・パイの存在に気づきました。慌ててダガーを構えます。

「オ・パイ！」

ノアの言葉に、レイやボーズ太郎もハツとします。敵意が感じられませんでしたし、いままで呆然としていて気づかなかったのです。

「・・・いまさらだな。私に戦う意思はない」

オ・パイは肩をすくめて言います。しかし、ノアは信じる事が出来ません。

「本当なの！　ノア！　お父さんは・・・お父さんは記憶を、記憶をとりもどしたの！　私のことも思い出してくれた！　そして、あのビシユエルと戦ってくれたの！！」

メルがオ・パイをかばうようにして立ちはだかります。アホンもダラム「そうだ！」と強く頷きました。

「で、でも・・・」

ノアは唇をかみます。いきなりオ・パイが善人になったと言われとも信じられません。特にボーズ太郎はそうでした。長老や仲間たちを殺されているのですから・・・。

「・・・スタッドへの借りは返した。後はラグナロク遺跡でもどこでも行くがいい」

オ・パイはそう言って踵を返します。

「お父さん！　なんで！！　なんで、そうなの！？　ちゃんと訳を、

訳を言つて！！　そうすればノアたちだつて・・・」

メルは父の手をとつて揺さぶります。しかし、オ・パイは微動だにしません。

「・・・スタッドを私の元へ連れてこい。さすれば、野望をもつ男でも、四天王でもない。ただの一介の暗殺者オ・パイが相手をしよう。・・・ジャスト城で待つ」

オ・パイはメルの手を優しく振り払い、そして立ち去っていきま
す。アホンとダラは、チラッとノアを見たかと思うと、慌ててオ・
パイの後を追いました。

途中で、オ・パイはチラッとボーズ太郎を見やります。恐怖を堪
えながらも、怒りと憎しみを込めた目でオ・パイを睨み付けました。

「・・・ボーズ星人が、そう感情を顕わにすると、初めに見た」
「あ、当たり前だボー！　皆が・・・皆が許しても、我は・・・我
は絶対に許さないボー！！」

拳を振るわせていうボーズ太郎です。今でも殴りかかつてしまい
そうな雰囲気でした。

オ・パイは目を軽く瞑つたかと思いきや、両足の爪先をクルツと
ボーズ太郎の方向に向けます。そして、腰を深く折りました。なん
と頭を下げたのです。

「・・・我が非道を詫びる。貴様たちに何の罪もない。今はそれぐ
らいしか言えぬ」

謝られたことに、ボーズ太郎は呆気にとられます。しかし、それ
だけで怒りが消えるはずありません。複雑な気持ちで、ボーズ太
郎はモゴモゴと口を動かしました。しかし、言葉が出てきません。

「許してくれとは言わぬ。復讐を果たしたければ、魔神バルバトス
の件が片づいた後にしてもらいたい」

オ・パイはそう言い切ると、頭をあげてその場を立ち去りました。
・・・

シャリオはずっと両親の側で幸せそうな顔をしています。それを

壊したくなくて、ノアたちは逡巡していました。

「ど、どうするんだ？」

「どうすうもこうするも。このまま放つて置くわけにはいかないだろ」

ノアは頭をガリガリと掻いて、シャリオの側に立ちます。そして、そのシャリオの肩をポンと叩きました。

「あ！」

驚いたシャリオの魔力が途絶えます。そして、両親の影は消えて、マネキンの下半身がその場に倒れました。

「あ！ お父さん！！ お母さん！！」

悲しげな顔をして、慌ててシャリオは魔法を詠唱し出します。再び両親を生み出すつもりなのでしょう。しかし、ノアはそれを止めさせて、自分の方を向かせました。

「シャリオ。これは、アンタのお父さんでもお母さんでもないよ」

シャリオはクシャクシャに顔を歪めます。そして、激しく首を横に振って再び詠唱しました。

「シャリオ！！」

ノアがガバツとシャリオを抱きしめます。最初ビツクリしていたシャリオでしたが、長い睫が伏せられるとポロポロと涙を零します。「・・・お父さんと、お母さんがもう死んじゃったの。ボクは知っていたんだ」

シャリオの言葉に、誰もが何とも言えない顔をします。

「もう何年も何年も昔。シワクチャになって、おじいちゃんとおばあちゃんになっちゃって・・・それで動かなくなって死んじゃった」老人になって死んでしまった・・・というのは、どういうことかノアたちには解りませんでした。それでも、シャリオはきつと心細い思いをしていたのだろつということだけは伝わります。

「シャリオ。この小屋も壊れてしまつたし・・・私たちと一緒に行きましょう」

メルが優しく言うと、目を擦りながらシャリオはコクリと頷きま

す。

「ああ。行こう……。スタッドの待つところへ。そこで全て解るはずだ」

こうしてノアたち一行は、シャリオという幼いながらも強力な魔力を秘めた子供を新たに仲間にして、ラゲナロク遺跡へと向かうのでした。。。。。

第十五章 四天王VS四天王（後書き）

ゲームでは、もっと簡潔で・・・オ・パイがあつという間にビシユエルを倒してしまっただけなんです。ちよつとメルに挽回の機会を与えた演出にしました。

今回はラグナロク遺跡です。ついにスタッドと出会うノア。スタッドは何を語り、何を目的としているのでしょうか・・・。その謎は十六章にて明らかになりますので。こうご期待・・・されている方は少ないことと思いますが（泣）。トホホ。

第十六章 英雄スタッドと聖剣エイスト

地図に指し示された場所は、ただ一面が雪に覆われたなんの変哲もないところでした。

ノアは愕然として、雪原に膝をつきます。

「なんだよ……。何も無いじゃないか！」

レイは辺りを見回しますが、本当に何も無いのだと解ると目を伏せました。

「ここじゃないのか……。道をどこかで間違えたか？」

地図を見直しますが、決して迷うような道の上ではありません。それは考え難いことでした。

「……。いえ。ここです」

「ボー。ビンビン感じるボー！」

メルとボーズ太郎が確信を持って言います。魔法を扱う者には何かが感じとれるでしょう。

「でもでも、なーんもないニヤ。なにがあるんミヤ？」

ミヤオがヒクヒクと鼻を動かして、首を横に振ります。二オイも感じられないのです。

ノアもレイも困ったような顔をします。なにかあると言われても、五感じゃとらえられないものであればどうのしようもありません。

「う、嘘じゃないボー！」

ノアたちの沈黙に、疑われたものと思ったボーズ太郎は慌てて周囲を探します。でも、雪を掘れど何もでてきません。

「……。どうということかしら？ 聖なる力はこの辺りから感じられるのに。封印の類いではないですし」

メルも懸命に魔法力の流れを追いますが、追うと途中で煙に撒かれたように見失うのです。漠然とした気配に、それを見極めることができずに困惑します。

「……。ラグナロク遺跡。神の運命を定める審判の社。世界創世に

して終焉の神域。人が神と契約を交わせし古の地」

「シャリオ？」

重々しく語り出すシャリオに皆が驚きます。子供が言う台詞には思えません。表情がいつもと違います。瞳が青白く煌々とし、言い知れぬ威圧を発しています。

「・・・時は満ち足りた」

シャリオはそう言って目を瞑ります。

「へ？ おわわわ！」

ドン！ 下から突き上げるような衝撃があつたかと思うと、大きく地面が波打つてグラグラと大きく揺れ出します。

「ミヤー、また地震ニヤー？ ユラユラはイヤだニヤー！」

「でも、悪魔は・・・ビシユエルは倒したポー！」

「悪魔はビシユエルだけじゃありません！ これだけ悪魔がいるんですから！」

「そもそも、悪魔が地震を起こしてる・・・その話が眉唾と考えるべきだな！」

「ええい！ そんな呑気に話してる場合じゃな、いきつ！・・・つてえー！ 舌かんだあー！！！」

大騒ぎの五人でしたが、地震はすぐに止みます。

「・・・なんなんだ。一体？」

レイが頭を振ります。

「・・・あ。入口だよ」

眼の輝きが消え、素に戻ったシャリオが指をさします。その方向に目をやると、なんと何もなかったところに洞窟ができていました。まるで最初からありましたという感じに、両手を広げてみてもぜんぜん足りないぐらいな大口を開けています。

「な！ なんだよ、これ・・・」

上に積もってる雪や、入口に連なる氷柱からして、それが突如として現れたものではないことが解ります。ずっとここにあったのでしょう。

「・・・これがスタッドさんの聖魔法なんでしょうか」

メルという言葉に、レイが眉を寄せます。そしてノアに目を向けました。

「ノア。俺はずっと思っていたことがある・・・」

レイの神妙な声に、ノアもポカーンと開けていた口をきつく閉じます。

「スタッドは確かに俺たちを招いている。でも、それは・・・歓迎とは違うのかも知れない」

メルもボーズ太郎も、ミヤオもシャリオも・・・不安そうな顔つきでノアとレイを見ます。

「・・・何が言いたいのさ」

言ってから、ノアは自分がとても冷たい口調だったという事に気づきます。でも訂正できません。訂正したら、自分も心の底で感じている不安を認めてしまう気がするのです。

レイは少しためらってから、それでもノアを見据えて口を開きます。

「あまりに・・・話が出来すぎている。スタッドをそこまで信用していいんだろうか？」

ノアが目を大きく見開きます。それは驚きでもあり、怒りを含んだものでもありました。

「いまさら何を言ってるんだよ！　ここまで来て!!」

激昂するノアです。メルも同意して頷きます。

「ボーズ星人の長老様も、ファラー大司教も・・・スタッドさんを信頼していました！　なにを疑うというの？」

メルに詰め寄られ、レイは気まずそうな顔をします。いつの間にか、レイ一人を責めるように皆の視線が向けられています。

「・・・なら逆に聞くが、スタッドはなぜ姿を現さないんだ？　こんなランドレークの最果てまで俺たちを呼んで何をしようとしているんだ？」

レイの問いに、ノアは顔を曇らせます。

「でも！ スタッドはアタシを助けてくれた！ オルガノツと戦った時だって！！」

ノアは必死に言います。ボーズ太郎も強く頷きます。

「すべてがスタッドの筋書き通りなら……。別の見方も出来る」

「……どういうことさ？」

レイは大きく息を吐き出しました。

「ノアが窮地に陥ったのも……スタッドの計画だったのかも知れない」

その言葉に、ノアは固まります。

スタッドがノアの存在を知っている時点で、頭の隅ではその可能性があることに気づいていました。でも、認めたくなかったのです。命を助けてくれたスタッドを信じたかったのです。

「……レイ。それがアントの本当の気持ちなら。ここでお別れだ」
ノアはレイにクルリと背を向けて言いました。

「待て！ ノア！！」

レイは呼び止めますが、ノアはそのまま洞窟の中へと向かっていってしまいます。

他の皆も、顔を見合わせ、少し悩んだ挙げ句、ノアの後を追いました。それを見て、レイは強く舌打ちをします。

「よく考えるんだ！ どうして、そこまでスタッドを信用できる！？」

そう叫びますが、ノアは立ち止まりません。いえ、正確には立ち止まれなかった……。と言っべきでしょう。レイの言葉に耳を貸しては、自分の決心が揺らぎそうだったのです。

なぜ、オ・パイによって瀕死になったノアを、スタッドがあのだイミングで助けられたのでしょうか？ なぜ、ボーズ星人たちを試すような真似をしたのでしょうか？ なぜ、ファラー大司教を通して自分の元へ案内しなければならなかったのでしょうか？ 疑問が次から次へと湧いては、うやむやに消えていきます。

そして、一番の疑問……。なぜ、スタッドはノアの事を知って

いたのでしょうか？ どうして、ノアをラグナロク遺跡に呼び寄せたのでしょうか？ 魔神バルバトスを封印を完璧にするため……。それに、どうしてノアが必要だというのでしょうか？

『もう大丈夫だよ。死んで良い命なんて一つもないんだから……。』と、スタッドがノアにかけた言葉。これだけが、ノアにとつての支えでした。その言葉を信じたからこそ、彼に会うためにノアはここまでやってきたのです。

優しい目元、頭に乗せられた温かい手……。それが偽りであったとは思えません。ドキドキした気持ちは本物です。一目惚れに理由があるでしょうか？ 好きになったから……。信じたい。ノアはその一心だったのです。

「クソツ……。なんだよ。俺、なんであんなことを言ったんだ」
レイは後悔して額に手をやります。自分の意見が間違っているとは思いませんでした。あんなことを言えばノアが怒るのは当然です。そんなミスを犯すなんて、レイらしくありませんでした。なぜかスタッドを心から信用するノアが憎々しく思えて、言わずにはおられなかったのです。

しかし、ここで置いていかれてもどうしようもありません。レイは大きく息を吐き出すと、ノアたちを追って洞窟へと入っていきました……。。

ノアは早足で洞窟の中を進んでいきます。洞窟は真っ暗で、どこがどうなっているのか全く解りません。それでも、ノアはお構いなしにズンズンと奥へ向かっていきます。まるで、憂鬱な自分の心の奥底に向かっているみたいだとノアは感じていました。

「ノア！」

ようやくメルが追いつきます。ちょっと息が乱れています。よほどノアは早足だったのでしょう。ノアの肩に置かれたメルの手が、その場に押しとどめようとするかのようです。

「……………どうしたの？ いつものノアじゃない」

メルがそう心配そうに言います。ノアはゆっくりと振り返りました。

「いつものアタシ？　いつものアタシって・・・何さ」

なんで、こんな風に冷たく言ってしまうのでしょうか。そんなつもりはなかったのです。でも、気づいたらその言葉が口から出ていたのです。メルがちよっと困った顔をしたのが、ノアには解りました。「ノア。お願いだから、落ち着いて聞いて・・・。私もスタッドさんのことは信じています。でも、レイが言う心配は当然だとも思います。スタッドさんが何をしようとしているのかはまだ解らないのですから」

穏便に言うメルでしたが、ノアにはそれが気に入りません。ノアを気遣う遠慮のある態度。それでいて、メルは言いたいことはハッキリ言ってくるのです。

「ハッキリ言えばいいじゃん。メルだって、スタッドのことを本当は怪しいと思っているんでしょ？」

「そ、そんなことは・・・！」

メルは明らかに傷ついた顔をします。ノアの胸に何かがチクリと刺さりました。

「じゃあ、スタッドの何を信じるの？　メルは会ったこともないのに？」

ノアの詰問に、メルは言葉に詰まります。ノアは目を細めました。「・・・メルはさ。良い人すぎるんだよ。アタシのことだって、本当に友達だと思っているの？　ただ友達だと思いこもうとしてくれるんじゃないの？」

メルは口元に手を当てます。目が潤んで、今にも泣き出しそうです。

「いつも優しそうな振りしちゃってさ・・・。それって本当にメルの気持ちなの？　ただバーボンおじさんに近づきたいから、アタシと仲良くしているだけじゃないの？」

「わ、私はそんなこと・・・！」

ブワツとメルが目から涙が溢れました。でも、ノアはそれがますます憎らしく感じます。偽善者っぽく見えるんです。気に入らないのです。

「メルメル！ ノア、ひどいボー！！」

ヨレヨレになって追いついたボーズ太郎が、頭から煙を出して怒ります。

「ひどい？ ひどいのはどっちだよ……。ボーズ太郎。アンタだつて、本当にスタッドのことを信じてここまで来たのか？ オルガノツソを倒すとき、スタッドに騙されていたんじゃないか。それでも信じているつていうのかよ？」

聖波動クライクの紙を握りしめて、ボーズ太郎は複雑な顔をします。

これはボーズ星人たちの命を使わなければ発動しない疑似魔法だと言われていました。スタッドはそんな嘘をついて、この魔法陣をボーズ星人たちに託したのです。酷といえは酷なやり方じゃありませんか。そんな嘘をつく必要がどうしてあったのでしょうか。そのせいで、ボーズ星人たちは死ぬ覚悟までしなければならなかったのですから。

「……。なんだか、変な感じニヤ」

ミヤオがボーズ太郎の後ろから顔を出します。シャリオを抱きかかえ、モゾモゾと居心地が悪そうにしています。シャリオもミヤオと同じような不安そうな顔つきです。

「ミヤオ。アンタだつて……。別にスタッドに会う理由なんてないだろ？ レムジンでお兄さんに会えたんだ。さっさと戻つたつていいじゃんか」

「ミヤァ……。でもでも、でっかくて悪いの倒さなきゃ……。いけない、ニヤァ」

ノアが怖い顔をしていたので、ミヤオは視線をさまよわせながらそう答えます。その態度が、さらにノアの神経を逆撫でしました。

「……。手下のビシユエルにだつて、アタシたち全員でも危なかつ

たんだ。アタシたちで、魔神バルバトスがどうにかできるなんて思えない。必要なのはスタッドだ。スタッドだけなんだ！」

ノアはそう叫んで、皆から逃げるように走り出しました。誰も追ってきません。それはそうです。あんなひどいことを言ったんですから。誰も……もうノアにはついてはきてくれないでしょう。

どれだけ進んだでしょう。暗闇はますます濃くなり、入口からの光もはや見えません。そこはノアの心のように真っ暗で悲しく寂しいところでした。

「……みんな！」

ノアは後悔して振りかえります。いま謝れば許してもらえるかもしれない。そんなことをフツと思ったのです。でも、もう誰もいません。すでに時は遅かったのです。

「なんだよ……。なんでだよ、皆で、一緒に……。ここまで来たのに」

ノアは膝を抱えてしゃがみ込んでしまいます。なんで自分はあるんなことを言ってしまったのでしょうか。苛立つ感情にまかせ、わざと傷つけるようなことを言ってしまうなんて最低です。ノアは激しく自己嫌悪しました。

「スタッド……。スタッド!!! どこにいるんだよ!!!」

ノアは声を張り上げてスタッドの名前を呼びます。でも、応えはありません。木霊する声は洞窟の闇に溶けて消えてしまいます。

スタッドはここにいますのでしょうか？　そもそも、ここが本当にラグナロク遺跡なのでしょうか？　暗闇がノアをより不安にさせます。孤独がノアを焦らせます。猜疑心が溢れてだして止まりません。『……ノア。それでいいのかい？』

「いいわけがない……。いいわけがないよ」

『……どうして頭を抱えて悩んでいるんだい？』

「どうすればいいのか……。解らない。何を信じていいのか解らないんだよ」

『・・・ノア。ノア。君は今までどうやってここまで来たんだい？』
「・・・どうやって？」

ノアは考えます。自分はどうかやってここまで来たのでしょうか？
そうです。メルがいなければ、靈希碑を通ることが出来ませんでした。ボーズ太郎がいなければ、傷を治してはもらえませんでした。レイがいなければ、途中で道に迷っていたかもしれませぬ。ミヤオがいなければ、ドレードの気持ちを動かすことはできなかつたでしょう。

いずれにしても、ノア一人の力で来たのではないのです。皆が力を合わせてここまでやってきたのです。誰か一人でも欠けていたら、決して上手くはいかなかつたのではありませんか。

ノアは顔を上げます。なんでここまで苦楽を共にした仲間を信じてあげられないのでしょうか。一時な感情に流されて、失つていいものであるはずがありません。そんなに安っぽいものではないのです。
「ああ。そうだ・・・。ダメだ。アタシだけじゃ・・・。みんなッ
!!!!」

ノアが立ち上がって叫びます。その瞬間、光がノアの周囲を駆けめぐりました。

空間が開け、闇が四方に散らされていきます。あまりの光量に、目が眩みます。まるで太陽の中にいるみたいです。

「・・・そうだ。それでいいんだよ。ノア。僕じゃない。仲間を信じなさい。ここまでやってきた仲間たちの力。それが、君の力となる」

光の満ちている先から、優しい声がします。ノアが目を細めてみようと、人影のようなものが何かを振りました。ビュンという風切り音がして、光が少しずつ収束していきます。

「ようこそ！ ラグナロク遺跡へ！ 僕の元へ！！」

ノアの目の前に立っていたのは、スタッドでした。両手を広げ、にこやかな笑顔を浮かべています。ちよっとずり下がって、鼻眼鏡になつてるところが剽軽ひょうけいな感じですが・・・。それは、あのエル

ジメン橋で出会った男そのものだったのです。

「スタッド!!」

ノアは感極まって泣き出しそうになりますが、慌てて目の周りをゴシゴシと擦ります。ちゃんと顔会わせるのが、泣き顔だなんてあんまりですから。

ちよつと赤い目でスタッドを見やると、ノアの胸がドキドキと高鳴ってきます。なぜか、本当に赤の他人には感じられないのです。これは間違いありません。好意であり、恋でした。ノアはそれを確信します。

「・・・ずっと、ずっと・・・会いたかった」

ノアが今までにないくらいに緊張して、ちよつと上擦った声で言います。スタッドは目を細めて、嬉しそうに微笑みます。

「そうだね。僕もだよ。ようやくこれで・・・『時が進む』」

スタッドの視線が、ノアから外れます。ノアはスタッドの視線を追いました。

「な!?! み、みんな!?!」

スタッドの視線の先、ノアの後ろには・・・なんと、みんなが倒れていたのです。

「うぐぐ。いたい・・・これは?」

「頭が痛い・・・ポー」

「これは・・・魔法でしょうか。ううっ」

「ミヤー・・・グルグルグルグルニヤー」

「お姉ちゃん。ボク・・・眠くて、眠くて」

どうやら、みんな無事のようにですが・・・それでもこれはいったいどうしたことでしょう。

ノアは辺りを見回して気づきました。ここは洞窟の中などではありません。大雪原のど真ん中。そこに菱形の岩で出来た大きなステージがあり、その上にスタッドを含むみんながいるのです。これがラグナロク遺跡だったのです。

「さあ、喋る時間も惜しい。立ち上がりなさい」

柔らかな口調ではありませんが、それは命令の言葉でした。ノアは眉を寄せて、まじまじとスタッドの顔を見やります。しかし、表情はさきほどと変わらないにこやかなものです。

その時、ノアは耳に違和感があることに気づきました。ビシユエルが吹いていた笛のような音色が、小さく耳の奥で響いているのです。それは、スタッドの右手の刺青から聞こえているようでした。

「こんな子供だましの幻術が通用するはずもないか……。当然だね。ここまで来たんだから」

スタッドが右手を払います。すると、笛のような音がまったく聞こえなくなりました。ノアは自分の視界がより開け、意識がはつきりするのを感じます。仲間たちも同じで、ヨロヨロと立ち上がりました。

「……。グツ。もしかして、スタッド。お前は、ビシユエルと同じく俺たちに幻術を!？」

レイが剣の柄に手を当てながら言います。

「そ、そんな……。まさか。なんで?」

ノアの唇がフルフルと震えます。そして、スタッドをジッと見つめました。それでも、スタッドの表情は少しも変わりません。

「……。こんなところでつまずいてもらっては困るんだよ。さあ、始めよう。全ては聖剣エイストの御意思のままに!」

スタッドが右手を大きく掲げます。そうすると、手全体に描かれた魔法陣の刺青が黄金色に輝きました。ズギユギユツツという皮膚を切り裂くような嫌な音がして、無機質な何かの手平からせり出していきます。

それは聖剣エイストでした。神々しいまでに白銀に輝く直刀。その刀身には、ノアたちがまるで見たこともない言語がズラーツと書かれています。光のエネルギーが収束して出来上がった鍔が、スタッドの指先でクルクルと三重の輪を描いて回転しました。

「な、なんで……。」

「戦うのに言葉はいらないだろう?」

ノアの失意の言葉に対し、スタッドは冷たく返します。微笑みとのギャップが激しすぎて、余計に冷酷な言葉のように聞こえます。

「危ない！ ノア！！」

急に剣を振りかぶって突進してきたスタッドに、レイがノアを突き飛ばして反撃しました。スタッドの剣とレイの剣がキーンと響いてぶつかり合います。

「レ、レイ……。アンタ……」

「今は呆けている場合じゃないだろ！！ 襲いかかってくるなら、立ち向かうだけだ！！！！」

力で押し返し、レイが袈裟に斬りつけます。スタッドはパツと飛び跳ねてそれをかわしました。

「それでいい！ 全力で来なければ、この僕は倒せないよ！！」

レイに続き、ノア以外の皆が戦闘態勢をとります。

「スタッドさん！ どういうことかは知りませんが、ノアを傷つけるというなら許しません！」

メルが詠唱を口ずさみながら前に進み出てきます。

「そ、そうだボー！ いくら、命の恩人だからって……。やっていいことと、わるいことがあるボー！」

ボーズ太郎が震えながらも、何度も頷きます。

「ニヤー！ 『男は女を下心もって守るものだ』ってコネミのおじちゃんが言ってたニヤー！」

きつと下心の意味がまったくわかっていないであろうミヤオが叫びます。

「ノアお姉ちゃんをイジメるな！」

スタッドが、ボーズ太郎の後ろに隠れながらも拳を握りしめて言います。

「み、みんな……。あんな、ひどいことを言ったアタシなのに」

ノアはパンと自分の頬を叩きました。目が醒めます。そうです。

ノアは一人ではありません。仲間たちがいるのです。ずっとここまでやってきた、素晴らしい仲間たちが！

「・・・スタッド！ アタシたちが勝つたら、全部の理由を吐いてもらうからね！！」

ノアがダガーを構えて、力強く言い放ちます。

「ああ。約束しよう。すべてには意味があるんだからね！！ さあ、来なさい！！」

スタッドの全身を聖なるオーラが覆います。聖剣エイストから発せられているエネルギーが、スタッドの全身を取り巻いているのです。それは誰もみたことがないほど強力な力の波動でした。

「『聖光集束！ セインブレイド！！』」

スタッドが聖魔法を唱えると、聖剣エイストの輝きが増します。威力が倍増したのが見た目にも解ります。

「うおおおお！！！！ 猛る獅子の牙『レイジングファン！！』」

スタッドの白色の混じった黄金色の光と、レイの棚引く黄金色の光が力強くぶつかり合います。猛烈な剣戟、レイが両手で振るっているにも関わらず、スタッドは涼しげな顔で片手でいなしてしまいます。

「こんなものなのかい！？ ジャスト王国剣技は！？」

「な、なにを！？ ツ、うあ！？」

レイがスタッドの剣に弾かれました。

「『エクспロード！！！！』」

レイが蹠跟めき、それを追撃しようとしたスタッドに向かってメルが上級魔法を撃ちます。アルティメットを習得したことで、上級魔法まで使えるようになっていたのです。

ビシユエルの扱ったそれよりも、遙かに規模の大きい地獄の炎が、スタッドを確実に捉えます。

「良い魔法だ。魔法力だけなら、フアラールよりも上だね。でも、甘い。『セイン・ファイヤーストーム！！！！』」

スタッドが聖魔法を唱えます。それは下級魔法のファイヤーストームでしたが、プラチナのエネルギーに覆われた炎です。その炎が、メルが放ったエクспロードを飲み込んで、掻き消してしまいまし

た。

「こ、これが・・・スタッドさんの聖魔法!？」

「ボー！ な、なら・・・これでどうだボー！ 『ボーズ音頭』だボー!!!」

ちよつと間抜けなBGMと共に、ボーズ太郎が踊り出します。オルガノツソを異次元に送り出した古代魔法です。なぜか、ミヤオも一緒になつて踊り始めますが・・・。

「忘れたかな？ それは僕の『聖波動クライク』で覚醒した力だよ。解除してしまえば、なんてことはないさ」

スタッドがパチンと指を鳴らします。BGMがフェードアウトし、古代魔法のエネルギーが溶けて消えてしまいます。何も無いところで踊っていたボーズ太郎は赤面しました。

「ボー！ 我的魔法が、魔法が使えないボー!!!」

聖波動クライクの恩恵で魔法が扱えるようになっていたボーズ太郎は戸惑います。どうやら、スタッド相手ではまったく為す術がないようです。

「もうおしまいかい？ そんなものなのか？ 四天王を退けた力は？」

スタッドが眼鏡をあげながら、ちよつと残念そうに苦笑いします。「ニヤニヤーン!!! せつかく気持ちよく踊っていたのに許さないニヤーン!!!」

ミヤオが珍しく怒つて、爪をたてて引つ掻き攻撃をします。どうやら、さっきの音頭がえらく気に入っていたようです。それを中断されたとあつて、頭にきているようでした。

「おっと！ さすが・・・ファルの瞬発力は侮れないねえー」

一撃目をかわしたスタッドでしたが、ミヤオはクルツと素早く体勢を立て直し、逃げるスタッドを追います。そのあまりの速さに、さすがのスタッドもちよつと驚いたような顔をして、聖剣エイストで攻撃を受けます。

「でも、攻め続ければ倒せる・・・そんな柔な僕じゃないよ。『セ

イン・スリープ！」

スタッドが、ミヤオの顔の前に左手を突き出します。今にも攻撃しようとしていたミヤオは、トローンと脛が下がったかと思うと、鼻チヨウチンを膨らませます。立ったまま眠らされてしまったのです。

「クツ！ 剣技だけじゃなく、攻撃魔法も補助魔法も一流か！ 英雄と呼ばれるだけはあるな！！」

レイは感心してそう言いながらも、上着とマントを脱ぎ捨てました。どうやら、本気で挑むつもりようです。

「メル！ ノア！ サポートよろしく頼む！！」

レイがそう言っ、剣をしっかりと握って突っ込んでいきます。

「それでこそ、男の子だね！」

「喋っている余裕なんて与えないぞツ！！」

レイは数多の動線を描き、突きやら払いやら、フエイントまで織り交せて、持ちうるあらゆる剣技を叩き込みます。しかし、スタッドはニコニコと微笑みながら、かわし、捌き、打ち返します。喋っている余裕がないのはレイのほうでした。ゼエゼエと荒い息をつきながらも攻撃を繰り返しますが、すべてやんわりと捌かれ、その端から反撃がやってきます。

レイがよるめくと、メルがすかさず魔法を放ちます。しかし、スタッドはメルの方も見ることもなく、左手を突き出したかと思うと瞬時に聖魔法を放ってそれを打ち消します。その隙にレイは体勢を立て直して、再び攻撃を開始するのですが、それはさっきのように聖剣イーストによって阻まれます。

「これじゃ埒があかない！ ポーズ太郎！ ミヤオを早く起こせ！！」

レイの言葉に、慌ててポーズ太郎がミヤオの身体を揺さぶります。ハツと気づいたミヤオは眠そうな顔をしていましたが、交戦中のスタッドを見るや否やザワザワと髪の毛が逆立ちます。

「ンニャー！ 許さないニャーツ！！」

まだ怒りは冷めていなかったようです。

ミヤオは素早く駆けていったかと思うと、レイと即席の連携を作ります。レイが左から攻めれば、ミヤオが右から。ミヤオが前から攻めれば、レイは後ろから。なかなか見事な攻撃です。訓練しているレイに追いつくぐらいですから、ミヤオは天性の格闘センスを持っているのかも知れません。

「・・・いいね。なかなか手強いな」

そんな言葉とは裏腹に、スタッドは鼻歌まじりに飄々と攻撃を避けます。攻撃の手数は増えているはずなので、速度はそれなりに素早くなっています。高速で捌いて、なおかつ反撃をしているスタッドですが、ゆるい表情自体は変わらないので、なんだか戦っていても変な感じがします。

「・・・ノア。君は戦わないつもりかい？」

スタッドがチラリとノアの方を見やります。戦いの最中によそ見をするんですから余裕綽々です。

そうです。ノアは構えていたダガーをおさめ、腰に手をやったままの姿勢でさつきから全く動かないのです。ジツとスタッドの動きを見つめるだけです。

「お、おい！ ノア！ ま、まさか・・・」

まだスタッドを信じる気にいるのかと、レイはちょっと非難混じりの声をあげます。隣に立つメルも不安そうにノアを見ますが、ノアはジツとスタッドの動きから目を離しません。

「いまだ！ 親分直伝『スラッシュレイン！！！！』」

スタッドがミヤオの攻撃を避けようと飛び跳ねた時、ノアの目がキラリと光りました。

ノアが指の間に挟んだナイフを一斉に投げつけます。数は六本、着地際を狙われたスタッドは慌ててエイストで弾く構えをとります。

「投擲なんか、僕に通じるとでも！？」

エイストをクルリと回転させ、カキツカキンツという金属音を響かせてすべてのナイフを叩き落とします。

「まだまだ！ でえいいいッ！」

ノアが勢いよく手を振り上げます。すると、地面に落ちたナイフがビュンと飛び上がりました。

これはどういうことかと、スタッドは目を細めます。よく見ると、ナイフの柄に細くキラキラと光るものが柵引いています。それは、ノアの指先にまで繋がっていました。

「あれは……。そうか、バツカレス親分が得意としているトラップか!?」

ノアが一気に手を振り下ろします。すると、まるで生き物のようにナイフが降り注ぎます。それはまるで刃物の雨のようでした。

「だが、しかし、爪が甘い！」

スタッドは左手で魔法の盾を作り出します。

「甘いのはスタッドの方だ!!!」

ノアは糸を手放し、腰のポーチから再び六本のナイフを取り出して放ちます。それは先ほどとは違い、横に広がって左右からスタッドを挟み撃ちにしました。計数十二本のナイフが迫ります!!!

「クウツ、避けられない！」

スタッドは観念して防御に徹します。執拗に迫り来るナイフの連撃に、反撃がままなりません。

「よっしゃ！ 初めて出来た！ どうだ、親分の得意技だよ！」

「ああ！ 見事だよ!!! 僕の死角を突く良い一撃だ……。でも、まだまだ!!!」

スタッドは全身に光を纏います。そのオーラがナイフを全て弾き返しました。そして、聖剣エイストを振りかざして魔法を放とうとした時です。

「『ストライクアタック!!!』」

「『レイジングファン!!!』」

いつの間にか迫り来てたノアとレイです。全身の体重をかけた一撃と、王国剣技筆頭の鋭い一撃です。それらがスタッドの身体に決まりました。

グサヤツ！ ノアのダガーが脇腹に！ ズシャツ！ レイの剣が肩口に深々と入ります。嫌な手応えを感じ、ノアもレイも目を見開きます。致命傷を負ったスタッドは、血を吹き出してその場に倒れました。

「え！？ な、なんで・・・なんで避けないんだよ！？」

倒れたスタッドに駆け寄り、ノアは激しく狼狽します。スタッドの傷口からはどんとどんと血があふれ出てきます。スタッドの力量を考えれば、攻撃は避けられなくても、ダメージを軽減するのはわけないはずでした。少なくとも、そう見込んでノアは斬りつけたのです。

「ボーズ太郎！ すぐに治療してくれ！」

レイが半ば焦り気味に言います。呼ばれたボーズ太郎は、ピクンと飛び跳ねますが、困った顔でガタガタと震えます。

「わ、私の魔法は・・・使えないボー！」

そうです。ボーズ太郎の魔法は、スタッドによって封じられたままでした。

「ど、どうしましょう・・・こ、こんな時にバーボンさんがいてくれたら」

メルは道具袋の中から薬草をとりだしますが、こんなものでは気休めにもならないでしょう。さつきからスタッドは青白い顔をしてピクリとも動きません。

「クソ、なんでだよ・・・スタッド。なんでなんだよ」

ノアの目からポタツと大きな雫がこぼれ落ちます。それがスタッドの頬を濡らしました。

「アタシは、アタシは・・・アンタに会いたくてここまで来たっていうのに。命を助けてもらって、そのお礼だと言っていいのに。こんなことなら、すぐにでも自分の気持ち・・・」

ノアが泣きじゃくります。いつも元気で明るいノアが涙を流しているのを見て、皆が悲しげな顔をしました。

「・・・なーんてね」

素つ頓狂な声が響きます。なんと、スタッドの目がパチツと開いたのです。ノアも皆もびっくりしてひっくり返りそうになりました。「んー、やれやれ。まさか、この僕がここまで苦戦するとはね。やっぱり僕が見込んでいた通りだ」

そう言いながら、スタッドが立ち上がります。傷口はといえば、あれだけ深い傷にもかかわらず、泡のようなものがシュワシュワとわき出たかと思うとアツという間に治ってしまいました。登山服の破けた跡があるだけです。

「こ、これも聖魔法だど・・・いつのか？」

レイが傷口があつた部分を凝視して言うのに、スタッドは大きくずれた眼鏡を力チャリとあげて微笑みます。

「いや、これは魔法じゃないよ。これが『聖剣エイストの力』なんだ」

そう言つて、スタッドは聖剣エイストをレイの目の前にだします。そこで初めてレイは気づきました。聖剣エイストの輝く鍔の部分に守られた刀身。その部分に三角形の宝石が埋め込まれています。その中にドクンドクンと生き物のように蠢く赤い何かがあることに。

「・・・僕の『心臓』さ。この聖剣エイストこそ、僕の本体であり僕自身でもある。こつちの肉體側が壊されたとしても、この剣を破壊しない限りは僕は倒せない」

驚愕の事実には、誰もが言葉を失います。剣の方がスタッドだと言われてもにわかには信じられません。だって、説明しているのは人間のほうのスタッドなのですから。

「僕は二十年前、このラグナロク遺跡でこの聖剣エイストを見つけました。それまでは、一度も戦ったことすらない。戦闘経験なんて皆無だ。そんな、ただのデムの男に過ぎなかったんだ。でも、この聖剣エイストが僕に力を・・・聖魔法を与えてくれた。僕の肉體に寄生し、僕自身が聖剣になることを代償に」

スタッドはこのラグナロク遺跡で大きな力を手にした・・・それは、伝説で語り告げられていることが事実だったというわけです。

ですが、その深い真相はあんまりのものでした。大きな力には、それに見合った大きな代償といえるでしょう。しかし、そんなことまでは、御伽噺には入っていません。都合のよいことばかりしか語られていないのですから……。これだけの代価を支払って力を得ていたというのは、きっとスタッドと一部の人間しか知らないことなのです。

「スタッド……。アンタは、どうしてそこまで？」

ノアが悲しげな目でスタッドを見やります。聖剣イイストを手にした……。それが、寄生されたということならば喜ばしいこととは言えません。そんなことまでして、どうして力を手に入れたのだろう。ノアはそれが知りたいと思いました。自分が聖剣になる……。そんなことは、余程の覚悟がなければ出来ません。

スタッドはノアの心情を察し、心底優しい微笑みを浮かべて答えました。

「……。死んで良い命なんて一つもないんだよ。僕はすべての命を、魔神バルバトスから守りたかったんだ。そのためなら、僕の身体ぐらい安いものさ」

その言葉に、ノアは胸に熱いものを感じます。なぜでしょう。なぜか、スタッドの言葉がノアの心にストンと入ってくるのです。共感できるのです。

「……。スタッド。じゃあ、なんでこんな試すようなことを？」

レイはそれでも疑いの目でスタッドを見やります。

「……。それは、もう僕だけじゃ魔神バルバトスをどうにも出来ないからだよ。この聖剣イイストは未来を少しだけ予測する力がある。そこに出てきたのは、君たちだった。でも、可能性はほとんどゼロに等しかった。でも、僕はノアを信じることにした。1パーセントにも満たない期待をかけたんだ。きつと、君なら僕の元にやってこれる。それも、僕を打ち倒すぐらいの成長を遂げて！　そして、その可能性の扉をひらいて君たちは僕の元までやってきてくれた！」

スタッドは、ノアの肩を強く掴んでそう言います。ノアは目をパ

チパチとさせました。

「そ、そんな・・・アタシ、なんにも」

「何を言うんだい。ノアは僕の期待以上の成果をもってきてくれた。凶悪な四天王を退け、この僕を怯ませるぐらいに成長を遂げて！」

スタッドは両手を広げて喜びます。しかし、その瞬間、スタッドはヨロツと蹠跟めきました。慌ててノアとレイがその身体を支えま
す。

「やっぱり、アタシたちの攻撃が!？」

「・・・いや、魔神バルバトスにかけた聖結界エミトンが綻びはじめているんだ。ここで僕は魔法力を温存していたけれど、どうやらさっきの戦いで負荷がかかったみたいだね。もう僕の力じゃ抑えきれないんだよ。そろそろ封印は完全に解けてしまう」

そう苦笑いして言うスタッドです。そういえば、心なしかスタッドのオーラが小さくなったような気がします。

「そこまでして、アタシたちの力を試したのか？ でも、アタシにはそんな力は・・・。スタッドみたいに強くなんてない。期待なんてされたって・・・」

落ち込むノアに、それでもスタッドは温かい眼差しを送り続けま
す。

「いや、君たちしか魔神バルバトスは倒せない」

「アタシたちが・・・魔神バルバトスを・・・倒す・・・？」

「ああ。もう封印はできない。今度はノア。君たちの力で、ヤツを倒すんだ・・・それしかないんだ」

ノアはミルミ城でみた魔神バルバトスを思い出します。あんな者を人間の手で倒せるはずがありません。ノアは無理だと、首を横に振りました。

ノアは、知らず知らずのうちにスタッドに会いさえすれば、すべてが解決すると思っていたのです。スタッドの力があればなんとかなると思っていたのです。もちろん、ノアだってスタッドに協力するつもりではいました。しかし、そのスタッドが自分を頼りにして

いるのだと知って、ノアは怯えました。スタッドはノアの主導で倒すと言っているのです。それは大きなプレッシャーです。

「ノア。ノア。よく聞きなさい……。魔神バルバトスを倒すのは君だけじゃない。DEMだけの力じゃ無理なんだ」

スタッドが重々しく言うのに、ノアは眼を瞬きます。

「え？」

「DEMだけじゃない。メリンやファル……。そして、ボーズ星人。この星に住む全ての人たちの力が集まらなければ、魔神バルバトスは倒せはしない」

「だったら……。なおさら、アタシなんて」

ますます無力感に噴まれ、ノアはスタッドから目を離してしまいます。

「……。自分の周りをよく見てごらん。ノア。これが君の力なんだ」
スタッドが人差し指をグルッと動かします。レイを、メルを、ボーズ太郎を、ミヤオを、シャリオを……。順繰りに差していきます。それがどうしたのかと、ノアは首を傾げました。これは仲間たちです。確かに、力強い仲間ですが、それがどうしてノアの力だということか解りません。

「ノア。君は、僕が世界を救った英雄となつてから二十年間……。誰もが成し遂げようと思つたのに、決して適わなかつた事を為し遂げただだよ。これは偉大なことだ。ここに、DEM、ファル、メリン、ボーズ星人……。すべての種が揃っていることは！」

スタッドの言葉に、ノアはハツとします。

「そうか！ ノアと俺は……。DEM。メルはハーフだけど、メリン。ミヤオとシャリオはファル。ボーズ太郎はボーズ星人だ。言われないうと当たり前すぎて気づかないものだ。俺たちは、決して仲良くならないはずの種族同士で……。仲間なんだ」

仲間仲間だ……。そう思っていたので、種族の差なんて気になつていませんでした。しかし、DEMを嫌っているはずのファルとメリンが一緒にいる。そしてさらには大きな差別の中にいて、忘れ去

られていたボーズ星人まで仲間となつて一緒にいるのです。これほどまでの珍妙なパーティは、世界中何処を探しても見つからないことでしょう。

「そうです！ ノアが・・・ノアが、私たちを導いてくれました。ノアがいなければ、私は今でも退化の大森林にいたでしょう」

メルが拳をキュツと握つて言います。

「そうだボー！ ノアが我らに勇気を与えてくれたボー！」
ボーズ太郎が踊り出します。

「ノアがいなきや、ミヤオはお兄ちゃんに会えなかつたミヤ！」
ミヤオがボーズ太郎の踊りに合わせて踊ります。

「うん！ ノアお姉ちゃんが、ボクを助けてくれたんだ！」
シヤリオが手を叩いて嬉しそうに頷きます。

「・・・ノア。俺だつてノアがいなければ、城から出るなんて考えもしなかつたと思う。俺たちは、ノアっていう大きな存在に引き寄せられてきたんだ」

レイが真面目な顔をして言うのに、ノアは照れくさくなって真っ赤になります。

「や、やめてよ！ アタシは・・・そんなつもりは！ ただ、夢中になつて・・・ここまで来ただけで」

「照れることはないさ。ノア。それが・・・『君の力』なんだ！
そして、それが魔神バルバトスを倒す鍵になる！！」

スタッドが大きく両手を広げて、まるで天を受け止めるような姿勢をとります。

「さあ！ 見せよう！ これが・・・真のラグナロク遺跡の姿！！
魔神バルバトスを倒すために僕が秘匿し続けてきた本当の切り札だ！！！！ ノア、今こそが時なんだ！！！！ 聖剣エイストの御意思のままに！」

そう叫びながら、スタッドは聖剣エイストを地面に突き刺しました。そして、足場が光と共に崩れ・・・そこに隠れていたものが姿を現します！！！！

スタッドとの出会い。それはノアたちを魔神バルバトスを倒すという、大きなとてつもない目標へと向けることとなるのでした・・・。

第十六章 英雄スタッドと聖剣エイスト（後書き）

スタッドと出会い、物語は佳境へと……。ついに魔神バルバトスにノアたちが立ち向かう話となっています。

ゲーム中だと、ラグナロク遺跡は普通のダンジョンなのですが……。トロツコを扱う仕掛けがあったりします。ゲーム中最大の難所……。のつもりですが、まあ初心者にも優しいRPGというコンセプトだったのでw 一画面だけのマップを越えるとスタッドに会えるという設定でありました。スタッドはかなり強力な敵としてノアたちにはだかります。小説だと、なかなか私の描写が未熟で伝わりにくいでしょうがw

第十七章 反撃！ バツカレス親分のBプラン！！

ノアたちがランドレークに渡った直後のお話です。

レムジンでは、今まさにロックゴーレムが地上に到達しようとしているところでした。

怪我人を治療してやりながら、バーボンは苦々しい顔で天を見上げます。時折にやってくる大きな揺れが、手元を狂わせてくるのが苛立たいです。

「・・・やべえな。アイツが落ちてきたら、怪我人だけじゃすまないぜ」

バーボンはチラッと、バツカレスのいる方を見やります。

大教会の斜め裏手にある公園のど真ん中。盗賊団の指示で、ファルやメリンの兵士たちが協力して大穴を掘り下げていますが、とても間に合いそうにありません。まだ地上から掘っている人間が見えるぐらいの深さしかないのです。「おい！ 大丈夫なんだろうな？」

一通り怪我の治療を終えたバーボンが、バツカレスに尋ねます。

バツカレスは腕を組んで難しい顔でロックゴーレムを見やっています。

「・・・時間がたりねえな。思っていた以上に横幅がでけえ。ま、その分、地上に降り立つのにも時間がかかっているみてえだがな」

「お、おいおい！ それじゃダメじゃねえか！ あんなのが暴れまわったら、レムジンなんてあつと間に壊されるぞ！」

「うっせー！ んなのは百も承知よ！！ そうしたら、そうしただけだ！」

バツカレスはダガー入った鞘の留め具をパチンと弾きました。ノアのより遙かに大きいダガーですが、それでもロックゴーレムが相手では頼りなく見えます。

「クソ。お前に付き合ってたら、命がいくつあってもたりねえぜ！」

バーボンも義手のアタッチメントを取り替えて鞭にします。

「……ん？ なんだありゃ」

バッカレスが何かに気づきます。瓦礫の山をヒョイヒョイと飛び越えて来る人影がありました。

「貴様たちか。アレを何とかしようとしているのは……」

攻撃してくるガーゴイルを一刀のもとに切り伏せ、バッカレスの目の前に着地したのはドレードでした。

バッカレスの指示で、大穴を掘る作業をしているファルやメリンたちは顔色を変えましたが、ドレードはそれをチラツと見ただけで何も言いませんでした。

「……ファルの総大将のお出ましか。わりいが、邪魔はさせねえぜ」

バッカレスもバーボンも持っている武器を構えます。ドレードはわずかに目を細めました。

「この期に及んで、そのようなことをするものか。このレムジンが助かる術があるならば、逆にこちらからお願いしたい」

ドレードがバッカレスに向かい頭を深々と下げます。プライドの高いファルが頭を下げたとあって、バッカレスは拍子抜けした顔を見ます。バーボンも取り出そうとしていた煙草をポロツと落としてしまいました。

ドレードが長剣をロツクゴーレムに向けて構えます。その姿を見て、バッカレスはニヤリと笑いました。デムでもファルでも、もうそんなこと関係がないのです。ドレードも、迫り来る脅威に立ち向かう同志なのだと解ったのです。

「……外壁周辺にいた兵士たちも、いまここに向かうように指示した。おそらく、レムジン全軍がこっこに集うだろう。もちろん、彼らも無傷とはいかないだろうが」

ドレードが言うのに、バーボンはコクリと頷きます。

「生きていりゃ、治して手伝わせるさ。おたくは『死ぬな』とだけ指示だしてくれりゃいい」

バーボンが煙草に火をつけながら笑います。ドレードも口の端だけを上げました。

「・・・おっし！ 落とし穴が完成するまで時間稼ぎといくぞ！ 野郎ども！ 気張れ！！ あんな岩の塊にビビッてんじゃねえぞ！！！」

バツカレスの声に、シユタイナやヤグル、そして盗賊団の皆が声を張り上げて応えました。

ズツシン！！ 大きな揺れと共に、石柱のような大きな指が大地に突き刺さります。四角い出窓のような目が煌々と光を放ちます。

逆立ちの姿勢のまま、ようやく魔法陣から抜けた足が、ズズズツシーン！！ という先ほどよりも遙かに大きな地響きをたてて落ちます。その衝撃だけで、周囲の建物が粉微塵に吹き飛びました。そして、四つん這いの姿勢のまま、大きな咆吼をあげます。 なんだか動きがぎこちなく、まるで生まれたての赤ん坊のようでしたが、その規模は世界最大の赤ちゃんといっても過言ではありません。なにせ、大教会の三倍はあるかという大きさなのです。ちよつと立って走ったら、五分とかならずに街を横断してしまうでしょう。「臆すな！ 怯むな！！ レムジンをランドレークの二の舞などに はさせん！！！」

ドレードが長剣を振るいます。合わせてファルの兵士が剣を構え、メリンの兵士が詠唱をし出します。

「おう！ 野郎ども、見せつけてやれ！！！」

バツカレスがダガーを持って駆け出します。盗賊たちも素早い足でロックゴーレムに向かって走り出しました。

「いまだ！ やれ！！！」 バツカレスの指示で、ビューツと何か がロックゴーレムに巻き付きました。ロープです。地面に忍ばせて あった大量のロープが、ロックゴーレムの手足を絡めとりました。

「ウゴオオ！？」

ロープがビーンツと勢いよく引っ張られますが、なにせあの体格です。盗賊たちが全員かかって引っ張ってもビクともしません。

「チツ！ 目だ！ 一番弱いところをねらえ！」

バーボンがそう叫びます。皆、あの四角い目をねらって攻撃を仕掛けますが、四つん這いでもかなり高い位置にあります。届く技は限られていますし、それもまた命中する可能性もあまり高くはありません。

「おるああ！！ これならどうでい！ 『スラツシユレイン！！！』」

「 バッカレスが八本のナイフを勢いよく発射します。それらは見事、ロックゴーレムの目に命中しましたが、まるで動じることがありません。ゴミが入ったとも感じていないようです。」

「・・・フン。ならばこいつをくれてやろう。『衝風刃きょうふうじん！！！！』」

ドレードが鞘に一度納めた剣を勢いよく抜き放ちます。ブーメラのような衝撃波がロックゴーレムの目に突き刺さりました。

「ウゴオオオオオーン！！」

ダメージはなかつたのですが、それでもロックゴーレムを挑発するには充分だったようです。ロックゴーレムが片腕を振り回しました。それだけで家が十数軒ひっくり返ります。何人かの兵士たちが塵と化します。

「お、おい！ シヤレになつてねえぞ！！ クソツ！！ 生き残っているヤツは俺の所に連れてこい！！」

攻撃に参加しようとしていたバーボンが、慌ててメスと包帯を取り出します。怪我人は遠目にもかなりいそぎです。救助だけでも困難であるうと、バーボンは眉を寄せました。

ファルやメリンの兵士たちが集結しつつあり、盗賊たちを手伝おうとロープを掴みますが、それでもロックゴーレムを止めることはできません。まるで紙の紐を切るかのように、拘束していたロープをブチブチと切ってしまいます。

また脅威はロックゴーレムだけではありません。魔法陣の形成をする必要がなくなった生き残りのガーゴイルたちも積極的に襲いかかってきます。数は減っているとはいえ、それはとても厄介でした。「・・・おのれ！！ 一カ所に固まるな！ 狙いの的になる！！」

ドレードが上手く敵の攻撃をかいくぐりながら指示を出します。しかし、片腕となったことでバランスが悪くなつたせいか、左右から飛びかかつてくるガーゴイルの爪を避けるだけでも苦戦を強いられているようでした。

「親分！ まだまだまだ落とし穴は完成しないです！！ そもそも完成しても、どうやってアイツを誘導するんです!?」

ヤグルが煙玉を放つてガーゴイルたちを攪乱しながら叫びます。

「対策をたてようにも、こう敵が多くては!!!」

シユタイナが、手近なガーゴイルと格闘を繰り広げながら言います。

「それでもやるしかねえだろうが！ 泣き言いうな！ ノアに笑われんぞ!!!」

ダガーを振るって鼓舞するバツカレスでしたが、このどうしようもない状況に、さすがの親分も冷や汗でびしょりです。

ロツクゴーレムが、這い這いで前進します。ちよつと動く度に建物が崩れ、整地された道路が陥没します。

「いけねえ！ よりによって大教会に向かってやがる!!! 止める!!!」

ドレードやファルの戦士が縦横無尽に駆けめぐり、手を尽くして攻撃しますが止まりません。メリンの強力な魔法を受けても、蚊に刺されたほどのダメージしかないでしょう。

「ウオゴツ!!!」

上半身を少し起こし、手を伸ばして拳を振り回しました。裏拳が周囲を扇状になぎ倒し、建物の屋根が飛び、教会の一番高い尖塔にボガンツ!!! と当たって吹っ飛んでいきます。

「レムジンの象徴を壊されるとは！ ゲツ、これも私の力が至らなしばらくかッ!!!」

ドレードが悔しそうに拳を握りしめます。休むことなく攻撃を仕掛けますが、傷一つすらつけられそうにありません。

「だーッ！ バーボン!!! テメエの薬品で何とかできねえのか！

「!!」

バツカレスが唾を飛ばしながら、ガーゴイルを殴ります。

「さっき泣き言いいうなって言ったばかりだろうが！ できてりゃ、すでにやってる！！ アイツが無機物じゃなきゃな！ あいにく、生物以外は専門じゃねえ！！」 負傷した兵士に手際よく包帯を巻きながらバーボンが答えます。時折、それを邪魔をしてくるガーゴイルを鞭で置きしながらです。忙しいっいたらありません。

「あー！ もうお終いだ！ ああ、こんなことならノアに告白してくんだったー！！」

ヤグルが涙を流しながら逃げ回ります。

「ああ、神王様。諜報活動のためだけじゃなく、今度からはちゃんと心の底から祈ります。だから、いるならなんとかして下さい！」 シュタイナが跪いて大教会に向かって祈ります。神父の格好はそれに相應しいものでしたが、騒々しい戦場では台無しです。

「・・・そうだよ。祈りは大事なんだ」

屋根が吹き飛んだ大教会の尖塔から、静かな声が響きました。

「え！？ ま、まさか・・・祈りが聞かれた！？」

シュタイナがびっくりして飛び上がります。すると、瓦礫の中からひよっこりと人が姿を現しました。

「フアラー大司教！？」

ドレードが振り返って声をあげます。それはフアラーでした。ずいぶんとやつれてフラフラですけども、大司教その人だったのです。

「・・・ふう。これで、どうやら大司教の面目躍如のようだ。娘たちよ、力を貸してくれ」

その声に合わせるかのように、五人の娘たちがそれぞれテレポートでフアラーの周りに集結します。どうやら、ずっとガーゴイルたちと戦っていたようでボロボロです。それでも目は光を失っていません。

「私が魔法力を誘導する。そこから、ある人物をここにテレポート

させたい。もうそれだけの魔法力も私には残されていないからね。
お前たちの力が必要なんだ」

ファラーの説明に、娘たちはコクリと頷きます。

「何を……。誰を呼び寄せようっていうんだ？」

バーボンが訝しげな顔をします。その側で、いつの間にかやってきていた末娘アングリー……。いや、神官戦士アングリーが腕を組んでいました。

「……。いまぞ、猊下とスタッド殿との契約が果たされるんだわい」
魔法力が集中する尖塔跡を見やりながら、アングリーは大きく頷きます。

「誰が来るのか知ってるってのか？」

「まったくわからん！」

思わせぶりなことを言っておいて、それでも堂々としているアングリーです。バーボンは呆れた顔をしました。

しかし、そんな事をしている間に、ファラーと娘たちが詠唱を終えてテレポートを発動させます。疲弊しているとはいえ、大司教と司教合わせて六人全員の魔法力です。それはメリンの魔法兵長をして、思わず入れ歯を落としてしまうほどに強力なものとなりました。

キラキラと、大教会の前に虹色の光が集まります。それはかなり巨大なものでした。うっすらとその姿が明らかになっていきます。何が来るのだろうと、誰もが目を見張りました。

「よし！ ウイリアム！！ アタイらの力、見せつけてやるよ！！」

現れたのは、デザート・スコピオンのウイリアムでした。その上にはゴーグルを付けたステラが手綱を握っています。

「やれやれ。こんな形でレムジンに戻ることにするとは……」

ステラの後ろから、のんびりとした声がします。

「おおおおお！！ あ、あれは……。コネミ殿！！ コネミ神官長殿ではないかッ！！！！」

アングリーが感動に打ち震え、涙を流しながら、跪いて祈りだし

ます。そうです。ステラの後ろにいたのはコネミだったのです。

「・・・すべてはスタッドの導き、だったんだね。まさか命がけてレポートしたのが、元神官長コネミの元だったなんて」

フアラーはペタリとその場に座り込み、懐から聖魔法の封じ込まれた紙を取り出します。

「まあ、お父様の魔法力がなくなったら発動する・・・テレポート先を固定する魔法ですか」

長女アルマが、紙の魔法陣を見て口元を抑えます。フアラーは苦笑しました。

「まったくひどいヤツだよ・・・。次に会ったら、文句の一つでも言ってやらなきゃだね」

ステラが手綱をグイッと引きました。グリーンとサソリの目玉がロツクゴーレムを見据えます。カチャカチャと鉄を鳴らし、すでに臨戦態勢のウィリアムです。

「・・・こいつはウィリアムよりでかいね。こいつは不利だわ」
魔物では規格外の大きさを誇るデザート・スコープオンでしたが、それでもロツクゴーレムと比べれば大人と子供ぐらいの差があります。

「おい！ そのデカイ乳をした姉ちゃん！！」
バツカレスが下で声を張り上げます。不愉快そうな顔をしながらも、ステラはチラツと下を見やりました。

「そのデケエ魔物を使えるのか！？ なら、裏に行け！ そいつなら、馬鹿でかい落とし穴すぐに作れんだろ！！ 真っ正面からぶち当たっても勝てるわけがねえ！！」

バツカレスが指さす方に、未完の落とし穴があることをステラは確認します。それからコネミの顔をみやりました。コネミは大きく頷きます。

「・・・では、そのための時間かせぎを私はすればいいわけですね」

コネミがウィリアムから飛び降りて着地します。

「コネミ神官長殿！！」

アングリーが走り寄ってきて、深々と頭を垂れます。その出で立ちを見て、コネミは自分の顎を撫でました。

「後継者・・・ですか。ならば、その責務・・・お分かりですね？」
「ハッ！ 大教会と猊下を命を賭けてお守りすることこそ、神官の大義であると心得まする！！」

二人とも大教会と、その上に立つファラーを見やります。そして、どちらからというわけでもなくコネミとアングリーが、迫り来るロツクゴーレムに向かって走り出しました。

ロツクゴーレムの、コネミは左腕に、アングリーは右腕に向かいます。そして全身に力を蓄えたとはいきや、自身の数倍はあろうかという質量の腕を抱きかかえるようにして抑えました。

「ぬっっっっんッ！！！！！！」

「うおおおおおッ！！！！！！」

誰もが無謀だと思いました。いくら力自慢とはいえ、相手が相手です。しかし、誰もが驚く奇跡がその時に起こりました。凄まじい砂埃を撒き散らしながら、ロツクゴーレムの歩むスピードが遅くなっていくのです。なんと、誰も止められなかったロツクゴーレムを二人の男が止めてしまったのです！

「ウゴ！？ ウゴゴゴゴッ！！！！！！」

ロツクゴーレムは拘束を逃れようと暴れますが、コネミもアングリーも離しません。額に青筋を立て、渾身の力を込めて押しとどめます。

「神王の加護がある戦士の力を舐めたらいけないよ。魔神が封印されてからというもの、コネミは十年以上もレムジンへの魔物の侵入を封じてきた守護者なんだ」

ファラーが言うのに、ムキムキ状態のコネミは、額に汗しながらも口元を笑わせました。

「で、デムであることの、さ、差別を恐れ・・・。猊下とレムジンを見捨て、に、逃げ出した哀れな隠居人にしか・・・過ぎませんよッ！！！！」

「それでも・・・コネミ。お前さんは、ずっとレムジンの入口から離れずにいたじゃないか。私がそれを知らないとしても思っていたのかい」

フアラーの言葉に、コネミは少しだけ顔を歪ませます。それが哀しみによるものか、苦痛によるもののかは誰にも解りませんでした。

「・・・や、やれやれ。ブランクがあるとキツイですね。汗が目からもでてきましたよ!!」

さらに力を込め、コネミがロックゴーレムを少しずつではありますすが押し返して行きます。

「人間業じゃねえな。オ・パイも化け物じみているが、こんなことが可能なのかよ」

バーボンが治療の手を止めないままで、驚嘆してその光景を見やります。

「ありや、禁忌のものだ・・・。自分の生命力、寿命を代償に剛力を得る献身の技だ」

バツカレスが口をへの字にしてそう説明します。バーボンは目を丸くしました。

「お、おい！ それだったら・・・ヤツら！」

「そうだ。早いところ、落とし穴を完成させねえと死にかねええ！」

バツカレスがウィリアムの方を見やります。ウィリアムは必死で土を掘り返しますが、穴を掘るには不向きな形状の鋏です。そんなにすぐに深く掘れるわけでもありません。

「・・・チツ。しかたねえな。ここでハマったら、ノアに何を言われるかわからねえしな」

「お、おい！？ 何をする気だ？」

周囲を見回すバツカレスを、バーボンは不審そうに見やります。

「・・・あ？ 決まってるんだろ、奥の手だ」

バツカレスがニヤツと笑います。そして、バーボンの発言を待つ間もなく走り出しました。

「ヤグル！ プランBだ！ 俺がポイントについたらすぐやれ！！」
バツカレスが走りながら、ベそをかいているヤグルにそう言いつけます。ヤグルは眼をパチパチと瞬きました。

「お、親分！ プランBって・・・そんな！！ あれはマズイっス！！！！」

「うっせー！！！！ 命令だ！！！！ いいからやれ！！！！」
もの凄い勢いで駆けていく親分を見て、ヤグルだけでなく部下たちも慌てだします。どうやら何事かを行うようです。

「おい！！！！ その馬鹿力の二人！！！！ そのでっけえのを、裏手の穴に誘導しろ！！！！ あの大教会をグルリと迂回させてだ！！！！」

バツカレスが、コネミとアングリーに向かっていいいます。振り返る余裕はありませんでしたが、それでも二人とも穴の方角はわかっています。

「か、簡単に言ってくれます・・・ねえッ！！！！」

「し、しかし、落とし穴は・・・ま、まだ未完ではないのか！？」

「いいから、俺の言うとおりにしろ！！！！ それともあと一時間、穴が出来るまで持ちこたえられんのか！？？ ああ！？ 無理だろうが！！！！」

確かにコネミもアングリーも、そんなに持ちこたえられるはずもありませんでした。今現状はなんとかロックゴーレムの行進を止めているのがやっとです。ちょっとでも気を抜けば吹っ飛ばされてしまいかねません。

コネミは穴を掘っている公園の方に向かいます。

「おい！ デカイ乳の姉ちゃん！！ ここはもういい！ あの二人を手伝ってやってくれ！！」

「そのデカイ乳はやめてくんない！ アタイはステラだ！ でも、まだ途中だよ！？ こんなんでヤツを落とせるのかい！？」

ゴーグルを上げてステラが大声で言います。

ウィリアムが掘った穴は、大教会の高さの三分の二ほどには達していません。人力よりは遙かに早いスピードですが、それでも這い這いしているロックゴーレムを完全に落とすには至らないでしょう。容易に脱出してしまえます。

「説明している暇はねえんだ!! 早くしろ!!!」

バツカレスの指示で、ステラは手綱を強く引きます。ウィリアムが反転し、ガシャガシャと自分が掘った穴を登って行きます。

「コネミーンツ!!! すぐに助けてやるからなあ!!!」

ステラがウィリアムを操縦して、大教会を反対側から回り、アツという間にロックゴーレムの後ろに出ます。その時、盗賊たちが再びロープトラップを起動させました。ロックゴーレムの手足や胴体に無数のロープが巻き付きます。それを盗賊たちのみならず、ファルの兵士、メリンの兵士たちが懸命に引っ張ります。

「ウゴオオオオオンツ!!!」

ロックゴーレムは藻掻きますが、コネミとアングリーがそうはさせまいと踏ん張ります。そして、押すのではなく今度は腕を抱えたまま引っ張ります。押すより引っ張る方が大変なのは言うまでもありません。さらに強く力を込めます。ウィリアムも後ろからアシストします。

「よし! ということか解んねえが、とりあえず穴に落とせ!!!」

バーボンが叫びます。皆の力が集結します。徐々にではありますが、ロックゴーレムの軌道が大教会を逸れ、穴に向かって誘導されていきます。

「ウゴ!? ウゴオオオオオンツ!!!」

視覚に穴を捉えたロックゴーレムが無茶苦茶に暴れます。それはそうです。穴に落とされようとしているのですから抵抗しないわけがありません。

「クソツ! これ以上は無理です!!! 親分ツ!!!」

血豆を作りながらも、懸命にロープを引くシュタイナが悲鳴をあげます。コネミもアングリーも限界でした。完熟トマトよりも真っ

赤な顔をしていますし、額の盛り上がった血管が、今にもぷつつんと切れてしまいそうです。

「おっし！　そこまで近づけりゃいい！！　ヤグルやれ！！　んで、全員、そいつを離して後ろに下がれ！！！！」

穴の前でバツカレスが吼えます。誰一人どういことなのか解りませんでした。穴まではまだまだ距離があります。それでもバツカレスには何か考えがあるのだと、それに賭けるしかありませんでした。ただプランBの正体を知っているヤグルだけが青白い顔をしています。

「で、でも親分！！」

「でももなにもねえ！！　やらなきゃ全員潰されちまうぞッ！！！！」

バツカレスの言葉に、ヤグルはビクツと震えます。そして周りを見回します。何百、何千と命を賭けている人々。彼らをロックゴレムに潰させるわけにはいきません。コネミとアングリーが手を離れた瞬間、豪腕がアリの潰すように、側にいる人々を叩きのめすのは誰の目にも明かなのですから。

「うあああああッ！！」

ヤグルが叫びながら、何かの導火線を手繰り寄せ、それに火を付けます。

「逃げるッ！！！！！！！！！！」

バツカレスの言葉に、慌てて皆が避難します。コネミもアングリーも手を離しました。力尽きて倒れる二人を盗賊たちが抱きかかえて走ります。

「こいつが、盗賊バツカレス様の奥の手よ！！！！」

バツカレスがニヤリと笑います。その瞬間、パンパンと何かが弾ける音がしました。

「ウゴ！？」

拘束を解かれ、暴れようとしていたロックゴレムが異変に気づきます。しかし、すでにバツカレスの罠の中でした。皆が避難した

のを見届け、バツカレスがどこから取り出した導火線に火をつけました。

「地獄への案内状だぜ！ うけとれやツ！！」

再び何かが弾ける音がします。それはちょうどロックゴーレムの後ろからしました。何事かと、ロックゴーレムの眼がチカチカと点滅します。

そして間もなく、ロックゴーレムとバツカレスのいる地面が・・・穴の方に向けガタンと落ち、斜めになります！！

「一名様ご案内ー！！ 直通片道の滑り台だぜ！！！！」

バツカレスが固い地面を選んでダガーを突き刺し、滑り落ちないように踏ん張ります。

そうです。自分とロックゴーレムがいた地盤を爆破したのです。ヤグルの導火線は、地面の下にあらかじめ設置していた爆薬に繋がっていたのでした。穴を掘ったせいで、その周囲は脆くなっています。そこを爆破することにより、穴側に地面が崩れ落ちて斜めになったのでした。

ロックゴーレムはその巨体です。踏ん張ろうにも、自分の体重に負けてしまい、斜めに滑り落ちていきます。

「ウゴゴオオオツ！！」

なんとか落ちるのを避けようと、ロックゴーレムは慌てて両手両足をばたつかせます。でも、ばたつかせれば、ばたつかせるほど、脆くなった地面が崩れて更に足場がひどくなっています。

「・・・だが、あの穴に落としたところで、這い上がられてしまうぞ！」

ドリードが高いビルの上から、その光景を見やりながら言います。「はん！！ だから、この俺がここにいるんだろうがツ！」

バツカレスは、突き刺したダガーを引き抜き、砕け落ちる瓦礫を見極め、それを足場に飛び移ります。そして、大穴の中のある地点を目指して次々と飛び移りました。

「親分ツ！！ ダメだ、そいつだけは！！」

ではありませんでした。穴の周辺に用意してあった爆薬にまで火が点くようになっていたようです。小規模な太陽が落ちたかのように、辺りがオレンジ色に照らされ、とてつもない爆風と轟音、土煙に人々は吹き飛ばされぬよう踏ん張るのが精一杯でした。

「バツカレスツーーー!!!」「親分ーーーッ!!!」

バーボンや子分たちが悲痛の叫びを上げます。

「な、なんだと!?!」

眼を片手で覆いながら、ドレードが口を半開きにしたまま呟きます。側にいたヤグルは涙と鼻水を垂れ流しながらシャックリをあげていました。

「・・・落とし穴が完成できなかったら、親分は、自分がけじめつけるって・・・。お、俺の持ってた爆薬みんな持って。プランBなのは、親分が自爆する最後の手段だったんだ!!!」

ドレードは唇を噛みしめます。そこからは血が出ていました。それにも構わず、強く噛みます。

「レイ王子といい・・・。なぜ、デムが。このファルの首都のためにこうまでできるのだッ!!!」

そう言って、ドレードは側にあつた柱をドンツと殴りつけました。

「馬鹿野郎・・・。死に急ぎやがって。チキショウツ!」

バーボンが持っていたメスを取り落として、膝をガクリとつきまです。あの爆発で生きていられるはずがないとすでに悟ったのです。

「・・・ウゴ、ウゴゴゴッ!!!」

モウモウとたつ煙から、何かが蠢く気配があります。人々は我が眼を疑いました。

「そ、そんな! ああの爆発で・・・生きてやがるってのかよ!?!」

ロックゴーレムはまだ生きていました。上半身をもたげ、穴からむっくりと出てきます。まるで何事もなかったかのように動いているです。

やがて煙が消え、まったく無傷のロックゴーレムが姿を現します。それを見て、誰もが絶望に沈みました。バツカレスの命をかけた一

撃も効果がなかったのです。

「なんてことだ。あそこまでやって・・・こんな理不尽な話があるか」

ドレードはギリギリツと歯ぎしりします。

「・・・そんなわけない。ヤツはもう動けない」

ヤグルが涙を拭いながら言います。しかし、ロックゴーレムはレムジンを完膚無きまでに叩きつぶそうと歩き始めているのです。

それは、ロックゴーレムが穴から出てこようと瞬間でした。バツカン！ と、何かが崩れ落ちる音が響きました。

「親分は・・・。親分の本当の狙いは、穴の下にあるものだ」

ヤグルが真つ赤な目で、ロックゴーレムを強く睨み付けながら言います。その言葉を聞いて、ドレードが大教会の方を見やってハツと何であるかに気づきます。

「・・・地下貯水槽か！」

巨大都市レムジンは、道路の殆どが舗装されています。それ故に雨天などによる排水の問題を、地下に大きな貯水槽を作って対処しているのです。それはちょうど、大教会の下に存在しているのです。ここに街全部の排水が集められているのです。それは当然、膨大な量です。

穴の底から、貯水槽から漏れだした大量の水があふれ出してきました。そうです。バツカレスが爆破したのは貯水槽の石壁だったのです。

迫り来る水から逃げようと、ロックゴーレムは穴から這い出ようとします。しかし、緩慢なロックゴーレムよりも水が満ちる方が早かったです。

「ウゴオッー！！??」

穴から這い出ようとしていたロックゴーレムが手を滑らしてひっくり返ります。大量の水しぶきと共に轟音が響きました。飛び散る水は、大教会にいたファラーの顔にも飛び散ります。

「・・・これはただの水じゃない？」

フアラーが額にかかった水を掬いとり、指で擦ると少しネバネバしています。仄かに甘いような匂いもします。

「増粘剤の一種です。我々の住む森で採取される『ルロン』と呼ばれる実からとれるものです。水と反応して、粘り気のある液体になります。親分が・・・これを貯水槽に仕掛けるよう指示をだしていたのはこのためだったのか」

全てを知らされていなかったシユタイナが、悔しそうに帽子を深々と被り直します。ツーツと頬を涙が一筋伝いました。

ロックゴーレムは何度も起きあがろうとしますが、粘り気のある水のせいでヌルヌルと滑ってしまいます。なんとか数歩は前に進めても、穴からは上がれそうにありません。重い体重が災いして、滑り落ちてしまうのです。すぐ目の前に敵がいるのに進めない。悔しそうに、ロックゴーレムは咆吼をあげました。

未だ諦めずに起きあがろうとしたロックゴーレムでしたが、やがて緩慢な動きが更に鈍くなっていきます。ドロドロであった水の表面が固まっていき、氷のようなバリバリとした固体となっていくます。そして、やがてロックゴーレムごと完全に固まってしまいました。ピクリとも動けなくなります。

「ルロン増粘剤は、水に溶け出した後に、空気に触れると急激に硬化するんだ・・・だから、俺らがトラップで使うときにはビニールで密閉して使う。これで、もう二度とヤツは暴れられない・・・親分が勝ったんだ」

ヤグルががっくりと項垂れてそう言います。ファルやメリンの兵士たちも、被り物を脱いで、呆然とした顔で、動かなくなったロックゴーレムを注視しました。

ロックゴーレムに気をとられていて誰も気づいていませんでしたが、いつの間にかガーゴイルも一匹残らず倒し終わっていました。もう動いている敵は存在しないのです。

先ほどの戦いが嘘だったみたいなのに、辺りは静まりかえっています。飴細工のようなオブジェとなったロックゴーレムが、全ての戦いの

終わりを物語っていました。

徐々に、人々に勝利の実感が湧いてきます。沸々と、身体の内側から喜びが満ちてきます。長い悪夢から覚めた開放感です。

「や、やったー！」

「お、俺たちが勝ったんだ！！」

誰からでもなく、喝采の声があがります。それは大きな波紋となり、レムジン全体が震撼するように喜びの音が響き渡りました。

隠れていた民たちが、シエルターを開いて姿を現します。生き残れたことを互いに確認しあい、抱き合って涙を流します。飛び上がって、頭を大きく振ります。兵士たちも、剣を捨て、杖を捨て、守りきった愛する者の側に駆けつけます。

しかし、バーボンや盗賊たちは浮かぬ顔です。ファラーや娘たち、ステラも心から喜べないといった感じでした。

「……静まれ、民たちよ」

いつの間にか、ドレードが一番高い瓦礫の塔の上に立っていました。全ての民が見渡せるような位置です。

人々はレムジンの指導者を前に一瞬だけざわめきたちましたが、すぐに口を噤んで皆がドレードに眼を向けます。

「……我々は勝利した。ランドレークやミルミのような破滅は回避されたのだ」

かつてミルミ城にいたメリンたち。とくに魔法兵長などの歳いった年代の人々は大きく頷いて鼻をすすります。

「だが、勝利はファールとメリンだけのものではない。DEMたちの協力があつたからこそだということを忘れてはならない……」

そう言つて、ドレードはロックゴーレムの亡骸を見やります。そこにバツカレスもいるはずでした。

「グッ……！ 親分ッ！！」

大穴の方を一斉に見やり、盗賊たちが泣き出します。唸るようにして嗚咽をもらします。

「クソッ。俺は……俺はノアになんて言えばいいんだよッ！！」

バツカレスツ！！」

バーボンが力の限り拳で石畳を殴ります。何度も何度も。側で治療を受けていた兵士たちが、それを戸惑いながらも止めました。拳が血だらけになって、バーボンは大きく嘆きながら叫びます。

最初、デムだからといって敬遠していたファルやメリンの姿はもうありませんでした。盗賊たちを慰めるかのように、側に寄って一緒に悲しみを共有します。もらい泣きする人々の姿もありました。そこには種族の差などありません。共に危機を乗り越えた仲間なのですから。

「・・・我々は、スタッド殿に次ぐもう一人の英雄を失った。それを永久に忘れることな・・・く？」

語っていたドレードが、何かを見つけて眼を見開きます。

ロックゴーレムが固まっている奥、穴の端に誰かがいます。硬化した水が飛び散り、それで全身がくっつきながらも、何かを一生懸命に支えています。

「・・・ディレアス卿!？」

信じられないと言わんばかりに、ドレードは声を上げます。それはメリンの代表であるディレアスです。先ほどから姿が見えないことから、他の元老員と共にレムジンから脱出したものとドレードは思っていたのです。

ドレードは俊足の足で、ディレアスの近くに寄ります。ディレアスは真っ赤な顔をして、何かを掴んで、穴に落ちないように引っ張っているのです。

「あ、ああ！ ドレード卿！ た、助けてツ・・・わ、私は、あ、足が！！」

包帯が巻かれた膝から出血していました。どうやら、無理して踏ん張っているせいで治療した傷口が開きかけているようです。

ドレードは慌ててディレアスが掴んでいるのを代わろうと腕を伸ばしました。手を伸ばして掴んだもの、それは一本のロープでした。先端に何があるのかは、ドレードの位置からは全く見えません。

「これは・・・何だ？」

それがズツシリと、思ったよりも重くてドレードは眉を寄せます。穴の奥を見やるうとしますが、ちよつと前のめりになっただけで引きずられてしまいそうです。片腕しかないのです、それだけで支えるのもちよつと辛いぐらいなのです。

そうこうしてゐるうちに、ファラーたちやステラがやってきます。

そして、今にも倒れそうなドレードを支えました。

「これは、なんなんだい？」

ステラが、ドレードごとグイツとそれを引つ張り上げます。何かゴソツと引つかかった手応えを感じます。

「イデッ！」

悲鳴が聞こえました。それがロープの先から聞こえたのだと解つて、ステラは眼を丸くします。

「に、人かい！？ そりゃ大変だ！！ すぐに引き上げてやらないと！」

ファラーが言います。魔法力があれば、空を飛んで助けにいけるのですが、あいにくと娘たちも含めて魔法力はすつからかんでした。「これは・・・重いねッ！ ウィリアムに括り付けて引つ張るしかないか！」

ステラが口笛を吹くと、ウィリアムが尾っぽの針を突き出します。それはフックの様な形状をしているので、何かを牽引するにはちよつど便利な形です。ステラはロープの先端で輪っかを作つて針に括り付けました。

ウィリアムはグルンと目を回し、勢いよく尾っぽを引つ張ります。ズボンッ！ という間抜けな音がして、何かが穴から飛び出てきました。

「うおおおおおッ！！？」

ロープの先端にいる人を見て、ドレードもファラーもステラも眼を見開きます。

「ほげえッ！」

ドツシン！ 勢いよく地面に叩きつけられ、その人は悲鳴をあげました。全身が硬化した水で覆われていて、地面に当たった衝撃でそれらが砕けます。むしろ、それがクツションになったおかげで怪我をしなかったようですが……。

「……ば、バツカレスさん？」

フアラーが恐る恐る尋ねます。バツカレスはしばらく唸っていたかと思うと、眼をうつすらと見開きました。

「イテテ……。もちつとマシな助け方はねえのかよ」

バツカレスに気づき、バーボンや盗賊たちが駆けつけます。

「バツカレス！！」「親分！！」「生きてたのかッ！！」

次々と、驚きとも喜びとも聞こえる声がバツカレスに大量に浴びせかけられます。うるさそうに、バツカレスは苦い顔をしました。

「親分ッ！ 俺、俺は……！！ 親分が、俺の爆薬で死んだものかッ！」

一際、ヤグルが泣きじゃくってバツカレスの身体に抱きつきます。手足が固化していて動かないのでバツカレスはその抱擁に甘んじるしかありません。気持ち悪そうに、バツカレスは歯をむき出しにして怒鳴りました。

「馬鹿野郎！ 俺様がそう簡単に死ぬか！！」

「マジかよ……。誰だ、自爆しただなんて言いやがったの」

バーボンがガツクリと肩を落として、ヤグルを睨みます。その視線を感じながらも、ヤグルはバツカレスの胸元で泣きじゃくっていました。

「脱出用のロープ用意してりゃ、予想以上に早く水が固まっちゃまって……。動けねえじゃねえか！ どんだけ薬いれたんだ！！ 早く固まりすぎだろコレ！！」

シユタイナが服の裾で涙を拭いながら、前に進み出てきます。

「そりゃありつただけですよ……。倉庫にあつたの一応、全部もってきていましたからね。なにせ、このレムジンの貯水槽がどれだけ大きいのか。それを調べる術も時間もなかったですから」

それを聞いて、ファラーがフツと笑います。

「ああ……。今は雨期じゃないから。そんなには貯水槽に水はなかつたと思うよ。実際に、満水だったら、この大穴から溢れ出るほどになるはずだからね」

その言葉を聞いて、皆が一斉に大笑いします。

「……しかし、ディレアス卿。よく、バツカレス殿に気づいたものだな」

ドレードが言うのに、痛む膝をさすっていたディレアスは赤面します。

「い、いや……。偶然です。でも、このままデムに……。いいところばかりとられるわけにはいきませんから」

ディレアスがバーボンをチラツと見て言います。その眼には見返してやりたいという気持ちが込められていました。何か自分ができることをしようとして、ディレアスは怪我している身でありながらもここにいたのです。それにはメリンの代表としてのプライドがあったのでしよう。

ドレードが口の端だけを笑わせます。何があつたのかまでは知りませんが、これからのメリンを担う若い指導者の成長ぶりを心の中で喜んでいました。

「フツ。じゃあ、後は……。俺の仕事だな。……。大事な死に損ない一人助けてもらったんだ。その恩は万倍にして返してやるよ」

バーボンが、ディレアスに笑いかけ、立ち上がります。

「オウ。テメエの腕が衰えてねえとこみせてやれ……。だがな、バーボン。その前に……」

バツカレスが真面目な顔をしてバーボンを見やります。

「あんだよ？」

「……これ、何とかしてくれ」

固化した自分の身体をバツカレスが顎でしゃくりまします。側ではヤグルがまだ抱きついて泣いていました。『これ』というのはヤグルも含まれているのです。

そこで改めて見るバツカレスの姿の滑稽さに、皆が一同に吹き出して、再び心からの笑い声をあげたのでした……。

こうして種族を越えた多くの人々の力を得て、ビシュエルの策略によるレムジンの最大最悪の危機は回避されたのでした……。

第十七章 反撃！ バツカレス親分のBプラン！！（後書き）

大変、UPまでお待たせしましたー。今回はノアたちがランドレ
ークに行った後のレムジンのお話です。

長々と時間がかかったのは、ロックゴーレムみたいなデカイ敵を
どう倒すか悩んでいたわけでありまして（汗）。案はいくつかあつ
たのですが、自分でじっくりこななくて。まあ、書いてみて、この決
着もどうかなーと思っちゃってますがw とりあえずは、こんな感
じでw

さて、今回は本筋に戻って。スタッドが魔神バルバトスを倒すた
めに秘匿しつづけてきた切り札が明らかになります。物語は終局へ
と。。。。

次回のUPは、それほど時間をかけずにしたいと思っておりますw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6399u/>

Valbatous【バルバトス】

2012年1月12日01時49分発行